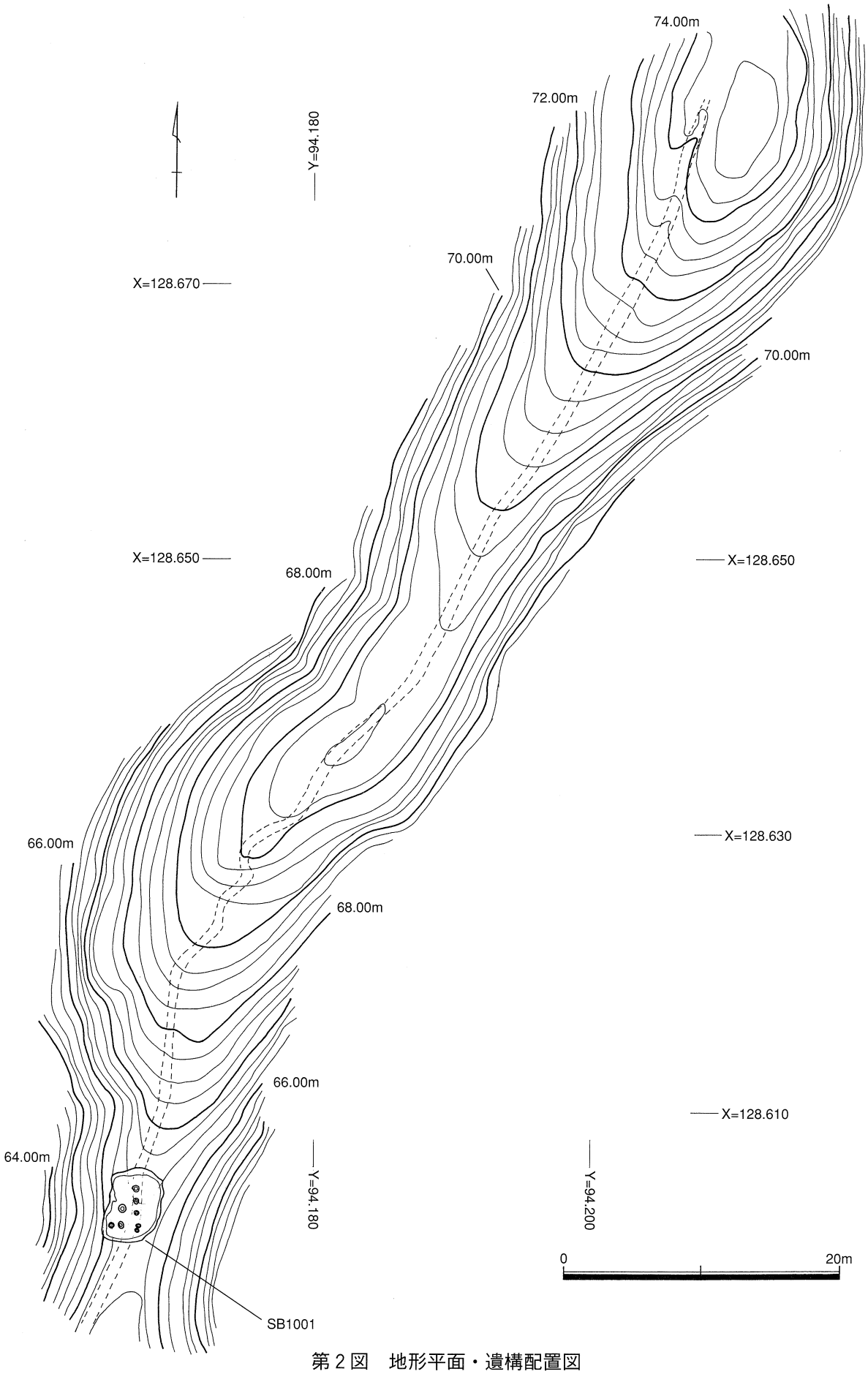
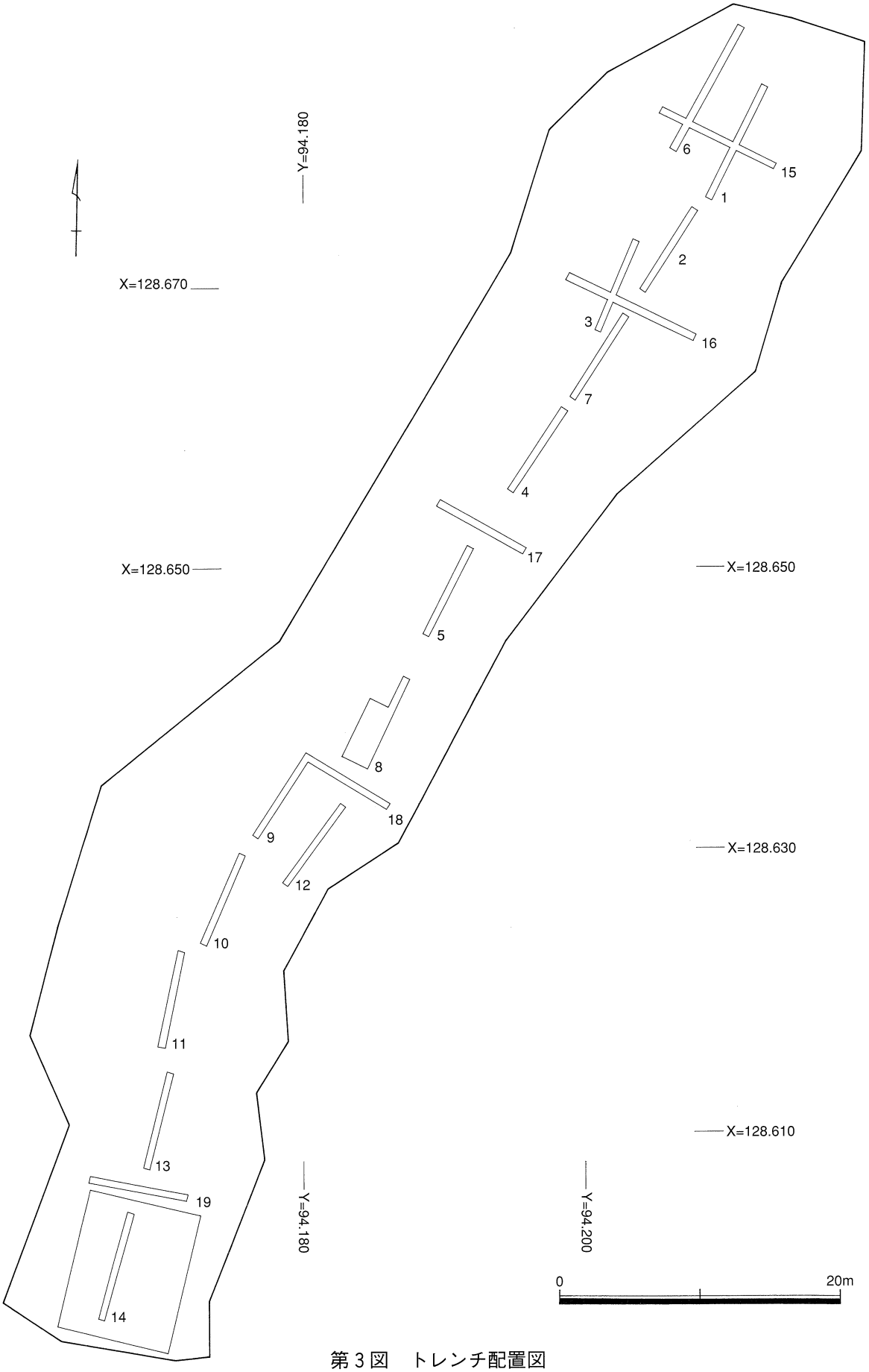


第２図　地形平面・遺構配置図


Y=94.180
X=128.670
X=128.650
X=128.650
X=128.630
X=128.610
Y=94.180
Y=94.200
0
20m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19

第３図　トレンチ配置図

2　調査成果

（1）遺跡の位置（Ⅰ-第1図およびⅡ-第1・5・17図）

延谷東遺跡は四国横断自動車道建設に伴い発掘調査が実施された。調査地点は鳴門市大麻町萩原の阿讃山脈南麓、標高66～77mの尾根上に位置する。調査の結果、遺構では弥生時代の竪穴住居跡が検出された。遺物は弥生土器甕などが出土した。時期的には中期末～後期初頭頃と思われる。

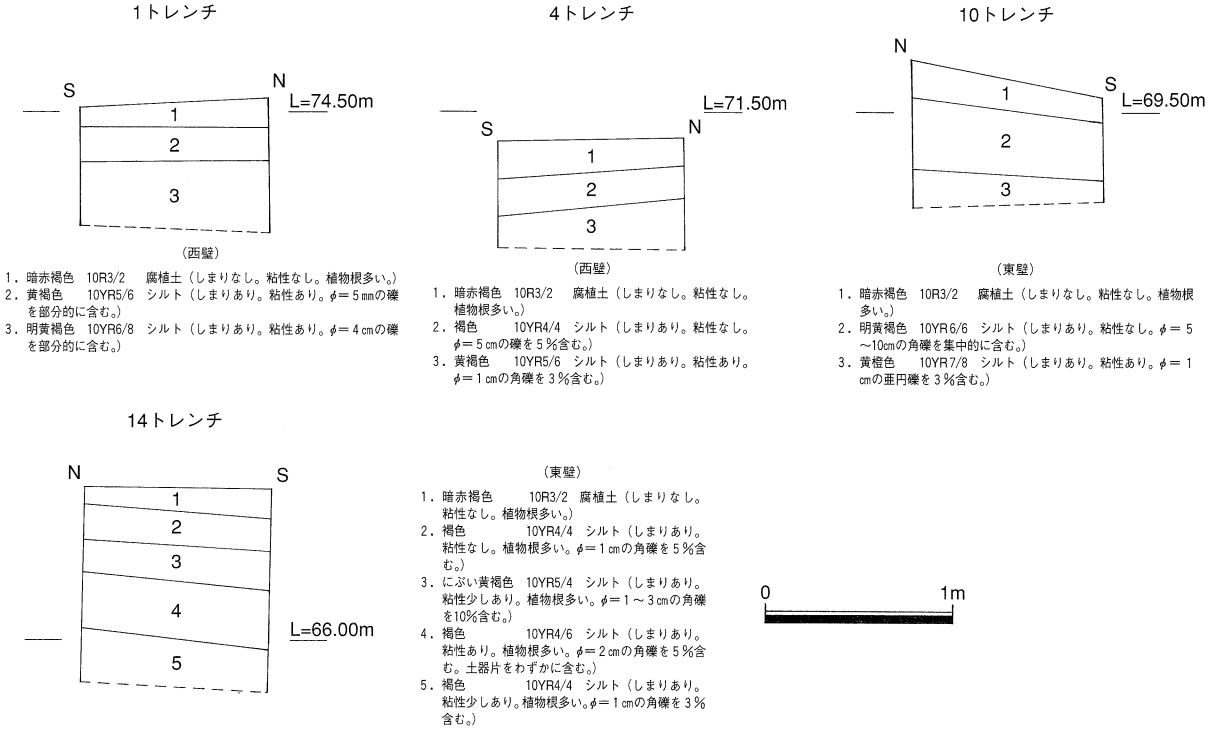
（2）基本層序（第2～4図）

トレンチ配置状況と土層堆積状況

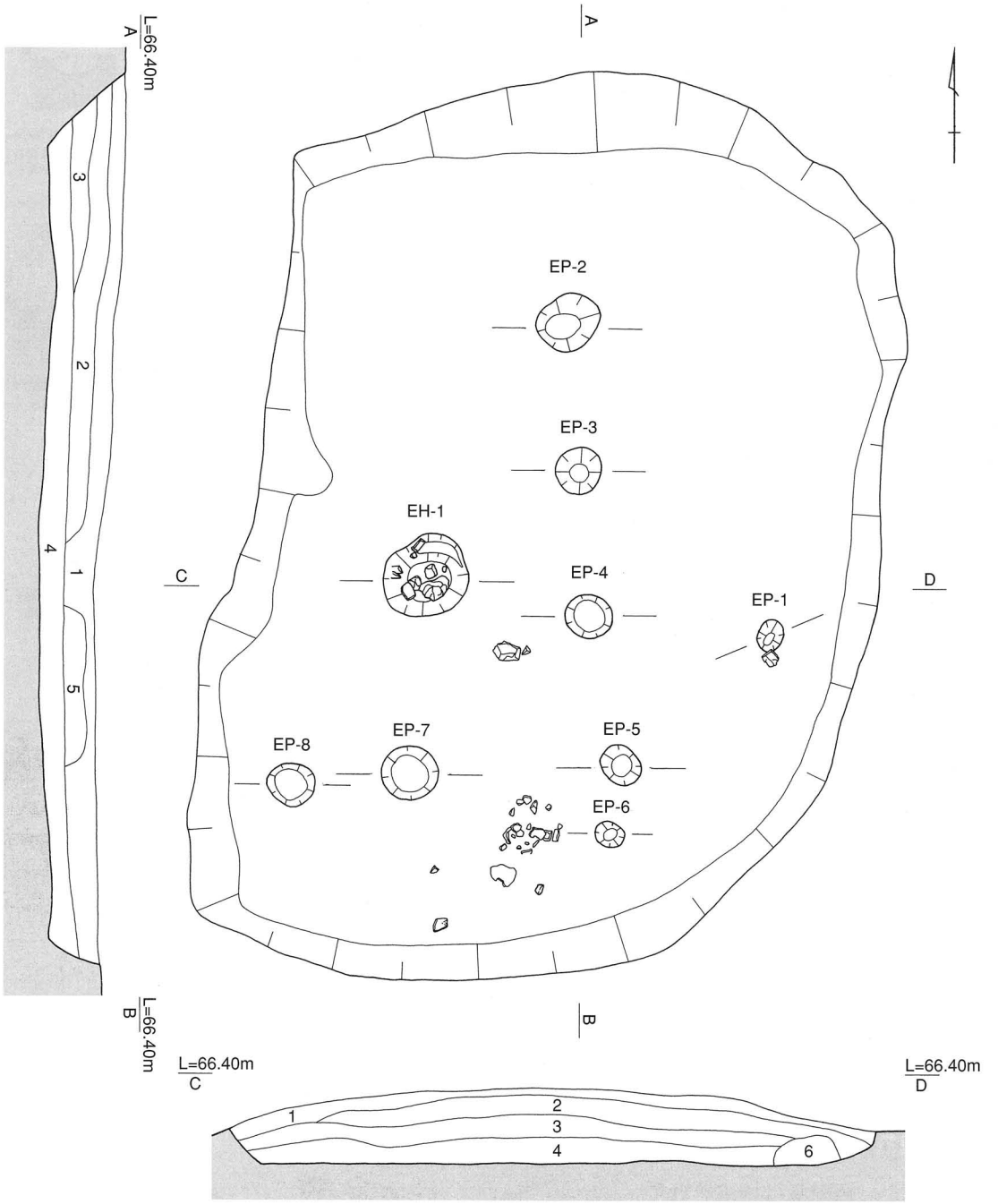
調査に際し、現況の地形測量を実施した。その結果を基にトレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘の結果、調査区南部において弥生時代の竪穴住居跡を確認したため、80m²の範囲を対象に本調査へ移行した。

土層堆積状況は各トレンチとも類似しており、各トレンチにより微差はあるが基本層序は以下の通りほぼ対応する。

1．…暗黄褐色 10YR3/2 砂質土（表土）
2．…褐色 10YR4/4 砂質土（シルト質土。岩盤風化土。）
3．…にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質土（シルト質土。岩盤風化土。φ＝1～3㎝程度の礫を含む。）
4．…明黄褐色 10YR6/6 岩盤（和泉層群礫層。地山。）



第4図　模式柱状土層図



A—B

1．褐色　10YR4/4　シルト（しまりあり。粘性なし。植物根を少し含む。φ＝1㎝の角礫を1％含む。）

2．にぶい黄褐色　10YR5/4　シルト（しまりあり。粘性なし。植物根を僅かに含む。φ＝1～3㎝の角礫を3％含む。）

3．黄褐色　10YR5/8　シルト（しまりあり。粘性少しあり。φ＝1㎝の角礫を3％含む。）

4．黄褐色　10YR5/6　シルト（しまりあり。粘性少しあり。）

5．にぶい黄褐色　10YR6/4　シルト（しまりあり。粘性なし。植物根を少し含む。φ＝1㎝の角礫を3％含む。岩盤層を含む。）

C—D

1．褐色　10YR4/4　シルト（しまりあり。粘性なし。植物根を少し含む。φ＝1㎝の角礫を1％含む。）

2．にぶい黄褐色　10YR5/4　シルト（しまりあり。粘性なし。植物根を僅かに含む。φ＝1～3㎝の角礫を3％含む。）

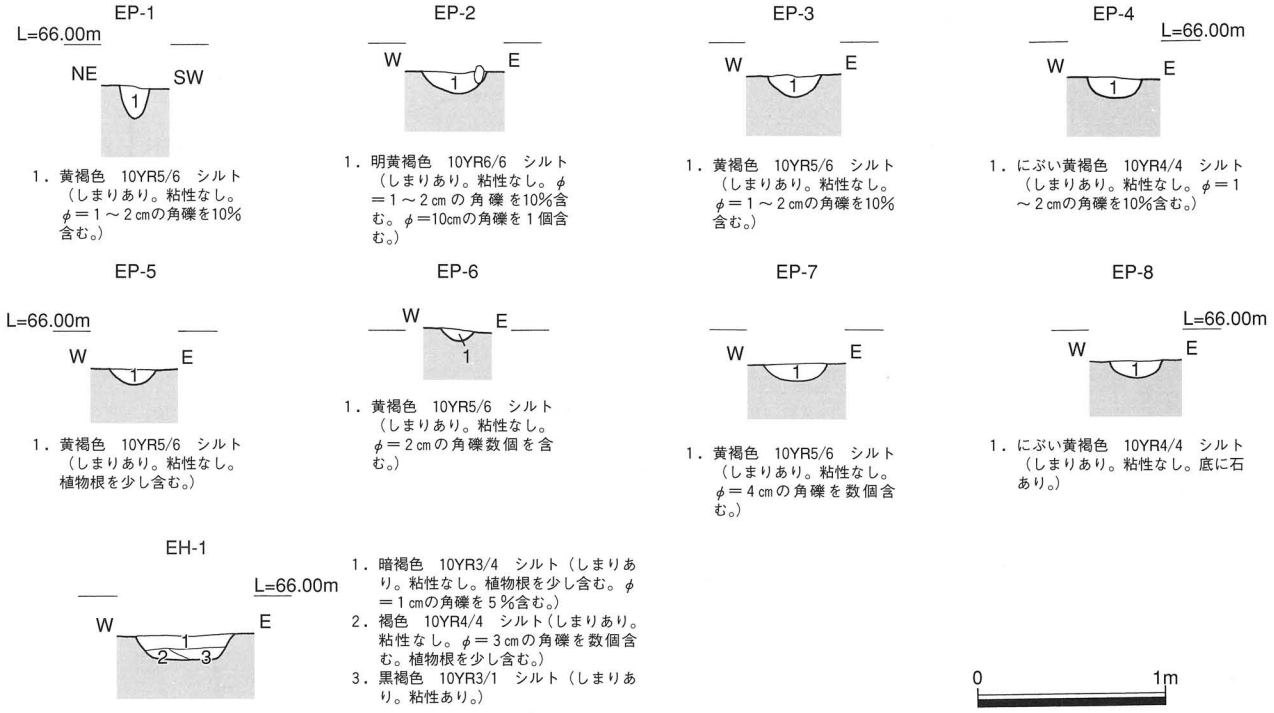
3．黄褐色　10YR5/8　シルト（しまりあり。粘性少しあり。φ＝1㎝の角礫を3％含む。）

4．黄褐色　10YR5/6　シルト（しまりあり。粘性少しあり。）

5．にぶい黄褐色　10YR6/4　シルト（しまりあり。粘性なし。植物根を少し含む。φ＝1㎝程の角礫を3％含む。岩盤層を含む。）

0　4m

第5図　SB1001平・断面図



第6図　SB1001-EH・EP断面図

（3）遺構と遺物

弥生時代

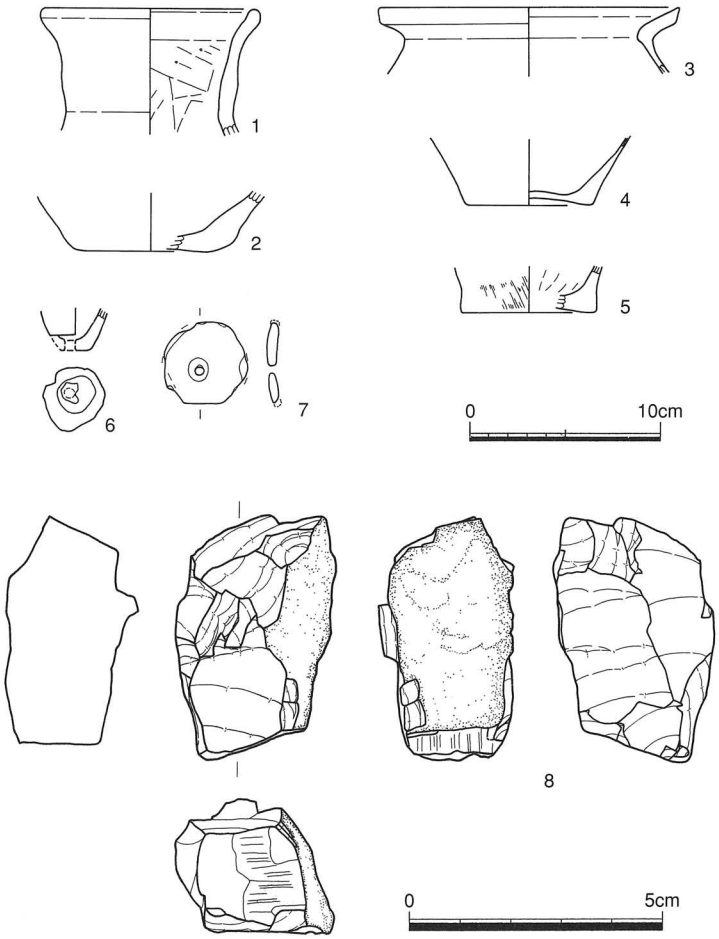
SB1001（1号竪穴住居跡）

（第5・6図）

B-2グリッド、調査区南部、標高約66mの地点で検出された竪穴住居跡である。西側部分は消失しているものと思われるが、隅丸長方形状の平面形態を呈する。規模は現存長で、長軸5.30m、短軸4.30m、深さ34㎝を測る。主柱穴は6本と思われる。中央部には炉跡も検出された。周壁溝は検出されていない。SB内からは弥生土器壺・甕等が出土した。小片のため詳細は不明であるが、時期的には弥生時代後期頃と考えられる。

出土遺物（第7図）

細片も含めると約350点程度の弥生土器等が出土したが、遺存状態が良くないため、復元・実測可能なものは少

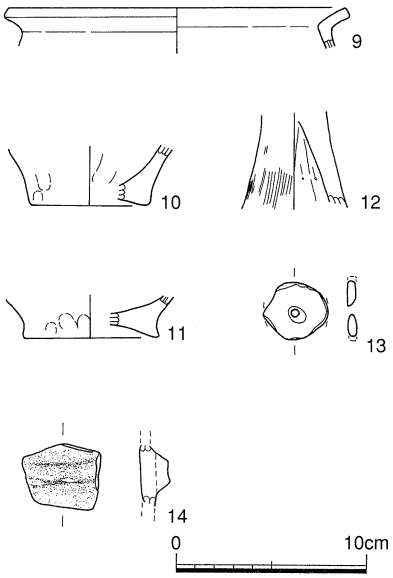


第7図　SB1001出土遺物

ない。1・2は壺、3～5は甕である。6は小形の鉢と思われるが、底部に穿孔が見られる。7は紡錘車である。出土土器はいずれも小片のため全容の判明するものはなく、表面の摩滅も激しいため詳細な時期決定は困難であるが、概ね弥生時代後期初頭頃に属するものと思われる。8は砥石である。石材は砂岩を用いる。

包含層出土遺物（第8図）

9～11は弥生土器甕である。12は高杯脚部、13は紡錘車である。14は円筒埴輪のタガの部分である。



第8図　包含層出土遺物

（4）まとめ

今回の調査では弥生後期初頭頃と思われる竪穴住居跡を1軒確認した。尾根地形全体からみれば、SB出土地点は尾根の中腹にあたる。今回の調査対象範囲は道路の路線内という制約があり、路線外になるため今回は調査することができなかったが、さらに南側の尾根尖端部にかけて遺構が展開する可能性は残される。

現時点においては遺跡単体でみれば、本遺跡は阿讃山脈の尾根上に営まれた非常に小規模な高地性集落であるといえる。本遺跡の東側尾根には弥生高地性集落のカネガ谷遺跡が所在しており、カネガ谷遺跡は、規模・遺構構成・出土遺物からみて当該地域における中心的存在の集落であったことは想像に難くない。本遺跡の性格としては、尾根上に営まれた見張り小屋的な集落、本集落から派生し、周辺の尾根上に展開した支集落として捉えることができよう。

当該地域は、桧はちまき山遺跡を西端にしてカネガ谷遺跡まで、遺跡の継続時期に微差はあるものの、東西約3㎞の間に、ほぼ同時期の弥生時代の高地性集落遺跡が展開しており、防御・情報のネットワークを形成していたことを窺わせる。これら一連の遺跡は、阿讃山脈南麓の尾根上に展開する支集落として把握する必要があり、また、それぞれの支脈での土地利用形態の分析を通して当該地域の集落構造を検討していく必要がある。

延谷東古墳群
第１表　出土遺構一覧表
SB

遺構名	種　類	グリッド	平面形態	断面形態	長軸（cm）	短軸（cm）	深度（cm）	備　考
SB1001	SB1001	B-2	隅丸長方形状	浅い逆台形状	530	430	34	
	EH-1	B-2	円形	逆台形状	48	46	7	
	EP-1	B-2	円形	U 字状	18	13	16	
	EP-2	B-2	円形	D 字状	40	34	10	
	EP-3	B-2	円形	D 字状	28	24	10	
	EP-4	B-2	円形	D 字状	28	22	10	
	EP-5	B-2	円形	D 字状	24	22	7	
	EP-6	B-2	円形	D 字状	16	16	6	
	EP-7	B-2	円形	D 字状	32	20	8	
	EP-8	B-2	円形	D 字状	26	24	8	

第２表　出土遺物観察表
SB（土器）

報告書掲載番号	遺　構	出土地点	層　位	器　種	残存率	口　径（cm）	体　部最大径（cm）	底　径（cm）	頸部（脚柱）径（cm）	器高・残存高（cm）	その他の法量（cm）	部位	形　態	調　整	含有物組　成	色　調	備　考
1	SB1001			弥生土器壺	口縁部1/5	11.1			8.8	6.7		口縁部	頸部直立。口縁部緩やかに短く外反して、端部を丸く収める。	外面：ナデ。内面：口縁部ナデ。頸部ケズリ。	石英・長石・雲母・結晶片岩・角閃石	外面：褐灰内面：褐灰	焼成良好。
2	SB1001			弥生土器壺	底部1/2			7.0		3.2		底部	平底。体部外上方に延びる。	外面：摩滅のため調整不明。内面：摩滅のため調整不明。	石英・雲母・結晶片岩	外面：浅黄橙内面：にぶい橙	焼成やや不良。
3	SB1001		4層（遺構内）	弥生土器甕	口縁部完形	16.0			13.1	3.6		口縁部	体部、口縁部に向かって内彎気味に立ち上がり、口縁部はやや肥厚し、端部を上方に拡張した方形状を呈する。	外面：口縁部ナデ。内面：口縁部ナデ。	石英・長石・雲母・結晶片岩・赤色斑粒	外面：にぶい黄橙・灰内面：にぶい黄橙・灰	焼成良好。4と同一遺物。
4	SB1001		4層（遺構内）	弥生土器甕	底部完形			6.8		3.6		底部	やや上げ底。体部外上方に延びる。	外面：摩滅のため調整不明。内面：摩滅のため調整不明。	石英・長石・雲母・結晶片岩・赤色斑粒	外面：にぶい黄橙・灰内面：にぶい黄橙・灰	焼成良好。3と同一遺物。
5	SB1001			弥生土器甕	底部1/3			7.2		3.5		底部	僅かに上げ底。体部外上方に延びる。	外面：ハケ（8条/cm）。摩滅のため調整不明瞭。内面：ケズリ。摩滅のため調整不明瞭。	石英・長石・雲母・結晶片岩	外面：褐灰内面：明赤褐	焼成良好。
6	SB1001			弥生小型有孔鉢	底部一部欠損			1.6		2.3		底部	体部外上方に延びる。平底。底部穿孔有り。	外面：摩滅のため調整不明。内面：摩滅のため調整不明。	長石・赤色斑粒	外面：浅黄橙内面：浅黄橙	焼成良好。
7	SB1001			弥生紡錘車	ほぼ完形1/1						直径4.5厚み0.5	ほぼ完形		摩滅のため調整不明。	石英・長石・結晶片岩・赤色斑粒	外面：にぶい橙内面：にぶい橙	焼成良好。

包含層（土器）

報告書掲載番号	遺　構	出土地点	層　位	器　種	残存率	口　径（cm）	体　部最大径（cm）	底　径（cm）	頸部（脚柱）径（cm）	器高・残存高（cm）	その他の法量（cm）	部位	形　態	調　整	含有物組　成	色　調	備　考
9	No14トレンチ		4層（遺構内）	弥生土器甕	口縁～体部1/8	17.8			16.4	2.3		口縁～体部	口縁部「く」字状に外反。口縁端部を方形状に収める。	外面：摩滅のため調整不明。内面：摩滅のため調整不明。	長石・結晶片岩	外面：橙内面：にぶい黄橙	焼成良好。
10	No14トレンチ		4層（遺構内）	弥生土器甕	底部1/5			6.2		3.2		底部	僅かに上げ底。体部外上方に延びる。	外面：ユビオサエのちハケ（12条／cm）。内面：ユビナデ。内外面とも摩滅のため調整不明瞭。	石英・雲母・結晶片岩	外面：にぶい橙内面：灰	焼成良好。
11	No14トレンチ		4層（遺構内）	弥生土器甕	底部1/3			7.2		2.2		底部	上げ底。体部斜め上方に延びる。	外面：ユビオサエ。内面：摩滅のため不明。	石英・雲母・赤色斑粒	外面：にぶい黄橙内面：にぶい黄橙	焼成良好。
12	No14トレンチ		4層（遺構内）	弥生高杯脚	不明					5.2		脚部	脚部外下方に延びる。	外面：ミガキ（2㎜／本）。摩滅のため調整不明瞭。内面：ケズリ。	石英・長石・雲母・赤色斑粒	外面：淡黄内面：浅黄	焼成良好。
13	No14トレンチ			弥生紡錘車	ほぼ完形1/1						直径3.4厚み0.5	ほぼ完形		摩滅のため調整不明。	石英・雲母・結晶片岩	外面：にぶい褐内面：褐灰	

SB（石器）

報告書掲載番号	遺　構	出土地点	層　位	石　材	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	その他の法量（cm）	残存率	部　位	備　考
8	SB1001			砂岩	砥石	19.4	12.9	10.8	2950.0				

包含層（埴輪）

報告書掲載番号	遺　構	出土地点	層　位	器　種	法　量（cm）	形態の特徴	成　形・調　整	胎　土	色　調	備　考
14	No14トレンチ	拡張部	覆土	円筒埴輪	縦3.5横4.1厚さ0.8	タガの断面形は台形状。	外面：ナデ。内面：ナデ。	精、石英・赤色斑粒・黒色斑粒0.1～2.5㎜	橙	焼成軟質。

XV　勝明寺谷古墳群

例　言

1　本章は四国横断自動車道建設に伴う勝明寺谷古墳群の発掘調査報告書である。

2　所在地　鳴門市大麻町池谷字日開谷１他

調査対象面積　1,920m²

試掘面積　250m²

本調査面積　80m²

3　発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次の通りである。

発掘調査期間　平成12年１月16日～平成12年３月31日

報告書作成期間　平成15年４月１日～平成16年３月31日

4　遺物番号・挿図番号・図版番号は通し番号とした。遺物番号は本文・挿図・表・図版と一致する。

5　本遺跡の地理的・歴史的環境については、「Ⅱ　調査地点の立地と環境」を参照されたい。

6　SX1001～1003出土の埴輪についての報告は藤川智之が行った。

1　調査の経過

（1）調査の経過（Ⅰ-第1図およびⅡ-第1・5・18図）

勝明寺谷古墳群は阿讃山脈南麓の鳴門市大麻町池谷地区に位置し、以前から古墳群が密集する地域として周知されていた。事前の分布調査の際にも阿讃山脈から張り出す尾根上に古墳の存在する可能性が指摘されていた。したがって分布調査で推定された遺跡の範囲の内1,920㎡を調査対象面積として試掘調査を実施した。試掘調査は平成12年1月16日～3月31日にかけて人力掘削によるトレンチを250㎡実施した。試掘の結果、調査区南部東側斜面において埴輪片の出土集中箇所が確認された。明確な遺構として把握できないため、SXとして出土範囲の確認に努め、80㎡の範囲を対象に本調査を行った。

（2）発掘調査の方法（第1図）

調査を始めるにあたり、グリッドの配置に際しては、発掘統一基準にならい、第Ⅳ系国土座標を基準とし、5mメッシュを1グリッドとして調査対象地を包み込む形で設定した。南西隅を基準として北にA・B・C…、東に1・2・3…の順に記号・番号をふり、その組み合わせで各グリッド名を表すこととした。遺構記号・番号は検出時に順次決定した。

（3）調査日誌抄

勝明寺谷古墳群試掘調査日誌抄

2000年

1月17日　調査準備。

1月18日　平板地形測量。

1月26日　平板地形測量。トレンチ設定。
　　トレンチ配置図作成。

1月28日　トレンチ掘削開始。土層断面図作成。
　　土層断面写真撮影。

2月3日　墳丘状高まり周辺表土掘削。
　　トレンチ土層断面図作成。

2月17日　墳丘状高まり周辺掘り下げ。
　　土層断面図作成。

2月18日　埴輪出土状況写真撮影。

2月21日　SX1001平面図作成。

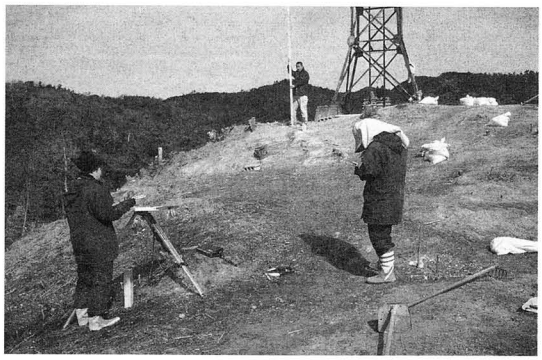
2月22日　SX1001土器出土状況平面図作成。

2月23日　SX1001・ST1001・ST1002土器取り上げ。
　　トレンチ土層断面図作成。

2月24日　ST1001・ST1002平面図作成。

2月25日　SX1001精査。

3月7日　墳丘状高まり周辺掘り下げ。SX1002平面図作成。



3月8日　SX1003出土土器取り上げ。

3月9日　SX1003平面図作成。SX1003土器取り上げ。

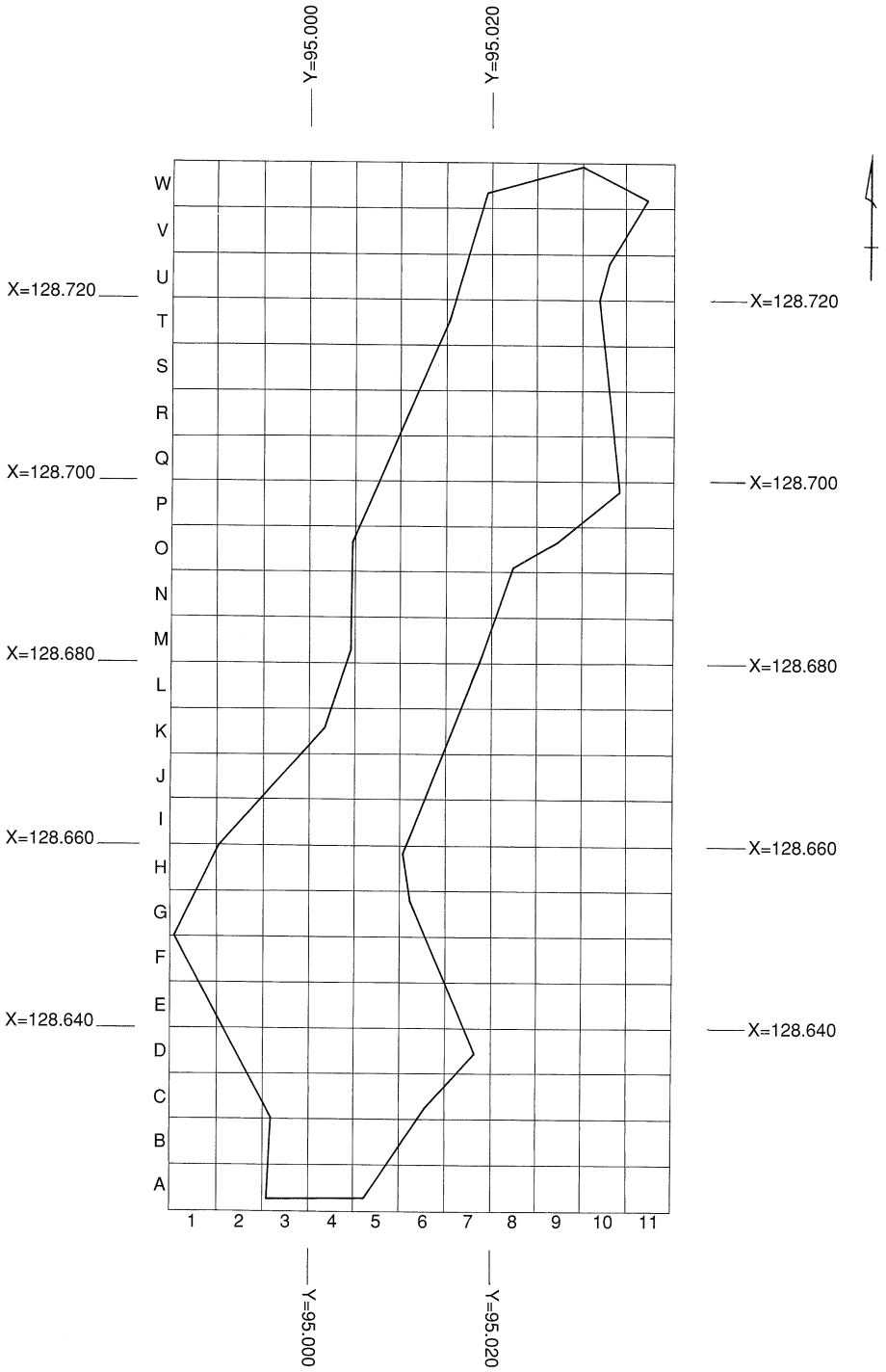
3月10日　SX1003平面図作成。SX1003土器取り上げ。

3月13日　トレンチ配置図作成。

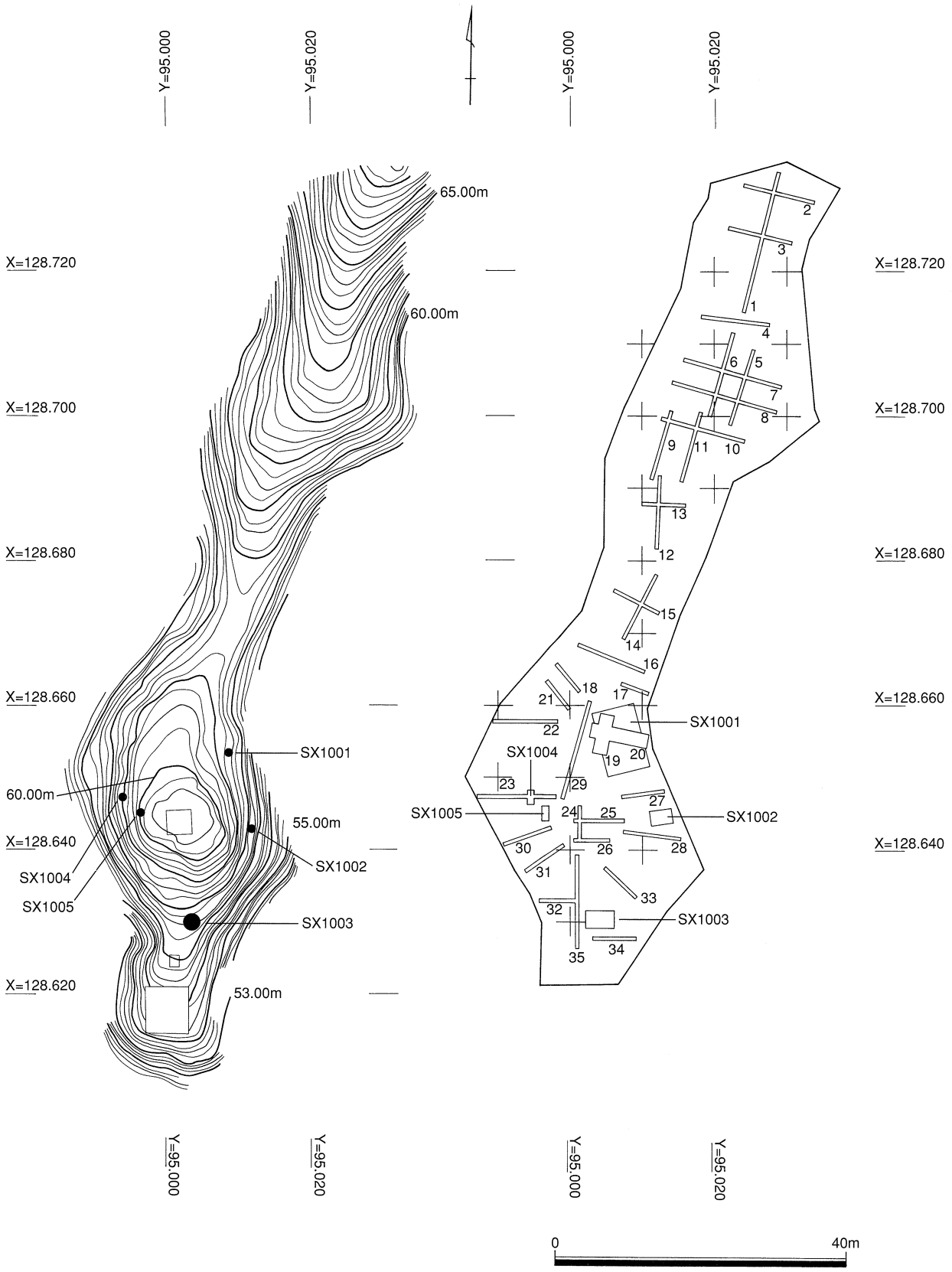
3月22日　調査区全景撮影。

3月23日　遺構埋め戻し。図面整理。

3月24日　調査終了。現場撤収。


Y=95.000
Y=95.020
W
V
U
T
S
R
Q
P
O
N
M
L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
X=128.720
X=128.700
X=128.680
X=128.660
X=128.640
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11

第１図　グリッド配置図



第２図　地形平面・トレンチ配置図

2　調査成果

（1）遺跡の位置（Ⅰ-第1図およびⅡ-第1・5・18図）

勝明寺谷古墳群は四国横断自動車道建設に伴い発掘調査が実施された。調査地点は鳴門市大麻町池谷の阿讃山脈南麓、標高57～67mの尾根上に位置する。調査の結果、調査区は土地の改変が著しく、明瞭な遺構は確認することはできなかったが、朝顔形埴輪・円筒埴輪等が多く出土しており、当該調査区に古墳が築造されていたことが示唆される。

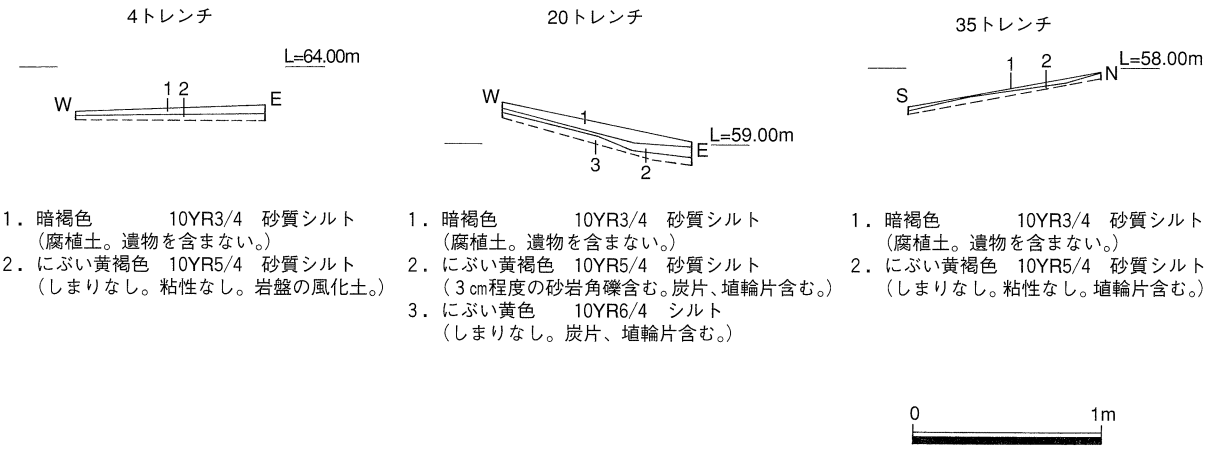
（2）基本層序（第2・3図）

トレンチ配置状況と土層堆積状況

調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘の結果、調査区南部東側斜面において埴輪片が集中して出土する箇所がみられ、必要に応じてトレンチを拡張して出土範囲等の把握に努めた。

土層堆積状況は各トレンチとも類似しており、基本層序は以下の通りほぼ対応する。

1．…暗褐色 10YR3/4 砂質土（表土。腐植土。）
2．…にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質土（シルト質土。岩盤風化土、ϕ＝3～5㎝程度の礫を含む。炭化物・埴輪片含む。）
3．…岩盤（和泉層群礫層。）



4トレンチ
1．暗褐色　10YR3/4　砂質シルト（腐植土。遺物を含まない。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質シルト（しまりなし。粘性なし。岩盤の風化土。）

20トレンチ
1．暗褐色　10YR3/4　砂質シルト（腐植土。遺物を含まない。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質シルト（3㎝程度の砂岩角礫含む。炭片、埴輪片含む。）
3．にぶい黄色　10YR6/4　シルト（しまりなし。炭片、埴輪片含む。）

35トレンチ
1．暗褐色　10YR3/4　砂質シルト（腐植土。遺物を含まない。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質シルト（しまりなし。粘性なし。埴輪片含む。）

第3図　模式柱状土層図

（3）遺構と遺物（第2図）

遺跡内における遺構配置は第2図に示すとおりである。明瞭な遺構は確認することはできなかったが、朝顔形埴輪・円筒埴輪等が多く出土しており、埴輪集中出土地点をSXとして扱った。

SX1001（不明遺構1）（第4図）

G・H-3グリッド、調査区南部東側斜面で検出された埴輪出土集中部である。埴輪が伴うような遺構はみられず、埴輪片の散布のみであり、明瞭な平面プランを有する遺構を形成していない。埴輪片は5m×5m程度の範囲に集中してみられる。これらの埴輪片は出土状況から、破壊された後に周辺の山土とともに二次的に再堆積したと考えられ、原位置は遊離しているものと思われる。また埴輪の原位置も確定は困難である。

出土遺物（第5～8図）

出土した埴輪は円筒埴輪が主体を占めるが、朝顔形埴輪も少数ではあるが散見する。1～7は朝顔形埴輪、8～32は円筒埴輪である。埴輪は、ほとんどが10cm前後またはそれ以下の破片として検出されており、全容の判明するものは少ない。また埴輪片の多くは摩滅している。埴輪片の中には焼成がよく須恵質となっているものもみられる。表面の遺存状態の良好なものを観察すれば、一次調整後のタテハケおよび突帯貼付後のB種ヨコハケが認められる。

1はもっとも良好に遺存する個体である。数片の断片となるが、約60cmの器高に復元できるものである。3条突帯で細身の円筒部分から、口縁部は直線的に大きく開くが、口縁端部は強いナデによって屈曲して水平近くまでさらに開く。壺に見立てた場合の肩の部分は膨らみに乏しく、頸部と口縁部中位に突帯が巡る。透かし孔は3段目に円形のものが1箇所みえており、中位の2段目と3段目に1対が千鳥式に配置されるのであろう。突帯は断面で中位が窪む弱い「M」字形で、明瞭な突出がある。口縁部中位の突帯は、一度断面三角で突出の低いものを貼り付けた後に、再度断面「M」字形となるように粘土を付加している。器面調整は、円筒部分外面は一次調整にタテハケ、二次調整には器表面をハケ工具が静止しながら全周するB種ヨコハケを施し、内面はナデ調整である。底部付近については、外面は2種のハケ後に縦方向のヘラケズリ、内面はナデ後横方向のヘラケズリで調整している。壺部肩は円筒部同様のヨコハケであるが、口縁部はタテハケのみとなる。同内面は頸部以上のみ横方向のハケである。B種ヨコハケの原体幅は突帯間と一致（3段目）しており、一瀬和夫の「Bb種」でありこの調整技法の中ではもっとも新しい段階とされている（一瀬 1988）。工具の静止痕は右斜め上がりにあり、その間隔は3～6cmである。2～6も1と同様の形態であるが、4のみ口縁部中位の突帯が台形で突出度も高い点に違いがある。

円筒埴輪は全形の判明するものはないが、口径が25cmに（8）、底径が約20cmに（12・27）復元されることから、2条突帯3段構成で器高約40cmと朝顔形埴輪と比較してやや太めのプロポーションが想定できる。8・10・11でみると最上段は直立しており、口縁部周辺のみ外傾（8）あるいは屈曲（10）している。透かし孔は中間の2段目に円形に穿たれ、突帯は突出度の低いもので断面形状が台形あるいは弱い「M」字となる。器表面の調整は外面が一次調整のタテハケの後二次調整にB種ヨコハケ、内面はナデ調整の後口縁部直下には横方向のハケを基本としているが、外面にハケを用いずナデによる調整で終える一群がある。20は最下段をB種ヨコハケ後縦方向に強くナデ調整している。27の最下段では、

B種ヨコハケの工具幅は朝顔形埴輪の場合と同様に突帯間の間隔に一致している（約9㎝）。

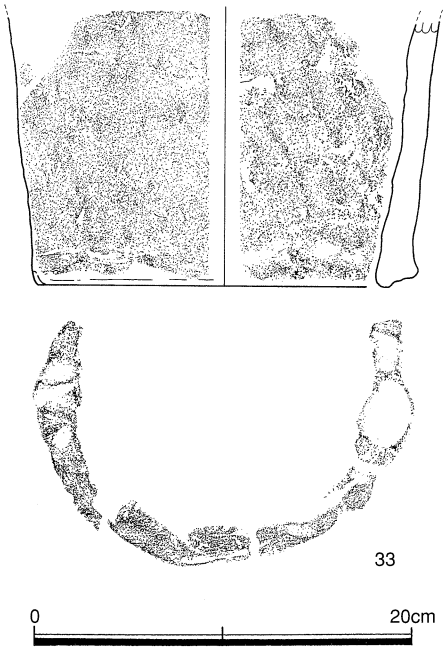
これらの埴輪は色調・胎土などから大きく3種に分かれる。A群はにぶい黄褐色を呈するもので1・2・3・5・7の朝顔形埴輪の他、11・13・24・27・29・30の円筒埴輪を含む。1や30のように良好な焼成のものは部分的に須恵質化している。B群はにぶい黄橙色を呈するもので、朝顔形埴輪の4の他、10・12・21・23の円筒埴輪を含む。C群はA・Bいずれにも該当しないもので、個体ごとの差異が大きく、14・19などがこれにあたる。

SX1002（不明遺構2）（第9図）

E-5グリッド、調査区南部東側斜面で検出された埴輪出土集中部である。埴輪が伴うような遺構はみられず、埴輪片の散布のみであり、明瞭な平面プランを有する遺構を形成していない。埴輪片は1m×1m程度の狭い範囲に集中してみられる。これらの埴輪片は出土状況から、SX1001と同様、破壊された後に周辺の山土とともに二次的に再堆積したと考えられ、原位置は遊離しているものと思われる。また埴輪の原位置も確定は困難である。

出土遺物（第11図）

出土した埴輪は、ほとんどが10㎝前後またはそれ以下の破片として検出され、復元・実測可能なものは少ない。33は円筒埴輪の基底部である。端部はやや肥厚する。底径が20㎝に復元されるもので、器表面の調整は、外面にハケはみられず弱い板ナデ、内面は縦方向のナデが施される。底面には作業台からの切り離しの工具の痕跡を明瞭にとどめる。



第11図　SX1002出土埴輪

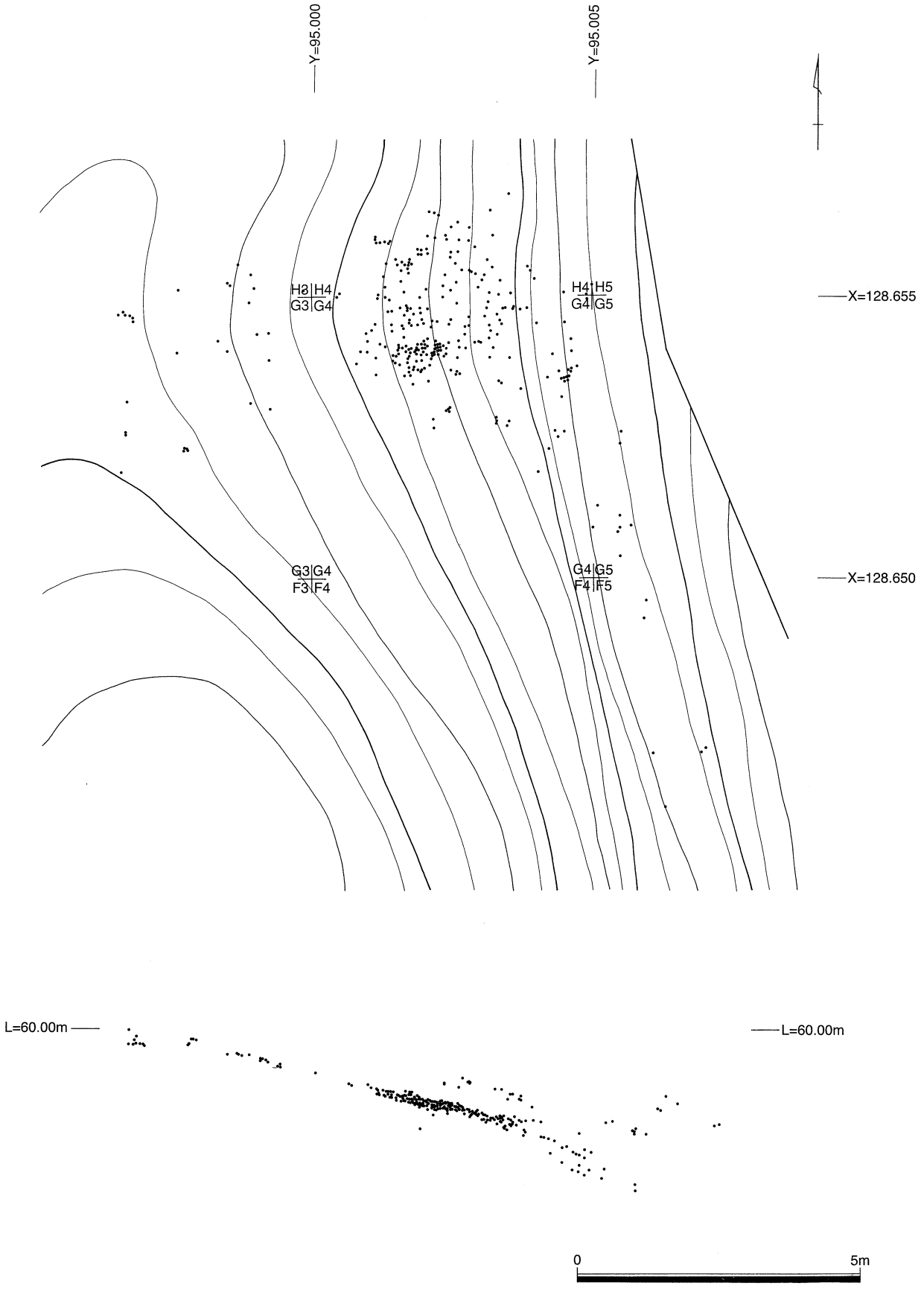
SX1003（不明遺構3）（第10図）

B・C-3グリッド、調査区南部東側斜面で検出された埴輪出土集中部である。埴輪が伴うような遺構はみられず、埴輪片の散布のみであり、明瞭な平面プランを有する遺構を形成していない。埴輪片は2m×2m程度の範囲に集中してみられる。これらの埴輪片は出土状況から、破壊された後に周辺の山土とともに二次的に再堆積したと考えられ、原位置は遊離しているものと思われる。また埴輪の原位置も確定は困難である。

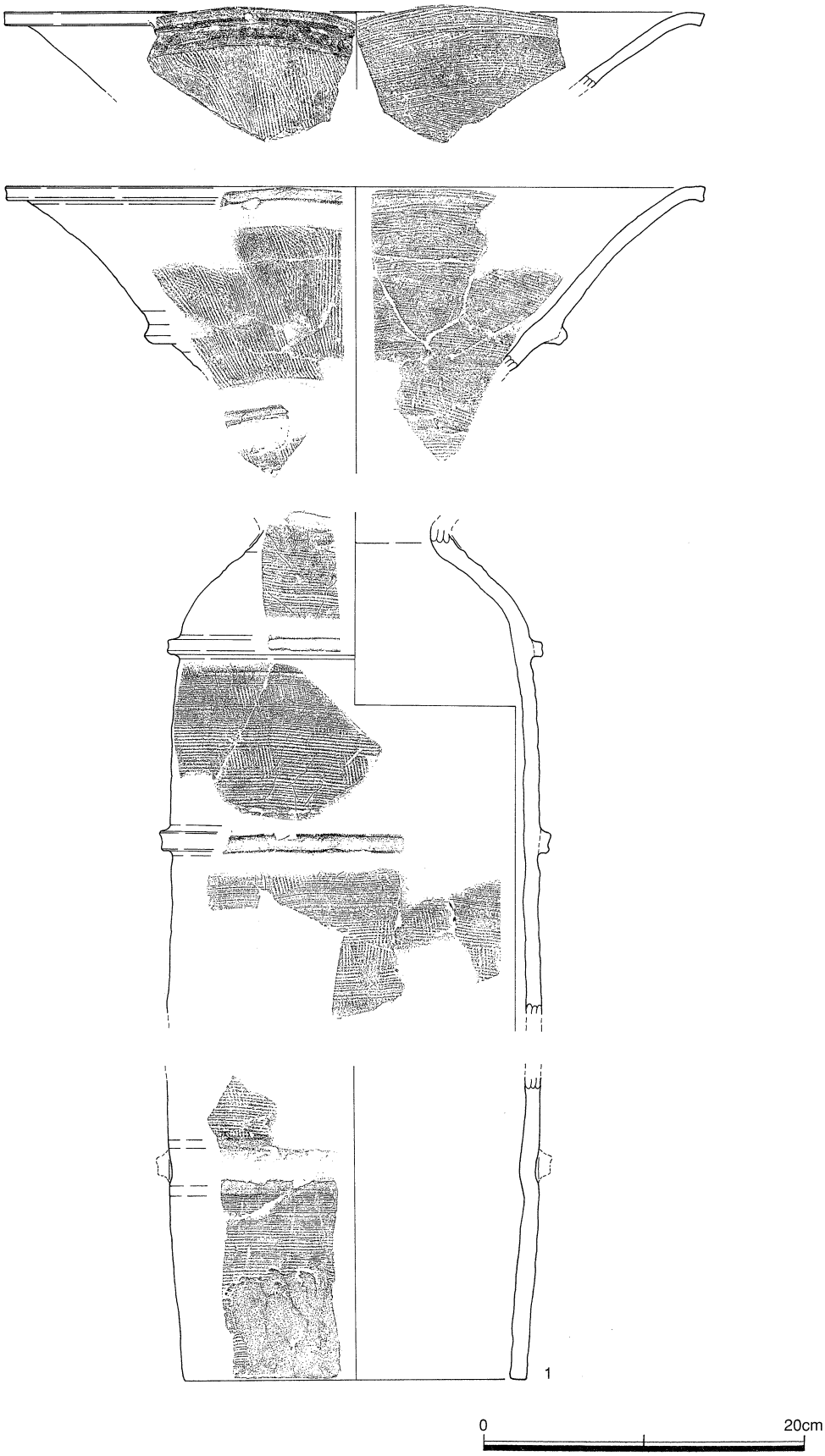
出土遺物（第12・13図）

出土遺物はほとんどが埴輪片であるが、若干の須恵器片もみられる。全容の判明するものは少ない。また埴輪片の多くは摩滅している。出土した埴輪は円筒埴輪が主体を占めるが、朝顔形埴輪も少数ではあるが散見するが、復元・実測可能なものはなかった。

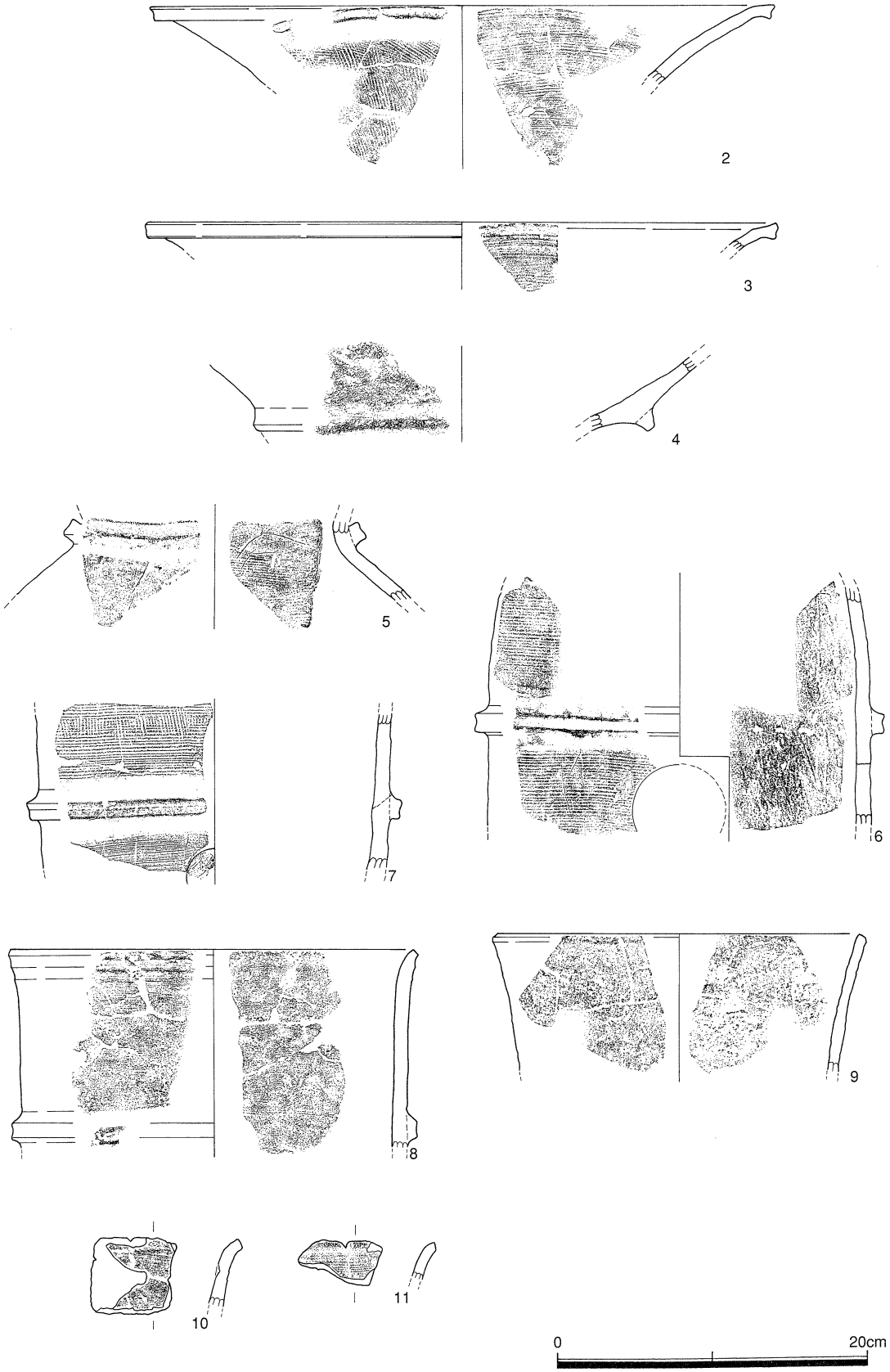
34は須恵器甕の体～底部で体部最大径・器高ともに約30㎝が想定される。外面格子目タタキ、内面同



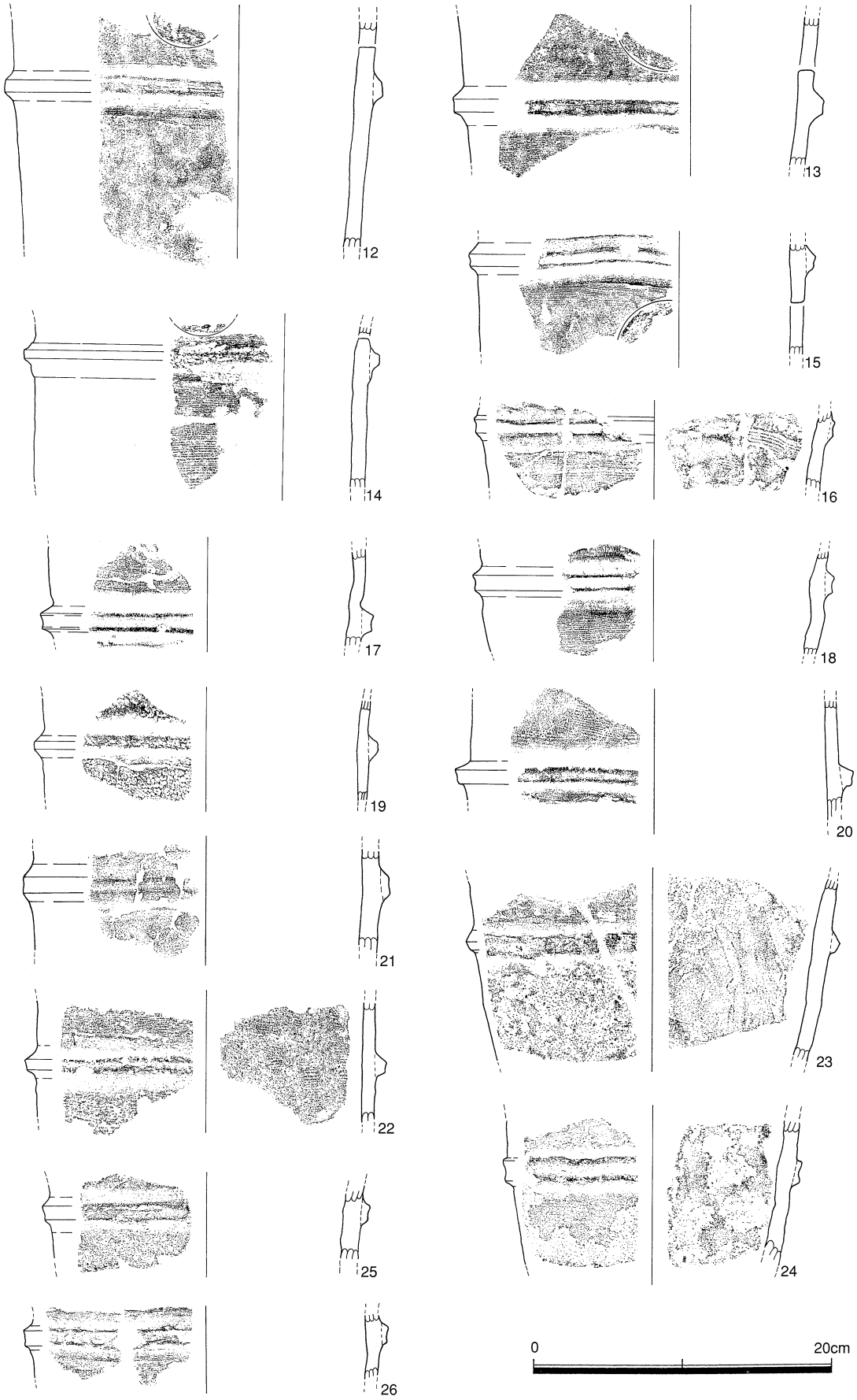
第４図　SX1001遺物出土状況分布図



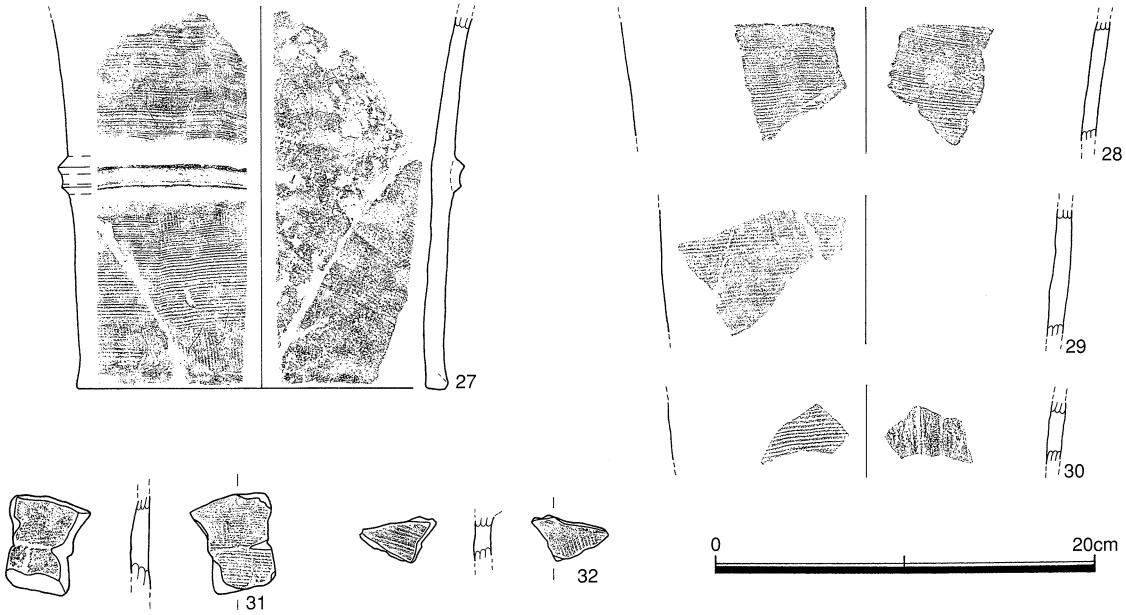
第５図　SX1001出土埴輪１



第６図　SX1001出土埴輪２



第７図　SX1001出土埴輪３



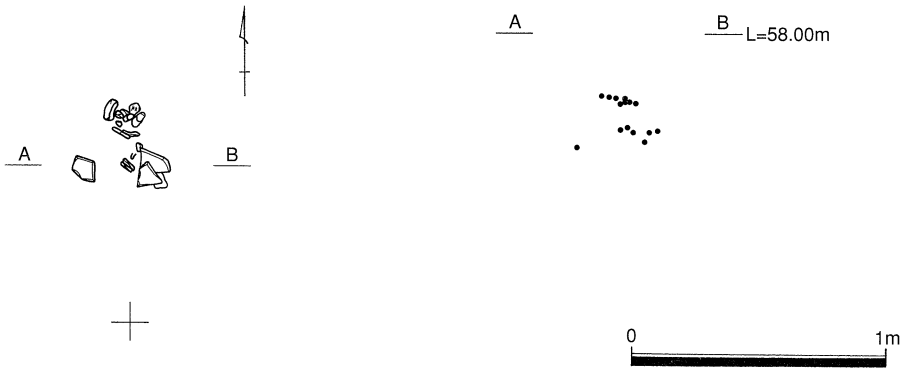
第８図　SX1001出土埴輪４

心円当て具による成形であり、時期的には古墳時代後期のものである。

35～50は円筒埴輪である。埴輪片は10cm前後またはそれ以下の破片として検出されており、小片のみであるが、全形はSX1001出土のものと同様である。突帯・透かし・ハケによる調整についても同類とみなしうる。異なっている点は、SX1001でのＢ群が主体を占めている点で、35・37～50がこれにあたっており、いずれにもハケ調整にみられない。底面に作業台からの切り離し時の痕跡として48には指の圧痕が、49には板ナデがみられる。

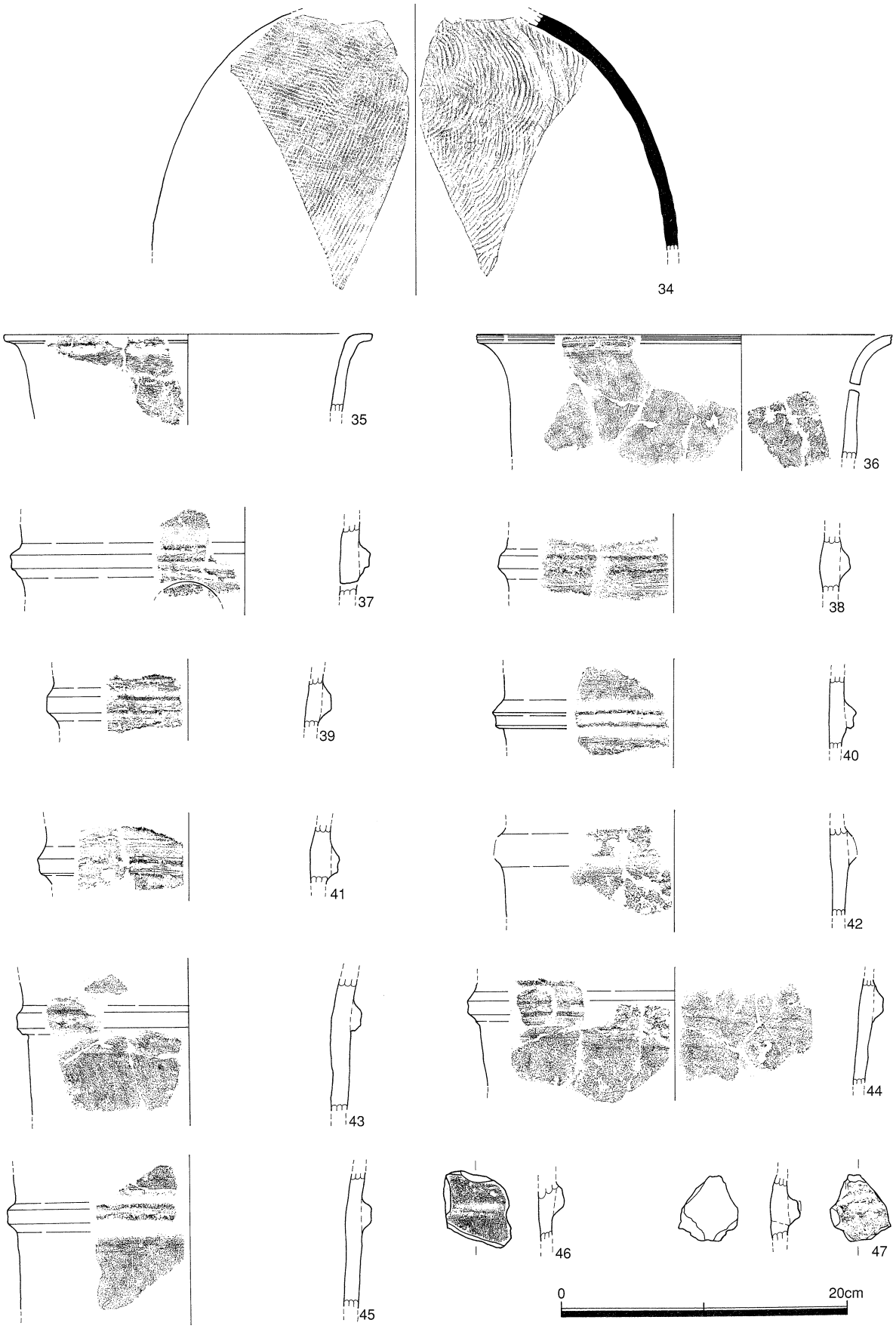
SX1004（不明遺構４）（第14・15図）

F-1グリッド、調査区南部西側斜面で検出された遺構である。検出時は円筒埴輪基底部と思われたが、円筒形の焜炉を埋設した遺構であった。須恵器片なども混入していたが、共伴する近世陶・磁器片などから、近世以降に骨蔵器として利用された可能性が高い。

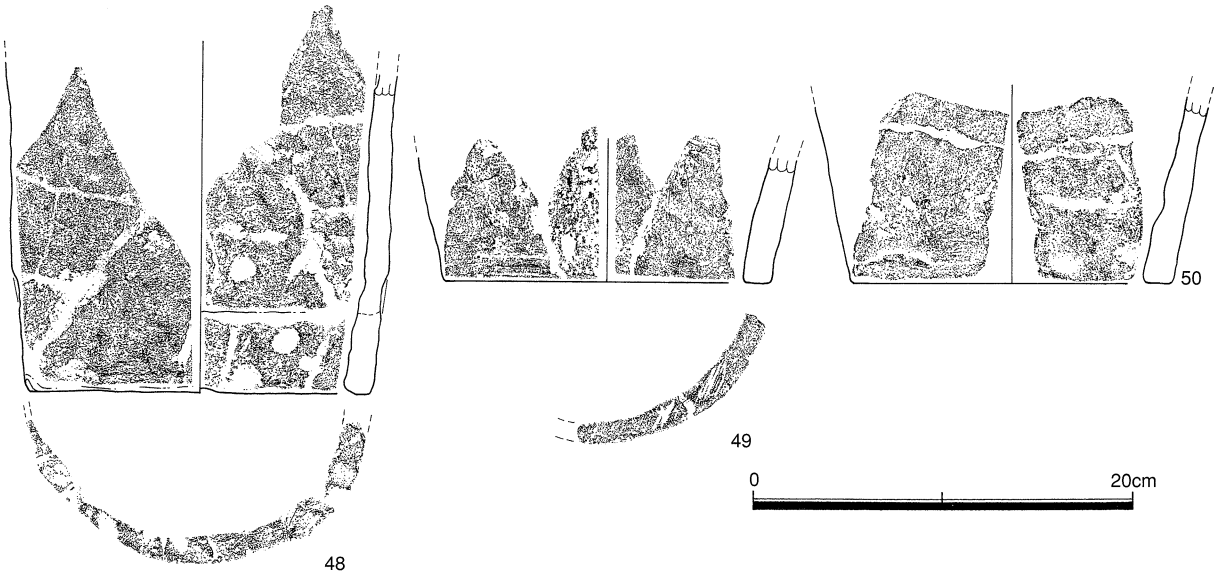


第９図　SX1002埴輪出土状況平・断面図

第10図　SX1003埴輪出土状況平・断面図



第12図　SX1003出土遺物１



第13図　SX1003出土遺物２

SX1005（不明遺構５）（第16図）

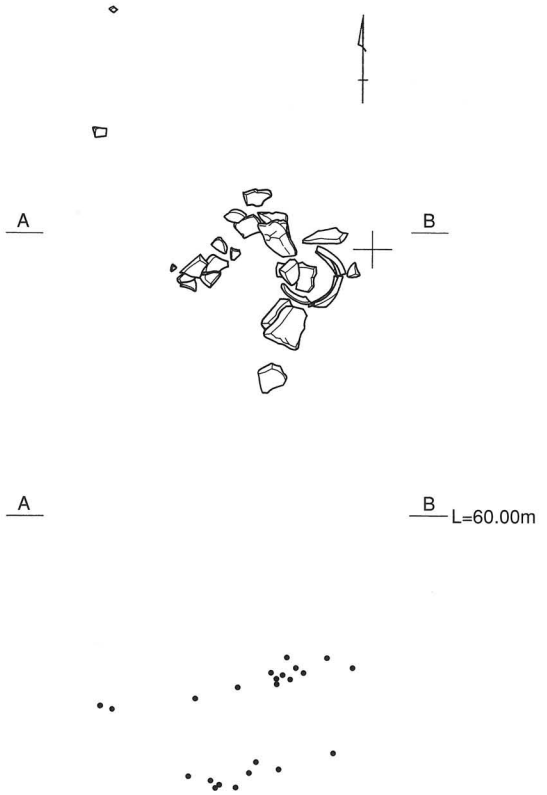
F-2グリッド、調査区南部西側斜面で検出された遺構である。検出時は円筒埴輪基底部と思われたが、円筒形の焜炉を埋設した遺構である。SX1004と同様、共伴する陶・磁器片などから、近世以降に骨蔵器として利用された可能性が高い。

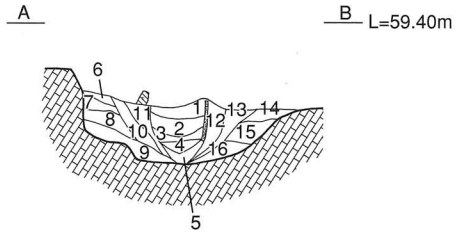
出土遺物（第17図）

３点とも火鉢・焜炉類である。51は竈で下部に楕円形の受けとその下に２ないし３の足を持つ、移動可能な置き竈と呼ばれるタイプである。52と53は焜炉であるが、52は外面全周に回転印刻文が施され、口縁上端部から6.5cmの位置に長さ縦２cm、幅２mmの透かしが焼成前に穿孔されている。口縁端部内側全周には炭化物の付着が見られる。53は珪藻土から作られている。何れも骨蔵器として埋納された可能性が高い。時期的には近世以降のものと考えられる。

包含層出土遺物（第18図）

54・55は須恵器甕の体部破片である。56は形象埴輪の破片で家形埴輪の一部と思われるが詳細は不明である。

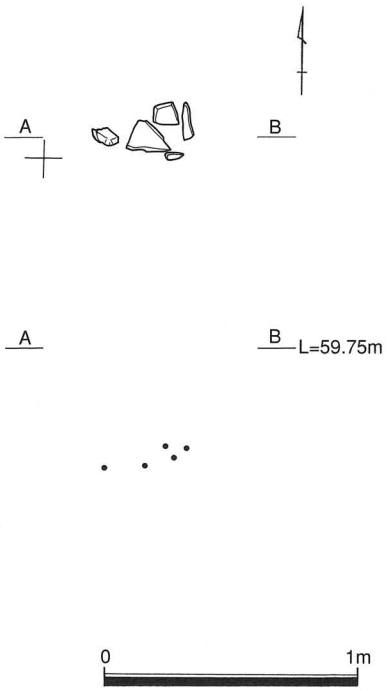




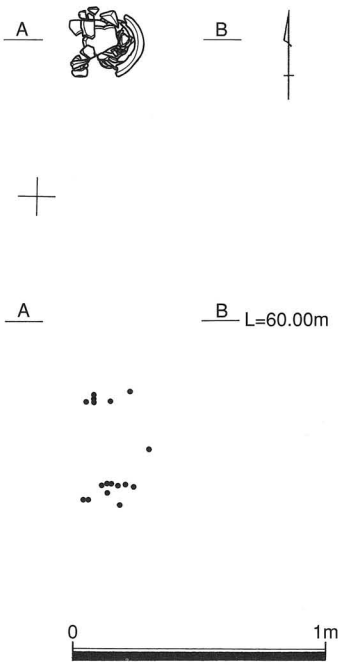
1．にぶい黄橙色　10YR6/4　シルト（しまりなし。粘性なし。1㎝の角礫を少し含む。）
2．黄褐色　10YR5/6　シルト（しまりなし。粘性なし。）
3．褐色　10YR4/4　シルト（しまりなし。粘性なし。）
4．にぶい橙色　7.5YR6/4　シルト（しまりなし。粘性なし。）
5．明黄褐色　10YR6/6　シルト（しまりなし。粘性なし。）
6．にぶい黄橙色　10YR7/3　シルト（しまりなし。粘性なし。）
7．にぶい黄橙色　10YR6/4　シルト（しまりなし。粘性なし。）
8．にぶい黄橙色　10YR5/4　シルト（しまりなし。粘性なし。）
9．明黄褐色　10YR6/6　シルト（ややしまりあり。粘性なし。）
10．黄褐色　10YR4/2　シルト（しまりなし。粘性なし。）
11．にぶい黄褐色　10YR5/4　シルト（しまりなし。粘性なし。）
12．にぶい黄褐色　10YR6/3　シルト（しまりなし。粘性なし。）
13．にぶい黄橙色　10YR7/4　シルト（しまりなし。粘性なし。）
14．にぶい橙色　10YR7/3　シルト（しまりなし。粘性なし。）
15．灰褐色　10YR4/2　シルト（しまりなし。粘性なし。）
16．にぶい黄褐色　10YR6/3　シルト（しまりなし。粘性なし。）

0　1m

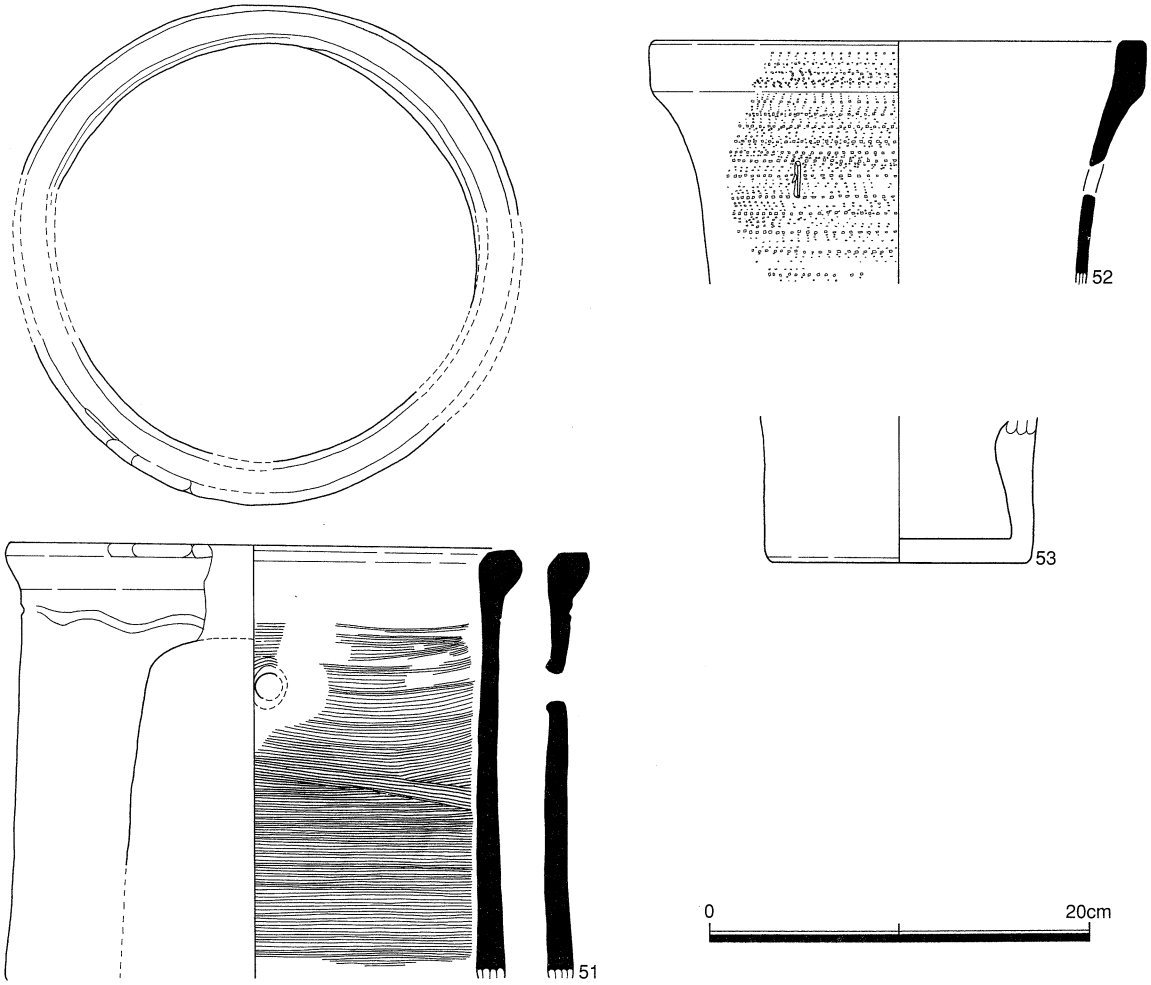
第14図　SX1004遺物出土状況平・断面図



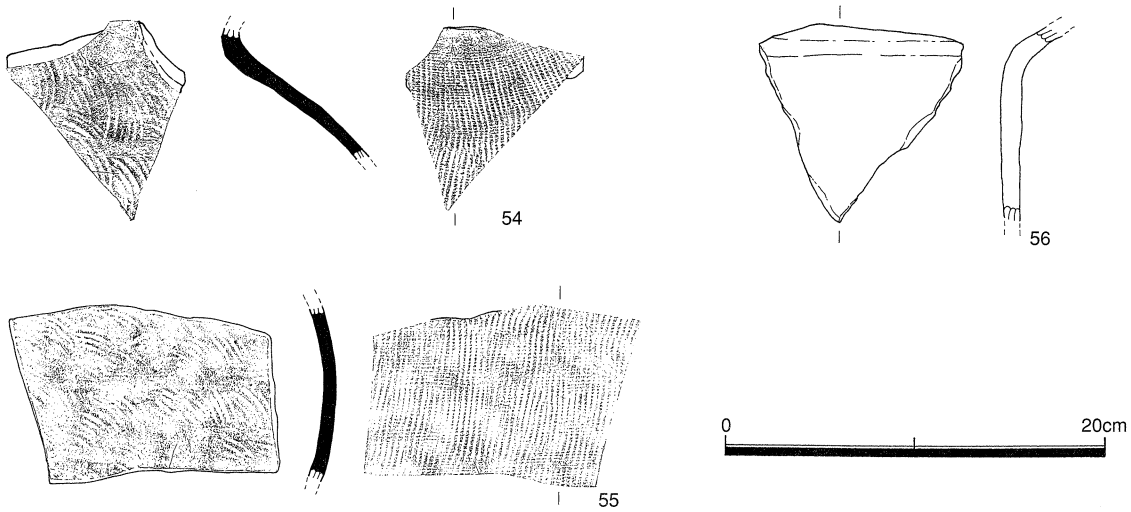
第15図　SX1004西側遺物出土状況平・断面図



第16図　SX1005遺物出土状況平・断面図



第17図　SX1004・1005出土遺物



第18図　包含層出土遺物

（4）まとめ

調査区南部、標高66m前後の地点には墳丘状の高まり地形がみられ、それを中心として東側斜面からは埴輪片が集中して出土している。また周辺からは結晶片岩の破片が散在していたことから、この地点に古墳が築造され、主体部が存在していた可能性が高い。

調査地点は地形の改変が著しいため、遺存状況は良好ではない。主体部の形態は不明であるが、片岩を用いた石室の存在が示唆される。墳丘の盛土等は確認できなかった。削平が著しいこともあるが、墳丘の構築については、自然地形を利用して地山を削出して成形していたものと思われる。墳丘規模は地形コンタライン等から直径17m前後の円墳であったと推定される。

出土埴輪等から、本調査地点において５世紀後半頃に古墳が築造されていた可能性がある。

引用・参考文献

一瀬　和夫　1988「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修に伴う発掘調査概要・Ⅴ　応神陵古墳外堤・Ⅰ　古室遺跡・Ⅲ』大阪府教育委員会

勝明寺谷古墳群
第１表　出土遺構一覧表
SX

遺構名	グリッド	墓壙平面形態	墓壙断面形態	墓壙長軸（cm）	墓壙短軸（cm）	墓壙深度（cm）	備　　考
SX1001	H･G-4～6						埴輪集中部、再堆積の可能性。
SX1002	E･F-6						埴輪集中部、再堆積の可能性。
SX1003	B･C-4･5						埴輪集中部、再堆積の可能性。
SX1004	F-2	墓壙　石室は残存せず。					須恵器などが検出されたが、共伴する陶器片等は新しいので、近代以降に作られた可能性。 円筒埴輪の円の中心と中心の距離は1.4m。
SX1005	E･F-3	墓壙　石室は残存せず。					須恵器などが検出されたが、共伴する陶器片等は新しいので、近代以降に作られた可能性。 円筒埴輪の円の中心と中心の距離は1.4m。

第２表　出土遺物観察表
SX（埴輪）

報告書掲載番号	遺　構	出土地点	層　位	器　種	法量（cm）	形態の特徴	成形・調整	胎　土	色　調	備　考
1	SX1001	G-3・4 H-4	岩盤直上	朝顔形埴輪 （口縁部）	器高11.6 口径43.6 厚さ0.9	口縁部は大きく外反し、端部は水平に傾き、方形状に収める。	外面：口縁部ナデ、ナナメハケ（６条／cm）のちタテハケ（６条／cm）（10条／cm）、頸部タテハケ（10条／cm）。 内面：ヨコハケ（６条／cm）（12条／cm）のちナナメハケ（８条／cm）。	精、石英・結晶片岩0.1～3.0㎜	にぶい橙	焼成硬質。
1	SX1001	G-3・4 H-4	岩盤直上	朝顔形埴輪 （口縁部）	器高11.6 口径43.6 厚さ0.9	口縁部は大きく外反し、端部は水平に傾き、方形状に収める。口縁部突帯は台形状である。	外面：口縁部ナデ、ナナメハケ（６条／cm）のちタテハケ（６条／cm）（10条／cm）、頸部タテハケ（10条／cm）。 内面：ヨコハケ（６条／cm）（12条／cm）のちナナメハケ（８条／cm）。	精、石英・結晶片岩0.1～3.0㎜	にぶい橙	焼成硬質。
1	SX1001	G-3・4 H-4	岩盤直上	朝顔形埴輪 （胴部）	器高30.4 頸径13.8 胴径23.0 厚さ1.1	胴部、直線的に立ち上がる。タガの断面形はＭ形状。肩部内傾し、頸部突帯に至る。頸部突帯は剥離している。	外面：肩部ナデ、ヨコハケ（６条／cm）、胴部タテハケ（６条／cm）のちヨコハケ（６条／cm）（10条／cm）のち一部タテハケ（６条／cm）、タガ部分ナデ。 内面：ナデ。	精、石英・結晶片岩0.1～5.0㎜	にぶい橙	焼成硬質。
1	SX1001	G・H-4	岩盤直上	朝顔形埴輪 （底部）	器高18.8 胴径23.1 底径21.2 厚さ1.0	基底部端部は方形状を呈する。底部から上方に直線的に延びる。１段目突帯は剥離している。	外面：基底部ヨコハケ（６条／cm）（10条／cm）のち一部にナデあり、胴部タテハケ（６条／cm）のちヨコハケ（６条／cm）。 内面：ナデ。	精、石英・雲母・結晶片岩0.1～１㎜	にぶい橙	焼成硬質。
2	SX1001	H-4	岩盤直上	朝顔形埴輪	器高5.1 口径40.4 厚さ0.8	口縁部は大きく外反し、端部は水平に傾き、上下に拡張する。端部は強いナデにより凹んでいる。	外面：ナデ、ナナメハケ（６条／cm）のちタテハケ（６条／cm）。 内面：ヨコハケ（６～８条／cm）。	やや精、石英・長石４㎜	橙	焼成やや硬質。
3	SX1001	H-4	岩盤直上	朝顔形埴輪	器高1.8 口径40.5 厚さ0.7	口縁部は大きく外反し、端部は水平に傾き、上下に拡張する。端部は強いナデにより凹んでいる。	外面：ナデ。 内面：ヨコハケ（９条／cm）。	精、石英・赤色斑粒0.1～３㎜	浅黄橙	焼成やや硬質。
4	SX1001	G-4	岩盤直上	朝顔形埴輪	器高4.8 突帯幅1.5 突帯高1.0	直線的に外反し、口縁部と頸部の境に突帯１条。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	粗、石英・長石・赤色斑粒0.1～３㎜	にぶい黄橙	焼成軟質。
5	SX1001	G-4	岩盤直上	朝顔形埴輪	器高5.0 頸径18.4 厚さ0.9	肩部上、頸部突帯に延びる。タガの断面形は四角形状。	外面：ナデ。 内面：ヨコハケ（６条／cm）。	粗、長石・雲母・赤色斑粒0.1～３㎜	橙	焼成軟質。
6	SX1001	G･H-4	岩盤直上	朝顔形埴輪	器高15.0 胴径24.5 厚さ0.9	肩部緩やかに内彎する。肩部と胴部の境に位置するタガの断面形はＭ形状。透かし孔(円孔)がタガの下に有り。	外面：ヨコハケ（６条／cm）、ナデ。 内面：ナデ。	粗、石英・長石・赤色斑粒0.1～２㎜	橙	焼成やや軟質。
7	SX1001	G・H-4	岩盤直上	朝顔形埴輪	器高9.8 胴径25.0 厚さ1.0	胴部、ほぼ直線的に延びる。タガの断面形はＭ形状。	外面：タテハケ（８条／cm）のちヨコハケ（６条／cm）、ナデ、ヨコハケ（10条／cm）。 内面：ナデ。	精、石英・結晶片岩0.1～9.0㎜	にぶい橙	焼成硬質。
8	SX1001	G-4	岩盤直上	円筒埴輪	器高13.0 口径25.8 厚さ0.9	胴部、直線的に延びる。タガの断面形はＭ形状。口縁部で僅かに外反し、端部を方形状に収める。口縁外側は強いナデにより凹みがある。	外面：ヨコハケ（10条／cm）。 内面：ナデ、ヨコハケ（10条／cm）。	粗、石英・赤色斑粒0.1～１㎜	橙	焼成軟質。
9	SX1001	G-4	岩盤直上	円筒埴輪	器高8.9 口径24.1 厚さ0.6	口縁部僅かに外反し、端部を方形状に収める。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	粗、長石・赤色斑粒0.1～３㎜	橙	焼成軟質。
10	SX1001	G-4	岩盤直上	円筒埴輪	縦5.0 横5.6 厚さ0.8	口縁部僅かに外反し、端部を方形状に収める。	外面：ヨコハケ（７条／cm）のちナデ。 内面：ナデ。	粗、石英・結晶片岩・赤色斑粒0.1～２㎜	外面：暗灰黄 内面：浅黄橙	焼成軟質。
11	SX1001	G-4	岩盤直上	円筒埴輪	縦2.9 横5.4 厚さ不明	口縁部僅かに外反し、端部を方形状に収める。	外面：ヨコハケ（７条／cm）。 内面：摩滅のため不明。	粗、石英・赤色斑粒0.1～２㎜	浅黄橙	焼成軟質。
12	SX1001	G-4	岩盤直上	円筒埴輪	器高15.1 胴径24.0 厚さ1.2	胴部、外上方に延びる。タガの断面形は台形状。透かし孔（円孔）有り。	外面：ヨコハケ（単位不明）のちナデ。 内面：ナデ。	粗、石英・赤色斑粒２㎜	浅黄橙	焼成軟質。
13	SX1001	G-4	岩盤直上	円筒埴輪	器高10.0 胴径23.0 厚さ0.9	胴部、外上方に延びる。タガの断面形はＭ形状。透かし孔（円孔）有り。	外面：ヨコハケ（単位不明）、ナデ、ヨコハケ（９条／cm）。 内面：ナデ。	やや粗、石英・赤色斑粒２㎜	浅黄橙	焼成やや軟質。
14	SX1001	G･H-4	岩盤直上	円筒埴輪	器高10.6 胴径22.4 厚さ1.0	胴部、外上方に延びる。タガの断面形は台形状。透かし孔（円孔）有り。	外面：ナデ、ヨコハケ（６条／cm）。 内面：ヨコハケ（６条／cm）のちユビオサエ、ナデ。	粗、石英・赤色斑粒0.1～５㎜	浅黄橙	焼成軟質。

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	法量（cm）	形態の特徴	成形・調整	胎土	色調	備考
15	SX1001	G-4	岩盤直上	円筒埴輪	器高7.3 胴径22.0 厚さ0.9	胴部、直線的に延びる。タガの断面形はM形状。透かし孔（円孔）有り。	外面：ナデ、タテハケのちヨコハケ（11～12条／cm）。 内面：ナデ。	やや粗、石英・赤色斑粒２㎜	橙	焼成軟質。
16	SX1001	G-4	岩盤直上	円筒埴輪	器高5.4 胴径23.0 厚さ0.9	胴部、外上方に延びる。タガの断面形はM形状。	外面：ヨコハケ（７条／cm）。 内面：ヨコハケ（５条／cm）。	粗、石英・長石・赤色斑粒0.1～２㎜	にぶい橙	焼成軟質。
17	SX1001	G-4	岩盤直上	円筒埴輪	器高6.2 胴径21.2 厚さ0.8	胴部、ほぼ直線的に延びる。タガの断面形はM形状。	外面：ヨコハケ（８条／cm）、ナデ。 内面：ナデ。	精、石英・雲母・赤色斑粒0.1～1.8㎜	黄橙	焼成やや硬質。
18	SX1001	G-4	岩盤直上	円筒埴輪	器高6.9 胴径23.0 厚さ0.9	胴部、外上方に延びる。タガの断面形はM形状。	外面：ナデ、ヨコハケ（８条／cm）。 内面：ナデ。	粗、石英・赤色斑粒0.1～６㎜	浅黄橙	焼成やや硬質。
19	SX1001	G-4	岩盤直上	円筒埴輪	器高6.6 胴径21.8 厚さ0.8	胴部、直線的に延びる。タガの断面形は台形状。	外面：摩滅のため調整不明。 内面：摩滅のため調整不明。	粗、石英・赤色斑粒３㎜	橙	焼成軟質。
20	SX1001	G-4	岩盤直上	円筒埴輪	器高8.0 胴径25.5 厚さ0.8	胴部、直線的に延びる。タガの断面形はM形状。全体的に摩滅気味。	外面：ヨコハケ（５～６条／cm）、ナデ。 内面：ナデ。	粗、石英・赤色斑粒５㎜	橙	焼成軟質。
21	SX1001	B-3	岩盤直上	円筒埴輪	器高5.8 胴径23.8 厚さ1.2	胴部、直線的に延びる。タガの断面形はM形状。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	粗、石英・赤色斑粒３㎜	浅黄橙	焼成軟質。
22	SX1001	G-4	岩盤直上	円筒埴輪	器高8.0 胴径25.5 厚さ0.8	胴部、直線的に延びる。タガの断面形はM形状。	外面：ヨコハケ（摩滅のため単位不明）、ナデ。 内面：ヨコハケ（６条／cm）。	粗、石英0.1～３㎜	外面：橙 内面：浅黄橙	焼成軟質。
23	SX1001	G-4	岩盤直上	円筒埴輪	器高12.３ 胴径24.５ 厚さ１.１	胴部、外上方に延びる。タガの断面形は台形状。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	粗、石英・長石・雲母・赤色斑粒0.1～３㎜	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい橙	焼成軟質。
24	SX1001	G-4	岩盤直上	円筒埴輪	器高9.5 胴径19.5 厚さ1.0	胴部、外上方に延びる。タガの断面形はM形状。	外面：ヨコハケ（８条／cm）、ナデ。 内面：ナデ。	粗、石英・長石・赤色斑粒0.1～２㎜	橙	焼成軟質。
25	SX1001	G-4	岩盤直上	円筒埴輪	器高4.9 胴径20.6 厚さ1.2	胴部、やや外上方に延びる。タガの断面形はM形状。	外面：ナデ、摩滅のため調整不明。 内面：摩滅のため調整不明。	粗、石英・雲母0.1～1.5㎜	浅黄橙	焼成軟質。
26	SX1001	G-4	岩盤直上	円筒埴輪	器高4.3 胴径23.1 厚さ0.8	胴部、直線的に延びる。タガの断面形はM形状。	外面：ナデ、タテハケのちヨコハケ（８条／cm）。 内面：ナデ。	粗、石英・赤色斑粒0.1～４㎜	浅黄橙	焼成軟質。
27	SX1001	G-4	岩盤直上	円筒埴輪	器高19.5 2段目胴径21.8 底径19.5 厚さ1.2	基底部端部は方形状を呈する。底部から外上方に直線的に開く。タガの断面形はM形状。	外面：基底部タテハケのちヨコハケ（７条／cm）、ナデ、胴部タテハケのちヨコハケ（７条／cm）。 内面：ヨコハケ（７条／cm）のちナデ。	やや粗、石英・赤色斑粒５㎜	黄橙	焼成軟質。
28	SX1001	H-4	岩盤直上	円筒埴輪	器高6.2 胴径25.5 厚さ0.7	胴部、直線的に延びる。タガの断面形は台形状。	外面：ヨコハケ（８条／cm）。 内面：ヨコハケ（８条／cm）。	精、石英・雲母・赤色斑粒0.1～２㎜	橙	焼成やや硬質。
29	SX1001	E・H-4	岩盤直上	円筒埴輪	器高6.2 胴径25.5 厚さ0.7	胴部、ほぼ直線的に延びる。	外面：タテハケのちヨコハケ（６条／cm）。 内面：ナデ。	粗、石英・結晶片岩0.1～4㎜	外面：橙 内面：にぶい橙	焼成軟質。
30	SX1001	G-4	岩盤直上	円筒埴輪	器高3.3 胴径20.8 厚さ0.8	胴部、ほぼ直線的に延びる。	外面：ヨコハケ（６条／cm）。 内面：ヘラケズリ（1.4cm／本）。	粗、石英0.1～５㎜	外面：にぶい橙 内面：橙	焼成やや硬質。
31	SX1001	G・H-3	岩盤直上	円筒埴輪	縦5.3 横4.5 厚さ0.9		外面：ヨコハケ（６条／cm）。 内面：ナデ、ヨコハケ（６条／cm）。	粗、石英・雲母・赤色斑粒0.1～２㎜	橙	焼成軟質。
32	SX1001	G-4	岩盤直上	円筒埴輪	縦2.5 横4.0 厚さ0.8		外面：タテハケ（６条／cm）。 内面：ヨコハケ（６条／cm）。	やや精、石英・長石１㎜	橙	焼成やや硬質。
33	SX1002	F-5	岩盤直上	円筒埴輪	器高14.1 底径20.0 厚さ1.3	基底部端部は外面に肥厚し突出する。底部から外上方に直線的に開く。	外面：ナデ、ユビナデ。 内面：ナデ。底部ユビオサエ。	精、石英・結晶片岩・赤色斑粒0.1～２㎜	灰白	焼成硬質。
35	SX1003	C-3	岩盤直上	円筒埴輪	器高5.4 口径25.6 厚さ0.8	口縁部はやや外反し、端部は水平に傾き、丸く収める。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	粗、石英・長石・赤色斑粒0.1～２㎜	にぶい黄橙	焼成軟質。
36	SX1003	C-3	岩盤直上	円筒埴輪	器高8.5 口径29.0 厚さ0.7	口縁部は外反し、端部を方形状に収める。ϕ＝0.5cmの穿孔有り。	外面：口縁部ヨコナデのち凹線２条、ナデ。 内面：ナデ。	やや粗、石英・赤色斑粒２㎜	にぶい橙	焼成やや硬質。
37	SX1003	C-3	岩盤直上	円筒埴輪	器高5.1 胴径23.6 厚さ1.2	胴部、外上方に延びる。タガの断面形はM形状。透かし孔（円孔）有り。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	粗、石英・雲母0.1～２㎜	淡黄	焼成軟質。
38	SX1003	B-3	岩盤直上	円筒埴輪	器高4.2 胴径23.0 厚さ1.1	胴部、直線的に延びる。タガの断面形は台形状。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	精、石英・雲母・赤色斑粒0.1～３㎜	外面：浅黄橙 内面：にぶい黄橙	焼成軟質。
39	SX1003	C-3	岩盤直上	円筒埴輪	器高3.5 胴径18.8 厚さ0.9	胴部、外上方に延びる。タガの断面形は台形状。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	粗、石英・長石・赤色斑粒0.1～２㎜	にぶい橙	焼成軟質。
40	SX1003	C-3	岩盤直上	円筒埴輪	器高5.1 胴径23.8 厚さ1.1	胴部、直線的に延びる。タガの断面形はM形状。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	粗、石英・赤色斑粒４㎜	にぶい橙	焼成軟質。
41	SX1003	B・C-3	岩盤直上	円筒埴輪	器高4.0 胴径19.7 厚さ1.1	胴部、直線的に延びる。タガの断面形は台形状。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	粗、石英・雲母・長石・赤色斑粒0.1～２㎜	にぶい黄橙	焼成軟質。
42	SX1003	C-3	岩盤直上	円筒埴輪	器高6.1 胴径24.2 厚さ1.2	胴部、直線的に延びる。タガは欠落しており、形状不明。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	粗、石英・赤色斑粒５㎜	にぶい黄橙	焼成軟質。
43	SX1003	C-3	岩盤直上	円筒埴輪	器高9.0 胴径22.4 厚さ1.3	胴部、外上方に延びる。タガの断面形はM形状。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	粗、石英・雲母・赤色斑粒0.1～３㎜	浅黄橙	焼成軟質。
44	SX1003	C-3	岩盤直上	円筒埴輪	器高7.2 胴径27.3 厚さ0.9	胴部、外上方に延びる。タガの断面形は台形状。タガは剥離部分が多い。	外面：ナデ。 内面：ナナメハケ（６条／cm）のちナデ。	精、石英・雲母0.1～2.5㎜	外面：褐灰、にぶい黄橙 内面：浅黄橙	焼成やや硬質。

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	法量（cm）	形態の特徴	成形・調整	胎土	色調	備考
45	SX1003	C-3	岩盤直上	円筒埴輪	器高9.4 胴径24.0 厚さ1.1	胴部、外上方に延びる。タガの断面形はM形状。	外面：ナデ、ヨコナデ。 内面：ナデ。	粗、石英・赤色斑粒3㎜	にぶい橙	焼成軟質。
46	SX1003	B-3	岩盤直上	円筒埴輪	縦5.4 横4.7 厚さ0.8		外面：ナデ。 内面：ナデ。	精、雲母・赤色斑粒0.1～1.5㎜	浅黄橙	焼成やや硬質。
47	SX1003	C-3	岩盤直上	円筒埴輪	縦4.5 横4.2 厚さ1.1		外面：ナデ。 内面：ナデ。	精、石英・雲母・結晶片岩0.1～3㎜	淡黄	焼成硬質。
48	SX1003	C-3	岩盤直上	円筒埴輪	器高17.4 底径18.2 厚さ1.5	基底部端部は丸みをもつ。底部から外上方に直線的に開く。	外面：ナデ。 内面：ナデのちユビオサエ。	精、石英・結晶片岩・赤色斑粒0.1～2㎜	浅黄橙	焼成硬質。
49	SX1003	C-3	岩盤直上	円筒埴輪	器高6.6 底径17.4 厚さ1.5	基底部端部は方形状を呈する。底部から外上方に直線的に開く。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	粗、石英・長石・赤色斑粒0.1～2㎜	にぶい黄橙	焼成軟質。
50	SX1003	C-3	岩盤直上	円筒埴輪	器高9.9 底径17.0 厚さ1.6	基底部端部は方形状を呈する。底部から外上方に直線的に開く。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	粗、石英・長石・赤色斑粒0.1～0.3㎜	外面：にぶい橙 内面：にぶい黄橙	焼成軟質。

包含層（埴輪）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	法量（cm）	形態の特徴	成形・調整	胎土	色調	備考
56		J-2	岩盤直上	形象埴輪 家形	縦10.9 横10.5 厚さ3.3		外面：ナデ。 内面：ナデ。	粗、石英・赤色斑粒2㎜	橙	焼成軟質。

SX（土器）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径（cm）	体部最大径（cm）	底径（cm）	頸部（脚柱）径（cm）	器高・残存高（cm）	その他の法量（cm）	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
34	SX1003	祠西B-3		須恵器 甕	不明		36.7		17.2	16.5		体部	体部内彎している。	外面：格子目タタキ（4条／cm）。 内面：同心円文。	雲母	外面：灰白 内面：灰白	焼成やや不良。
51	SX1004,5	F-2		陶器 壺	一部欠損	26.0			25.3	23.2		口縁～体部	孔あり。	外面：口縁ヨコナデ後ユビナデ。 頸部ヨコナデ。 体部凹線1条。 内面：口縁頸部ヨコナデ。 体部ヨコハケ（8条／cm）。 底部近くヨコナデ。	石英・長石・雲母・角閃石	外面：にぶい褐 内面：褐灰 にぶい黄橙	
52	SX1004,5	F-1・2		陶器 焜炉	口縁部1/10	25.6				13.2		口縁部	口縁内面端部は黒く焼けている。	外面：ロクロナデ。 回転印刻文。 内面：ロクロナデ。	石英・雲母・赤色斑粒	外面：にぶい赤褐 内面：にぶい橙	
53	SX1005	F-4		珪藻土 七輪				13.0		7.7		底部		不明。	不明	外面：にぶい橙 内面：にぶい橙	

包含層（土器）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径（cm）	体部最大径（cm）	底径（cm）	頸部（脚柱）径（cm）	器高・残存高（cm）	その他の法量（cm）	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
54		B-3		須恵器 甕	破片					6.8	縦6.9 ヨコ9.4 厚さ0.8	体部		外面：タタキ（4条／cm）のち肩部カキメ（櫛描き）。 内面：同心円文。	長石	外面：灰 内面：灰	焼成良好。
55		B-3		須恵器 甕	破片					9.1	縦9.5 ヨコ14.3 厚さ0.6	体部	体部内彎している。	外面：タタキ（4条／cm）。 内面：同心円文。	長石	外面：灰 内面：灰	焼成良好。

XVI　助ヶ谷古墳群

例　言

1　本章は四国横断自動車道建設に伴う助ヶ谷古墳群の発掘調査報告書である。

2　所在地　徳島県鳴門市大麻町池谷字助ヶ谷39他

調査対象面積　1,330㎡

試掘面積　100㎡

本調査面積　400㎡

3　発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次の通りである。

発掘調査期間　平成11年６月１日～平成11年６月30日（１次）

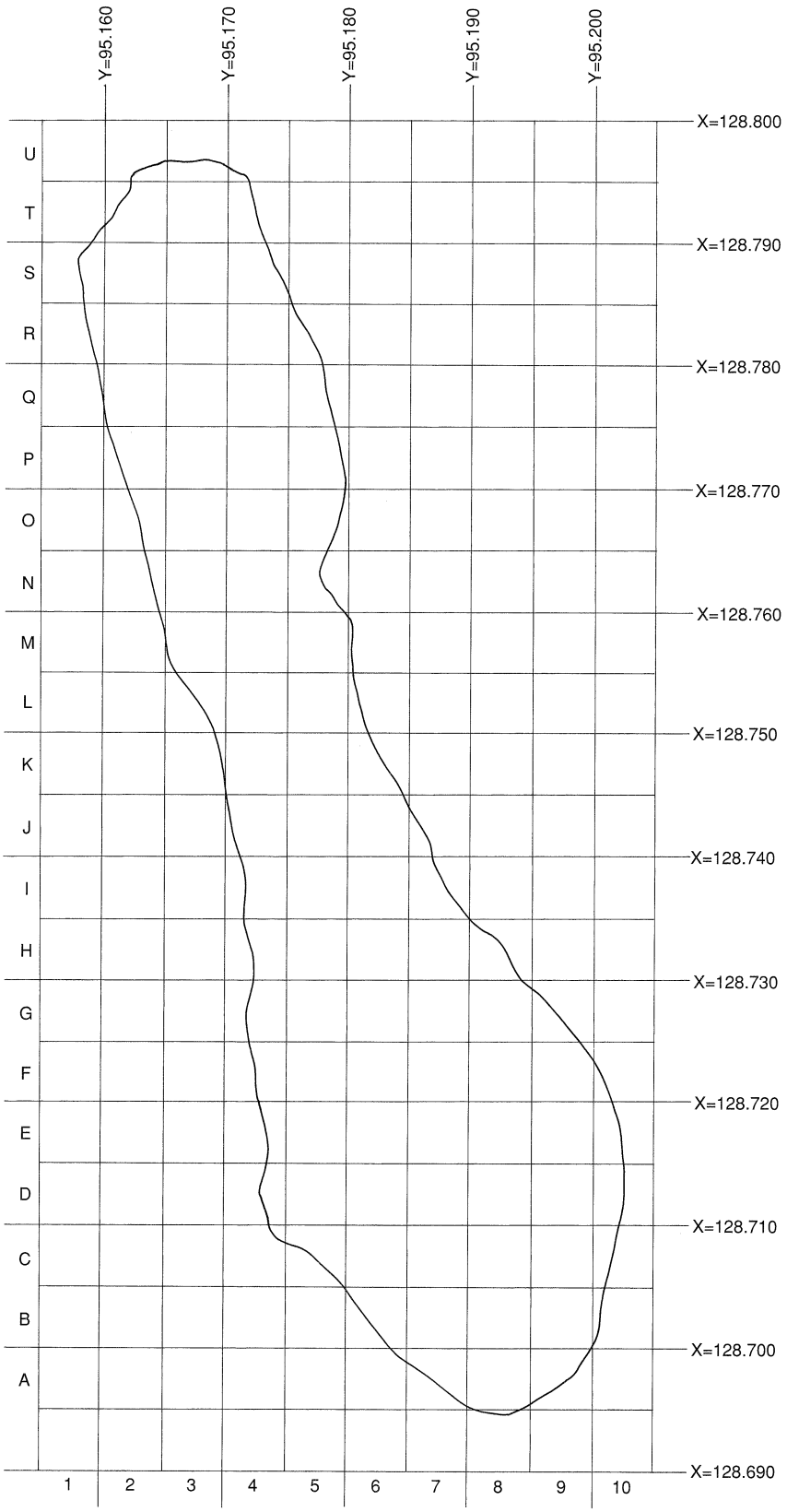
平成11年９月１日～平成11年10月31日（２次）

報告書作成期間　平成15年４月１日～平成16年３月31日

4　遺物番号・挿図番号・図版番号は通し番号とした。遺物番号は本文・挿図・表・図版と一致する。

5　本遺跡の地理的・歴史的環境については、「Ⅱ　調査地点の立地と環境」を参照されたい。

6　SM1001周壕内および遺物包含層出土の埴輪についての報告は藤川智之が行った。


Y=95.160
Y=95.170
Y=95.180
Y=95.190
Y=95.200
X=128.800
X=128.790
X=128.780
X=128.770
X=128.760
X=128.750
X=128.740
X=128.730
X=128.720
X=128.710
X=128.700
X=128.690
U
T
S
R
Q
P
O
N
M
L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

第１図　グリッド配置図

1　調査の経過

（1）調査の経過（Ⅰ-第1図およびⅡ-第1・5・18図）

助ヶ谷古墳群は阿讃山脈南麓の鳴門市大麻町池谷地区に位置し、以前から古墳群が密集する地域として周知されていた。事前の分布調査の際にも阿讃山脈から張り出す尾根上に古墳の存在する可能性が指摘されていた。したがって分布調査で推定された遺跡の範囲の内1,330m²を調査対象面積として試掘調査を実施した。試掘調査は平成11年6月1日～6月30日および平成11年9月1日～10月31日にかけて人力掘削によるトレンチ調査を実施した。試掘の結果、調査区南部の墳丘状地形北側において埴輪片や結晶片岩の散布が確認されたため、400m²の範囲を対象に本調査へ移行した。本調査は平成12年10月31日に終了した。

（2）発掘調査の方法（第1図）

調査を始めるにあたり、グリッドの配置に際しては、発掘統一基準にならい、第Ⅳ系国土座標を基準とし、5mメッシュを1グリッドとして調査対象地を包み込む形で設定した。南西隅を基準として北にA・B・C…、東に1・2・3…の順に記号・番号をふり、その組み合わせで各グリッド名を表すこととした。遺構記号・番号は検出時に順次決定した。

（3）調査日誌抄

助ヶ谷古墳群試掘調査日誌抄

1999年

6月1日　調査準備。

6月9日　トレンチ掘削。図面整理。

6月29日　図面整理。

6月30日　現場撤収。

1999年

9月1日　調査準備。

9月6日　試掘トレンチT1～6設定。掘削開始。

9月7日　周壕検出。埴輪片等出土。試掘トレンチT1～6設定。掘削。

9月8日　周壕掘削。試掘トレンチT1～6設定。掘削。

9月13日　周壕掘削。墳丘面出し。

9月20日　墳丘面出し。

9月28日　周壕、墳丘セクションベルト土層図作成。現場報告会。

9月29日　周壕、墳丘セクションベルト土層図作成。

9月30日　SM1001全景写真撮影。

10月1日　SM1001墳丘断ち割り。1/20遺物平面図作成。

10月7日　SM1001墳丘断ち割り。墳丘上面掘り下げ。

10月15日　SM1001全景写真撮影。1/20トレンチ断面図作成。遺物・平面図作成。

10月18日　トレンチ埋め戻し。遺物取り上げ。

10月19日　トレンチ埋め戻し。

10月20日　現場撤収。

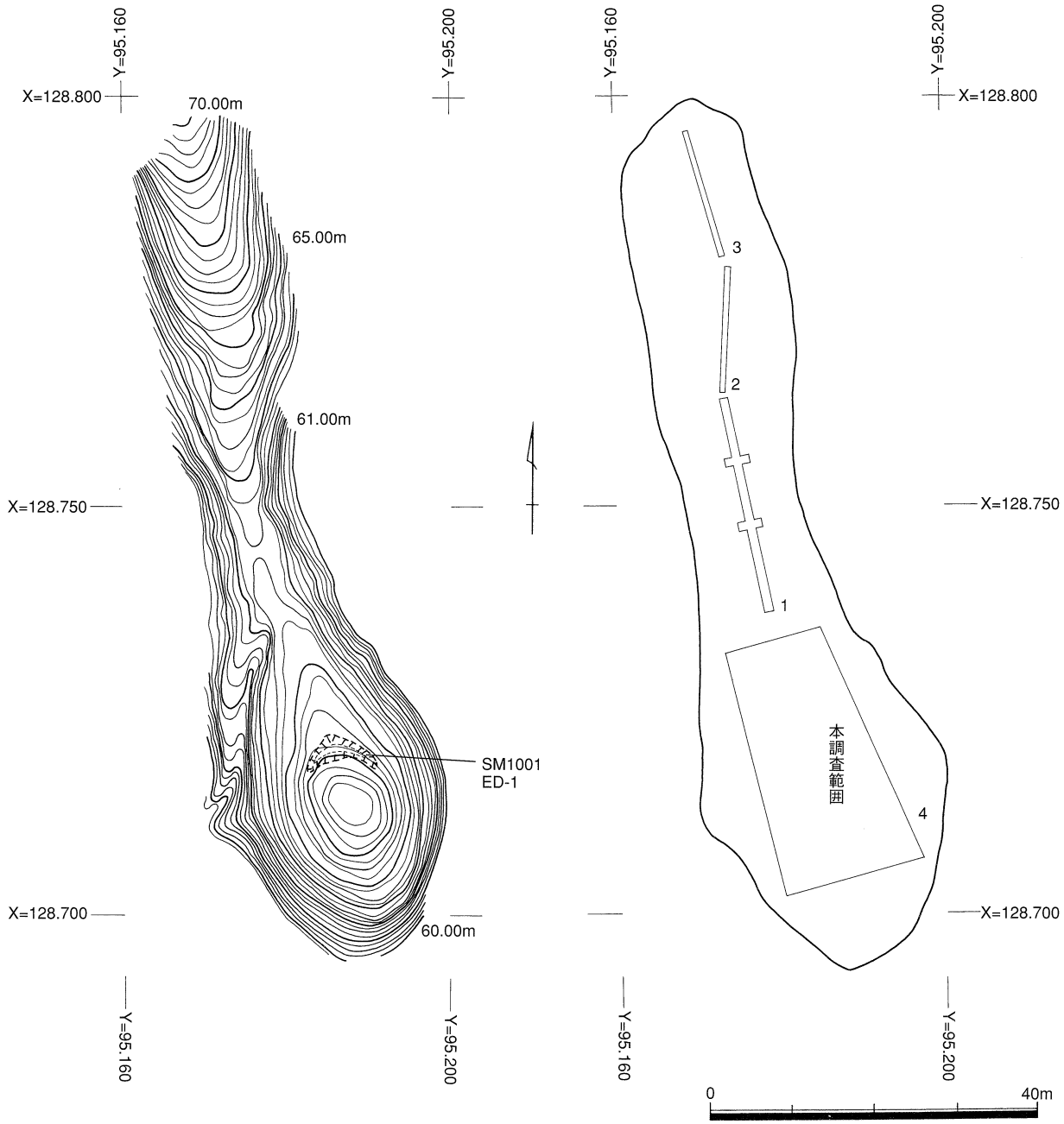
10月22日　現場報告会。

10月25日　試掘とりまとめ。

2　調査成果

（1）遺跡の位置（Ⅰ-第1図およびⅡ-第1・5・18図）

助ヶ谷古墳群は四国横断自動車道建設に伴い発掘調査が実施された。調査地点は鳴門市大麻町池谷の阿讃山脈南麓、標高61～68mの尾根上に位置する。調査の結果、調査区は土地の改変が著しく、明瞭な遺構は確認することはできなかったが、埴輪片・結晶片岩礫片等が出土しており、当該調査区に古墳および主体部が築造されていたことが示唆される。



第2図　地形平面・トレンチ配置図

（2）基本層序（第2・3図）

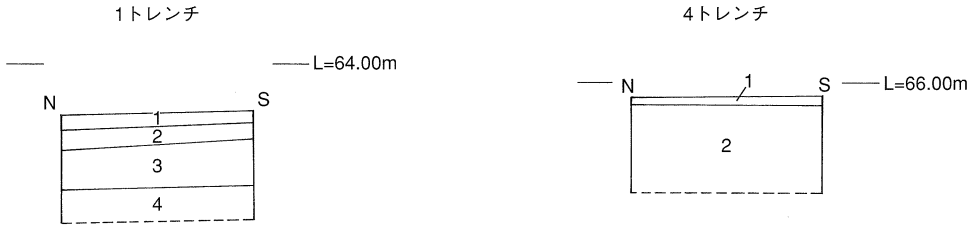
トレンチ配置状況と土層堆積状況

調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘の結果、調査区南端の高まり北側において墳丘を区画する周壕を確認した。周壕内から円筒埴輪片や形象埴輪片（靫）、結晶片岩の破片などが出土した。しかし、主体部は後世に削平されたのか検出することができなかった。

土層堆積状況は各トレンチとも類似しており、微差はあるものの、基本層序は以下の通りほぼ対応する。

1．…黒褐色 10YR2/3 砂質土（表土、腐植土。）

2．…明黄褐色 10YR6/8 粘性砂質土（岩盤風化土、ϕ＝3～5㎝程度の礫を含む。部分的に灰黄褐色 10YR6/3 粘土が混じる。）



1．黒褐色　5YR2/2　砂質土（腐植土）
2．灰黄褐色　10YR4/2　砂質土
（しまり不良。粘性あり。ϕ＝5㎜～1㎝程度の礫含む。）
3．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土
（しまりやや良。粘性あり。ϕ＝5㎜～1㎝程度の礫含む。）
4．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土
（3層よりしまり良。粘性あり。ϕ＝5㎜～1㎝程度の礫少量含む。）

1．黒褐色　10YR3/2　砂質土（腐植土）
2．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（しまり良。砂性強い。ϕ＝3㎝～5㎝程度の礫含む。部分的に灰黄褐色10YR6/2砂質土が混じる。）

0　1m

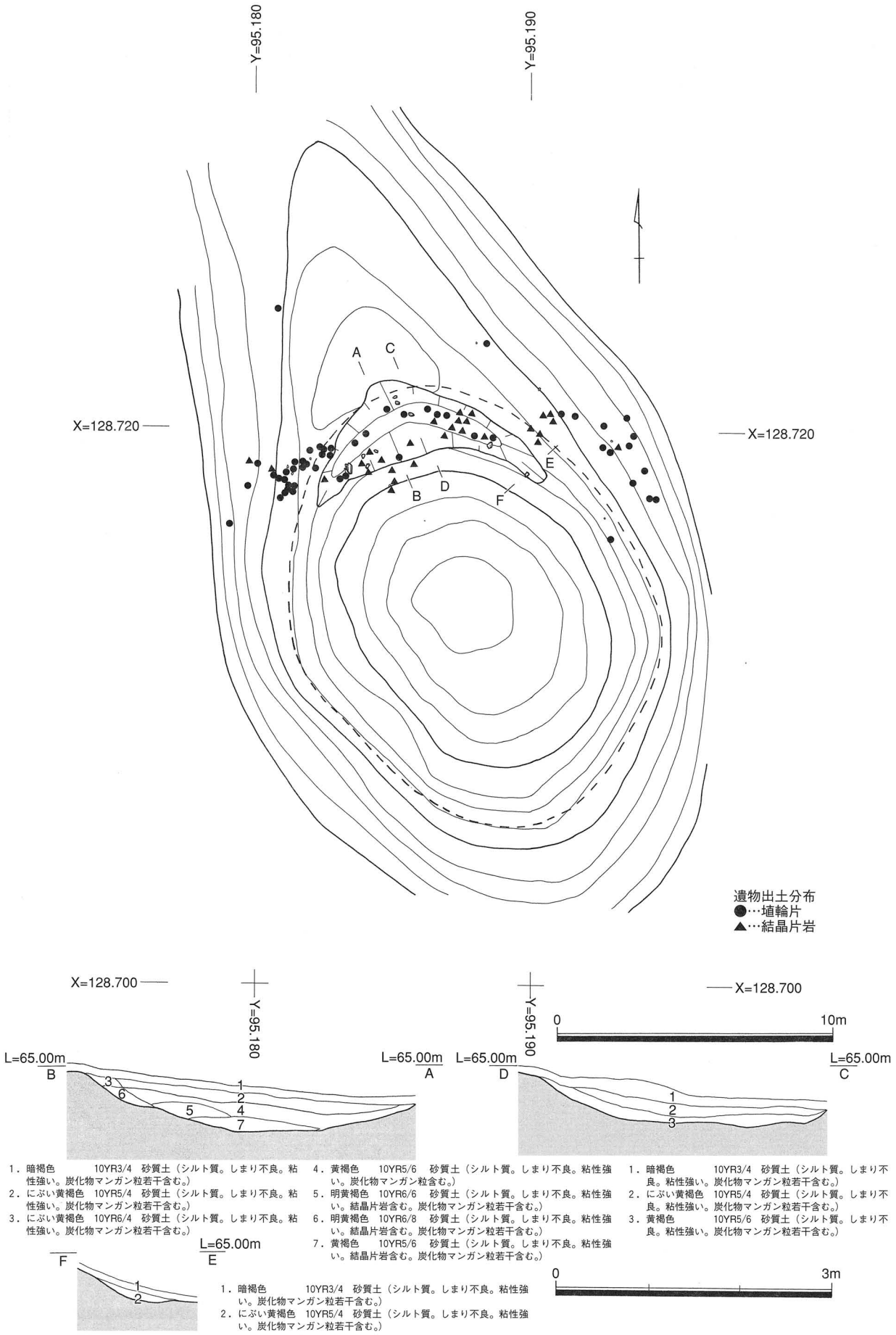
第3図　模式柱状土層図

（3）遺構と遺物（第2図）

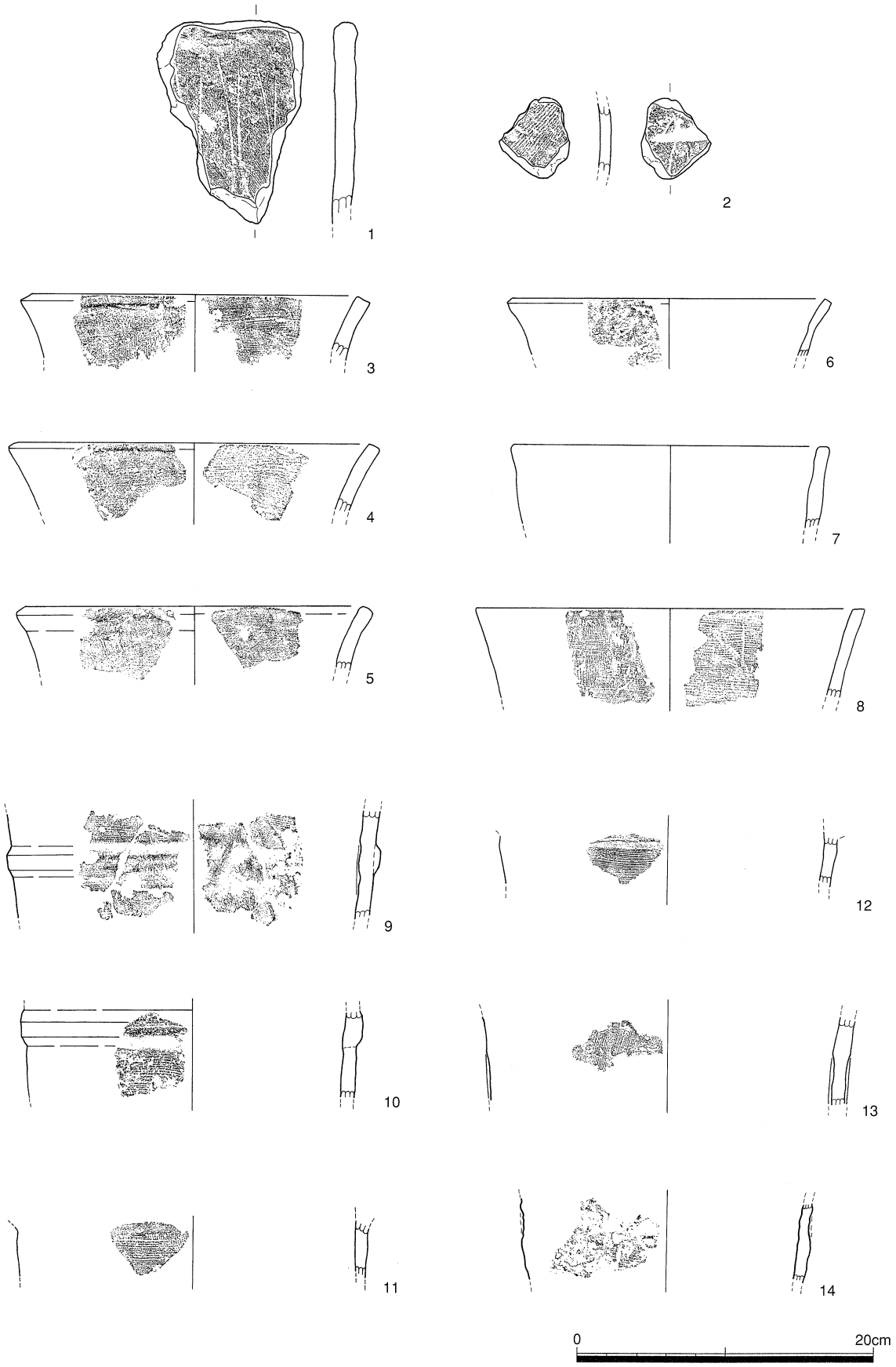
遺跡内における遺構配置は第2図に示すとおりである。明瞭な遺構は確認することはできなかったが、古墳に付帯する周壕を検出した。

出土遺構（第2・4図）

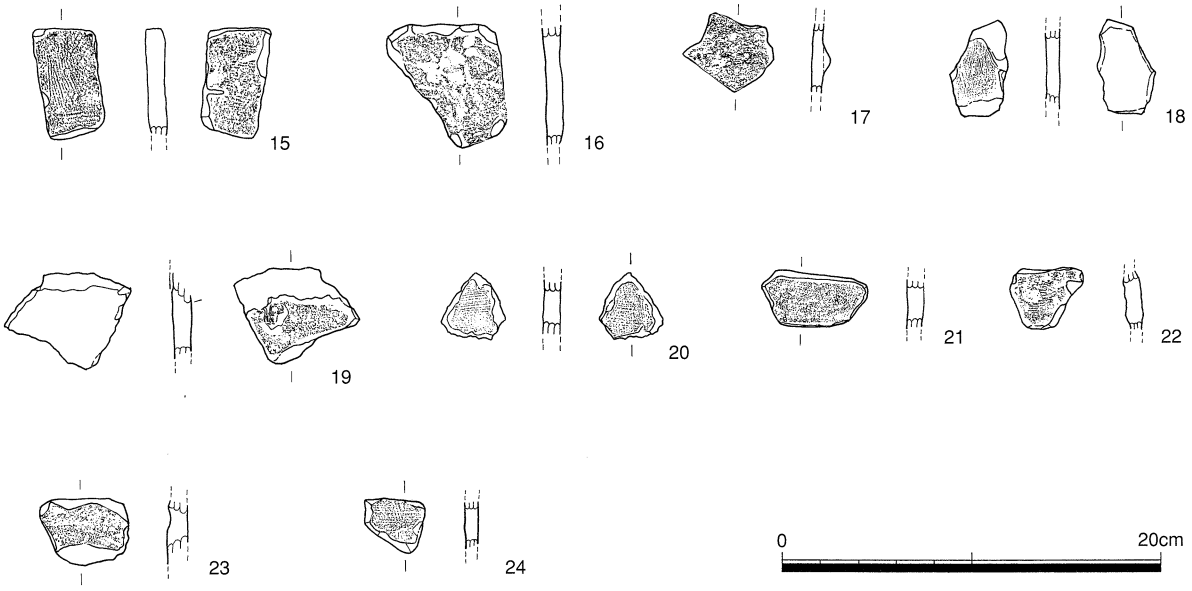
調査区南端において円墳と思われる高まりを1基確認した。調査の結果、周壕や埴輪片・結晶片岩礫片等が出土した。



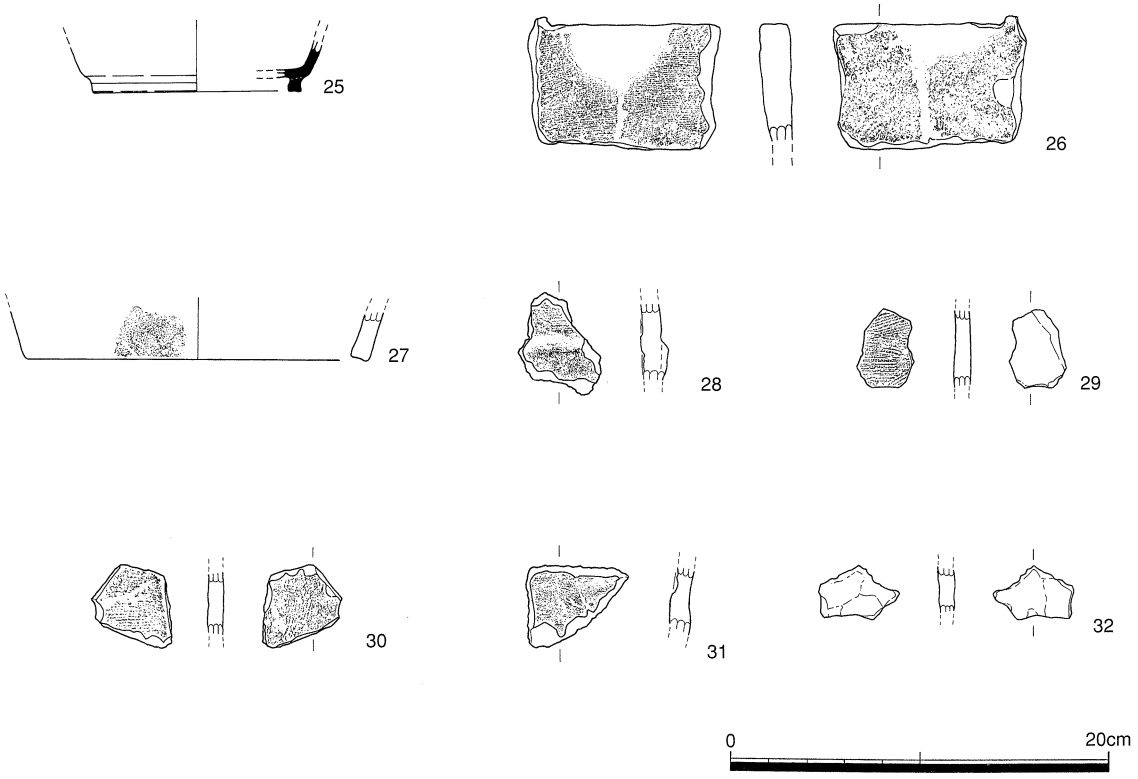
第４図　SM1001周壕内遺物出土状況分布平面・周壕土層断面図



第５図　SM1001周壕内出土遺物１



第６図　SM1001周壕内出土遺物２



第７図　包含層出土遺物

SM1001（１号墳）（第４図）

調査区南端に位置する円墳である。墳丘の規模は現状で直径13mを測る。墳丘形状は地形を利用し、正円ではなくやや楕円形を呈する。明瞭な基底部は形成されていないが、墳丘の高さは1.5mである。墳丘は岩盤を削り出して作出しており、盛土はされていない。墳丘上面には葺石などの外表施設はみられなかった。

墳丘北側には岩盤を掘り込んで周壕が構築されており、現存値で最大長10.23m、最大幅2.22m、最大深度は56cmを測る。周壕内および周辺からは形象埴輪片・円筒埴輪片の他、結晶片岩の礫などが計約770点出土した。埴輪片はおそらく墳頂部に置かれていたものの一部とみられるが、原位置を確認するに至らなかった。また主体部についてはその痕跡すら確認することもできなかった。推測ではあるが埋葬施設として箱式石棺が考えられる。時期を特定する遺構や遺物がほとんど見られないため、詳細な時期の決定は困難であるが出土遺物などから古墳時代中期、５世紀頃と考えられる。

出土遺物（第５・６図）

墳丘裾および周壕などにおいて埴輪片や主体部の石材とみられる結晶片岩礫片などが出土した。埴輪片は大小合わせて約115点程度出土した。

１は靫形埴輪である。破片ではあるが、北側墳丘裾より出土した。表面には柳葉形の鉄鏃と思われる線刻が施されている。２～24は円筒埴輪である。小片ではあるが、墳丘北側裾および周壕より約60点出土した。表面にはハケ目調整およびタガがみられる。口縁部はやや外側に広がる。

これらの埴輪は墳頂部または墳丘裾に置かれていたものの一部とみられるが、原位置を確認するに至らなかった。

SM1001周壕内

形象埴輪（１）と円筒埴輪（２～24）がある。17・23は形象埴輪になる可能性がある。

１は靫形埴輪。上辺が残存しているが、左右・下辺は残存しない。表面には２本一組の緩やかな孤状の線刻で柳葉形の鉄鏃を表現している。

円筒埴輪は小片が多く全形の判明するものはないが、３～８の口径が20～25cmになることから、器高25～30cmの２条突帯３段構成に復元される。突帯は低平で断面台形、透かしは中段に円形である(10)。器表面の外面は一次調整にタテハケ、二次調整にヨコハケ（B種）が施されるが、下段にはヨコハケはなく、外面板オサエまたは板ナデによる整形となっている（16・21)。内面は口縁部付近にのみランダムなヨコハケがあるが、その他は、ナデによる成形である。

これらの埴輪は、胎土・色調から２種に大別できる。赤みの強い橙または明赤褐色を呈するグループ（A群）と白みの強い浅黄橙色のグループ（B群）である。A群は円筒埴輪の口縁部が緩やかに開くもので器壁がやや厚い。焼成が軟質のもの（２・３～６・９・12・22）と硬質のもの（10・13・14・18・20・24）とがあるが、基本的には同質のもの。硬質のものは、焼成時に器表面が細かいクレーター状に剥離している。B群には（１・７・８・11・15～17・19・23）が含まれ、円筒埴輪の口縁部は直立気味で器壁は薄い。

包含層出土遺物（第７図）

25は須恵器の杯底部と思われるが、小片のため詳細な時期は不明である。26は靫形埴輪と思われる。27～32は円筒埴輪と思われる破片である。

25は須恵器の高台を有する杯である。高台の形状からみて奈良時代のものと思われる。

埴輪には形象埴輪（26）と円筒埴輪（27～32）がある。26は板状で、展開図左の上下が残存していることから、家形埴輪の壁部材の窓の開口部であろう。円筒埴輪は、周壕内出土のものと同様の特徴を持つ。A群のうち軟質のもの（27・30・31）と硬質のもの（28・32）、浅黄橙色のグループのもの（26・29）がある。

（４）まとめ

調査の結果、調査区南端で周壕と思われる溝状遺構や埴輪片が出土したが、主体部は検出することはできなかった。墳丘部分と考えられる高まりは後世に削平を受けていると考えられ、主体部はすでに消失しているものと思われる。調査区周辺には土師器窯があったとされ、また現在、墓地となっている調査区南側の小丘陵には古墳があったといわれており、馬形埴輪などが出土していることなどから、これらとの関連が注目される。時期を特定する遺構や遺物がほとんど見られないため、詳細な時期の決定は困難であるが、出土遺物などから古墳時代中期、５世紀頃に古墳が築造されていたと考えられる。

助ヶ谷古墳群
第１表　出土遺構一覧表
SM

遺構名	グリッド	墳丘形態	墳丘規模	墓壙平面形態	墓壙断面形態	備考
SM1001	C～F-5～8	円墳	墳丘の直径は130m。墳丘の高さは1.5m、楕円形。	明瞭な墓壙石室ともみとめられない。		墳丘北側に最大長10.23m、最大幅2.22m、最大深度0.56mの周壕が構築されている。

第２表　出土遺物観察表
SM（埴輪）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	法量（cm）	形態の特徴	成形・調整	胎土	色調	備考
1	SM1001 墳丘北側（周壕内）	E-3		形象埴輪 靫形	縦13.6 横9.9 厚さ1.7	柳葉形鉄鏃を模した線刻を施す。	外面：ナナメハケ（８条／cm）のち沈線（線刻）。 内面：ナデ。	粗、長石・雲母・赤色粒0.1～2.0mmを含む。	橙色	焼成軟質。
2	SM1001 墳丘上面裾	E-3		円筒埴輪	縦5.45 横4.7 厚さ0.9	柳葉形鉄鏃を模した線刻を施す。	外面：ナデ、ハケのち線刻（鏃）。 内面：ナナメハケ（７条／cm）。	粗、長石・赤色斑粒0.1～1.0mmを含む。	外面：橙色 内面：にぶい黄橙色	焼成軟質。
3	SM1001	E-3		円筒埴輪	器高4.3 口径21.8 厚さ1.0	口縁部は外反し、端部を方形状に収める。	外面：タテハケのちヨコハケ（７～８条／cm）、摩滅ぎみ。 内面：ヨコハケ（７～８条／cm）。	やや精、石英４mm	橙色	焼成やや軟質。
4	SM1001 墳丘上面裾（周壕底）	E-4		円筒埴輪	器高4.5 口径25.0 厚さ0.9	口縁部は外反し、端部を方形状に収める。	外面：ヨコハケ（５条／cm）。 内面：ヨコハケ（６条／cm）。	粗、石英・長石0.1～1.0mm	橙色	焼成軟質。
5	SM1001 墳丘上面裾	E-3		円筒埴輪	器高4.3 口径22.7 厚さ0.9	口縁部はやや外反し、端部を方形状に収める。	外面：ナデ、タテハケ（７条／cm）。 内面：ヨコハケ（７条／cm）。	粗、石英・赤色斑粒0.1～1.5mm	橙色	焼成軟質。
6	SM1001 墳丘上面裾	E-3		円筒埴輪	器高3.3 口径21.8 厚さ0.6	口縁部はやや外反し、端部を方形状に収める。	外面：摩滅のため不明。 内面：ナデ。	精、石英・雲母0.1～1.0mm	明赤褐色	焼成軟質。
7	SM1001 墳丘裾（周壕）	E-3		円筒埴輪	器高5.2 口径21.2 厚さ1.0	口縁部は直線的に立ち上がり、端部を方形状に収める。	外面：ナデ。 内面：ナデ、ハケ（単位不明）。	精、石英・雲母・赤色斑粒0.1～1.0mm	浅黄橙色	焼成やや硬質。
8	SM1001 墳丘上面裾	E-3		円筒埴輪	器高6.0 口径26.0 厚さ0.8	口縁部は直線的に開き、端部を方形状に収める。	外面：タテハケのちヨコハケ（８条／cm）。 内面：ヨコハケ（８条／cm）。	粗、石英・赤色斑粒0.1～1.0mm	外面：橙色 内面：浅黄橙色	焼成軟質。
9	SM1001 墳丘裾（周壕）	E-3（T-5）		円筒埴輪	器高7.2 胴径25.2 厚さ1.1	胴部、直線的に上方に開く。タガの断面形は台形状。	外面：ヨコハケ（７条／cm）のちナデ。 内面：ヨコハケ（５条／0.6cm）ナデ。	精、石英・雲母・赤色斑粒0.1～1.5mm	橙色	焼成軟質。
10	SM1001 墳丘裾（周壕）	E-3		円筒埴輪	器高5.8 胴径23.0 厚さ1.0	胴部、直線的にやや開く。タガの断面形はＭ形状。	外面：ナデ、ヨコハケ（８条／cm）。 内面：ナデ、ヨコハケ（８条／cm）。	精、石英・雲母0.1～1.0mm	橙色	焼成やや硬質。
11	SM1001 墳丘上面裾	E-3		円筒埴輪	器高3.8 胴径23.5 厚さ0.8	胴部、直線的に延びる。	外面：タテハケのちヨコハケ（７条／cm）。 内面：ナデ。	粗、石英・赤色斑粒２mm	にぶい橙色	焼成やや硬質。
12	SM1001 墳丘上面裾	E-3		円筒埴輪	器高3.7 胴径22.6 厚さ0.9	胴部、直線的に延びる。	外面：ヨコハケ（８条／cm）。 内面：ナデ。	精、石英・雲母0.1～1.0mm	橙色	焼成軟質。
13	SM1001 墳丘上面裾	F-5		円筒埴輪	器高5.9 胴径24.6 厚さ1.1	胴部、上方に開く。	外面：タテハケ（10条／cm）。 内面：ナデ。	精、石英・雲母0.1～3.5mm	橙色	焼成硬質。
14	SM1001 墳丘上面裾	F-6		円筒埴輪	器高5.4 胴径19.6 厚さ0.8	胴部、上方に開く。タガは剥離している。	外面：ハケ（単位不明）・ナデ。 内面：ナデ。	精、石英・赤色斑粒0.1～1.0mm	橙色	焼成やや硬質。
15	SM1001 墳丘上面裾（周壕）	E-4		円筒埴輪	縦5.9 横3.5 厚さ1.1		外面：タテハケ（８条／cm）のちヨコハケ（６条／cm）。 内面：ヨコハケ（８条／cm）。	精、石英・雲母・赤色斑粒0.1～3.0mm	明黄褐色	焼成やや硬質。
16	SM1001 墳丘上面裾	E-3		円筒埴輪	縦6.5 横6.3 厚さ0.9		外面：ナデ。 内面：ナデ。	粗、長石・赤色斑粒0.1～2.0mm	外面：橙色 内面：にぶい黄橙色	焼成軟質。
17	SM1001	D-5		円筒埴輪	縦4.1 横4.7 厚さ1.1		外面：ナデ。 内面：ナデ。	粗、石英・赤色斑粒５mm	にぶい橙色	焼成軟質。
18	SM1001 墳丘裾（周壕）	E-3（T-5）		円筒埴輪	縦5.1 横3.0 厚さ0.8		外面：摩滅のため不明。 内面：タテハケ（11条／cm）。	やや精、石英・赤色斑粒３mm	橙色	焼成やや硬質。
19	SM1001 墳丘裾（周壕）	E-3（T-5）		円筒埴輪	縦5.1 横6.6 厚さ1.0	タガの剥離痕有り。	外面：ヨコハケ（10条／cm）のちナデ。 内面：ナデ。	精、石英・雲母・赤色斑粒0.1～2.0mm	浅黄橙色	焼成やや硬質。
20	SM1001 墳丘上面裾	E-4		円筒埴輪	縦3.6 横3.4 厚さ0.9		外面：タテハケのちヨコハケ（８条／cm）。 内面：ヨコハケ（８条／cm）。	粗、石英・赤色斑粒0.1～1.0mm	橙色	焼成硬質。
21	SM1001 周壕	E-4		円筒埴輪	縦2.9 横5.6 厚さ0.9		外面：ナデ。 内面：摩滅のため不明。	精、石英0.1～0.5mm	にぶい橙色	焼成軟質。
22	SM1001 墳丘上面裾	F-6		円筒埴輪	縦3.2 横3.9 厚さ0.8		外面：ヨコハケ（６条／cm）。 内面：摩滅のため不明。	精、雲母・赤色斑粒0.1～1.0mm	橙色	焼成軟質。
23	SM1001	E-3		円筒埴輪	縦3.5 横4.6 厚さ1.1		外面：タテハケ（６条／cm）。 内面：摩滅のため不明。	粗、長石・赤色斑粒0.1～2.0mm	外面：浅黄橙色 内面：にぶい橙色	焼成軟質。
24	SM1001 墳丘裾（周壕）	E-3		円筒埴輪	縦2.9 横3.3 厚さ0.7		外面：ヨコハケのちタテハケ（６条／cm）。 内面：摩滅のため不明。	粗、石英・長石0.1～1.0mm	橙色	焼成硬質。

包含層（埴輪）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	法量（cm）	形態の特徴	成形・調整	胎土	色調	備考
26		E-5		形象埴輪 鞍形	縦7.0 横10.2 厚さ1.6		外面：ナデ。 内面：ヨコハケ（8条／cm）。	粗、長石・赤色斑粒0.1～2.0mm	浅黄橙色	焼成軟質。
27		E-4		円筒埴輪	器高2.5 底径18.0 厚さ1.0	基底部端部は方形状を呈する。底部から外上方に直線的に開く。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	やや粗、石英・赤色粒2.0mm	橙色	焼成軟質。
28		F-4		円筒埴輪	縦5.4 横4.4 厚さ1.5		外面：ヨコハケ（8条／cm）、ナデ。 内面：剥離のため不明。	粗、石英・赤色斑粒0.1～1.0mm	橙色	焼成硬質。
29		E-4		円筒埴輪	縦4.2 横3.1 厚さ0.9		外面：摩滅のため不明。 内面：ヨコハケのちナナメハケ（5～6条／cm）。	粗、石英・赤色粒2.0mm	浅黄橙色	焼成軟質。
30		F-4		円筒埴輪	縦4.4 横4.2 厚さ0.9		外面：ナデ、タテハケ（6条／cm）。 内面：ヨコハケ（6条／cm）。	粗、石英・長石・赤色斑粒0.1～1.0mm	外面：橙色 内面：明黄褐色	焼成軟質。
31		F-4		円筒埴輪	縦4.3 横5.4 厚さ1.3		外面：ナデ。 内面：剥離のため不明。	粗、石英・赤色斑粒0.1～1.0mm	橙色	焼成軟質。
32		F-6		円筒埴輪	縦2.8 横4.4 厚さ0.9		外面：摩滅のため不明。 内面：摩滅のため不明。	粗、石英・長石4.0mm	橙色	焼成硬質。

包含層（土器）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径（cm）	体部最大径（cm）	底径（cm）	頸部（脚柱）径（cm）	器高・残存高（cm）	その他の法量（cm）	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
25	No.2 トレンチ		包含層	須恵器 杯	底部 1/8			11.0		2.7	高台高 0.7	体部～ 底部	体部外上方に延びる。貼り付け高台で直立し、断面を台形状に収める。	外面：回転ナデ。 内面：回転ナデ。	石英・長石	外面：灰 内面：灰	焼成良好。

XVII　東林院古墳群

例　言

1　本章は四国横断自動車道建設に伴う東林院古墳群の発掘調査報告書である。

2　所在地　鳴門市大麻町大谷字西山谷11他

調査対象面積　1,015㎡

試掘面積　65㎡

本調査面積　950㎡

3　発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次の通りである。

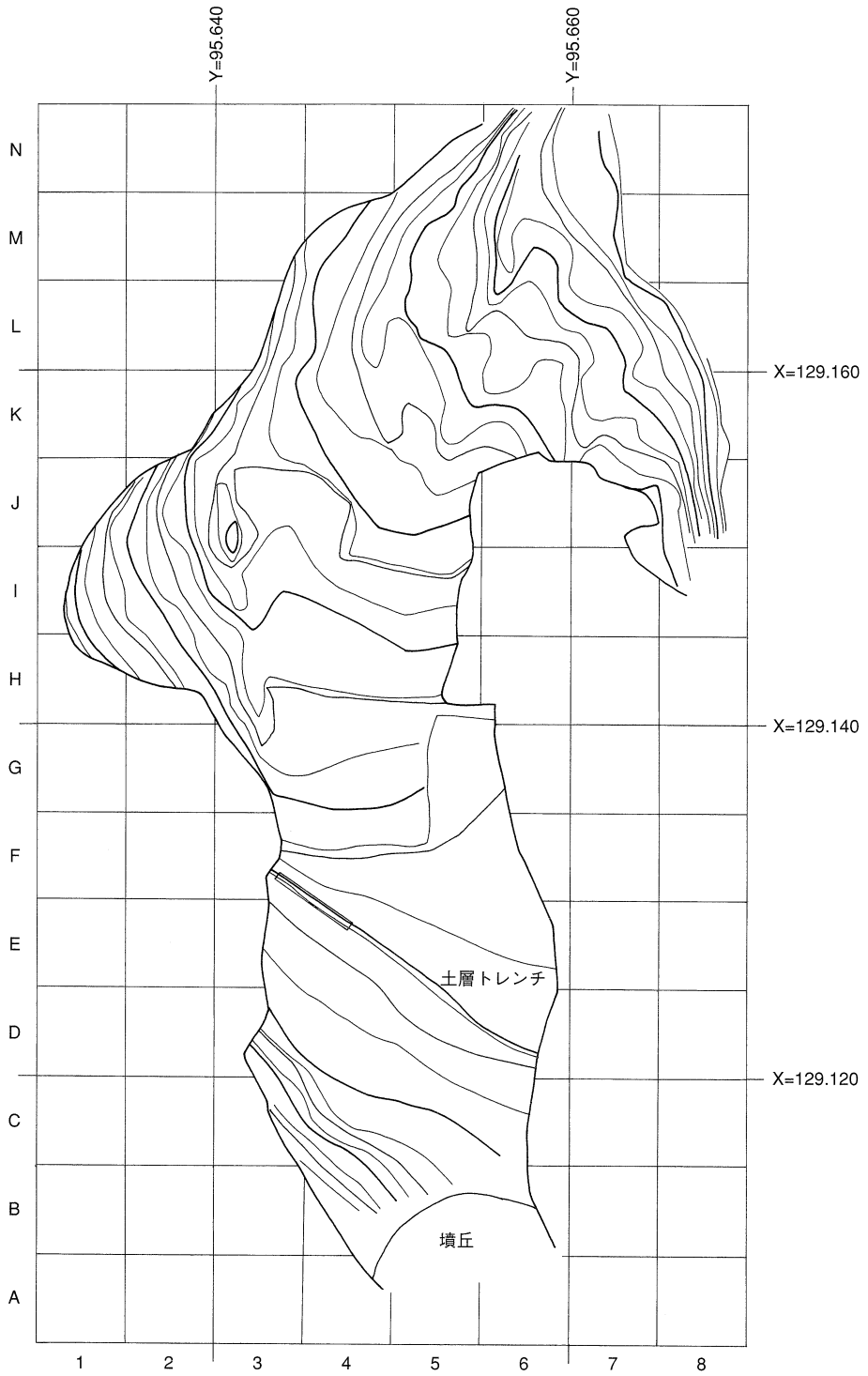
発掘調査期間　平成10年４月２日～平成10年９月15日

報告書作成期間　平成14年４月１日～平成15年３月31日

4　遺物番号・挿図番号・図版番号は通し番号とした。遺物番号は本文・挿図・表・図版と一致する。

5　本遺跡の地理的・歴史的環境については、「Ⅱ　調査地点の立地と環境」を参照されたい。

6　ST1002出土鉄器についての報文の一部および「まとめ　小竪穴石室」の項は栗林誠治が執筆した。



第１図　グリッド・トレンチ配置図

1　調査の経過

（1）調査の経過（Ⅰ-第1図およびⅡ-第1・5・19図）

東林院古墳群は阿讃山脈南麓の鳴門市大麻町字大谷地区、西山谷古墳群の所在する尾根の西麓、調査対象地は阿讃山脈南麓大谷川右岸の小規模な谷に位置する。標高は30～40mである。大谷川周辺は以前から古墳群が密集する地域として周知されている。隣接する東林院（寺）境内には穴観音として横穴式石室が遺存し、近隣に古墳の存在する可能性が指摘されていた。したがって分布調査で推定された遺跡の範囲の内1,050㎡を調査対象面積として試掘調査を実施した。試掘調査は平成10年5月28日～6月10日にかけて人力掘削によるトレンチを65㎡実施した。試掘の結果、調査区東側斜面部において石室の一部とみられる砂岩角礫や須恵器片等の散布が確認されたため、950㎡の範囲を対象に本調査へ移行した。また調査区西側谷部も試掘トレンチを開口したが、遺構・遺物は確認できなかった。本調査は平成10年9月30日に終了した。

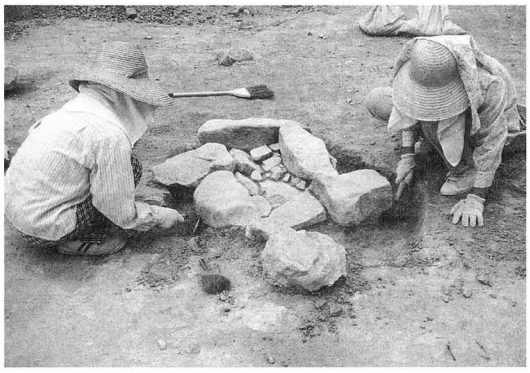
（2）発掘調査の方法（第1図）

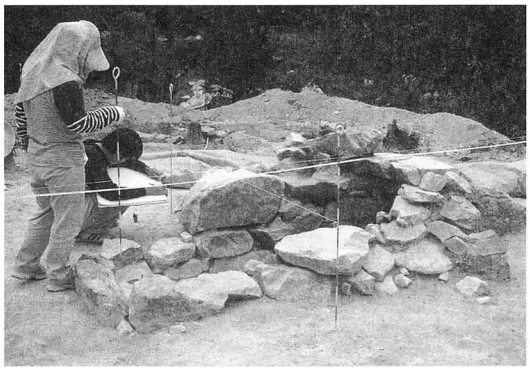
調査を始めるにあたり、グリッドの配置に際しては、発掘統一基準にならい、第Ⅳ系国土座標を基準とし、5mメッシュを1グリッドとして調査対象地を包み込む形で設定した。南西隅を基準として北にA・B・C…、東に1・2・3…の順に記号・番号をふり、その組み合わせで各グリッド名を表すこととした。遺構記号・番号は検出時に順次決定した。

（3）調査日誌抄

1998年

4月2日　調査準備。調査区調査前現況写真撮影。
5月28日　調査区現況地形（S=1/200）測量開始。
6月8日　本調査区（東側斜面部）地形測量終了。
本調査範囲設定。
6月10日　本調査範囲表土掘削開始。
6月18日　本調査範囲表土掘削終了。
6月23日　調査区西側谷部地形測量。
7月14日　調査区東側斜面部表土掘削ほぼ終了。
7月16日　遺構面精査終了。遺構検出（竪穴式石室墓等5基確認）。遺構掘削開始。
7月17日　遺構掘削と併行して本調査範囲残地表土掘削。
7月27日　1号墳石室床面よりガラス玉等出土。図面作成。
8月12日　1号墳墳丘断ち割り。図面作成。
8月19日　遺構掘削。調査区西側谷部開始。





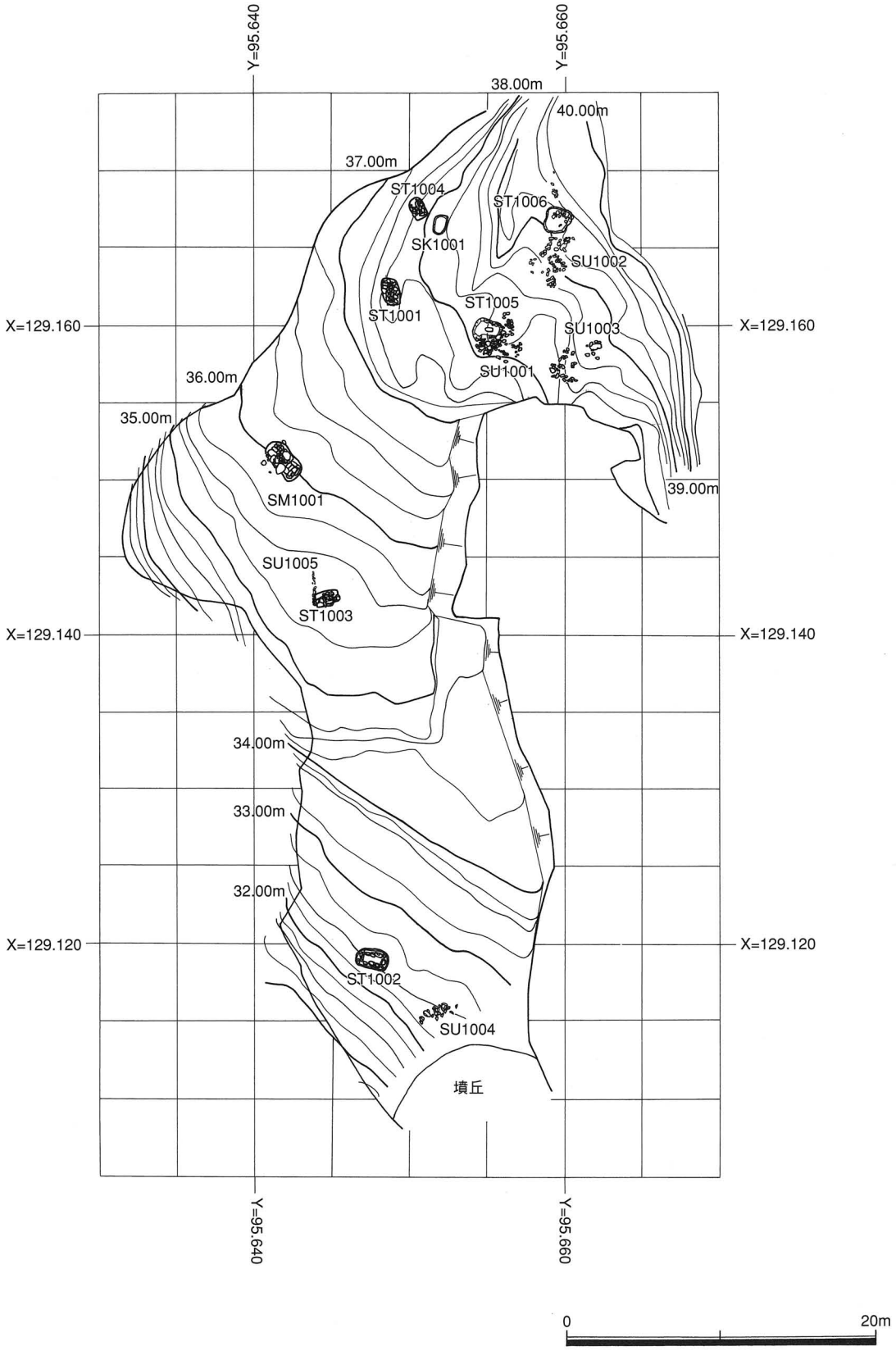
8月22日　2号石室墓より鉄刀・鉄鏃等出土。図面作成。

9月1日　遺構掘削。西側谷部試掘準備。下草除去。

9月3日　遺構図面作成。調査区西側谷部では遺構確認できず。

9月11日　調査終了。

9月14日　図面整理。現場撤収。



第２図　地形平面・遺構配置図

2　調査成果

（1）遺跡の位置（Ⅰ-第1図およびⅡ-第1・5・19図）

東林院古墳群は四国横断自動車道建設に伴い発掘調査が実施された。調査地点は鳴門市大麻町池谷の阿讃山脈南麓、標高30～40mの尾根上に位置する。

（2）基本層序（第1・3図）

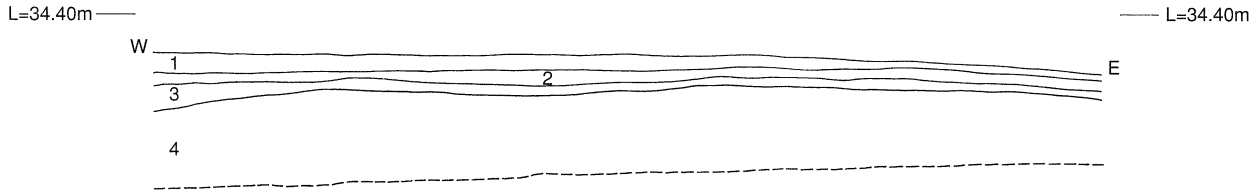
トレンチ配置状況と土層堆積状況

調査に際し、現況の地形測量を実施した。試掘トレンチは基本的に地形コンタラインに直交する形でメインを設定し、掘削作業を行った。試掘の結果、調査範囲の東側部分において石室の一部とみられる砂岩角礫や須恵器片等の散布が確認されたため、950m²の範囲を対象に本調査へ移行した。

土層堆積状況は各トレンチとも類似しており、基本層序は以下の通りほぼ対応する。

1．…黒褐色 10YR2/3 砂質土（表土、腐植土。）

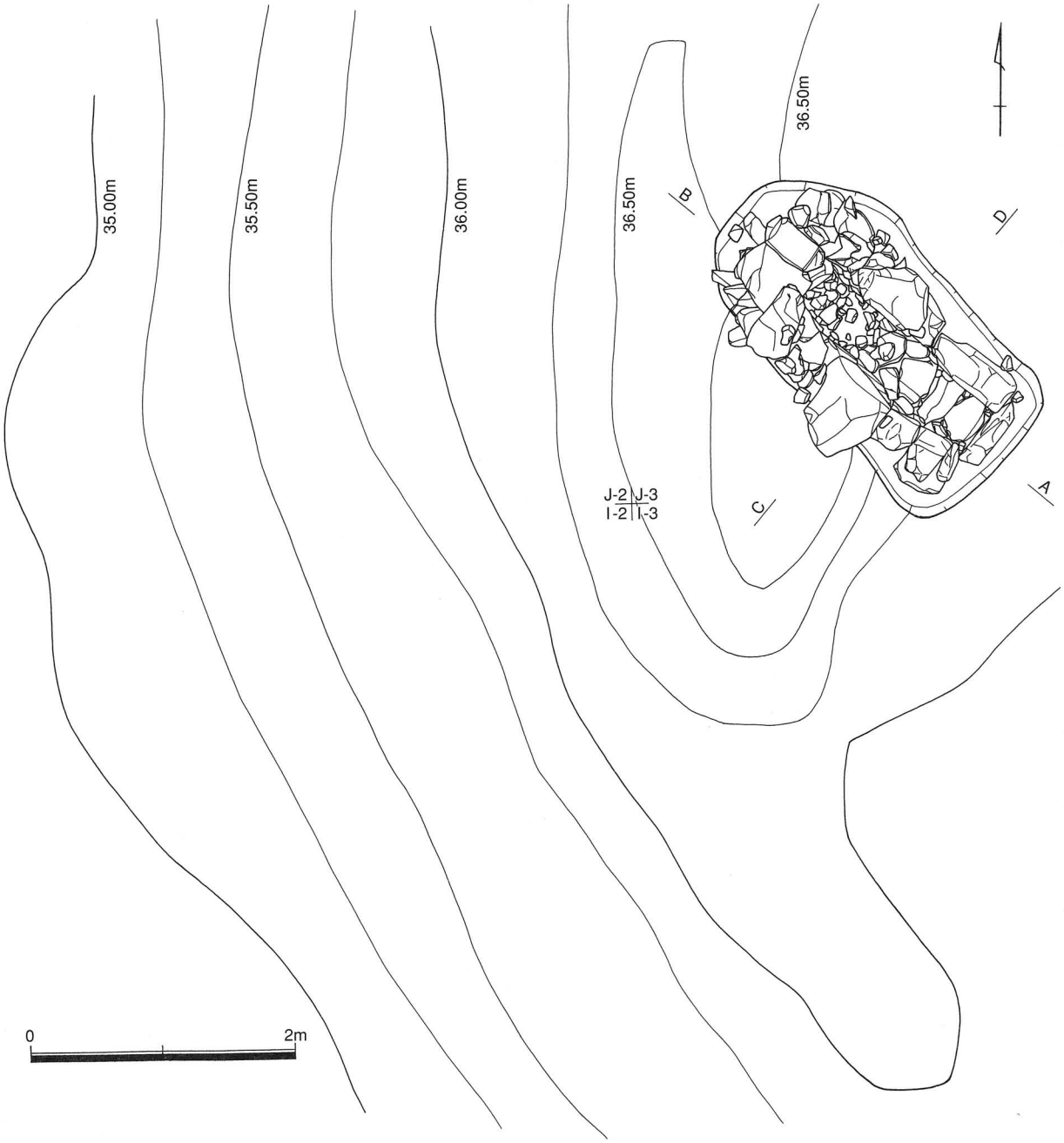
2．…明黄褐色 10YR6/8 粘性砂質土（岩盤風化土、ϕ＝3～5㎝程度の礫を含む。部分的に灰黄褐色 10YR6/2 粘土が混じる。）

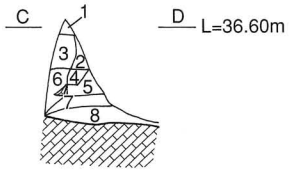


1．表土（腐葉土）
2．暗褐色　10YR3/4　シルト質土（粘性あり。しまり弱い。耕作土。）
3．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性あり。しまりややあり。岩盤の風化土。）
4．黄褐色　10YR5/6　砂質土（粘性3層より弱い。しまり3層よりあり。ϕ＝1～10㎝の角礫を含む。）

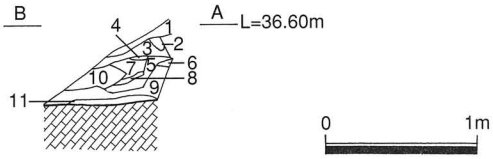
0　2m

第3図　基本土層断面図





1．にぶい黄橙色　10YR7/3　砂質土（粘性弱い。しまり弱い。）
2．にぶい黄橙色　10YR7/3　砂質土（粘性弱い。しまり弱い。）
3．にぶい黄橙色　10YR7/3　砂質土（粘性弱い。しまり弱い。）
4．にぶい黄橙色　10YR7/3　砂質土（粘性弱い。しまり弱い。）
5．にぶい黄橙色　10YR7/3　砂質土（粘性弱い。しまり弱い。）
6．にぶい黄橙色　10YR7/4　砂質土（粘性５層より弱い。しまり弱い。）
7．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性５層より弱い。しまり弱い。）
8．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性５層より弱い。しまり弱い。一部に版築あり。）



1．にぶい黄褐色　10YR7/4　砂質土（粘性弱い。しまり弱い。）
2．明黄褐色　10YR7/6　砂質土（粘性弱い。しまり１層より弱い。）
3．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性弱い。しまり弱い。）
4．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性１層よりあり。しまり３層より弱い。）
5．にぶい黄褐色　10YR6/4　砂質土（粘性３層よりあり。しまり３層より弱い。一部に版築あり。）
6．にぶい黄橙色　10YR6/3　砂質土（粘性５層よりあり。しまり３層より弱い。）
7．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性４層よりあり。しまり弱い。一部に版築あり。）
8．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性１層よりあり。しまり弱い。）
9．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性６層よりあり。しまり３層より弱い。）
10．褐灰色　10YR6/1　砂質土（粘性１層よりあり。しまり弱い。全体に版築あり。）
11．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性６層よりあり。しまり９層より弱い。一部に版築あり。）

第４図　SM1001平・墳丘土層断面図

（３）遺構と遺物（第２図）

出土遺構

尾根沿いに１基の円墳と４基の小竪穴式石室墓が確認された。過去に盗掘や開墾による削平を受け、全体的に遺存状況は良くないが、遺構によっては、鉄器や須恵器等の副葬品が良好な状況で検出されている。

SM1001（１号墳）（第４～６図）

Ｉ・J-3グリッド、調査区中央部で確認された円墳である。墳丘盛土の大部分は削平されており、墳丘全体の規模は不明であるが、墳丘盛土は南西部で半径３ｍほど残存する。葺石および周壕はみられない。

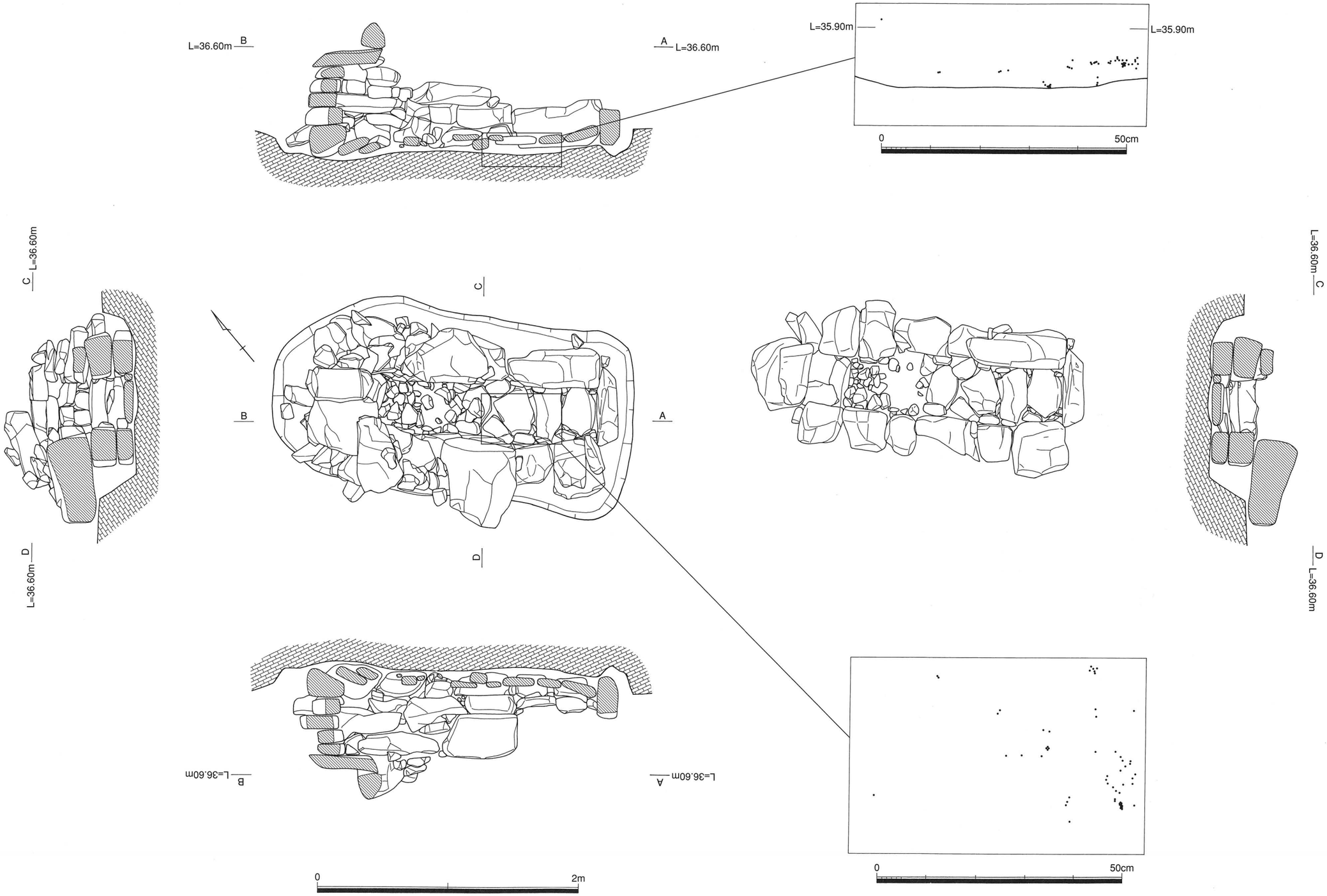
主体部は本遺跡で検出された古墳群の中では最も規模の大きい竪穴式石室をもつ。墓壙は隅丸長方形状を呈し、規模は長軸2.60m、短軸1.30m、最大深度は32cmを測る。

石室石材には砂岩の角礫が用いられる。墓壙基底部に30cm程度の板石を敷き、石室壁体を構築する。壁体は砂岩の50cm前後の角礫を１列５段に平積みで積み上げる。比較的遺存状況の良好な西小口はやや持ち送りで積み上げられていることが確認できる。壁体構築後、10cm前後の礫を敷き詰め床面を構築する。上部構造は不明であるが、石室壁体の持ち送りがほぼ垂直であることなどから、被葬者を安置した後、上部を60cm程度の板石で架構したものと推測される。

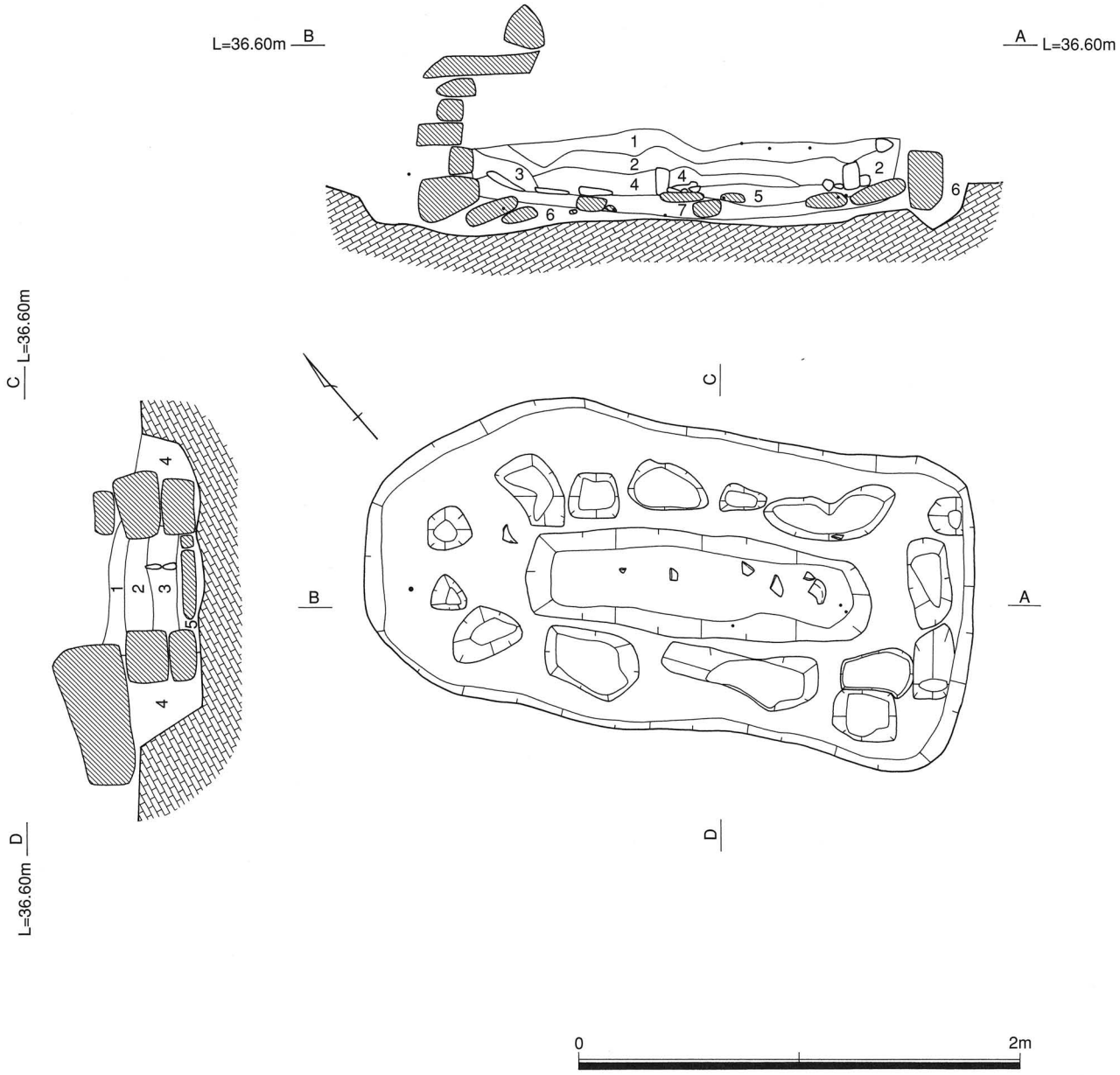
石室規模は内法で長軸1.94m、短軸0.45mを測る。石室床面からの高さは西小口で58cmである。主軸方向はN-135°-Eで東側がやや拡がっていることや石室南東部の床面下からは、一連のものと考えられる青色および濃緑色のガラス小玉が63点検出されていることなどから、東頭位であったと思われる。

出土遺物（第７図）

石室内からは須恵器やガラス小玉が出土した。玉類は主に石室南東部で出土したが、原位置は保っていないと思われる。須恵器はTK43段階と思われ、６世紀後半の年代が与えられる。１は須恵器杯蓋、２は杯身である。３須恵器壺である。４は墳丘盛土中より出土した弥生時代後期頃と思われるサヌカイトの石鏃である。５は焜炉のロストルである。覆土中より出土し、近世以降の所産と思われ、SM1001の盗掘された時期とも推測される。６～40はガラス小玉である。



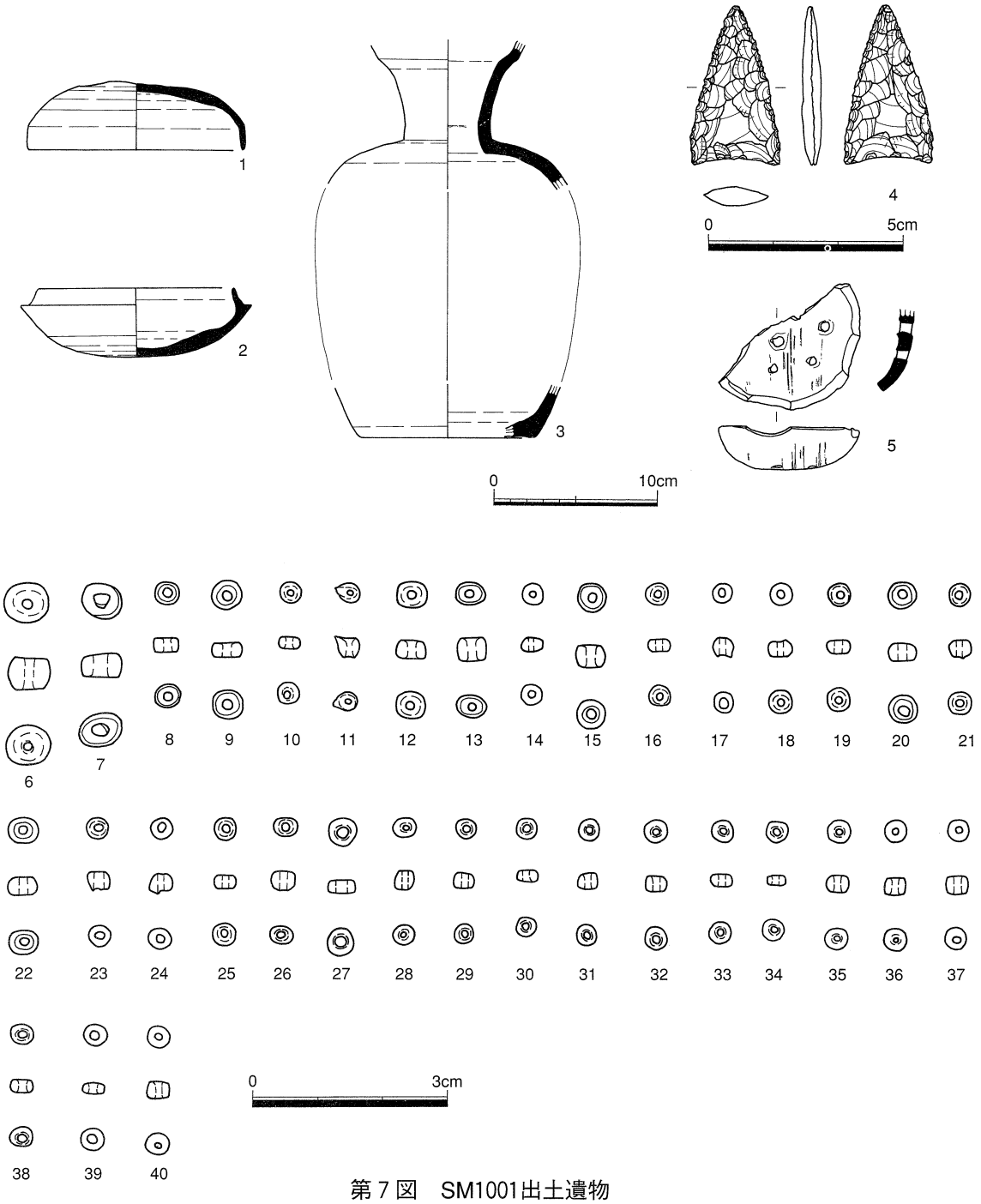
第５図　SM1001平・断面図および玉類出土状況分布図



A-B 土色
1．にぶい褐色　10YR5/3　砂質土（粘性ややあり。しまり弱い。表土の混入。）
2．にぶい褐色　10YR5/4　砂質土（粘性１層よりあり。しまり１層よりあり。）
3．橙色　10YR6/8　砂質土（粘性２層と同様。しまり２層と同様。）
4．橙色　10YR6/8　砂質土（粘性２層と同様。しまり２層よりあり。礫を多量に含む。）
5．黄褐色　10YR5/6　砂質土（粘性４層より弱い。しまり４層と同様。）
6．明黄褐色　10YR7/6　砂質土（粘性弱い。しまりあり。）
7．にぶい黄橙色　10YR6/3　砂質土（粘性ややあり。しまり弱い。）

C-D 土色
1．明黄褐色　10YR7/6　砂質土（粘性弱い。しまりあり。）
2．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性１層と同様。しまり１層よりあり。）
3．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性２層と同様。しまり２層と同様。）
4．明黄褐色　10YR5/6　砂質土（粘性弱い。しまりあり。）
5．にぶい黄褐色　10YR6/3　砂質土（粘性ややあり。しまり弱い。）

第６図　SM1001遺物出土状況平面図および土層断面図

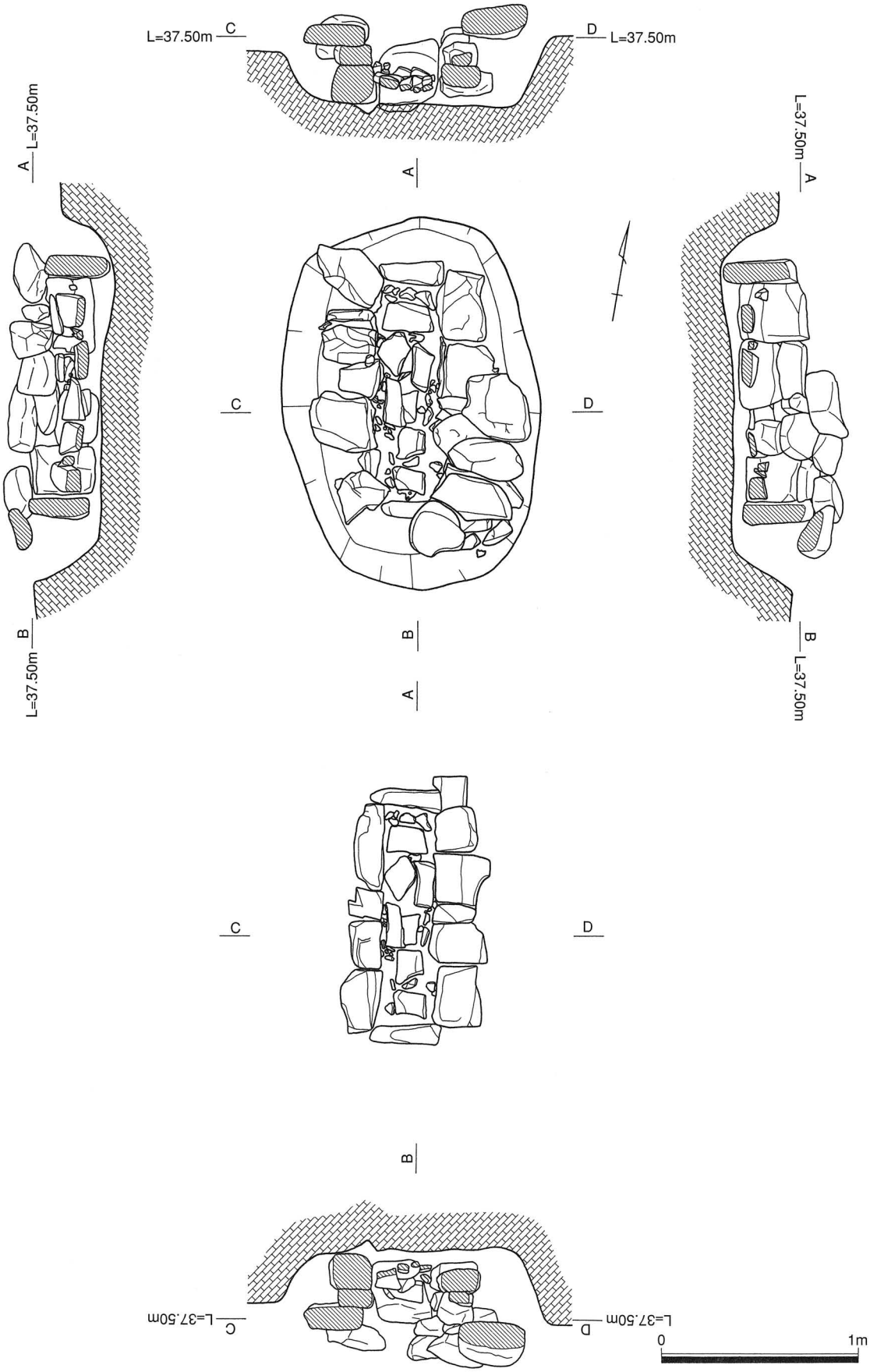


第７図　SM1001出土遺物

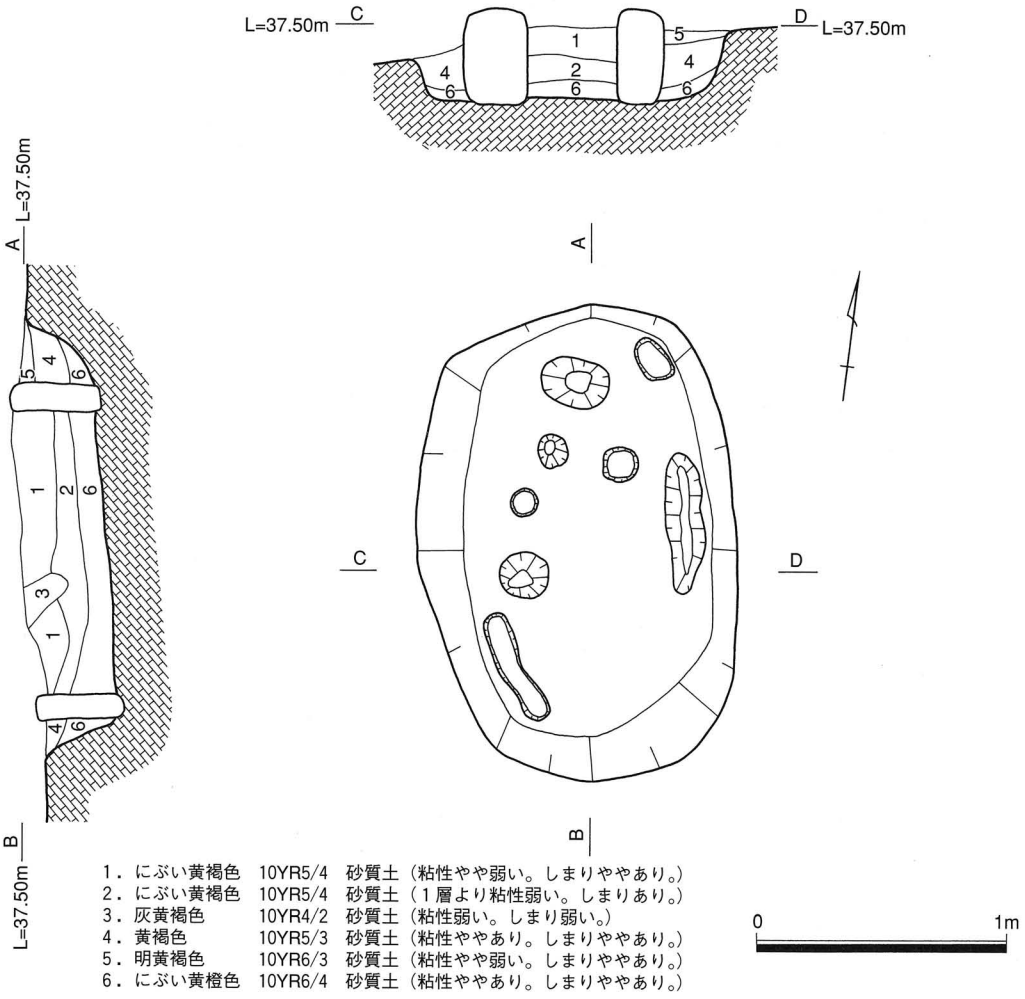
ST1001（１号石室墓）（第８・９図）

L-4グリッド、調査区北部で検出された小竪穴式石室墓である。明瞭な墳丘は確認できない。墓壙平面形は隅丸長方形状を呈し、長軸1.65m、短軸0.93m、最大深度は27cmを測る。

主体部の石室石材には砂岩の角礫が用いられる。墓壙基底部に20cm程度の板石を敷き、床面を構築する。壁体は砂岩の40cm前後の角礫を１列３段に平積みで積み上げる。北・南の小口は板石を立てて壁体をつくる。上部構造は不明であるが、石室壁体の持ち送りがほぼ垂直であることなどから、上部は60cm程度の板石で架構していたものと推測される。



第8図　ST1001平・断面図

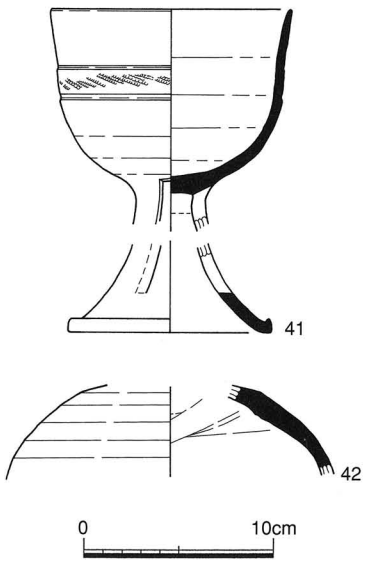


第９図　ST1001基底部平・断面図

石室規模は内法で長軸1.10m、短軸0.25m、石室床面からの高さは27cmである。主軸方向N-8°-Wで、北頭位であると推定される。石室基底部は良好な状況で残っていたが、副葬品は検出されなかった。

出土遺物（第10図）

遺構覆土中より須恵器が出土したが、実測可能なものは２点である。須恵器はTK43段階と思われ、６世紀後半の年代が与えられる。41は高杯である。42は壺の肩部と思われる。



第10図　ST1001出土遺物

ST1002（２号石室墓）（第11・12図）

C-4グリッド、調査区南部で検出されたST1001と同規模の小竪穴式石室墓である。明瞭な墳丘は確認できない。墓壙平面形は隅丸長方形状を呈し、長軸1.89m、短軸1.08m、最大深度は28cmを測る。

主体部の石室石材には砂岩の角礫が用いられる。墓壙基底部に20cm程度の板石を敷き、床面を構築する。壁体は砂岩の40cm前後の角礫を１列４段に平積みで積み上げる。北・南の小口はやや大きめの砂岩角礫１個を用いる。上部構造は不明であるが、石室壁体の持ち送りがほぼ垂直であることなどから、上部は60cm程度の板石で架構していたものと推測される。石室規模は内法で、長軸1.14m、短軸0.4m、石室床面からの高さは27cmである。主軸方向N-95°-Eで、頭位は副葬品の出土状況などから東頭位であったと推定される。

石室内からは、多くの副葬品が良好な状況で確認できた。石室床面上から鉄刀１振、鉄鏃１点、刀子１点、蓋杯１組、提瓶１点が、床石下から、鉄刀１振、鉄鏃４点、刀子２点が出土している。鉄刀は切先を西方に向け、石室内を斜めに区切るように出土しており、被葬者の胸上あるいは沿うように副葬されていたものと思われる。 木質は残存していない。 西小口側には鉄刀が配され、切先は北西を向く。鉄鏃および刀子の一部も西小口側に置かれており、被葬者の足元に副葬されたと考えられる。また須恵器杯身・杯蓋は東小口の鉄刀柄部南側で、提瓶は西小口の鉄刀西側で正位置の状態で立てかけるように出土している。ST1002から出土した須恵器は時期的にTK43段階と思われ、ST1002の築造年代も６世紀後半頃と考えられる。

出土遺物（第13～15図）

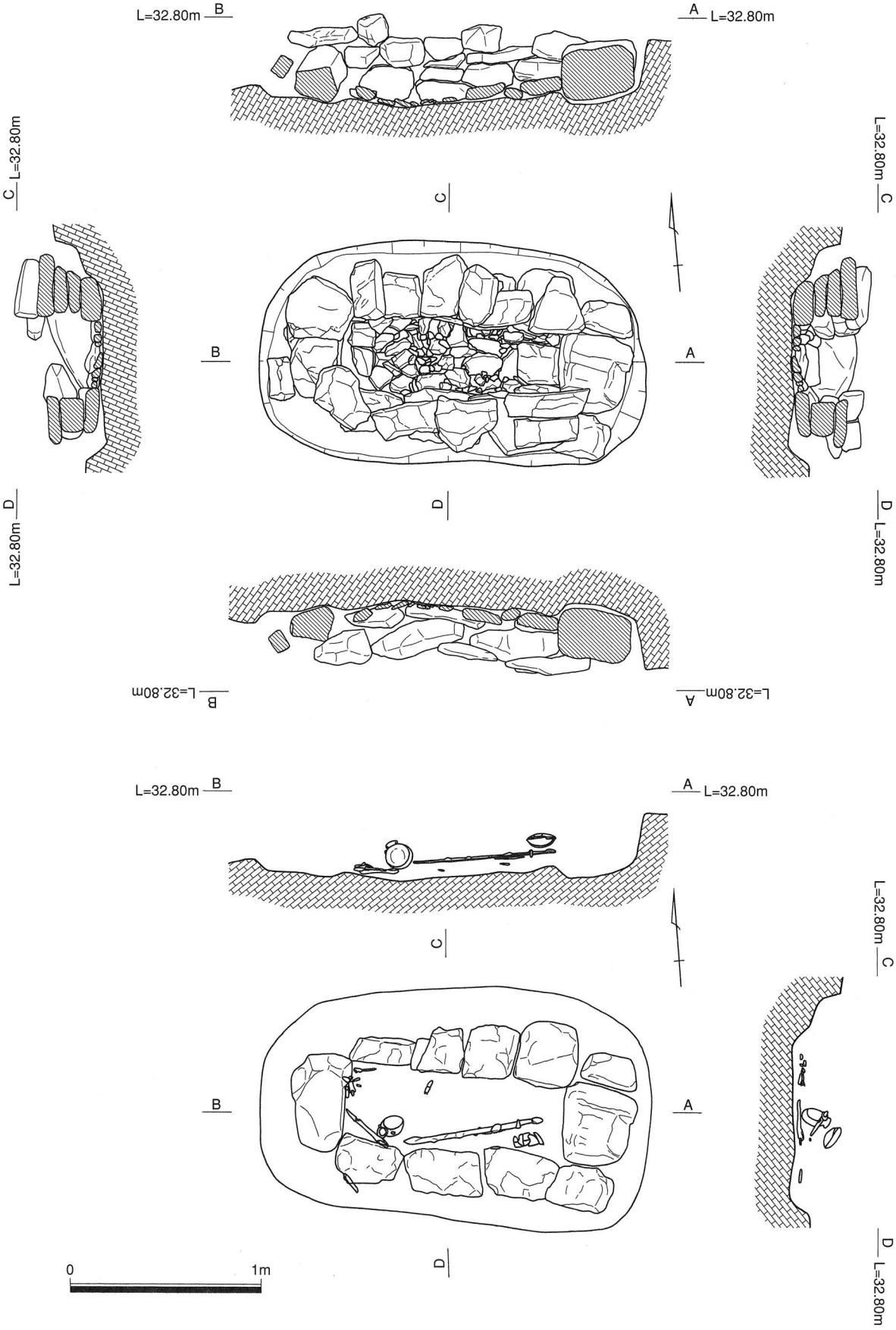
石室内からは、多くの副葬品が良好な状況で出土している。

43は鉄刀である。全長75cmを測り、鐔を有する。柄部に僅かに木質の痕跡が確認できる。44は石室西小口側で出土した鉄刀で全長28.2cmを測る。関は角関で身部に一部木質が遺存する。45は西小口側で鉄鏃と共に出土した鉄刀である。全長15.4cmを測り、関は角関で柄部に一部木質が遺存する。

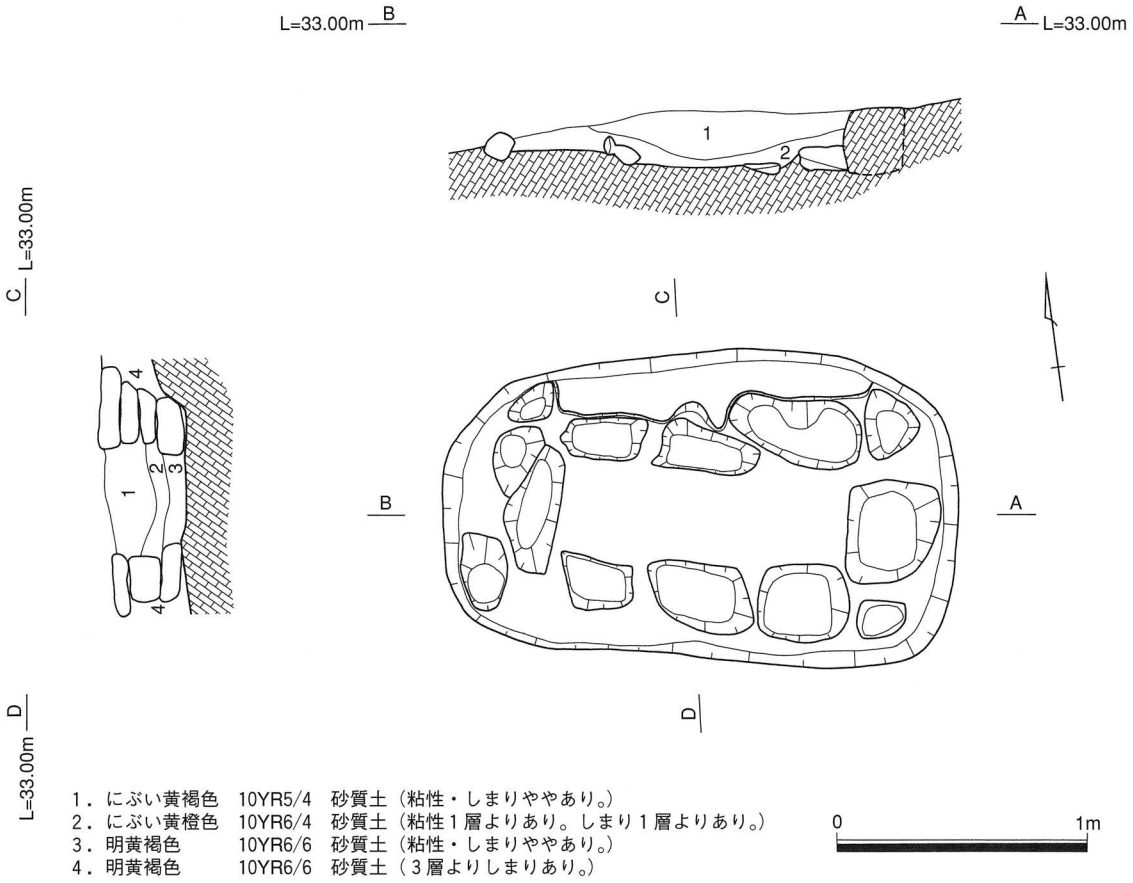
46～50は鉄鏃である。これらの鉄鏃および刀子は西小口側に副葬されていた。46は腸抉三角形鏃である。鏃身部形状は長三角形を呈し、鏃身部断面形状は両丸造を呈し、浅い逆刺を有する。頸部形状は直線状を呈し、斜関を有する。杉山分類腸抉三角形鏃群Ａ－１－Ａ型式に該当し、杉山編年Ⅸ期の年代を与えることができる。47は腸抉三角形鏃である。鏃身部形状は類柳葉状を呈し、外反する深い逆刺を有する。鏃身部断面形状は両丸造である。頸部形状は直線状を呈し、角関を有する。杉山分類腸抉三角形鏃群Ａ－２－Ｂ型式に該当し、杉山編年Ⅹ期の年代を与えることができる。48は腸抉三角形鏃である。鏃身部形状は類柳葉状を呈し、外反する逆刺を有する。逆刺の深さが47・50に比べて浅いのが特徴である。頸部形状は直線状を呈し、棘状関を有する。杉山分類腸抉三角形鏃群Ａ－３－Ａ型式に該当し、杉山編年Ⅹ期の年代を与えることができる。49は腸抉三角形鏃で、鏃身部のみが遺存する。類柳葉状の鏃身部に外反する逆刺を有する。鉄鏃48と同型式と推定される。50は腸抉三角形鏃で、鏃身部のみが遺存する。類柳葉状の鏃身部に外反する深い逆刺を有することから、鉄鏃47と同型式と推定される。

51～54は刀子で西小口側より出土している。

55～57は須恵器杯の蓋・身である。56・57は東小口の鉄刀柄部南側で出土した。58・59は須恵器の甕口縁部と思われる。60の提瓶は西小口側で出土した。環状の吊り手をもつ。61は須恵器広口壺である。62は甕体部、63は高杯である。55・58・59・61～63は石室覆土中からの出土である。



第11図　ST1002平・断面図および副葬品出土状況図

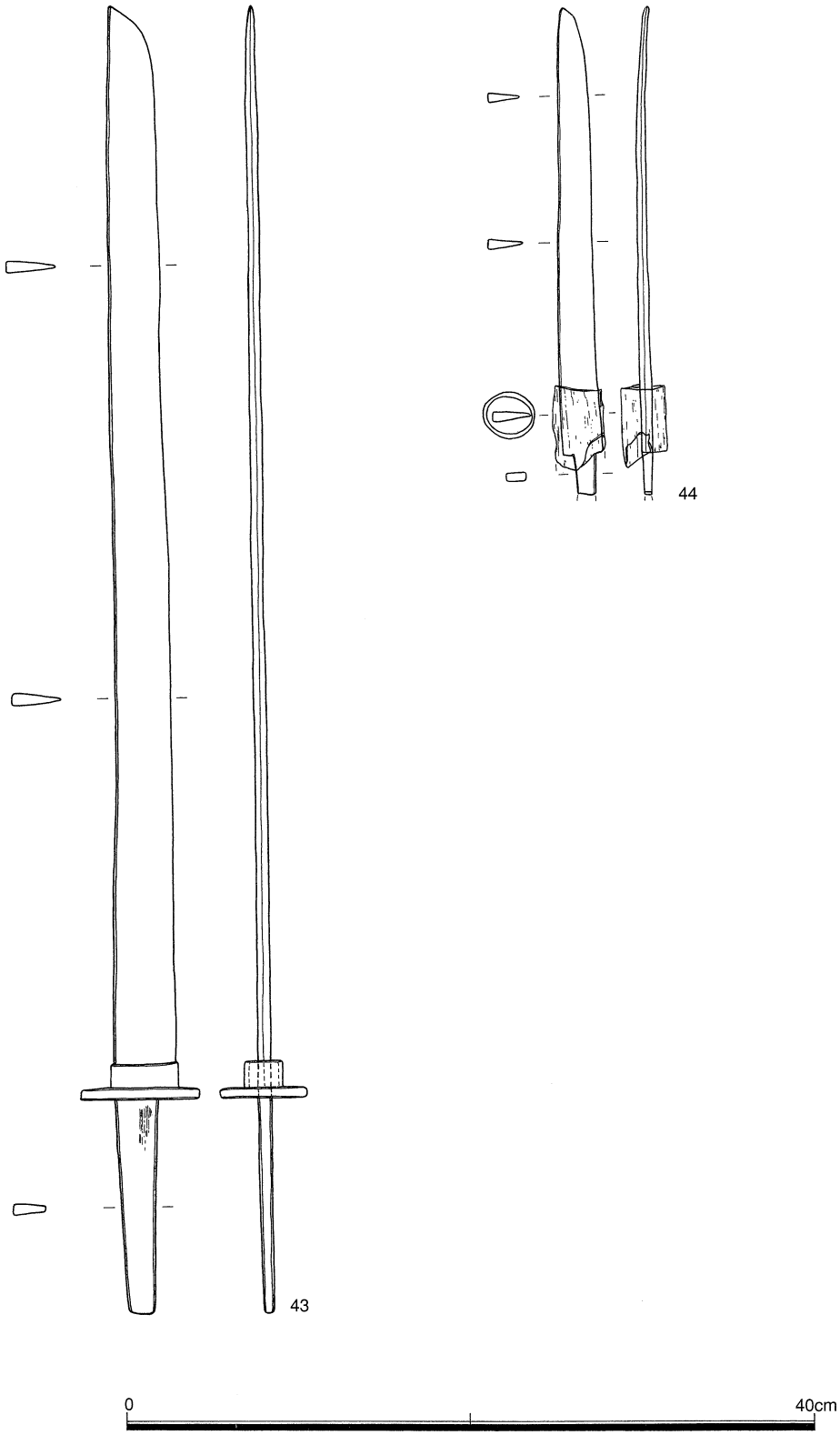


第12図　ST1002基底部平・断面図

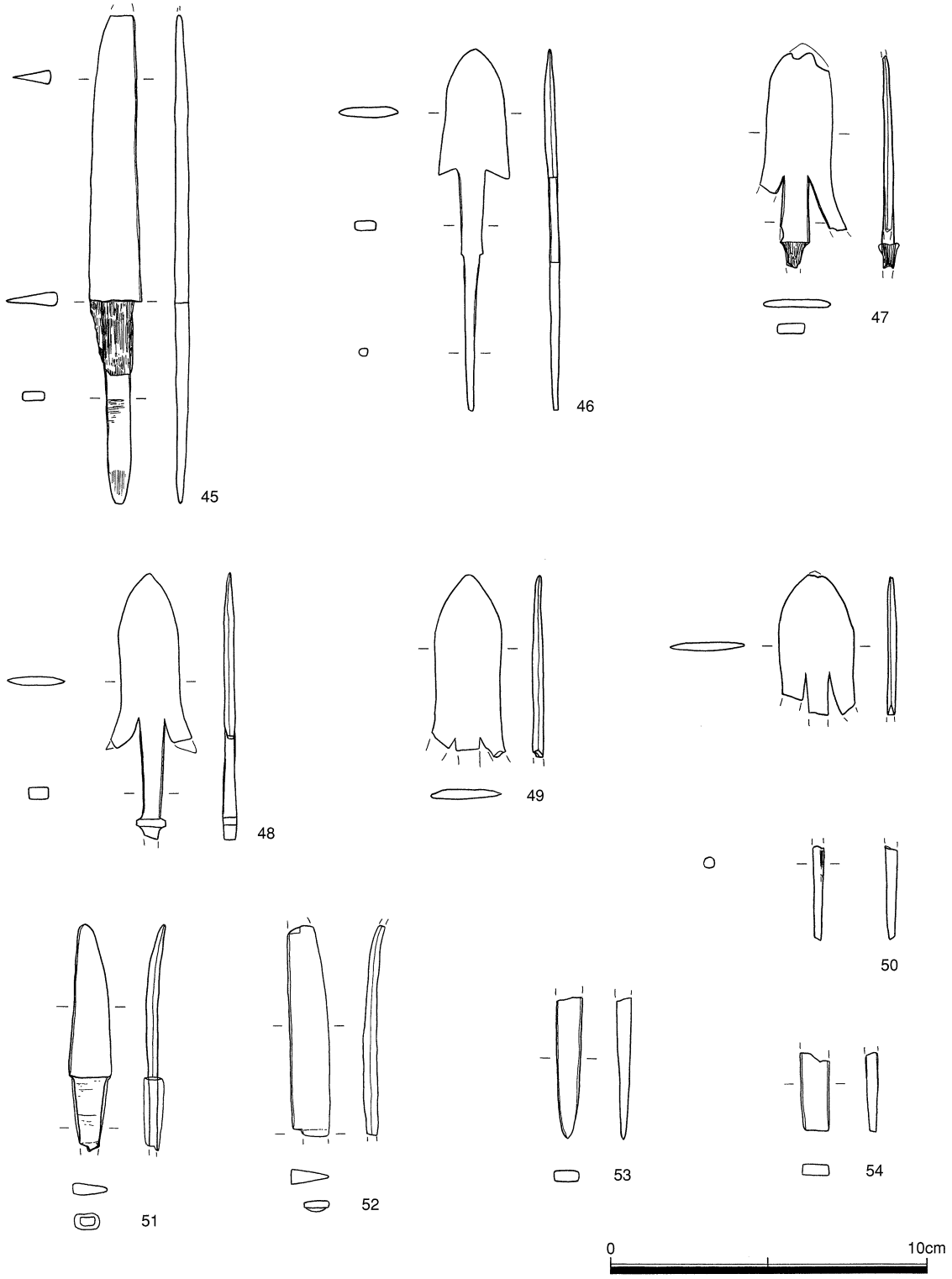
ST1003（３号石室墓）（第16図）

H-3・４グリッド、調査区中央部で検出された本遺跡では最も小型の規模の小竪穴式石室墓である。明瞭な墳丘は確認できない。墓壙平面形は楕円形状を呈し、長軸1.30m、短軸0.95m、最大深度は13cmを測る。

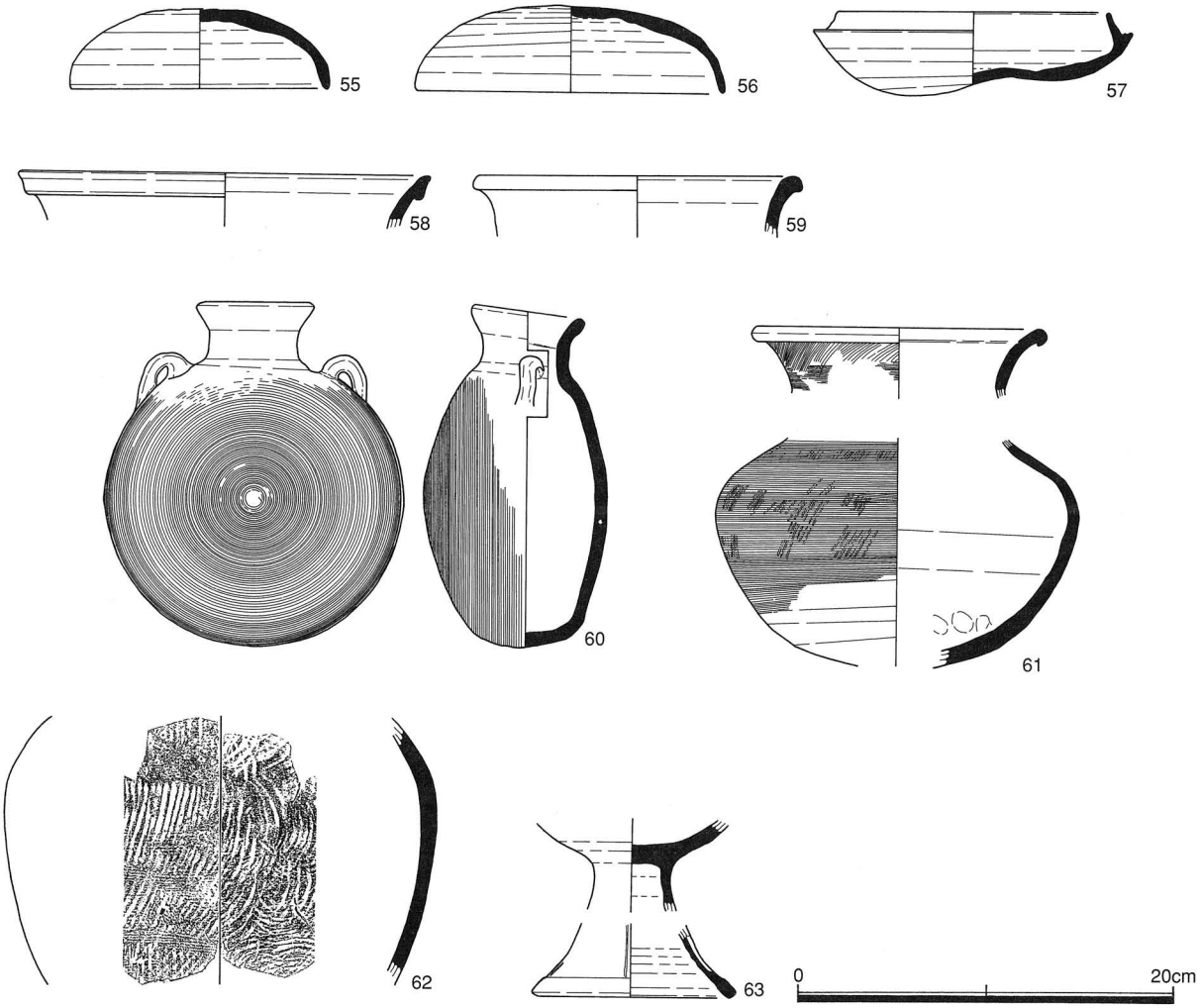
主体部の石室石材には砂岩の角礫が用いられる。墓壙基底部に20cm程度の板石を敷き、床面を構築する。壁体は砂岩の40cm前後の角礫を１列３段に平積みで積み上げる。上部構造は不明であるが、石室壁体の持ち送りがほぼ垂直であることなどから、上部は60cm程度の板石で架構していたものと推測される。石室規模は内法で長軸0.74m、短軸0.27m、石室床面からの高さは13cmで、主軸方向N-76°-Eである。石室平面形状は東側が僅かに広くなっており、東頭位であったと思われる。副葬品は出土しなかったが、覆土中より須恵器片等が出土している。出土した須恵器は時期的にTK43段階と思われ、ST1003の築造年代も６世紀後半頃と考えられる。



第13図　ST1002出土遺物１



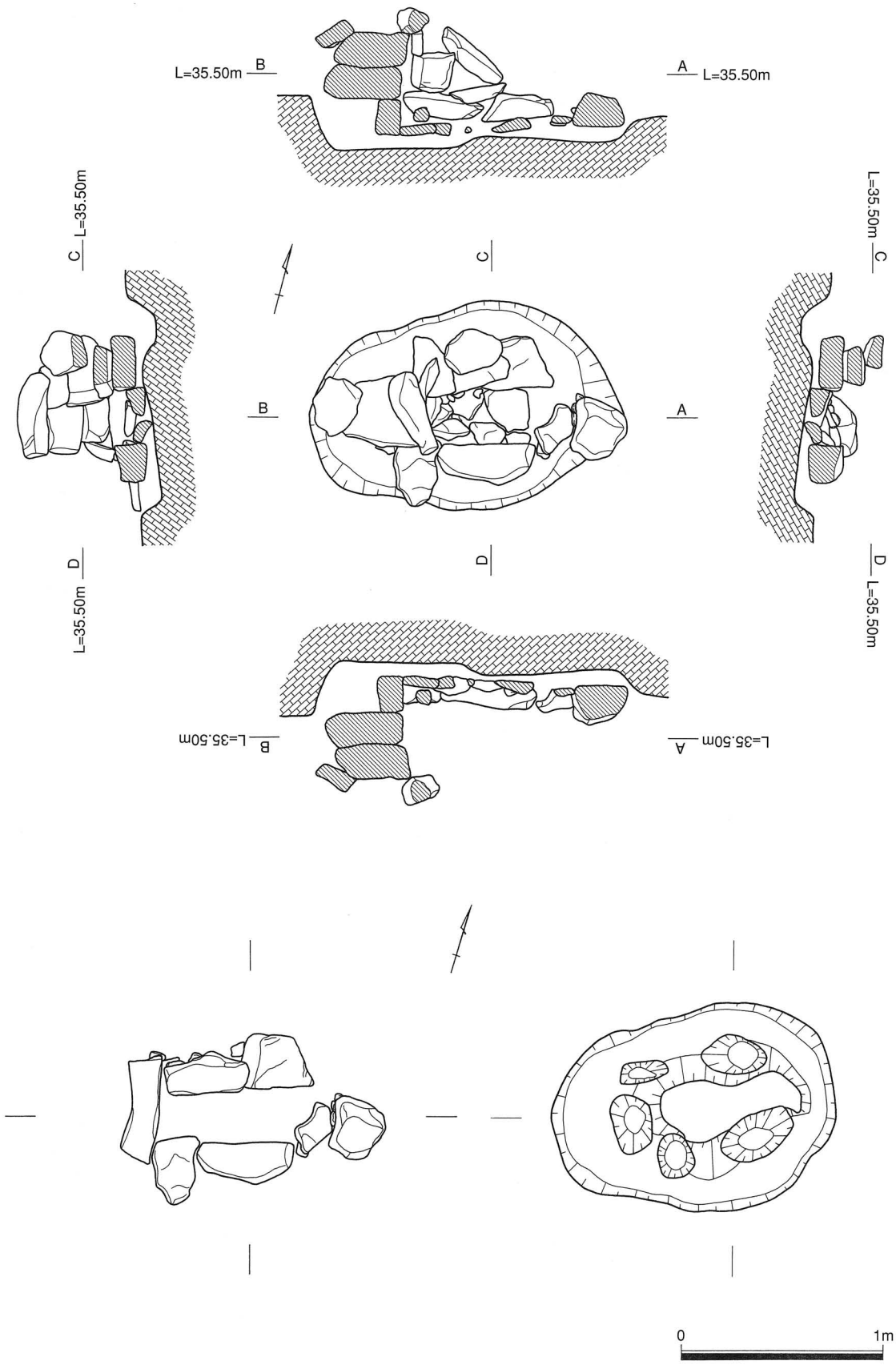
第14図　ST1002出土遺物 2



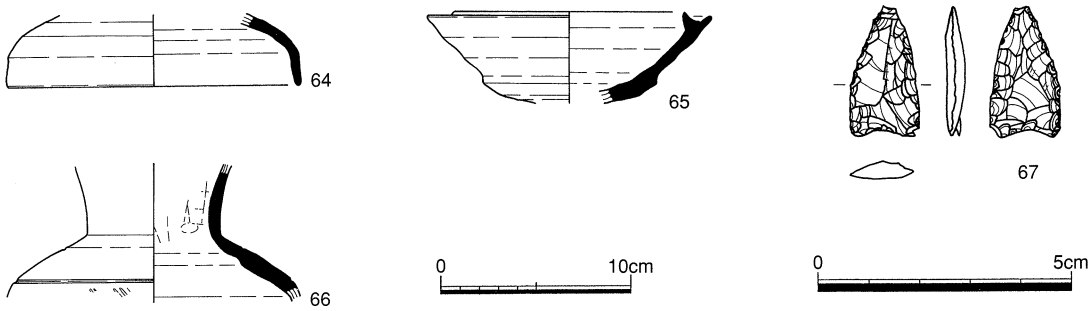
第15図　ST1002出土遺物 3

出土遺物（第17図）

64～66は須恵器である。64は杯蓋、65は杯身である。66は壺である。67は墳丘盛土中より出土した弥生時代後期頃と思われるサヌカイト製の石鏃である。



第16図　ST1003平・断面図



第17図　ST1003出土遺物

ST1004（４号石室墓）（第18・19図）

M-5グリッド、調査区北部で検出された本遺跡では最も小型の規模の小竪穴式石室墓である。明瞭な墳丘は確認できない。墓壙平面形は楕円形状を呈し、長軸1.35m、短軸0.71m、最大深度は26cmを測る。

主体部の石室石材には砂岩の角礫が用いられる。墓壙基底部に20cm程度の板石を敷き、床面を構築する。壁体は砂岩の20～40cm前後の角礫を１列２段に平積みで積み上げる。石室構築に使用された砂岩礫の大きさが不均一であることや、壁面が平坦に整えられていないことなど、構築状況に粗さがみられる。上部構造は不明であるが、石室壁体の持ち送りがほぼ垂直であることなどから、上部は50cm程度の板石で架構していたものと推測される。

石室規模は内法で、長軸84cm、短軸27cm、石室床面からの高さは21cmで、主軸方向N-21°-Wで北頭位であると思われる。石室基底部は良好な状態で遺存しているが、副葬品は北小口より須恵器杯の蓋・身が１組のみ出土した。出土した須恵器は時期的にTK43段階と思われ、ST1003の築造年代も６世紀後半頃と考えられる。

出土遺物（第20図）

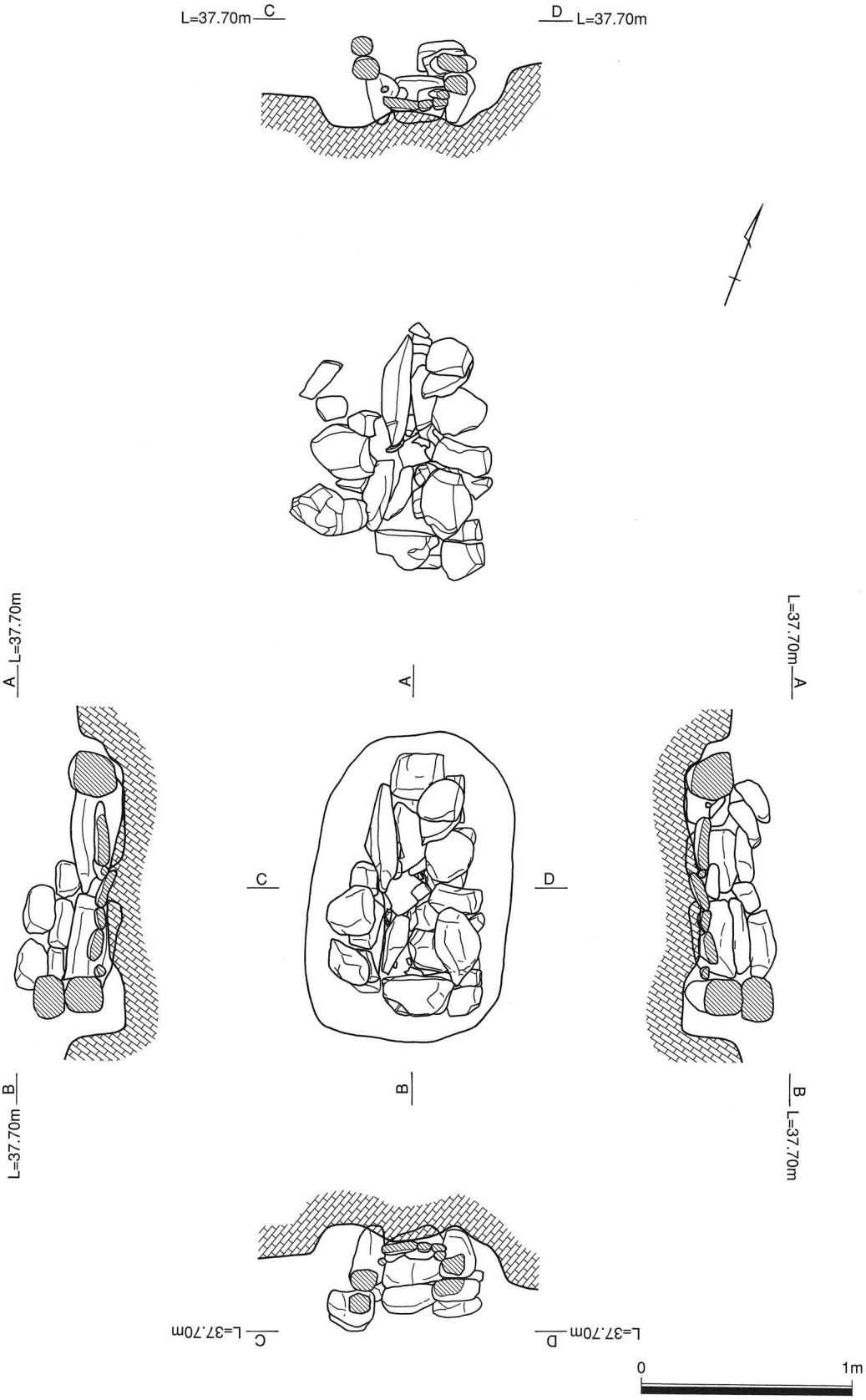
石室北小口床面より須恵器の杯蓋・杯身が１組出土した。68は蓋、69は身で時期的に６世紀後半頃と考えられる。

ST1005（５号石室墓）（第21図）

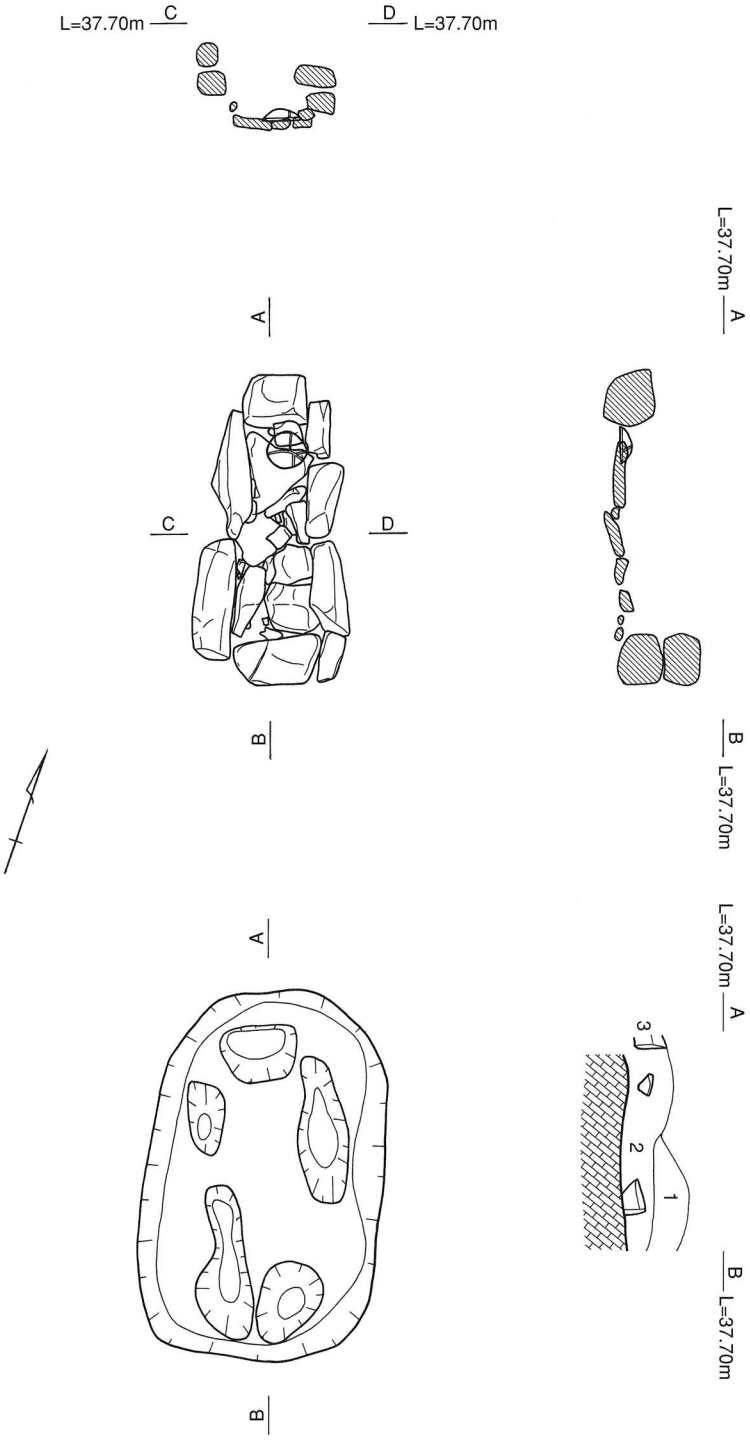
K・L-5・６グリッド、調査区北部で検出された小竪穴式石室墓である。明瞭な墳丘は確認できない。墓壙平面形は長方形状を呈し、長軸1.46m、短軸0.80m、最大深度は20cmを測る。長軸方向は東西である。石室は崩落が激しく、ほとんど残存していないため不明である。ST1005の南側で接してSU1001（集石遺構１）として検出した遺構があるが、ST1005の石室の崩落したものの可能性が高い。

出土遺物

若干の須恵器片等が出土したが、実測可能なものはなかった。



第18図　ST1004平・断面図



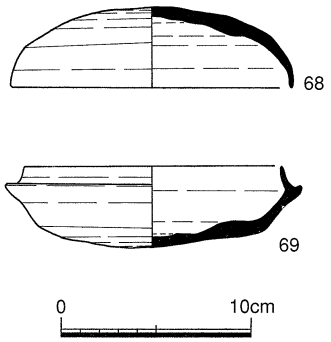
1．褐色　10YR4/6　砂質土（粘性弱い。しまりややあり。φ＝2.5cmの礫を含む。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性あり。しまりあり。地山。）
3．明黄褐色　10YR7/6　砂質土（粘性弱い。しまりあり。）

0　1m

第19図　ST1004基底部平・断面図

ST1006（６号石室墓）（第22図）

M-6・７グリッド、調査区北部で検出された小竪穴式石室墓である。明瞭な墳丘は確認できない。墓壙平面形は不整形な四角形状を呈し、長軸1.50m、短軸1.30m、最大深度は18cmを測る。長軸方向は東西である。石室は崩落が激しく、一部壁体と思われる砂岩礫が残存する程度である。砂岩礫の並びから主軸方向は東西と思われるが詳細は不明である。



第20図　ST1004出土遺物

出土遺物

若干の須恵器片等が出土したが、実測可能なものはなかった。

SU1001（集石遺構１）（第21図）

K・L-5・６グリッド、調査区北部で検出された砂岩礫の集石遺構である。明瞭な墳丘や堀り方は確認できない。礫の散布範囲は南北約2.50m、東西約2.80mである。ST1005の南側で検出されており、SU1001はST1005の石室の崩落したものの可能性が高い。

出土遺物

若干の須恵器片等が出土したが、実測可能なものはなかった。

SU1002（集石遺構２）（第23図）

L・M-6・７グリッド、調査区北部で検出された砂岩礫の集石遺構である。明瞭な墳丘や堀り方は確認できない。礫の散布範囲は南北約3.30m、東西約3.00mである。ST1006の南側で検出されており、SU1002はST1006の石室の崩落したものの可能性が高い。

出土遺物（第24図）

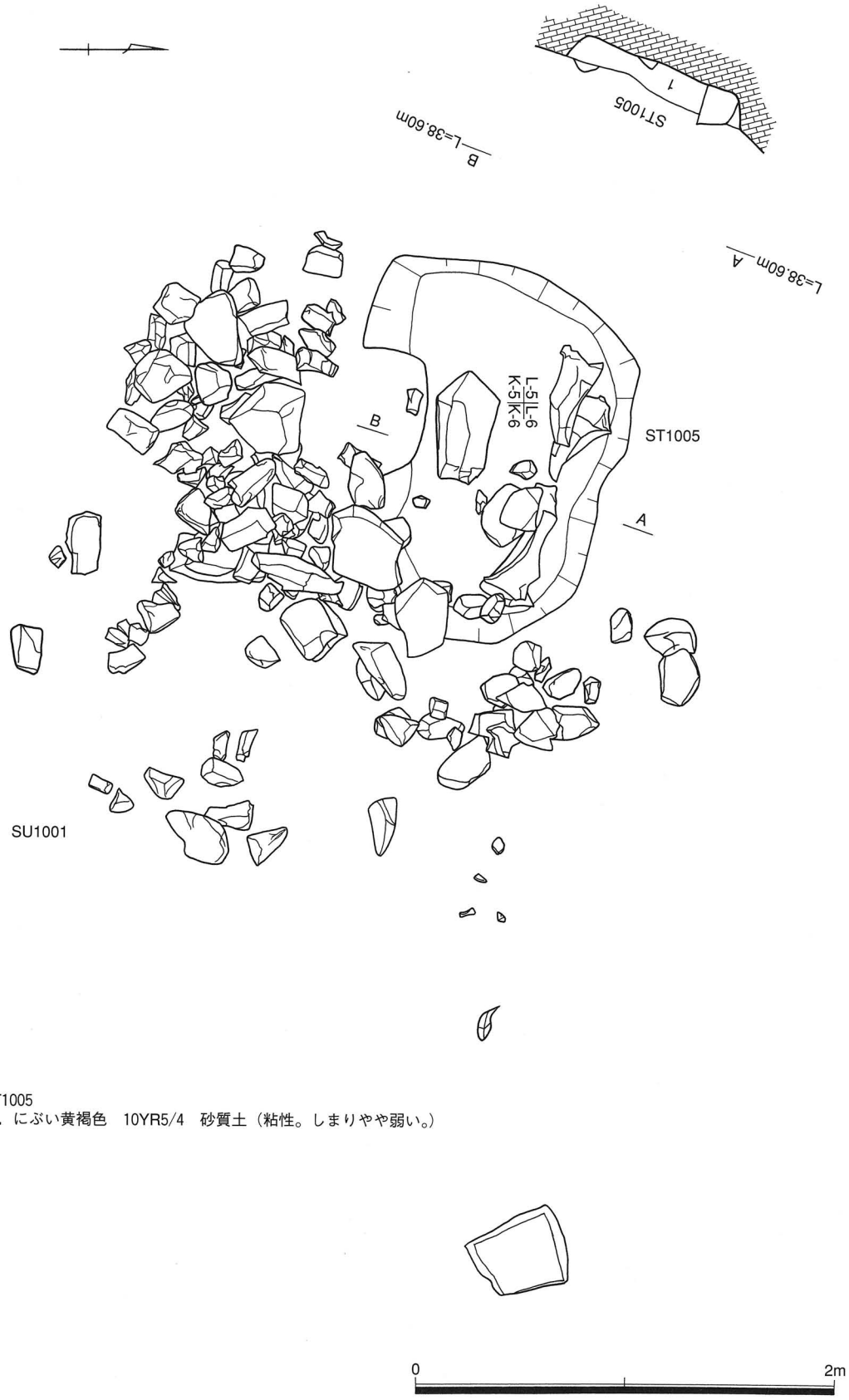
若干の須恵器片等が出土したが、実測可能なものは１点のみである。70は杯蓋である。

SU1003（集石遺構３）（第25図）

K-6・７グリッド、調査区北部東側で検出された砂岩礫の集石遺構である。明瞭な墳丘や墓壙等の堀り方は確認できないが、小竪穴式石室墓であった可能性がある。礫の散布範囲は南北約2.60m、東西約3.40mである。

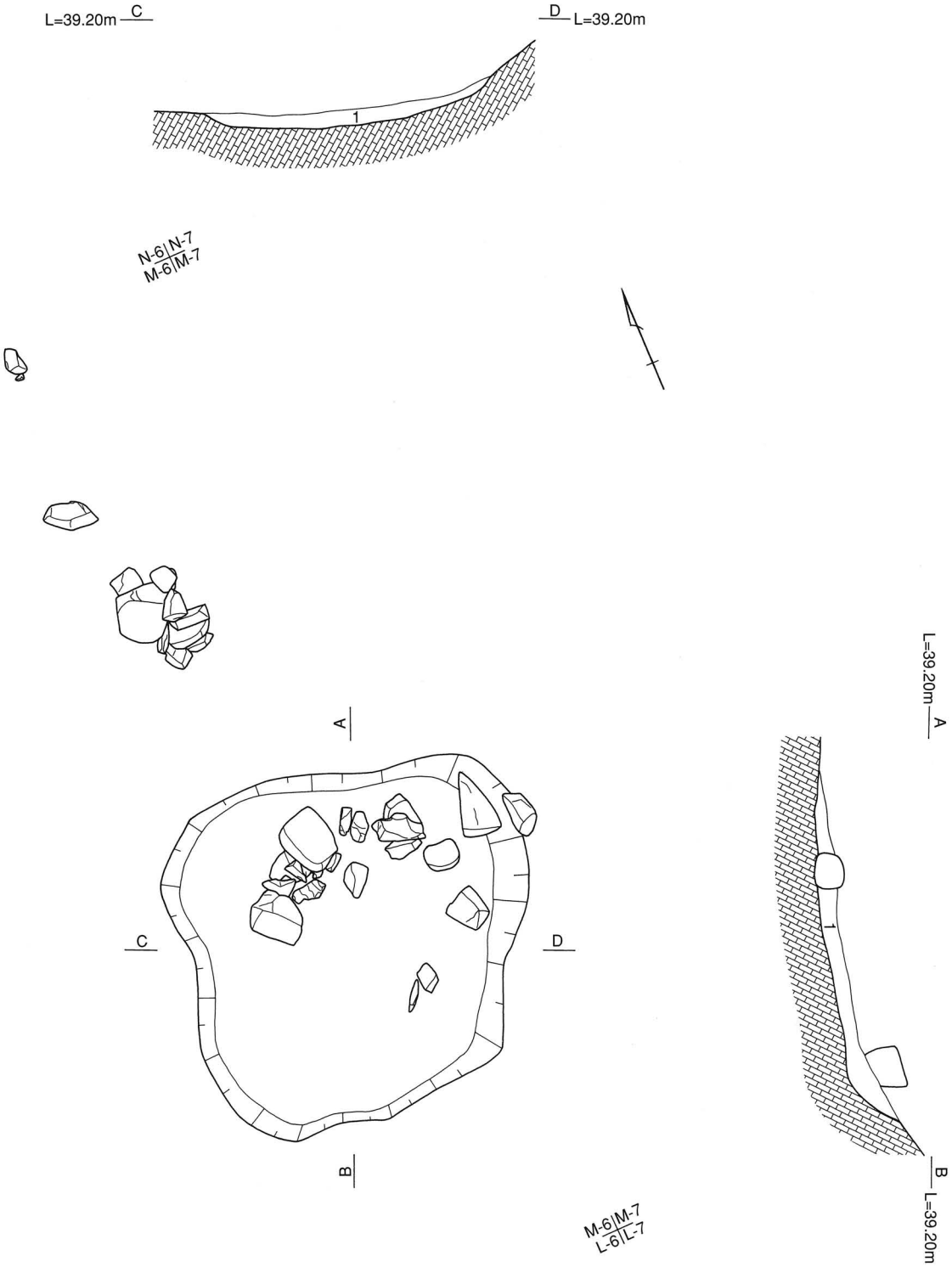
出土遺物

若干の須恵器片等が出土したが、実測可能なものはなかった。



ST1005
1．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性。しまりやや弱い。）

第21図　ST1005平面およびSU1001平・断面図

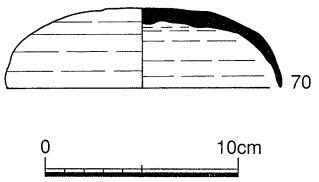


1．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性。しまりややあり。）

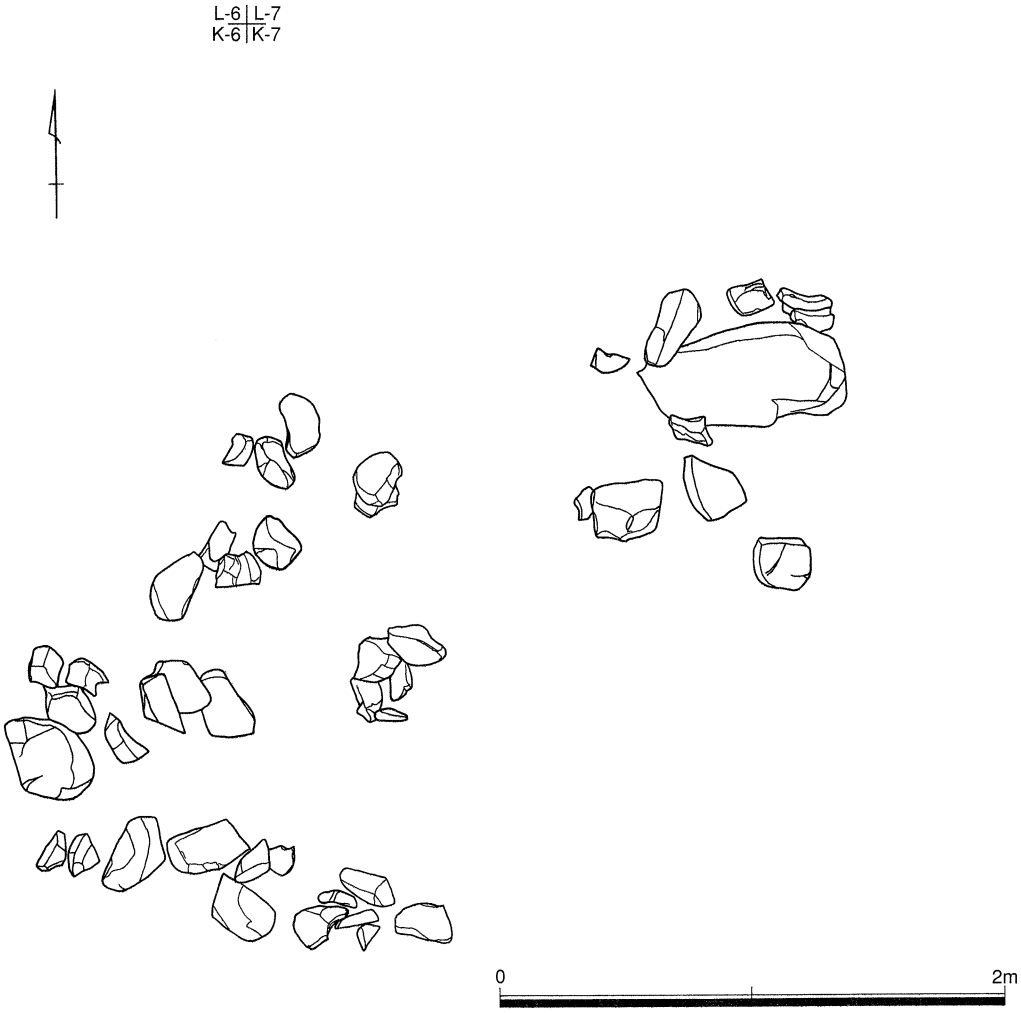
0　1m

第22図　ST1006平・断面図

第23図　SU1002平面図



第24図　SU1002出土遺物



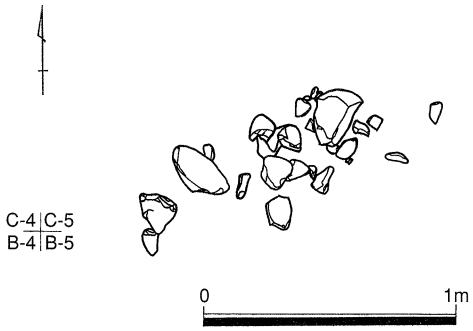
第25図　SU1003平面図

SU1004（集石遺構４）（第26図）

C・D-5グリッド、調査区南部で検出された砂岩礫の集石遺構である。明瞭な墳丘や墓壙等の堀り方は確認できないが、小竪穴式石室墓であった可能性がある。礫の散布範囲は南北約0.7m、東西約1.20mである。

出土遺物

若干の須恵器片等が出土したが、実測可能なものはなかった。



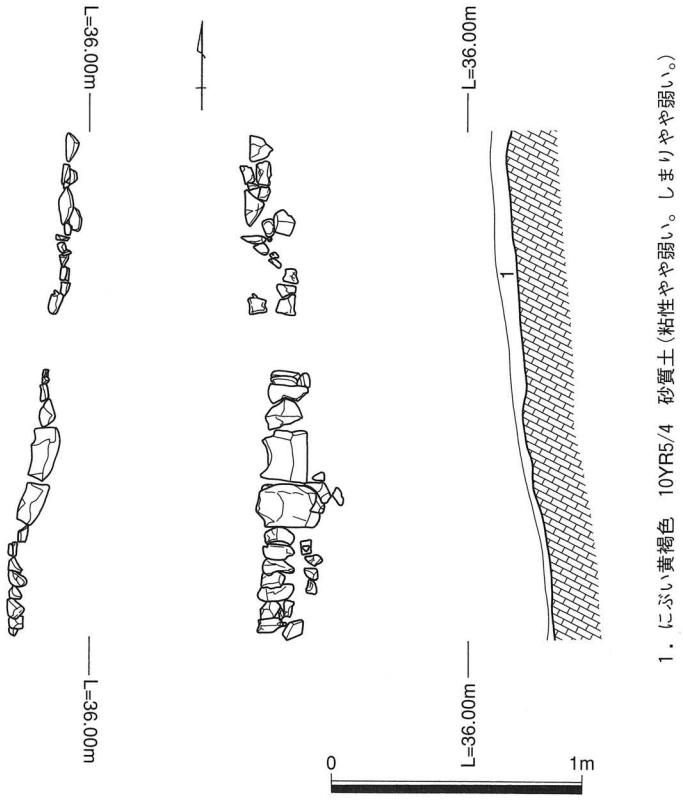
第26図　SU1004平面図

SU1005（集石遺構５）（第27図）

H-3グリッド、調査区中央部、ST1003の西側で接するように検出された砂岩礫の集石遺構である。明瞭な墳丘や墓壙等の堀り方は確認できない。礫の散布範囲は南北約2.00m、東西約0.35mで、南北方向に列状を成しており、出土状況からはST1003に伴う区画列石とも考えられるが断定はできない。

出土遺物

若干の須恵器片等が出土したが、実測可能なものはなかった。



第27図　SU1005平・断面図

SK1001（土坑１）（第28図）

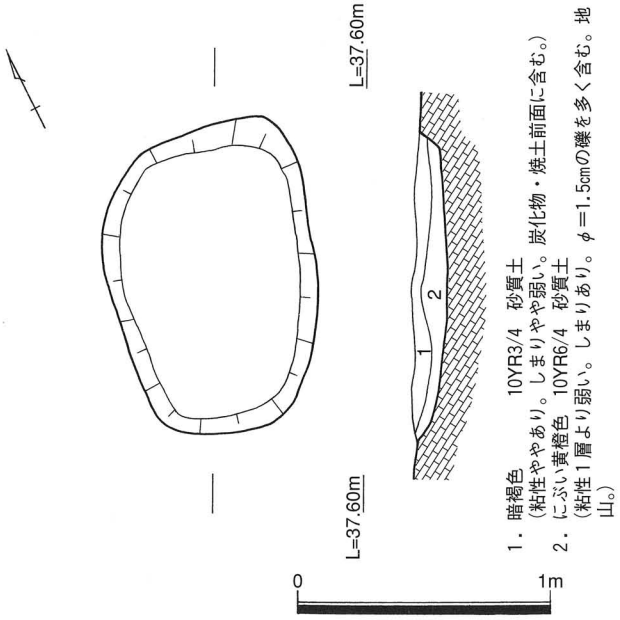
M-5グリッド、調査区北部、ST1004の南東側で検出された土坑である。

楕円形状の平面形を呈し、規模は長軸54cm、短軸34cm、最大深度14cmで、長軸方向は南北である。

小竪穴式石室墓の墓壙残穴と考えられる。

出土遺物

若干の須恵器片等が出土したが、実測可能なものはなかった。



第28図　SK1001平・断面図

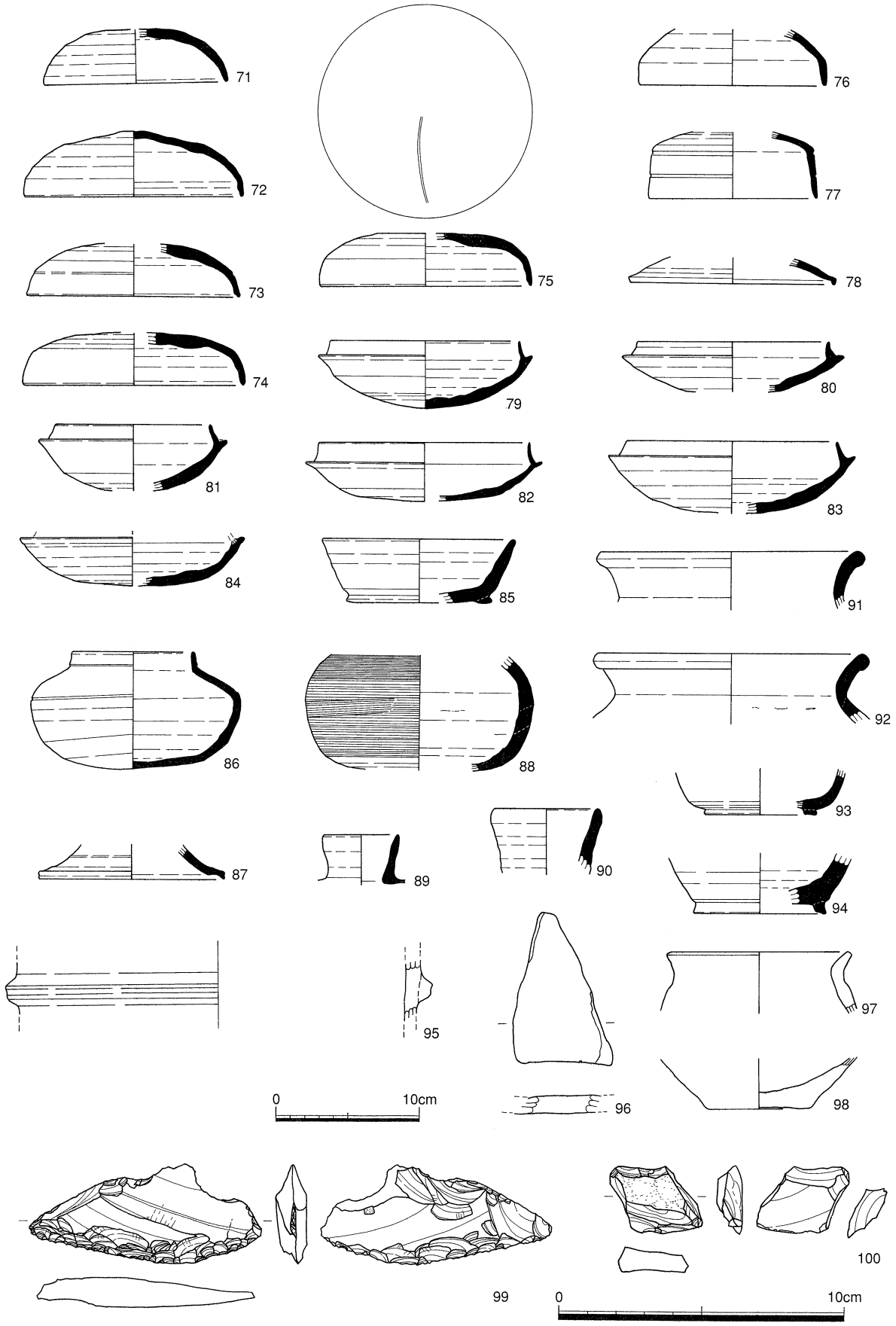
包含層出土遺物（第29図）

遺構外からも多くの須恵器等の出土がみられ、遺構から明らかに遊離した遺物を包含層出土遺物として扱った。

71～94は須恵器である。71～84は杯蓋および杯身である。75の外面にはヘラ記号がみられる。86は短頸壺である。87は高杯脚部、88は平瓶の体部である。89・90は瓶の口縁部と思われる。91・92は甕の口縁部、93・94は壺の底部と思われる。出土した須恵器は時期的にTK43段階と思われ、概ね６世紀後半頃と考えられる。

95・96は、埴輪の破片である。95は円筒埴輪のタガの部分で、96は形象埴輪であると思われる。

97～100は弥生時代の遺物である。97は甕の口縁部、98は壺の底部である。時期的には弥生時代後期頃と思われる。99はスクレイパー、100は楔形石器で、石材は99・100ともサヌカイトである。



第29図　包含層出土遺物

（4）まとめ

小竪穴式石室

吉野川河口域北岸地域における小竪穴式石室の最大の特徴は、多様な階層性が表現されていることにある。例えば吉野川下流域北岸群に属する板野郡上板町山田古墳群や柿谷古墳群では、古墳群を主体的に構成する横穴式石室に対して、同一墳丘内や墳丘外縁に接する形で小竪穴式石室が構築されており、「従属系小竪穴式石室」と位置づけることができる。こうした現象は吉野川流域各地で認められ、古墳時代後期の階層が反映されている。河口域北岸地域においても鳴門市ぬか塚古墳などでは同一墳丘内に小竪穴式石室が築造されていることが知られてきた。今回発掘調査が行われた大谷山田遺跡においても横穴式石室墳に接する形で小竪穴式石室が構築されている。しかし、東林院古墳群では、主体となる横穴式石室を有する古墳は認められず、小竪穴式石室のみで古墳群が形成されていた。東林院１号墳と穴観音古墳の先後関係は明確ではないが、恐らく穴観音古墳を築造契機として古墳群が形成された後、追葬と平行して谷奥部に小竪穴式石室が構築されたと推定される。独立系小竪穴式石室は、従属系に比べて副葬品組成が豊富である。東林院２号石室からは直刀２，鉄鏃５，刀子３，須恵器蓋杯１，提瓶１が出土しており、小型横穴式石室と比較しても遜色がない組成といえよう。こうした傾向は萩原墳墓群でも認められる。こうしたことから独立系小竪穴式石室は、他地域群の小型横穴式石室と従属系小竪穴式石室の中間に位置する階層に属すると言えよう。河口域北岸群内での階層分化が進展するにつれて発生したと言えよう。

横穴式石室墳と小竪穴式石室の関係は、墳墓群構造に反映された社会秩序や階層性と捉えることができる。墳丘規模と埋葬主体部様式・規模の関係は、大型古墳には大型・中型横穴式石室が、中型古墳には大型・中型横穴式石室が、小型古墳には中型・小型横穴式石室と独立系小竪穴式石室が組み合わされている。区画を有する低墳丘墓には大型・中型・小型独立系小竪穴式石室が、無区画の低（無）墳丘墓には独立系小竪穴式石室と従属系小竪穴式石室が組み合わされる。なお、従属系小竪穴式石室は主墳（横穴式石室）墳丘内と墳丘外に構築される２者がある。集落内方形土壙墓は大型・中型・小型の３者があるが、大型は単独で、中・小型は群を形成する傾向がある。これらすべてを「諸要素は社会（政治）秩序を反映している」という前提のもとに、上下方向に並べ替えると、吉野川流域全体では大地域群首長層、水系群首長層、有力家長層、家長層（上位）、家長層（下位）、一般成員に細分することが可能である（栗林 2003）。吉野川河口域北岸群の盟主墳（地域群首長墳）は、ぬか塚古墳と位置づけることが可能である。さらに樋殿内川水系群では、春日神社古墳群が水系首長墳であり、非生活域に立地するカネガ谷１号墳は水系内の有力家長墳と位置づけることが出来る。独立系小竪穴式石室の萩原墳墓群は下位の家長層、集落内方形土壙墓は一般成員層と推定される。一方、大谷川水系群では東林院穴観音古墳が水系首長墳であり、非生活域に立地する大谷山田１号墳や袖もぎ古墳群が有力家長層と位置づけることが出来よう。独立系小竪穴式石室の東林古墳群はやや下位の有力家長層であり、従属系小竪穴式石室の大谷山田１，２号石室は１号墳被葬者と同一出自の下位層と推定される。当該地域では集落遺跡は未確認であるが、鮎喰川流域同様に集落内に方形土壙墓が構築されていると推定される。この集落内方形土壙墓は一般成員の墓と推定される。

こうした階層性は吉野川流域全体では「地域格差」が認められる。河口域北岸群では、「巨大円墳＋巨大横穴式石室」は存在しないが、「生活域＋大型円墳＋大型横穴式石室（ぬか塚古墳）」を筆頭に各段階の墳墓が営まれており、多様な階層構造が存在したことが伺える。最大の特徴は「独立系小竪穴式石

室」の存在である。他地域群には認められず、副葬品組成も古墳と比べて遜色のない一群（東林院古墳群）も存在する。おそらく中・小型円墳と従属系小竪穴式石室の階層間に位置するものと推定されよう。その一方、従属系小竪穴式石室の副葬品組成は貧弱となる。下流域北岸群では、階層構造がやや単純化し、中位～下位が充実する。その要因は「生活域＋各古墳」と「独立系小竪穴式石室」が認められないことによる。その一方で、「非生産域＋大型・中型古墳」の副葬品組成は、下流域北岸群の「生活域＋大型・中型古墳」に近似（もしくは凌駕）する。また、従属系小竪穴式石室の副葬品組成も、下流域北岸の同埋葬様式より豊かである。上流域北岸群では、階層構造が大きく上位と下位に大きく２分割される。その要因は小竪穴式石室が未確認（希少）であることによる。また、「非生産域＋古墳」も比較的少なく、古墳は「生活域＋各古墳」へと集約さたと推定される。小竪穴式石室の希少性は、家長層が墓域を形成するまでには至らなかったことを示している。階層構造の「地域格差」、すなわち階層構造が複雑であるかどうかは、当時の社会状況が反映されていると推定される。吉野川流域という同一流域内に有りながらも、各地域は弥生時代の段階から明確な地域性（土器様式）が認められる。吉野川河口域北岸は、弥生時代中期以降、他地域との交流拠点として機能した地域である。古墳時代前期以降も、近畿地方を始め瀬戸内地域との物流の経節点としての機能を有した。そのために有力首長の形成が進んだ地域でもある(1)。また、各種職掌集団(ex. 製塩、埴輪生産、須恵器生産、武装）も成立・展開したと推定される。と同時に、吉野川流域の開発にあたっても、水系単位や小水系毎での首長層や家長層が台頭し、一般成員を掌握したと考えられる。一方、上流域における開発は古墳時代後期中葉以降と推定され、河口域に比べて遅れたり、技術的限界が存在したと推定される。そのため、開発は地域群首長層や水系首長層が、直接的に一般成員を掌握することにより進展したものと推定される。よって中間層である小竪穴式石室層の成立が、充分果たせなかったものと推定される。こうした開発形態の差は集落構造からも想定される。鮎喰川と吉野川が合流する地域に展開する敷地遺跡では、微高地毎に平地式住居と４～５軒の竪穴住居が一つの住居支群を形成し、さらにこの住居支群が数群集まって集落（約15～20軒）を形成している。一方、吉野川の中洲性微高地上に展開する大柿遺跡では、大型竪穴住居と６～８軒の竪穴住居が一つの住居支群を形成し、さらにこの住居支群が一つの微高地上に集住することにより集落（約170軒）を形成している。「集落構造には生産単位や灌漑水路管理単位が反映されている」と仮定するならば、敷地遺跡では小規模集落で水系管理が行われ、必然的に水利管理層が複数存在した推定される。一方、大柿遺跡では大規模集落で水系管理が行われ、水系管理層は基本的には単数であったと推定される。こうした開発（生産）単位の差が、階層構造に反映されていたことも推定されよう。

結び

今回の調査においては、本古墳群の構成はSM1001を主墳として、それを取り巻くようにして４基のSTが確認された。SM1001は、立地的および規模的にも、また、本遺跡で唯一の装飾品であるガラス小玉が石室内から出土したということからも、本古墳群構成の中心的存在であったと考えることができる。ST1002では、副葬品が良好な状況で遺存していた。この時期の小竪穴式石室墓に直刀等が副葬される例は少なく、当該地域の古墳群動向を検討する上で重要な存在である。

また、出土須恵器がTK43型式段階に該当するため、本古墳群は古墳時代後期、６世紀後半頃の築造年代が与えられる。遺物は石室外からも多く出土しており、調査区のほぼ全域から、約1,100点の須恵器片が検出された。このことから、今回検出されたSMやSTの他にも、横穴式石室を持つ古墳あるい

は小竪穴式石室墓が築かれていたことが窺われる。またSTの配置からもST1001・ST1004の周辺およびST1002周辺にも主墳となるような古墳が築造されていた可能性は残るが、調査区内からはその痕跡を確認することはできなかった。

本古墳群で検出された石室には、石材として自然石の砂岩が用いられている。このことは大谷山田遺跡・かに塚・ぬか塚など近隣に所在する当該地域の後期古墳の石室石材には砂岩が用いられる傾向を踏まえている。また前述の大谷山田遺跡・かに塚・ぬか塚などの後期古墳は比較的低所に築造されており、本古墳群においては当該地域における古墳群の立地においても同様の傾向をみせる。石室主軸方向・埋葬頭位については、SM・STともに東西方向・東頭位を志向するが、その規制は緩く、むしろ石室の築造に関して地形的条件の制約の影響も大きいものと考えられる。

古墳の立地・形状・石室石材および主軸方向が東西を志向するなど、当該地域における後期古墳は類同様相を見せ、石室使用石材や古墳築造の立地に関してある種の社会的規制があったものと想定される。今後さらに東西主軸を志向する古墳群の規制程度とその階層範囲など立地や石室構造・副葬品の組成を含めて検討が必要である。

引用・参考文献

杉山秀宏　1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』8　奈良県立橿原考古学研究所

東林院古墳群
第１表　出土遺構一覧表
ST

遺構名	グリッド	墳丘形態	墳丘規模	墓壙平面形態	墓壙断面形態	墓壙長軸（m）	墓壙短軸（m）	墓壙深度（cm）	石室長軸（内法m）	石室短軸（内法cm）	石室深度（cm）	主軸方向	備　考
SM1001	I·J-3	円墳	残存部半径約３m	隅丸長方形状	Ｄ字状（浅い台形状）	2.60	1.30	32	1.94	45	58	N-135°-E	１号墳。
ST1001	L-4			隅丸長方形状	Ｄ字状（浅い台形状）	1.65	0.93	27	1.10	25	27	N-8°-W	１号石室墓。
ST1002	C-4			隅丸長方形状	Ｄ字状（浅い台形状）	1.89	1.08	28	1.14	40	27	N-95°-E	２号石室墓。
ST1003	H-3·4			楕円形状	Ｄ字状（浅い台形状）	1.30	0.95	13	0.74	27	13	N-76°-E	３号石室墓。
ST1004	M-5			楕円形状	Ｄ字状（浅い台形状）	1.35	0.71	26	0.84	27	21	N-21°-W	４号石室墓。
ST1005	K·L-5·6			長方形状	Ｄ字状（浅い台形状）	1.46	0.80	20				東西	５号石室墓。
ST1006	M-6·7			不整形な四角形状	Ｄ字状（浅い台形状）	1.50	1.30	18				東西	６号石室墓。

SU

遺構名	グリッド	礫の散布範囲　南北（m）	礫の散布範囲　東西（m）	備　　考
SU1001	K·L-5·6	2.5	2.8	集石遺構１
SU1002	L·M-6·7	3.3	3.0	集石遺構２
SU1003	K-6·7	2.6	3.4	集石遺構３
SU1004	C·D-5	0.7	1.2	集石遺構４
SU1005	H-3	2.0	0.35	集石遺構５

SK

遺構名	グリッド	平面形態	断面形態	長軸（cm）	短軸（cm）	深度（cm）	主軸方向	備　　考
SK1001	M-5	楕円形状	Ｄ字状（浅い台形状）	54	34	14	南北	

第２表　出土遺物観察表
SM（土器）

報告書掲載番号	遺　構	出土地点	層　位	器　種	残存率	口　径（cm）	体　部最大径（cm）	底　径（cm）	頸部（脚柱）径（cm）	器高・残存高（cm）	その他の法量（cm）	部位	形　　態	調　　整	含有物組　成	色　調	備　考
1	SM1001	I-3	埋土、表土	須恵器杯蓋	天井部～口縁部3/4	13.3	13.5			4.2		天井部～口縁	天井部は緩やかなカーブから口縁で屈曲して直立し、端部は丸みをもって整えられる。	外面：天井部ロクロケズリ。口縁部ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	長石	外面：青灰内面：灰	焼成良好。
2	SM1001		墳丘盛土	須恵器杯身	全体1/1	12.1	14.2			4.2		全体	体部外上方に立ち上がり、かえしは内傾し、端部を丸く収める。内面の屈曲は弱い。受け上部二重凹線を呈する。	外面：口縁部回転ナデ。底部回転ヘラケズリ。内面：回転ナデ。	石英・長石	外面：灰内面：灰	焼成良好。
3	SM1001	I・J-3	表土	須恵器壺	口縁～底部1/6			10.6	5.2	9.2 3.3		口縁～底部	底部平底。体部外上方へ立ち上がる。肩部内彎し、頸部外上方へ立ち上がる。口縁部で僅かに外反する。	外面：ロクロナデ。自然釉。内面：ロクロナデ。自然釉。	石英	外面：灰黄内面：黄灰	焼成良好。グレイみの黄緑の自然釉。
5	SM1001	J-3	表土	陶器焜炉ロストル	全体1/2					2.7		全体	非轆轤成形、板作り。円孔有り。	外面：ケズリ。内面：ケズリ。		外面：赤褐内面：赤	

ST（土器）

報告書掲載番号	遺　構	出土地点	層　位	器　種	残存率	口　径（cm）	体　部最大径（cm）	底　径（cm）	頸部（脚柱）径（cm）	器高・残存高（cm）	その他の法量（cm）	部位	形　　態	調　　整	含有物組　成	色　調	備　考
41	ST1001	L-4		須恵器高杯	口縁～底部1/4	12.6		10.8		11.7 4.7		口縁～底部	杯部外上方へ直線的に立ち上がり、口縁端部で僅かに外反し、端部を丸く収める。脚部は「八」の字状に開き、端部は上方に拡張している。脚部３ヶ所に長方形の透かしがある。	外面：口縁部櫛状工具による斜行文。ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	石英	外面：灰内面：灰	焼成良好。
42	ST1001	L-4	埋土（床面）	須恵器壺	体部不明					4.8		体部	体部上部内彎しながら立ち上がる。	外面：回転ヘラケズリ。内面：回転ナデのちナデ。回転ナデ。	石英	外面：黄灰内面：黄灰	
55	ST1002	C-4	覆土	須恵器杯蓋	天井部～口縁部1/7	13.6				4.2		天井部～口縁部	天井部は緩やかなカーブから口縁で屈曲して直立し、端部は肥厚し、丸みをもって整えられる。	外面：口縁部ロクロナデ。天井部回転ケズリ。内面：ロクロナデ。	長石・黒雲母・角閃石	外面：灰内面：灰白	焼成良好。
56	ST1002	C-4	埋土	須恵器杯蓋	完形1/1	16.4				4.6		完形	天井部は緩やかなカーブから口縁に至り、端部を丸く収める。	外面：天井部回転ヘラケズリ。ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	石英・長石	外面：灰内面：灰	焼成良好。内面に同心円文状の当て具痕有り。
57	ST1002	C-4	埋土	須恵器杯身	完形1/1	14.4	17.0			4.5		完形	かえしは内傾し、端部を丸く収める。内面の屈曲は弱い。底部が歪む。	外面：口縁部回転ナデ。底部回転ヘラケズリ。内面：回転ナデ。	長石	外面：青灰内面：青灰	焼成良好。
58	ST1002	C-4	覆土	須恵器甕	口縁部1/13	21.7	22.0			2.9		口縁部	口縁部やや外反し、端部を折り返し上下に拡張する。	外面：ロクロナデ。自然釉。内面：ロクロナデ。自然釉。	長石	外面：赤灰内面：赤灰	焼成良好。内外面にオリーブ黄の自然釉。
59	ST1002	C-4	表土	須恵器甕	口縁部1/8	16.9	17.6			3.3		口縁部	頸部から口縁にやや外反し、端部を外方へ拡張し、丸く収める。	外面：ナデ。内面：ナデ。	石英	外面：灰白内面：灰白	

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径(cm)	体部最大径(cm)	底径(cm)	頸部(脚柱)径(cm)	器高・残存高(cm)	その他の法量(cm)	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
60	ST1002	C-4	埋土	須恵器提瓶	完形 1/1	5.6	16.0			19.4	厚み 9.7	完形	扁平な球形の体部の側縁に口縁を付す。口縁部はやや外反しながら開き、端部を丸く収める。体部肩には吊手をもつ。	外面：口頸部ナデ。体部回転カキメ。把手ユビナデ。内面：ナデ。	長石	外面：灰 内面：灰白	焼成普通。環状の吊手TK 43段階(6C後半)。
61	ST1002	C-4	覆土	須恵器壺	口縁～体部 1/2	14.9	19.4		11.3	3.6 12.2		口縁～体部	体部はその上半に最大径をもち、肩部はやや張り出す。口縁部で緩やかに外反し、端部は外下方へ折れ曲がる。	外面：口縁ヨコナデ。頸部タテハケ（7条／cm）のちヨコハケ（16条／cm）。体部タタキのちヨコハケ（11条／cm）。底部ケズリ。内面：回転ロクロナデ。体部ヨコナデ。底部ユビオサエ。ナデ。	石英・長石・雲母	外面：褐灰・暗灰 内面：灰	焼成良好。
62	ST1002	C-4	覆土	須恵器甕	不明		23.0			14.2		体部	体部内彎している。	外面：タタキのちハケ。内面：同心円文。	石英	外面：黒褐 内面：灰褐	焼成良好。
63	ST1002	C-4	覆土	須恵器高杯	底部 1/2			10.2		4.2 3.9		底部	杯部内彎気味に立ち上がり、脚部外下方に拡がり、端部をやや丸く収める。	外面：ロクロナデ。自然釉。線刻4本。内面：ロクロナデ。	石英・長石	外面：褐灰 内面：灰	焼成良好。外面に黄灰の自然釉。
64	ST1003	H-3·4	覆土	須恵器杯蓋	天井部～口縁部 1/3	15.4	15.6			3.8		天井部～口縁部	天井部は緩やかなカーブから口縁で屈曲して直立し、端部は丸みをもって整えられる。	外面：天井部回転ヘラケズリ。口縁部ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	長石	外面：青灰 内面：青灰	焼成良好。
65	ST1003	H-3·4	覆土	須恵器杯身	口縁～体部 1/2	12.2	15.0			4.8		口縁～体部	口径に比してやや深い杯部に短いかえしをもつ。かえしは内傾し端部を尖り気味に収める。内面の屈曲は弱い。	外面：ロクロナデ。底部ケズリ。自然釉。内面：ロクロナデ。	長石	外面：灰 内面：灰	焼成良好。外面に暗オリーブの自然釉。
66	ST1003	H-3	覆土	須恵器壺	頸部 1/4				7.1	7.3		頸部	口頸部は体部より直線的に開き、体部は最大径に向かい、直線的に外下方へ開く。	外面：頸部回転ナデ。体部ナデ。凹線1条。タタキ。内面：頸部回転ナデのちナデ及びユビオサエ。体部回転ナデ。	石英・長石・雲母	外面：灰 内面：灰	焼成良好。
68	ST1004	M-5	埋土（床面上）	須恵器杯蓋	完形 1/1	14.8				4.3		完形	天井部は緩やかなカーブから口縁で僅かに直立し、端部は丸みをもって整えられる。	外面：天井部回転ヘラケズリ。ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	長石	外面：灰 内面：赤灰	焼成良好。
69	ST1004	M-5	埋土（床面上）	須恵器杯身	完形 1/1	13.6	15.7			4.3		完形	体部外上方に立ち上がり、かえしは内傾し、端部を丸く収める。内面の屈曲は弱い。	外面：口縁部ロクロナデ。底部回転ヘラケズリ。内面：ロクロナデ。	長石	外面：灰 内面：灰	焼成良好。

SU（土器）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径(cm)	体部最大径(cm)	底径(cm)	頸部(脚柱)径(cm)	器高・残存高(cm)	その他の法量(cm)	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
70	SU1002	L-6	表土	須恵器杯蓋	天井部～口縁部 2/3	14.3	14.4			4.3		天井部～口縁部	天井部は緩やかなカーブから口縁に至り、端部は尖り気味に収める。	外面：天井部回転ヘラケズリ。ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	長石	外面：灰黄 内面：黄灰	焼成良好。

包含層（土器）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径(cm)	体部最大径(cm)	底径(cm)	頸部(脚柱)径(cm)	器高・残存高(cm)	その他の法量(cm)	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
71		H-4	表土	須恵器杯蓋	天井部～口縁部 1/4	12.8	13.0			3.8		天井部～口縁部	天井部は緩やかなカーブから口縁に至り、端部は丸く収める。	外面：天井部回転ヘラケズリ。ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	長石	外面：青灰 内面：青灰	焼成良好。
72		K·L-4	包含層	須恵器杯蓋	天井部～口縁部 1/2	15.2	15.4			4.6		天上部～口縁部	天井部のカーブから直立する口縁部へとつながる。端部を丸く収める。	外面：天井部回転ヘラケズリ。ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	長石	外面：灰 内面：灰	焼成良好。
73		H-4	包含層	須恵器杯蓋	天井部～口縁部 1/9	14.8	15.0			3.7		天井部～口縁部	天井部は緩やかなカーブから口縁に至り、端部は丸みをもって整えられる。	外面：天井部回転ヘラケズリ。ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	長石	外面：青黒 内面：青灰	焼成良好。
74		D-4	包含層	須恵器杯蓋	天井部～口縁部 1/3	15.2	15.6			3.7		天井部～口縁部	天井部は緩やかなカーブから口縁で屈曲して直立し、端部は丸みをもって整えられる。	外面：ロクロナデ。天井部回転ヘラケズリ。内面：ロクロナデ。	長石	外面：青灰 内面：青灰	焼成良好。
75		H-3·4	表土	須恵器杯蓋	天井部～口縁部 1/3	14.7				3.7		天井部～口縁部	天井部は緩やかなカーブから口縁で屈曲して直立し、端部は丸みをもって整えられる。	外面：ロクロナデ。天井部回転ヘラケズリ。内面：ロクロナデ。	長石	外面：青灰 内面：灰	焼成良好。天井部外面に「丨」字のヘラ記号。
76		H-3 J-4	包含層	須恵器杯蓋	体部～口縁部 1/6	13.1				3.9		体部～口縁部	天井部は緩やかなカーブから口縁で屈曲して直立し、端部は丸みをもって整えられる。	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	石英・長石	外面：灰 内面：灰	焼成良好。
77		K-5	表土	須恵器杯蓋	体部～口縁部 1/8	11.8				4.7		体部～口縁部	天井部のカーブから屈曲して直線的に口縁端部に至り、端部を尖り気味に収める。	外面：天井部回転ヘラケズリ。ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	長石	外面：青灰 内面：青灰	焼成良好。
78		K·L-5	表土、包含層	須恵器杯蓋	体部～口縁部 1/4	14.3	14.6			1.8		体部～口縁部	扁平な器形で、端部下方に拡張し丸く収める。	外面：ロクロナデ。自然釉。内面：ロクロナデ。自然釉。	長石	外面：青灰 内面：灰	焼成良好。内外面に自然釉。
79		L-5·6	表土、包含層	須恵器杯身	口縁～底部 2/3	13.3	15.0	0.5		4.8		口縁～底部	体部外上方へ立ち上がり、かえしはやや内傾し、端部を丸く収める。内面の屈曲は弱い。	外面：回転ヘラケズリ。内面：ロクロナデ。	長石	外面：灰 内面：灰	焼成良好。

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径(cm)	体部最大径(cm)	底径(cm)	頸部(脚柱)径(cm)	器高・残存高(cm)	その他の法量(cm)	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
80		H-4	表土	須恵器杯身	口縁～体部1/3	13.4	15.0			3.6		口縁～体部	浅い皿形の体部に内傾する短いかえしをもつ。かえしは基部が太く、先端ほど尖っている。	外面：ロクロナデ。体部回転ヘラケズリ。内面：ロクロナデ。	石英・長石	外面：青灰 内面：青灰	焼成良好。
81		H-3	包含層	須恵器杯身	口縁～体部1/3	10.8	13.3			4.6		口縁～体部	口径に比して、やや深い杯部に内傾するかえしが付く。内面の屈曲は強い。	外面：ロクロナデ。底部ヘラケズリ。内面：ロクロナデ。	長石	外面：灰 内面：灰	焼成良好。
82		L-4	包含層	須恵器杯身	口縁～体部1/4	14.8	16.6			4.1		口縁～体部	浅い皿形の体部にほぼ直立する薄いかえしをもつ。内面の屈曲は弱い。	外面：ロクロケズリ。内面：ロクロケズリ。	石英	外面：青灰 内面：灰	焼成良好。（6c末）。
83		B·C-4	包含層	須恵器杯身	口縁～体部1/2	14.6	17.2			5.1		口縁～体部	体部外上方へ立ち上がり、かえしは内傾し、端部を丸く収める。内面の屈曲は弱い。	外面：回転ヘラケズリ。ナデ。内面：ナデ。	石英・長石	外面：灰白 内面：灰白	焼成良好。
84		K-5·6 L-5	表土 包含層	須恵器杯身	口縁～底部1/2		15.8			3.4		口縁～底部	浅い皿形の器形に、受け部の端部は丸く収める。かえしは故意に打ち欠いた可能性有り。	外面：口縁部ロクロナデ。底部回転ヘラケズリ。内面：ロクロナデ。	石英・長石・結晶片岩	外面：灰 内面：灰	焼成良好。
85		J-5	表土	須恵器杯	口縁～底部1/4	13.4	13.6	9.0		4.45	高台高0.5	口縁～底部	体部外上方へ立ち上がり口縁端部を丸く収める。貼り付け高台は断面逆台形を呈する。	外面：ロクロナデ。体部下ケズリ。底部ナデ。内面：ロクロナデ。	石英・長石	外面：灰白 内面：灰白	焼成不良。
86		D·H-3 F·I·J-4		須恵器壺	全体3/4	8.6	14.7	7.0	8.8	8.2		口縁～底部	扁平な球形の体部から短い口縁部が上方へ延びる。端部は丸く収める。	外面：ロクロナデ。底部回転ヘラケズリ。自然釉。内面：ロクロナデ。	石英	外面：黄灰 内面：灰	焼成良好。外面に自然釉。
87		H-4	包含層	須恵器高杯	脚部1/6			12.9		2.4		脚部	「八」の字状に開き、端部が上下に僅かに拡張する。	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	長石	外面：青灰 内面：青灰	焼成良好。
88		C-3 D·H-4 K-6	包含層	須恵器平瓶	体部1/2		16.0			8.0		体部	扁平な球形の体部で最大径は中位にもつ。肩から口縁部は欠損している。	外面：ハケ。底部回転ヘラケズリのちハケ。内面：ヨコナデ。	石英・長石	外面：灰 内面：灰	焼成良好。接合痕2ヶ所有り。
89		H-4	包含層	須恵器瓶口	口縁～頸部1/3	5.2			4.6	3.5		口縁～頸部	欠損している体部に外側へ直線的に開く口縁部がつく。端部は丸く収める。	外面：ロクロナデ。自然釉。内面：ロクロナデ。自然釉。	長石	外面：灰白 内面：灰白	焼成良好。内外面に暗オリーブの自然釉。
90		H-3·4	包含層	須恵器瓶口	口縁部1/2	7.4				4.6		口縁部	口頸部は外反し上方へ延び、端部は肥厚し丸く収める。	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	長石	外面：青灰 内面：青灰	焼成良好。
91		H-3	包含層	須恵器甕	口縁～頸部1/8	17.6	18.8		15.6	4.0		口縁～頸部	頸部で屈曲し、口縁部は外上方へ僅かに外反する。端部は外面に肥厚し、丸く収める。	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	長石	外面：オリーブ灰 内面：オリーブ灰	焼成良好。
92		H-3	表土	須恵器甕	口縁部1/8	18.6			16.2	4.9		口縁～頸部	口縁部外反し、端部は肥厚し丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ。頸部ヨコナデ。内面：ヨコナデ。	石英・長石	外面：灰 内面：灰	焼成良好。接合痕有り。
93		F·L-4	表土 包含層	須恵器壺	底部1/6			7.7		3.25	高台高0.35	底部	体部内彎しながら上方に延びる。貼り付け高台で断面方形を呈する。	外面：ロクロナデ。底部ケズリ。内面：ロクロナデ。	長石	外面：青灰 内面：青灰	焼成良好。接合痕有り。
94		L-5	包含層	須恵器壺	底部1/10			9.2		4.2	高台高0.7	底部	体部内彎しながら外上方に延びる。貼り付け高台で「ハ」の字に開き、断面逆台形を呈する。	外面：体部回転ヘラケズリ。底部ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	長石	外面：青灰 内面：明青灰	焼成良好。
97		G-5	表土 包含層	弥生土器甕	口縁部1/6	12.3			11.9	4.3		口縁～体部	口縁部僅かに外反し端部を四角く収める。	外面：ヨコナデ。摩滅のため調整不明。内面：摩滅のため調整不明。	石英・長石・雲母・黒色斑粒	外面：にぶい黄橙 内面：明黄褐	
98		K-4	表土	弥生土器壺	底部1/1			7.1		3.6		底部	凹底。体部外上方に延びる。	外面：摩滅のため調整不明。内面：摩滅のため調整不明。	石英・長石・結晶片岩	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	

SM（石器）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	石材	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他の法量(cm)	残存率	部位	備考
4	SM1001	I·J-3	墳丘盛土	サヌカイト	打製石鏃	3.7	2.1	0.5	2.95		1/1		凹基。

ST（石器）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	石材	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他の法量(cm)	残存率	部位	備考
67	ST1003	H-3·4	墳丘盛土	サヌカイト	打製石鏃	2.6	1.4	0.4	1.3		1/1		平基三角。

包含層（石器）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	石材	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他の法量(cm)	残存率	部位	備考
99		C-3	包含層	サヌカイト	スクレイパー	3.5	8.1	1.1	24.8		4/5		横長剥片。凸刃。単刃。
100		H-3	包含層	サヌカイト	楔形石器	2.35	3.25	0.9	6.89		1/1		自然面残存。

SM（玉類）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	材質	器種	長径(mm)	短径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	孔径(mm)	その他の法量(cm)	残存率	備考
6	SM1001	I·J-3		硝子	臼玉	6.9	6.0	5.0	0.34	1.5		1/1	くらい青。
7	SM1001	I·J-3		硝子	臼玉	6.5	5.4	4.0	0.17	2.3		1/1	こい青。
8	SM1001	I·J-3		硝子	臼玉	3.8	3.6	2.1	0.05	1.3		1/1	こい青。
9	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	4.9	4.4	2.2	0.08	1.5		1/1	くらい青。
10	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	3.5	3.4	2.0	0.02	1.2		1/1	つよい青。
11	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	3.8	3.0	3.0	0.04	1.0		1/1	こい青。

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	材質	器種	長径（mm）	短径（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	孔径（mm）	その他の法量（cm）	残存率	備考
12	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	4.6	4.2	3.0	0.09	1.2		1/1	こい青。
13	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	4.4	3.6	3.6	0.09	1.3		1/1	くらい緑みの青。
14	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	3.3	3.2	2.5	0.03	1.0		1/1	こい青。
15	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	4.6	4.4	3.5	0.08	1.5		1/1	こい青。
16	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	3.7	3.6	2.0	0.03	1.1		1/1	つよい青。
17	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	3.3	3.0	3.0	0.04	1.5		1/1	つよい青。
18	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	3.8	3.4	2.6	0.05	1.5		1/1	つよい青。
19	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	3.7	3.6	2.1	0.04	1.0		1/1	こい青。
20	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	4.6	4.4	2.9	0.07	1.5		1/1	こい青。
21	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	3.6	3.2	3.0	0.03	1.1		1/1	つよい青。
22	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	4.6	4.2	3.0	0.08	1.3		1/1	こい青。
23	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	3.4	3.2	3.1	0.04	1.5		1/1	こい青。
24	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	3.6	3.4	3.1	0.04	1.3		1/1	つよい青。
25	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	3.6	3.4	2.3	0.04	1.1		1/1	くらい青。
26	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	3.6	3.0	3.0	0.04	1.1		1/1	くらい青。
27	SM1001	I·J-3	床面石敷	硝子	小玉	4.2	4.2	2.3	0.06	1.8		1/1	緑みの青。
28	SM1001	I·J-3	床面石敷	硝子	小玉	3.7	3.0	3.2	0.07	0.8		1/1	青。
29	SM1001	I·J-3	床面石敷	硝子	小玉	3.4	3.0	2.3	0.04	1.2		1/1	青。
30	SM1001	I·J-3	床面石敷	硝子	小玉	3.5	3.2	1.8	0.03	1.1		1/1	青。
31	SM1001	I·J-3	床面石敷	硝子	小玉	3.4	3.2	2.5	0.05	1.1		1/1	青。
32	SM1001	I·J-3	床面石敷	硝子	小玉	3.7	3.6	2.4	0.05	1.3		1/1	青。
33	SM1001	I·J-3	床面石敷	硝子	小玉	3.5	3.2	2.0	0.04	1.1		1/1	青。
34	SM1001	I·J-3	床面石敷	硝子	小玉	3.4	3.2	1.7	0.03	1.2		1/1	青。
35	SM1001	I·J-3	床面石敷	硝子	小玉	3.6	3.4	2.6	0.05	0.9		1/1	青。
36	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	3.6	3.4	3.1	0.04	1.0		1/1	くらい青。
37	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	3.5	3.2	3.0	0.04	1.1		1/1	くらい青。
38	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	3.5	3.3	2.9	0.04	1.1		1/1	くらい青。
39	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	3.4	3.0	1.2	0.03	1.3		1/1	くらい青。
40	SM1001	I·J-3		硝子	小玉	3.6	3.3	1.8	0.02	1.3		1/1	くらい青。

ST（鉄器）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	その他の法量（cm）	残存率	部位	備考
43	ST1002	C-4		鉄刀（大刀）	刃部45.8 柄30.2	刃部3.2 柄2.4	刃部0.7 柄0.75	542.3		1/1		
44	ST1002	C-4		鉄刀（短刀）	28.25	刃部2.2 柄3.0	刃部0.65 柄2.6	166.1		1/1		
45	ST1002	C-4		刀（短刀）	15.4	1.7	0.5	26.8		9/10		
46	ST1002	C-4	床面石敷	鉄鏃	11.3	2.2	0.35	12.6		1/1		
47	ST1002	C-4		鉄鏃	6.7	2.7	0.6	9.8		4/5		
48	ST1002	C-4	床面石敷	鉄鏃	8.4	2.5	0.4	13.4		4/5		
49	ST1002	C-4		鉄鏃	5.7	2.3	0.3	11.3		3/5	鏃身	
50	ST1002	C-4	床面石敷	鉄鏃	4.3	2.2	0.35	7.1		3/5	鏃身	茎部一部残る。
51	ST1002	C-4		刀子	8.2	1.3	0.6	9.1		3/5		
52	ST1002	C-4	床面石敷	刀子	6.6	1.2	0.9	10.4		1/2	刃部	
53	ST1002	C-4	床面石敷	刀子	4.4	0.8	0.4	4.5		3/5	柄部	
54	ST1002	C-4	床面石敷	刀子	2.4	0.9	0.4	2.6		1/3	柄部	

包含層（埴輪）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	法量（cm）	形態の特徴	成形・調整	胎土	色調	備考
95		L-7	包含層	円筒埴輪	器高4.0 胴径28.0 厚さ1.0	タガの断面形はM形状。	外面：ナデ。タガに凹線を施す。 内面：ナデ。	粗、石英・雲母・赤色斑粒0.1～3㎜	浅黄橙	焼成軟質。
96		K-7	包含層	形象埴輪	縦6.9 横10.4 厚さ1.3		外面：ナデ。 内面：ナデ。	精、石英・雲母・赤色斑粒0.1～2.5㎜	浅黄橙	やや軟質。

XⅧ　西山谷古墳群

例　言

1　本章は四国横断自動車道建設に伴う西山谷古墳群の発掘調査報告書である。

2　所在地　鳴門市大麻町大谷字西山谷15-2他

調査対象面積　4,235㎡

試掘面積　210㎡

本調査面積　3,530㎡

3　発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次の通りである。

発掘調査期間	平成10年７月１日～平成11年２月28日	210㎡（試掘）	2,120㎡（本掘）
	平成12年３月１日～平成12年３月31日		240㎡（本掘）
	平成12年４月１日～平成12年６月30日		960㎡（本掘）
報告書作成期間	平成15年４月１日～平成16年３月31日		

4　遺物番号・挿図番号・図版番号は通し番号とした。遺物番号は本文・挿図・表・図版と一致する。

5　本遺跡の地理的・歴史的環境については、「Ⅱ　調査地点の立地と環境」を参照されたい。

6　SM1003・ST1001・ST1004の遺構およびST1002・1004の出土鉄器の一部は栗林誠治が、まとめ「出土土器について」の項は田川　憲が執筆した。また石室の移設・保存と公開についての報文は湯浅利彦が執筆した。

1　調査の経過

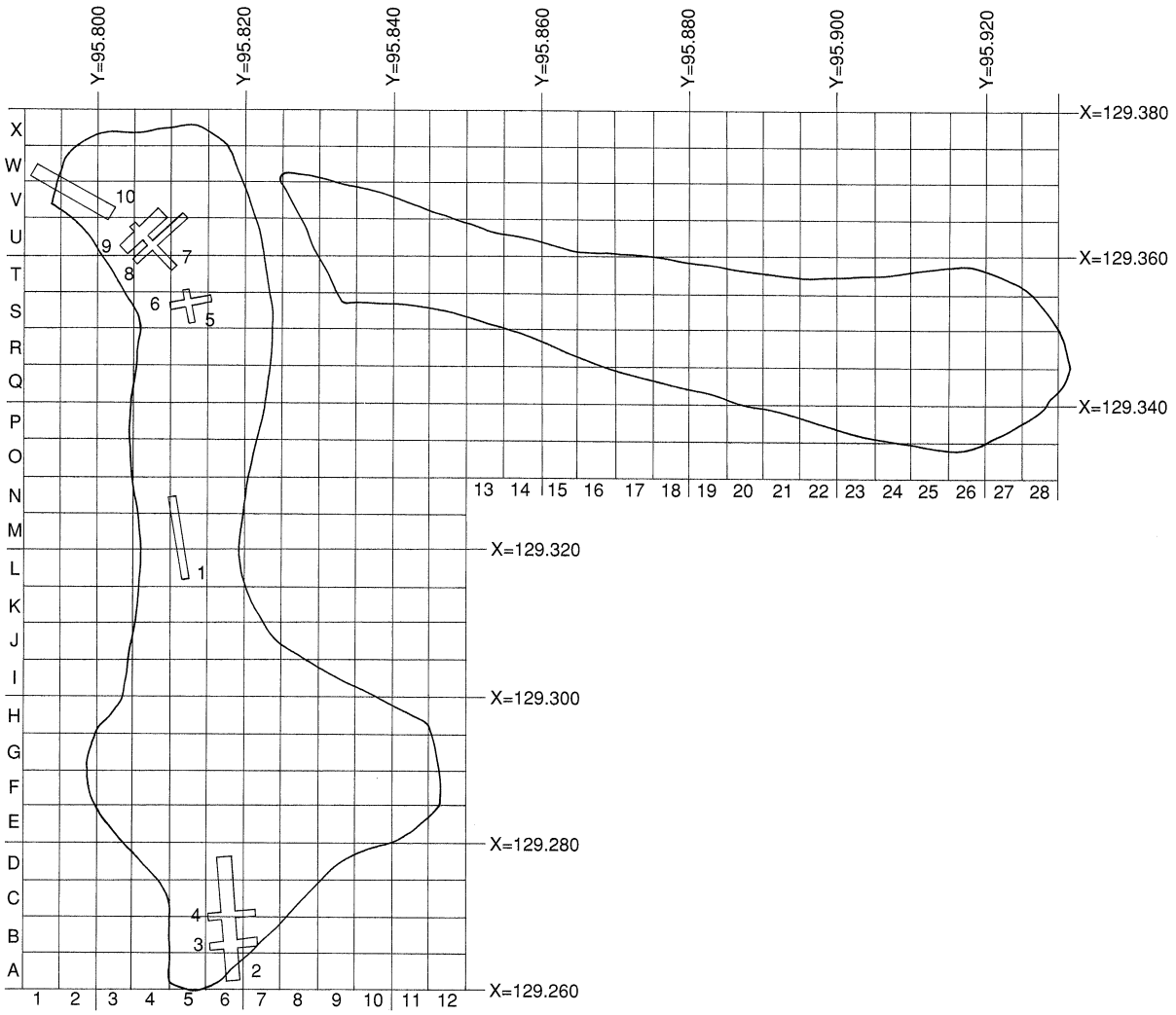
（1）調査の経過（Ⅰ-第1図およびⅡ-第1・5・19図）

西山谷古墳群は阿讃山脈南麓、鳴門市大麻町大谷の標高54～84mの二股に分かれた尾根上に所在する。この地域は宮谷古墳（前方後円墳）の所在する徳島市国府町の気延山周辺と並び、周辺一帯には多数の古墳群が密集する地域として周知され、以前から古墳群の存在が指摘されていた。事前の分布調査の際にも阿讃山脈から張り出す尾根上に古墳の存在する可能性が高まった。したがって四国横断自動車道建設に伴い、分布調査で推定された遺跡の範囲の内4,235m²を調査対象面積として試掘調査を実施した。

調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘調査は平成10年7月1日～7月31日にかけて人力掘削によるトレンチを210m²実施した。その結果、東西二股に分かれた東尾根・西尾根調査区において竪穴式石室など計6基の古墳を確認したため、3,320m²の範囲を対象に本調査へ移行した。平成10年7月～平成12年6月にかけて、（財）徳島県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。本調査は平成12年6月30日に終了し、なお2号墳の竪穴式石室は徳島県立埋蔵文化財総合センター敷地内に移設・整備保存されている。

（2）発掘調査の方法（第1図）

調査を始めるにあたり、グリッドの配置に際しては、発掘統一基準にならい、第Ⅳ系国土座標を基準とし、5mメッシュを1グリッドとして調査対象地を包み込む形で設定した。南西隅を基準として北にA・B・C…、東に1・2・3…の順に記号・番号をふり、その組み合わせで各グリッド名を表すこととした。遺構記号・番号は検出時に順次決定した。



第１図　グリッド・トレンチ配置図

（3）調査日誌抄

1998年

7月1日　調査準備。物品搬入。試掘調査開始。

7月3日　基準杭打設終了。週明けより地形測量開始予定。

7月6日　調査前現況写真撮影。調査地点平板地形測量（S＝1/200）西側尾根より開始。

7月13日　調査準備および試掘トレンチ設定。2号墳墳丘掘削前現況写真撮影。

7月15日　西側尾根平板地形測量終了引き続き東側尾根地形測量開始。2号墳試掘トレンチ設定。掘削開始。円墳もしくは前方後円墳の可能性あり。

7月17日　2号墳石室部分表土除去。結晶片岩礫および石室の石組みを確認。

7月21日　2号墳墳丘および石室掘り下げ。墳丘部分に葺石および盛土は見られない。東側尾根平板地形測量終了。

7月22日　東側尾根試掘トレンチ設定。試掘開始。

7月27日　2号墳石室墓壙掘り形確認。前方部はなく墳丘形態は円墳と判明。周壕などもみられない。

7月31日　試掘調査終了。西側尾根で1基。東側尾根で5基の古墳・竪穴式石室などを確認。

8月3日　試掘結果をうけて、調査区を確定。調査対象面積4,235㎡のうち3,320㎡を本調査へ移行。調査区表土人力掘削開始。写真撮影用足場設営打ち合わせ。

8月5日　東側尾根東端で箱式石棺と思われていた遺構が石蓋土壙墓であることが判明。写真足場設営。

8月11日　石蓋土壙墓検出状況写真撮影。2号墳、2号竪穴式石室墓掘り下げ。

8月12日～14日　現場盆休。

8月17日　協議事項発生のため午前中で作業を切り上げる。

8月18日

〃　協議事項解決まで現場作業一時中断。

9月3日

9月4日　現場作業再開。

9月10日　2号墳、1号石蓋土壙墓および1・2・3号竪穴式石室墓掘り下げ。竪穴式石室墓はいずれも墳丘が明瞭でなく、主体部も基底部が一部残存する程度。

9月16日　2号竪穴式石室墓床面より鉄剣出土。

9月21日　台風8号接近。台風対策。現場養生。

9月22日　台風8号接近。

9月29日　2号竪穴式石室墓掘り下げ。粘土棺床検出。副葬品（鉄剣・鉄鏃など）出土。

10月5日　2号墳、1号石蓋土壙墓および1・2・3号竪穴式石室墓掘り下げ。1号石蓋土壙墓蓋石除去。

10月6日　1号石蓋土壙墓床面より鉄剣・鉄鏃出土。鉄鏃は柳葉形鏃で束になって出土。

10月9日　2号墳主体部全景写真撮影。

10月12日　1号石蓋土壙墓、3・4号竪穴式石室墓主体部全景写真撮影。

10月15日　2号墳主体部（S＝1/10）平面図実測作業開始。1号石蓋土壙墓副葬品出土状況平面図実測および写真撮影。

10月16日　台風10号接近。現場台風対策。空撮図化打ち合わせ（（株）国際航業）。

10月20日　1号石蓋土壙墓出土遺物取り上げ。鉄剣1、鉄鏃17。

10月22日　2号墳および1・2・3号竪穴式石室墓実測図化作業。

10月28日　1・2・3号竪穴式石室墓断ち割りおよび写真撮影。

11月6日　2号墳石室平面図終了。石室積石面出しおよび断面ベルト設定。

11月9日　2号墳石室内掘り下げ。

11月13日　2号墳石室床面直上まで掘り下げ。朱

混じり粘質土および鉄片等出土。

11月18日　２号墳竪穴式石室内ベルト除去。石室床面精査。

11月19日　２号墳竪穴式石室内木棺痕跡平面プラン検出。写真撮影。鉄剣・鉄鏃等出土。

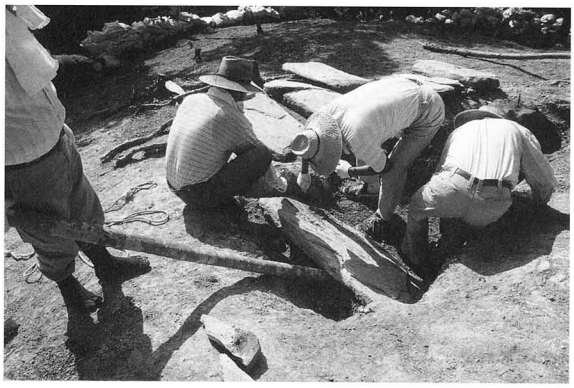
11月20日　２号墳竪穴式石室床面（粘土棺床）精査および木棺痕跡部分掘り下げ。棺床中央部、やや北小口よりの部分で青銅鏡出土。検出時状況写真撮影。

11月24日　２号墳竪穴式石室床面（粘土棺床）精査および木棺痕跡部分掘り下げ。棺床土層断面ベルト実測および写真撮影終了。

11月26日　２号墳竪穴式石室副葬品出土状況写真撮影。副葬品出土状況平面図(S＝1/2)実測開始。

11月30日　２号墳竪穴式石室粘土棺床精査。副葬品出土状況および竪穴式石室出土状況全景写真撮影。

12月２日　２号墳竪穴式石室平面図(S＝1/10)実測作業開始。



12月３日　２号墳竪穴式石室副葬品取り上げ開始。空撮打ち合わせ。空撮予定12/8に設定。

12月８日　２号墳竪穴式石室空撮。

12月10日　２号墳竪穴式石室粘土棺床平面図(S＝1/10)実測作業開始。

12月11日　２号墳墳丘形状再確認トレンチ掘削。前方部は確認できず、円墳であることを確認。

12月21日　２号墳主体部全景写真撮影。

12月24日　２号墳竪穴式石室立面図（S＝1/10）実測。

12月27日　現場養生。年内現場作業終了。

12月28日　仕事納め。

1999年

１月４日　仕事始め。

１月５日　２号墳石室立面図作成（S＝1/10）。

１月18日　２号墳石室見通し断面図作成（S＝1/10）。

１月20日　２号墳墓壙掘り下げ。

１月22日　２号墳墓壙土層断面（S＝1/10）。

１月25日　２号墳墓壙土層断面写真撮影。

１月26日　２号墳主体部平面図作成（S＝1/10）。

１月29日　現場報告会。

２月１日　２号墳主体部平面図作成。

２月４日　２号墳主体部空撮準備。

２月８日　２号墳主体部写真撮影。

２月９日　２号墳主体部第２回空撮(国際航業)。

２月10日　２号墳主体部写真撮影。

２月15日　発掘調査一時休止のため２号墳石室土嚢養生を行う。物品搬出。現場撤収。

２月17日　取りまとめ作業。

2000年

３月１日　発掘調査再開。３号墳地形平板測量。

３月２日　３号墳掘削。断面図作成(エレベーション)。

3月3日　3号墳掘削状況写真（平面全体写真）ベルトはずし（掘削）精査作業。3号墳清掃作業。3号墳掘り下げ。

3月6日　3号墳掘り下げ。3号墳清掃。3号墳遺構断面図作成。

3月7日　3号墳遺構平面図作成。1/10掘り下げ。3号墳清掃。3壕墳清掃（鉄剣破片）。

3月8日　3号墳掘り下げ。3号墳清掃。

3月9日　3号墳掘り下げ。遺構平面図作成。遺構断面図作成。遺構レベル。3号墳清掃。

3月10日　3号墳掘り下げ。積石取り上げ。

3月13日　3号墳平面図作成（エレベーション）。鉄剣検出。

3月14日　3号墳（秋葉神社）遺構平面図作成および鉄剣取り上げ。

3月15日　空撮（調査区西側全景、3号墳全景）。

3月17日　2号墳養生シート修正作業（風雨対策）。

3月21日　表土掘削。遺構平面図作成（2号墳）。

3月22日　表土掘削。遺構平面図作成（2号墳）。石室壁面図作成（2号墳）。

3月23日　遺構断面図作成S＝1/10（2号墳）。

3月24日　取りまとめ作業。

3月27日　2号墳壁面図作成（東面、西面）積石平面レベル測定。

3月28日　取りまとめ作業。

2000年

4月13日　1号墳竪穴式石室墓断ち割り。写真撮影。

4月14日　1号墳竪穴式石室墓平面図作成。写真撮影。断ち割り断面図作成。

4月17日　東尾根遺構完掘状況全景写真撮影。

4月18日　西山谷古墳群プレス発表（現地にて）。

4月19日　2号墳主体部積石レベル測定。

4月20日　現地説明会準備。

4月21日　2号墳主体部積石レベル測定。

4月22日　現地説明会（870名来場）。

4月23日　2号墳竪穴式石室移築準備作業にかかる。

4月24日　2号・3号墳竪穴式石室墓（断ち割り断面S＝1/10および断面図撮影）。2号墳主体部南側積石レベル測定。

4月25日　2号墳メッシュ設定。主体部南側積石レベル測定。東尾根古墳群1号墳竪穴式石室墓粘土床堀り下げ。

4月26日　図面整理。

4月27日　2号墳主体部積石メッシュおよび積石に識別No.を付け取り上げ。順次、作業繰り返す。北東側石室の控え積みの石を一部検出。積石取り上げメッシュごとに写真撮影。

5月1日　2号墳北小口裏込め状況写真撮影。2号墳墓壙北西隅写真撮影。

5月2日　2号墳石室北側積石除去および墓壙断面写真撮影。平・断面図作成。

5月8日　2号墳積石主体部石除去作業および北側・南側平面図作成。

5月9日　2号墳主体部北側積石取り上げ作業。南側平面図作成。

5月10日　2号墳墓壙積石取り上げ作業および平面図作成。

5月12日　2号墳墓壙積石取り上げ作業および平・断面図作成。墓壙積石検出状況写真撮影。

5月15日　2号墳墓壙積石取り上げ作業。南側墓壙断面図作成。

5月16日　2号墳墓壙南東部積石取り上げ作業。平・断面実測。

5月18日　2号墳墓壙南東部積石取り上げ作業および平・断面図作成。墓壙積石検出状況写真撮影。

5月22日　2号墳墓壙積石取り上げ作業。平面図作成。写真撮影。

5月23日　2号墳積石除去後平面図作成。墓壙積

石除去後全景写真撮影。

5月24日　2号墳積石除去後石室空撮（ブーム撮影）。

5月25日　2号墳積石除去後および石室北小口写真撮影。平面図作成。石室分割部分西壁の石の取り上げ。

5月26日　2号墳北小口断ち割り断面図および北小口平面図作製。石室分割部分西壁平面図作成。

5月29日　2号墳石室断ち割り。断面図作成（立案図）。

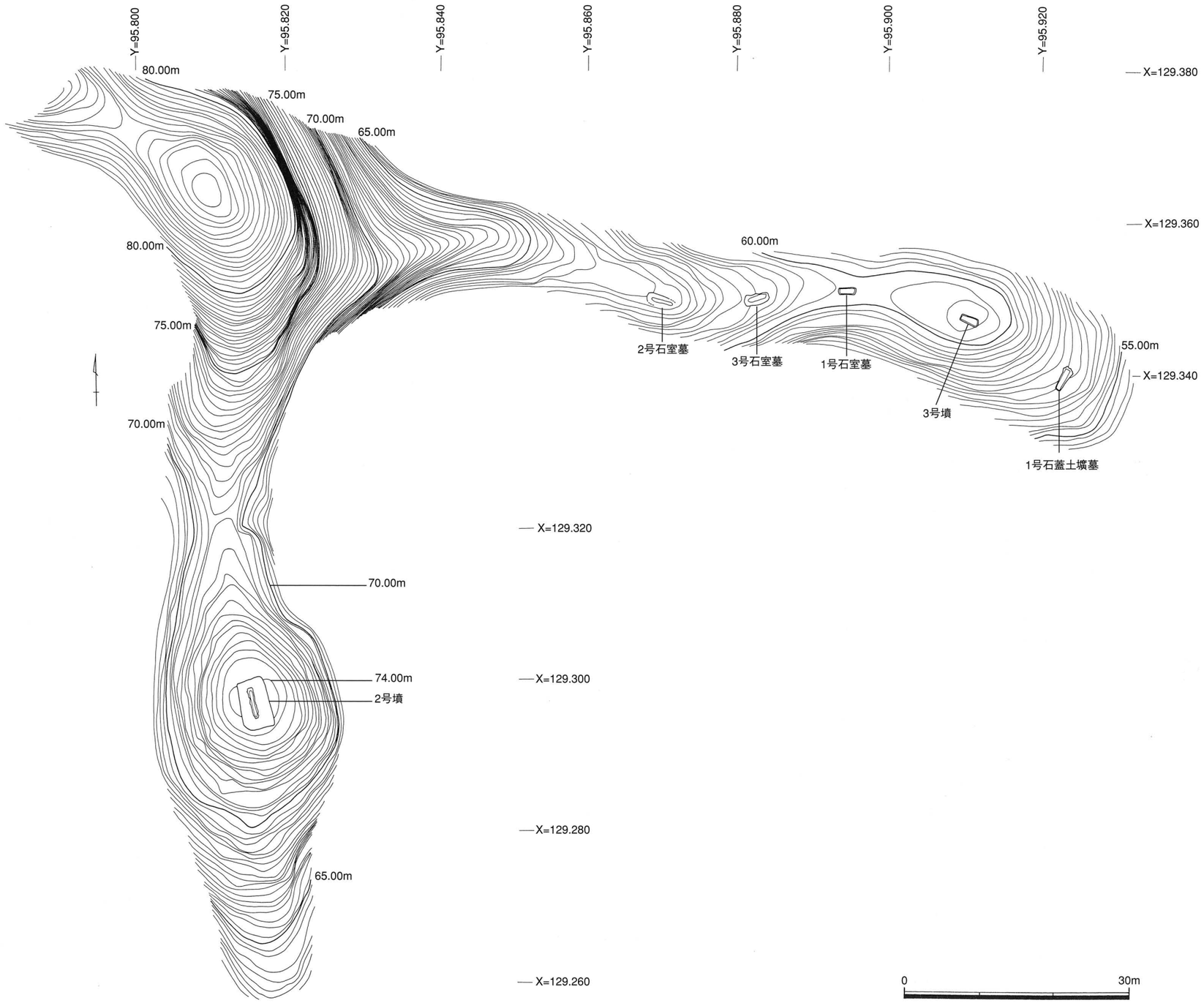
5月30日　2号墳石室（墓壙）北小口断ち割り。東西石室断ち割り写真撮影。

5月31日　2号墳石室写真整理。図面整理。

6月1日　2号墳墓壙北小口掘り下げ。写真撮影。断面図作成。粘土棺床断ち割り（3ヵ所設定）。

6月2日　2号墳墓壙南小口断ち割り。石室南小口裏込め状況写真撮影。石室粘土棺床断ち割り。断面写真撮影。

6月5日　2号墳石室粘土棺床土層断面図作成。現場調査終了。取りまとめ作業。



第２図　地形平面・遺構配置図

2　調査成果

（1）遺跡の概要（第2図）

西山谷古墳群は四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査により存在が確認された。西山谷古墳群は鳴門市大麻町に所在する。調査地点は阿讃山脈南麓、大谷川右岸の標高54～84mの二股に分かれた尾根上に位置する。発掘調査の結果、東側尾根で5基、西側尾根で1基の古墳を確認した。特に西側尾根で確認された2号墳は、調査の結果、時期的に3世紀中頃の築造と考えられ、副葬遺物の内容も含め、全国的に最古級の竪穴式石室をもつ古墳として注目された。

人類学・考古学者の鳥居龍蔵は鳴門市大麻町大谷周辺を調査し、その結果を1888年（明治21年）『東京人類学会雑誌』第3巻第24号に「阿波國板野郡大谷村塚穴」として報告している。ここに記載された「西山谷の塚穴」は竪穴式石室で、記述の位置関係から西山谷2号墳に該当するものとみられるが、報文に記された天井石は確認できず、検討の余地を残している。なお、全国遺跡地図（徳島県）文化庁刊（1980年）では、1・2号墳が記載されているが、1号墳は消滅の旨が記されている。

（2）基本層序（第3図）

土層堆積状況はトレンチによって微差はあるが、基本的に1．腐植土　2．岩盤風化砂礫土(包含層・遺構面)　3．地山（和泉層群系岩盤風化層・岩盤。地山。）であり、基本層序は以下の通り調査区全域でほぼ対応する。

1．…黒褐色　7.5Y2/2　砂質土（表土、腐葉土。）

2．…黄橙色　10YR7/8　砂質土（和泉層群の砂質泥岩風化礫を含む風化層。）

3．…明黄褐色　10YR6/6　砂質土（和泉層群の砂質泥岩風化層・岩盤。地山。）

（3）遺構と遺物（第2図）

1．古墳群の構成

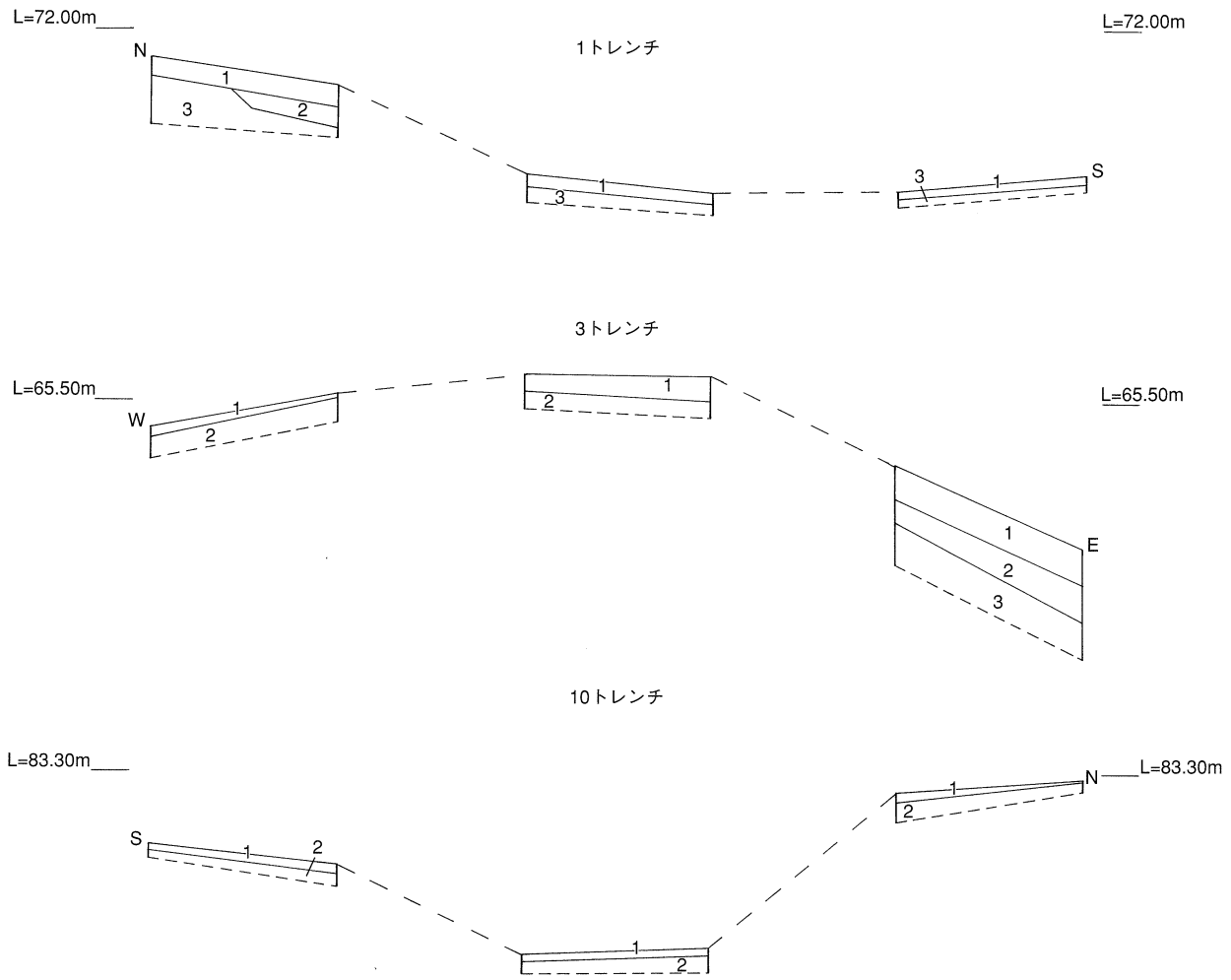
西山谷古墳群は鳴門市大麻町に所在する。調査地点は阿讃山脈南麓、大谷川右岸の標高54～84mの二股に分かれた尾根上に位置する。周辺の尾根上には多くの古墳が存在している。発掘調査の結果、東側尾根で5基、西側尾根で1基の古墳を確認した。

東側尾根調査区で出土した古墳群は3号墳を除き、尾根をわずかに整形したもので明確な墳丘はない。時期的には古墳時代前期末～中期初頭に収まるものと考えられる。なお1号墳は消滅しているため、古墳の呼称は2号墳からはじめた。

2．東尾根の古墳群

SM1003（3号墳）（第4・5図）

調査区東側の東西に延びる尾根の東部に位置する円墳である。墳丘は地山を削り出して整形しており、規模は直径約15m、墳頂部は削平を受け、現存で高さ2mを測る。主体部は箱式石棺で規模は現存で長軸2.43m、短軸0.98m、深さ0.1mを測るが、遺存状態は良好でない。主軸方向は東西で、N-75°-Wを向く。石材には20cm程度の結晶片岩の板石を用い、内側には朱の付着がみられた。基底部には粘土床



1．　黒褐色　10YR2/3　砂質土（腐葉土・表土）
2．　黄橙色　10YR7/8　砂質土（粘性やや強い。岩盤風化土。ϕ=3cm 前後の砂質泥岩の角礫を含む。地山。）
3．　明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性やや強い。和泉層群の砂質泥岩風化土。ϕ=20cm 前後の砂質泥岩の角礫を含む。）

0　1m

第3図　基本土層図

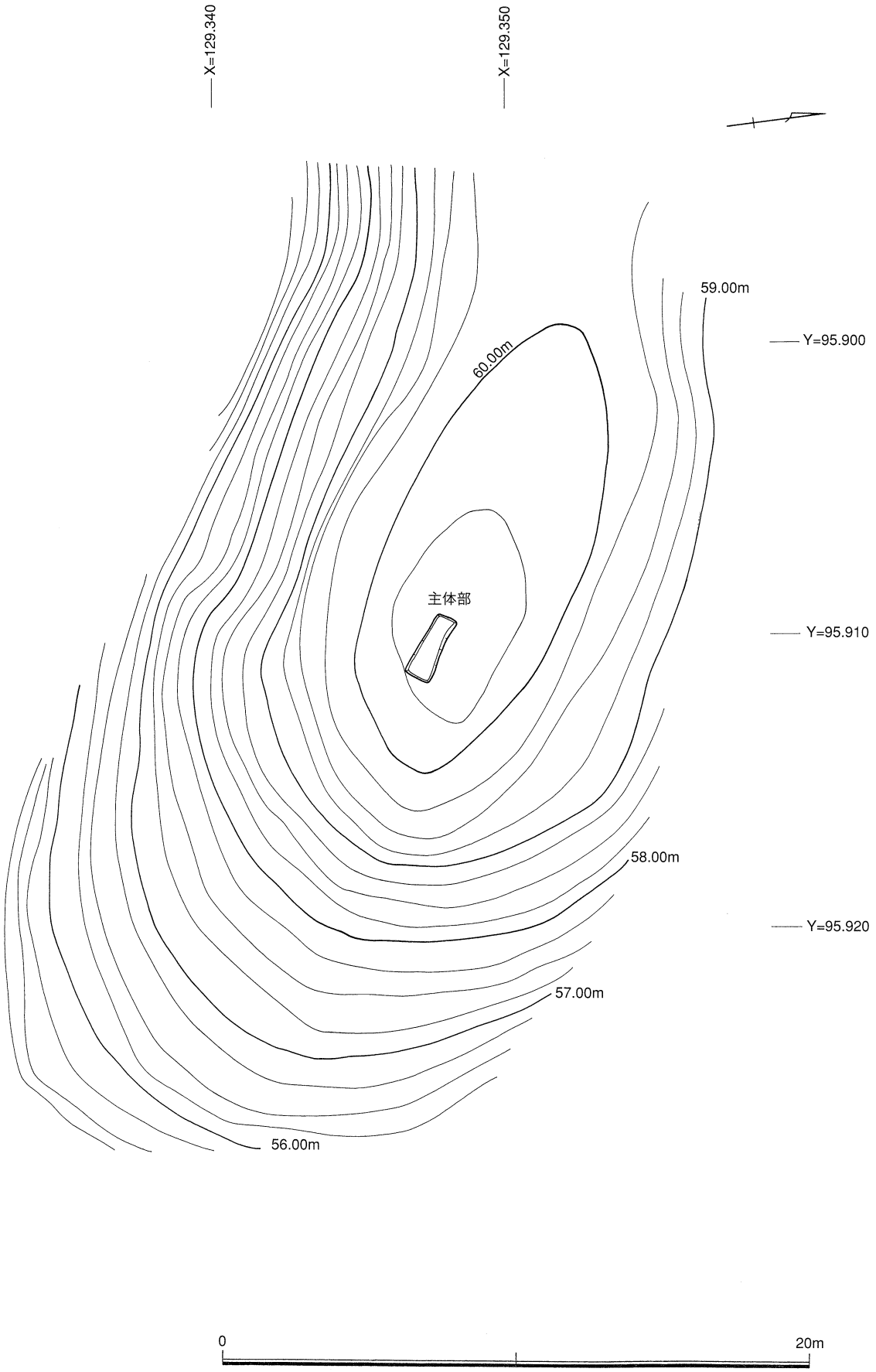
が一部残存する。頭位については、石室形状の東北側の幅がやや広いことや遺物の出土状況から東頭位であったと考えられる。

箱式石棺使用石材は、岩中節理が縦方向と推定される結晶片岩（S類割石型）である。長側壁構造は、残存する石材や墓壙基底部に残された痕跡からすると側複型と推定されよう。小口構造は小単型である。床面構造は粘土型である。平面形態は不明である。棺外施設は墓壙系の方形型となる。墓壙掘削時期は地山型に該当する。基本形成は谷口山系に似るが、床面構造が粘土型となるのが特徴である。谷口山古墳に先行する時期と推定される。

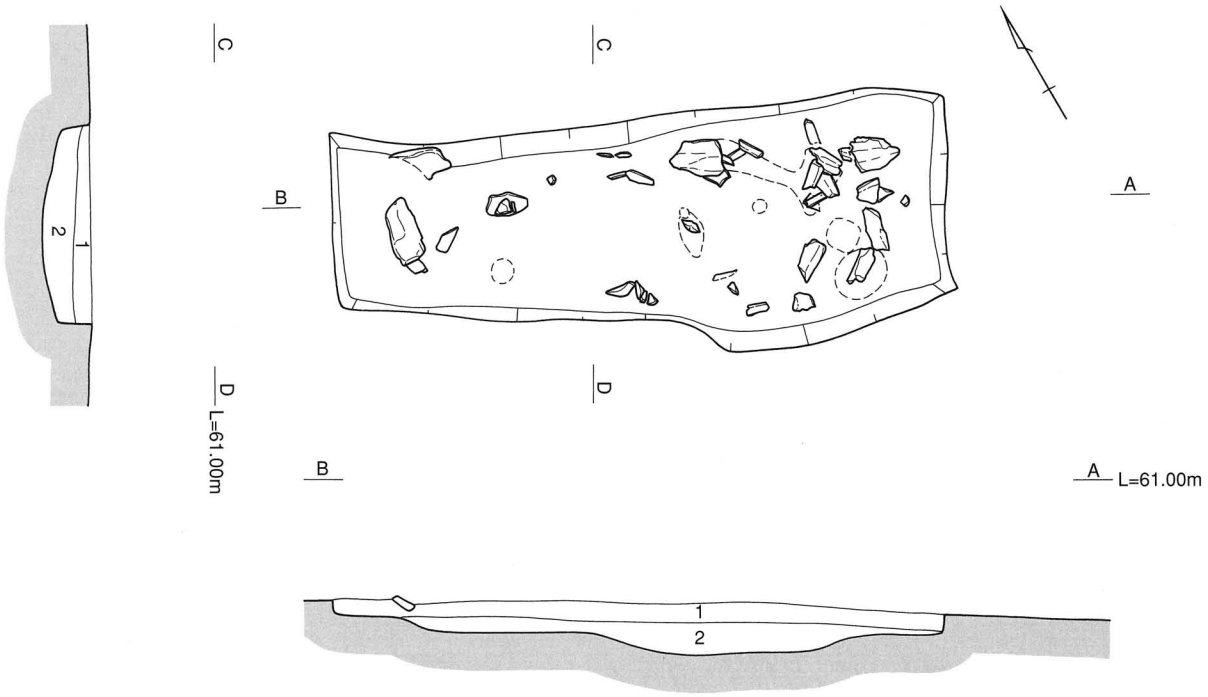
石棺内東側からは鉄剣片が3点出土したが、原位置は遊離している。

出土遺物

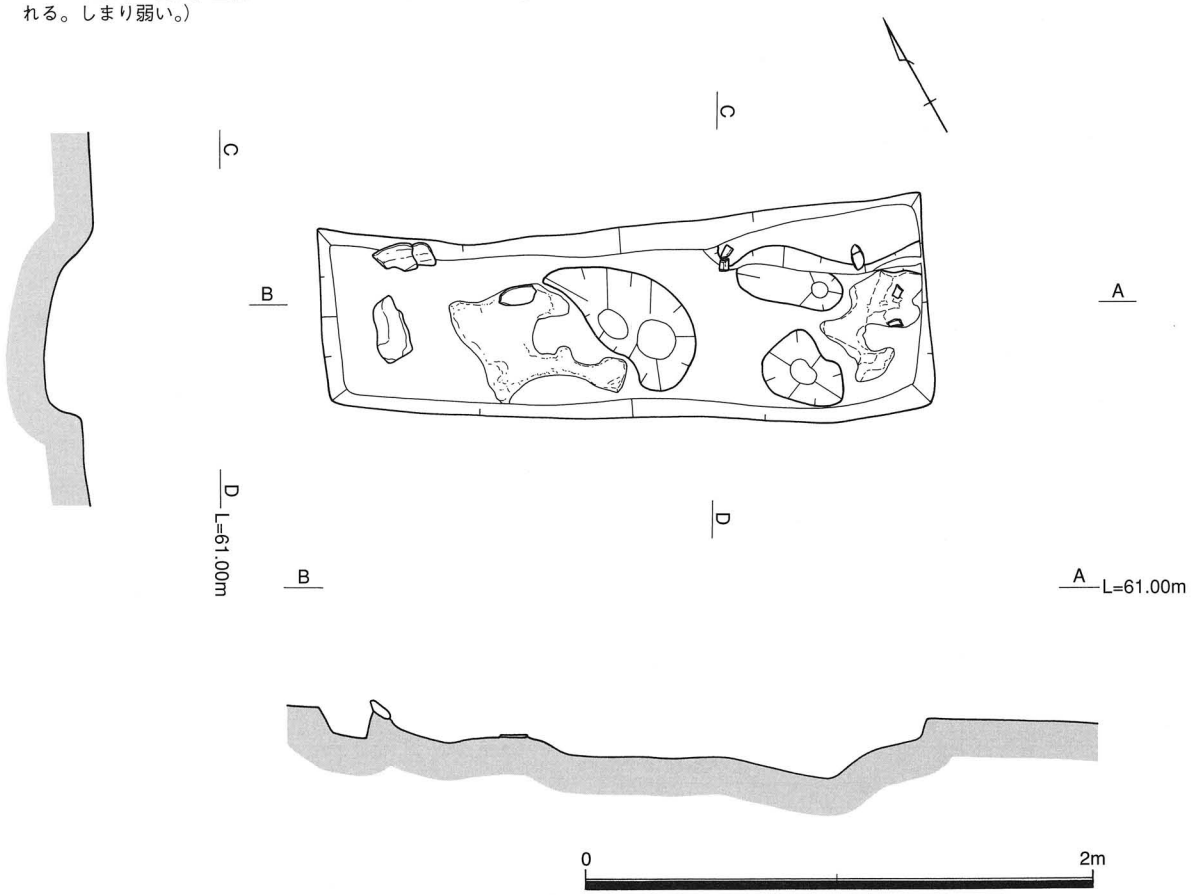
石棺内東側からは鉄剣片と思われる鉄片が3点出土したが、小片のため詳細の判明するものはなかった。



第４図　SM1003墳丘地形平面図



1．褐色　10YR4/4　砂質土（炭化物・マンガン粒少量含む。ϕ＝1㎝程度の礫がまじる。結晶片岩（石棺石材）多量含む。水銀朱含む。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（炭化物含む。ϕ＝3㎝程度の礫、片岩混じる。部分的に棺床粘土（にぶい黄橙色10YR6/4）および水銀朱が混入。盗掘によるカクランをうけていると思われる。しまり弱い。）



第５図　SM1003主体部平・断面図

ST1001（1号石室墓）（第6図）

3号墳の西側に位置する竪穴式石室である。主軸方向は東西でN-90°-Eを示す。石室基底部の粘土床を一部とどめるにすぎないため、主体部の構造は不明である。また明瞭な墳丘は確認されていない。墓壙は長方形を呈し、現存長で長軸2.03m、短軸0.82m、深さ10cmを測る。墓壙のみの検出となったが、SM1003同様の箱式石棺と推定される。

出土遺物

出土遺物はなかった。

ST1002（2号石室墓）（第7図）

調査区東側の東西に延びる尾根の西端に位置する竪穴式石室墓である。円墳であったと思われるが、現況では後世に削平をうけており、明瞭な墳丘はみられない。墳丘は地山を削り出して成形していると思われ、墳丘規模は現存で直径約10m、墳丘高は約1mである。葺石等の外表施設などは見られない。墓壙は南側部分が消失しているが、長方形を呈するものと考えられる。現存長で長軸3.6m、短軸1.35m、基底面から現存の石室壁体上面までの高さは最大で32cmを測る。

石室は東側小口および北側壁体の基底部一段しか遺存しておらず、詳細な構造は不明である。石室石材には20～30cm程度の砂岩の扁平礫が用いられる。石室基底部は粘土棺床が構築されており、東側の一部に水銀朱の拡がりが認められた。棺床の縦横断面は舟底形を呈しており、刳抜式木棺を安置していたものとみられる。小口部は緩やかにカーブを描きながら、上方に緩やかに立ち上がり、舟底状を呈する。小口部の突起は見られない。木棺痕跡の長さ3.8m、中央部の棺床上場での幅40cm、基底幅30cm、中央凹部は深さ13cmを測る。棺の小口幅の差および棺床の高低差はない。棺床断面形は緩いU字状を呈し、主軸方向は東西でN-75°-Wを向く。遺物の出土状況などから東頭位が考えられる。

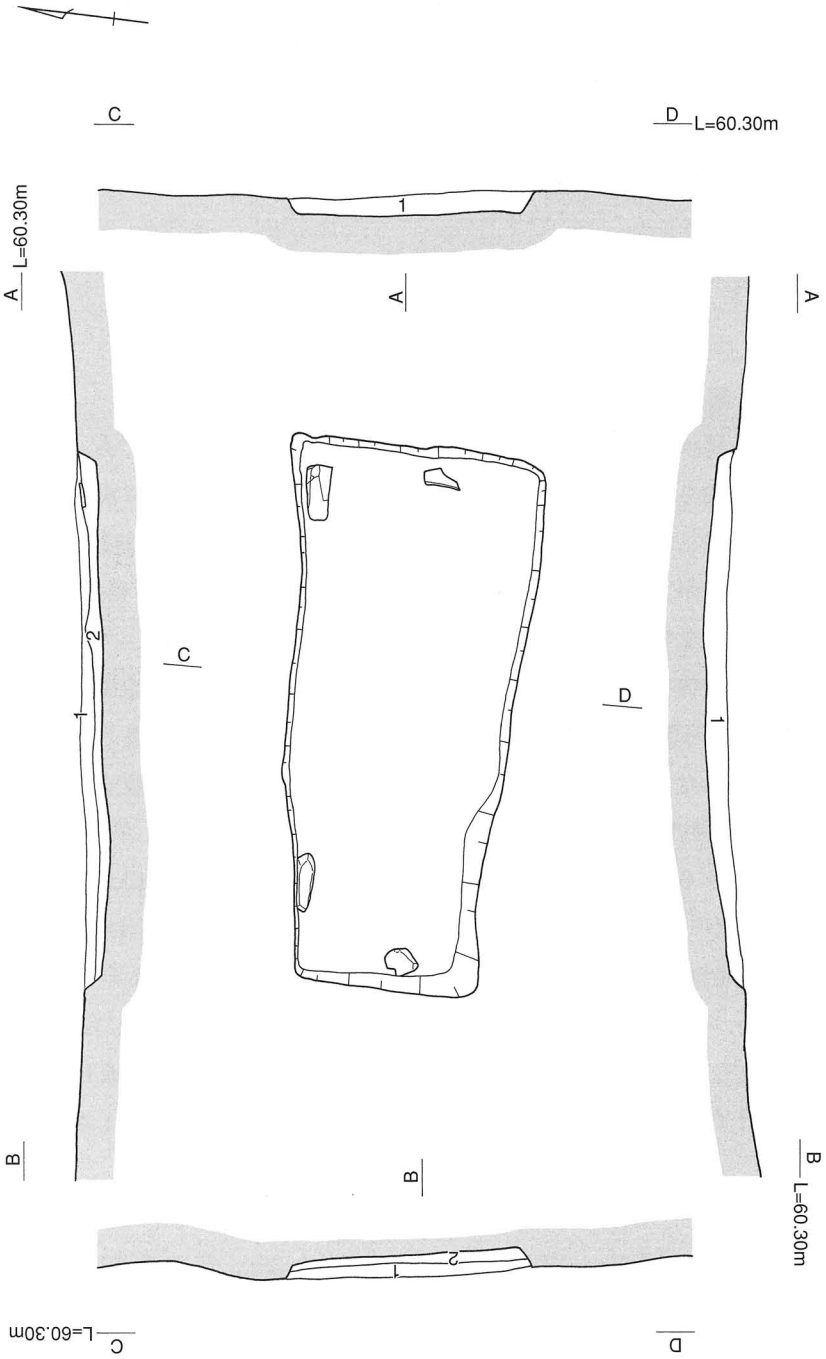
棺内東小口から西へ1.06mの地点で鉄槍1本が切先を東にして棺に沿うように副葬されていた。棺内西小口側、棺床北側の東小口から2.24mの地点で鉄剣1振、1.94mの地点で砥石1点が出土し、剣の切先は西を向いていた。また棺床南側の東小口から2.42mの地点で圭頭形鉄鏃1本が出土している。

出土遺物（第8図）

1は剣で全長35.8cm、身の長さ26.7cm、身幅2.7cm、身の厚み0.3cm、茎の長さ10.5cm、茎幅1.2cm、茎の厚み0.4cmである。身には明瞭な鎬はなく、横断面は凸レンズ状を呈する。関は角関である。把口が関の部分で終わっており、短剣の可能性が高い。茎に木質が遺存している。

2は槍と思われ、全長30.4cmで、身の長さ20.2cm、身幅2.7cm、身の厚み0.5cmを測り、身の横断面は凸レンズ状を呈する。茎の長さ10.0cm、茎幅1.1cm、茎の厚み0.4cmである。茎部には1ヵ所目釘穴が認められる。関は角関である。直線式の拵で、茎部4面に縦位の木目をもつ木質が遺存しており、茎部4面を固くはさみ込み、柄に装着していたものと思われる。身の部分にも一部木質が遺存しており、鞘に納められていたと思われる。

3の鉄鏃は茎部を一部欠損しているが、現存で12.5cmを測る。鏃身部の長さは11.4cmで、茎部に木質が遺存する。3は従来定角式とされてきた圭頭鏃の一群である。刃部はやや鈍い角度で広がり、内方へ屈曲した後はやや内湾気味に延びる。鏃身関部は斜関となる。鏃身部断面形は扁平な両丸造で、鏃身部

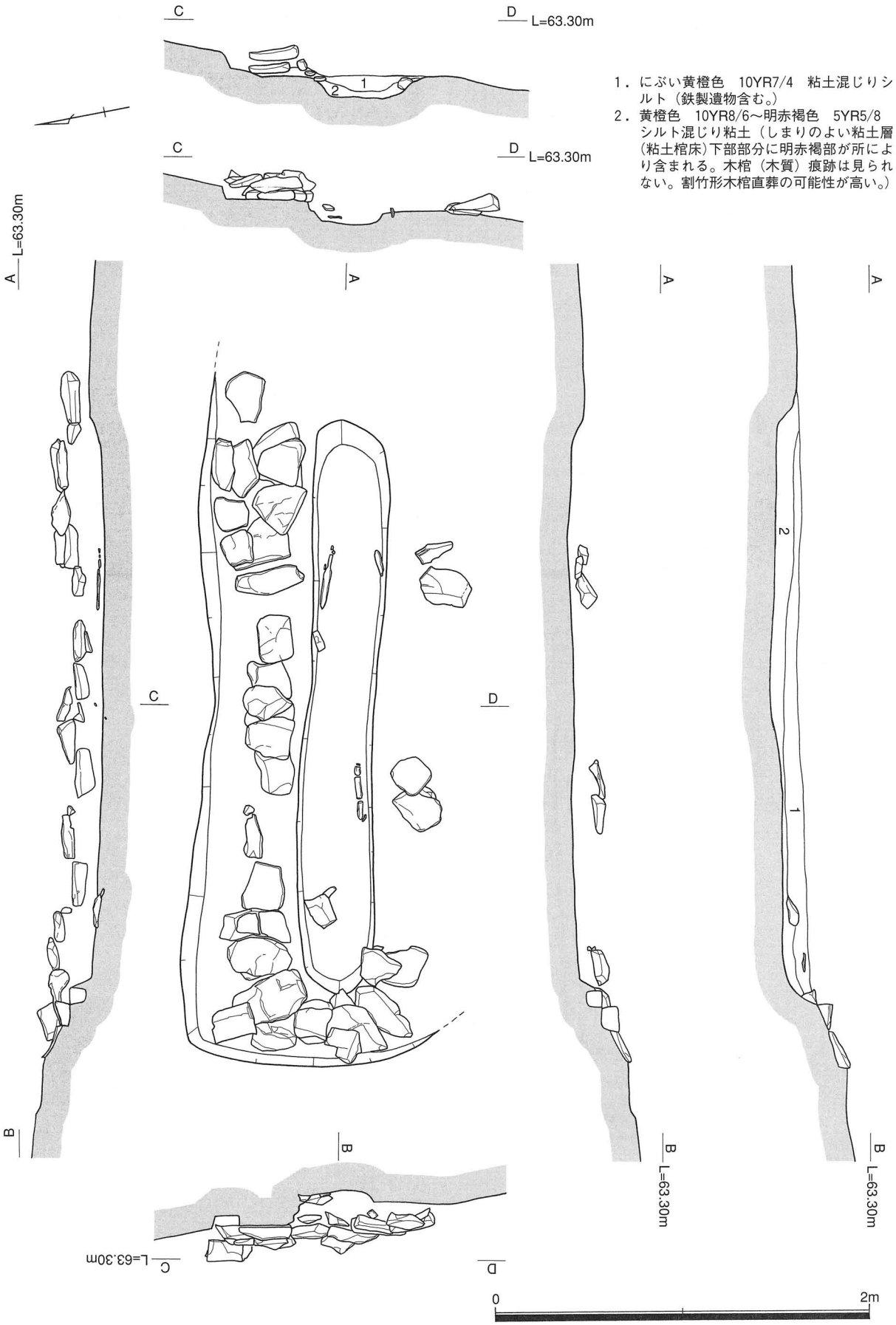


1．浅黄橙色　10YR8/3　粘土（ややしまりのある粘土。結晶片岩の破片を含む。ϕ＝1～2㎝の砂岩礫を含む。）

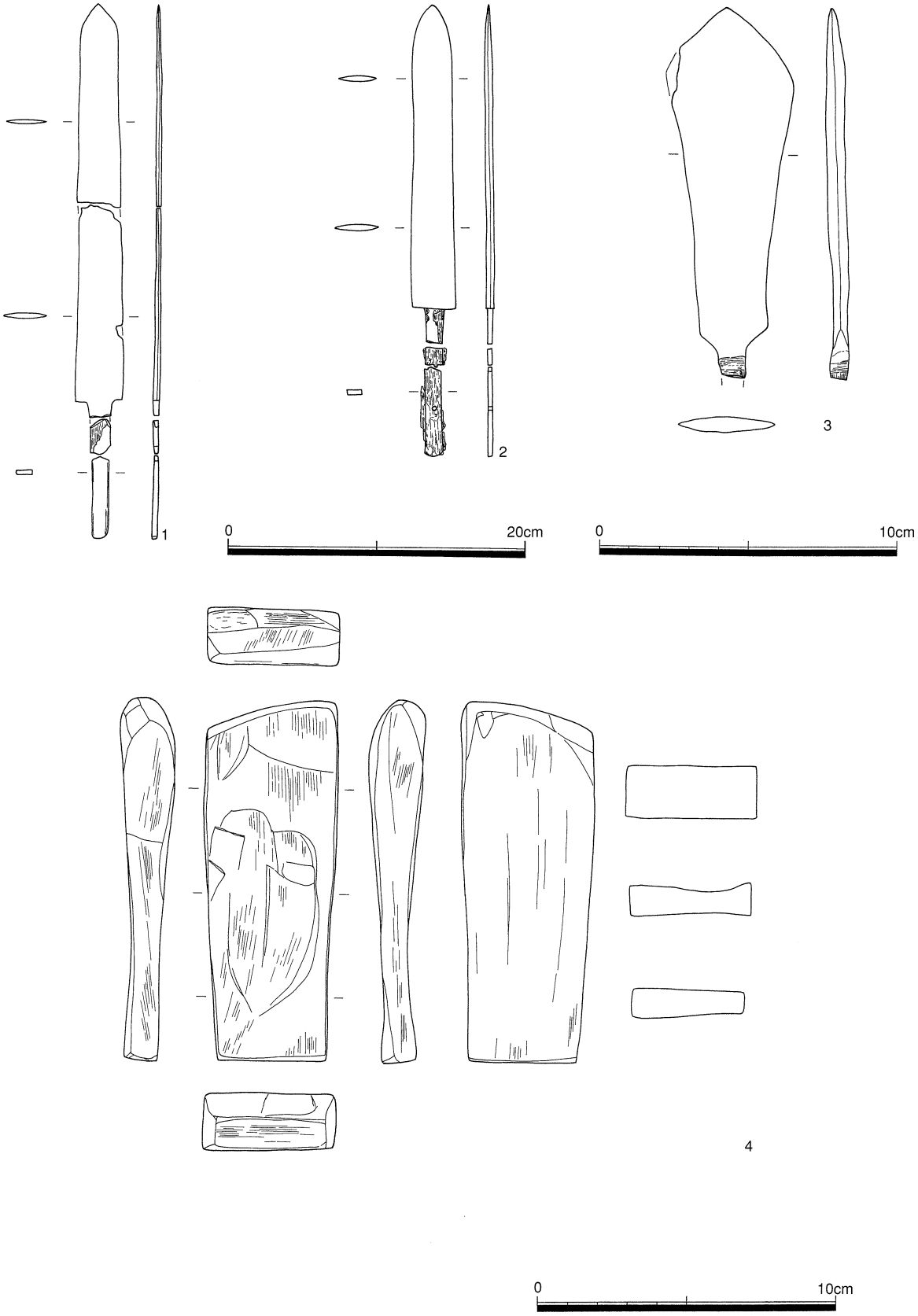
2．明黄褐色　10YR7/6　粘土（しまりのある粘土。結晶片岩の破片を含む。ϕ＝2～3㎝の砂岩角礫が含まれる。）

0　2m

第6図　ST1001主体部平・断面図



第７図　ST1002主体部平・断面図



第８図　ST1002出土遺物

全長が11.4cmを測る大型で扁平な圭頭鏃となる。現在の杉山分類では圭頭鏃群A－Ⅱ形式に該当するが、杉山分類では椿井大塚山古墳出土例が数少ない類例とされており、十分な検討が進んでいない形式の鏃である。ただし、鏃身部幅が細身ながらも、形態や法量が近似する類例としては大阪府紫金山古墳X群に見られる。肥大化した鏃身部法量等から前期末～中期前半の年代を与えることができよう。

4の砥石は肌理の細かい泥岩を用いる。表・裏面ともに使用痕が顕著である。

ST1003（3号石室墓）（第9図）

調査区東側の東西に延びる尾根の西端に位置する竪穴式石室墓である。2号石室墓同様、円墳であった可能性があるが、後世の削平を受け、明瞭な墳丘は残存していない。墳丘規模は現存で直径約10m、墳丘高は約1mである。

墓壙は大部分が消失するが、長方形を呈し、現存で長軸3.27m、短軸1.34m、棺床底面まで深さ49cmを測る。基底部は緩いU字状を呈し、中央凹部は深さ18cmを測る。

石室は基底部が一部遺存する程度で、詳細な構造は不明である。石室石材は砂岩を用いる。石室基底部は粘土棺床が構築されており、一部遺存する。棺床の縦横断面は舟底形を呈しており、刳抜式木棺を安置していたものとみられる。小口部は緩やかにカーブを描きながら、上方に緩やかに立ち上がり、舟底状を呈する。木棺痕跡の長さ2.52m、中央部の棺床上場での幅50cm、基底幅34cm、中央凹部は深さ20cmを測る。棺の小口幅の差はないが、棺床は僅かに東側が低くなっている。棺床断面形は緩いU字状を呈し、主軸方向は東西でN-80°-Eを向く。頭位は東であると思われる。

出土遺物

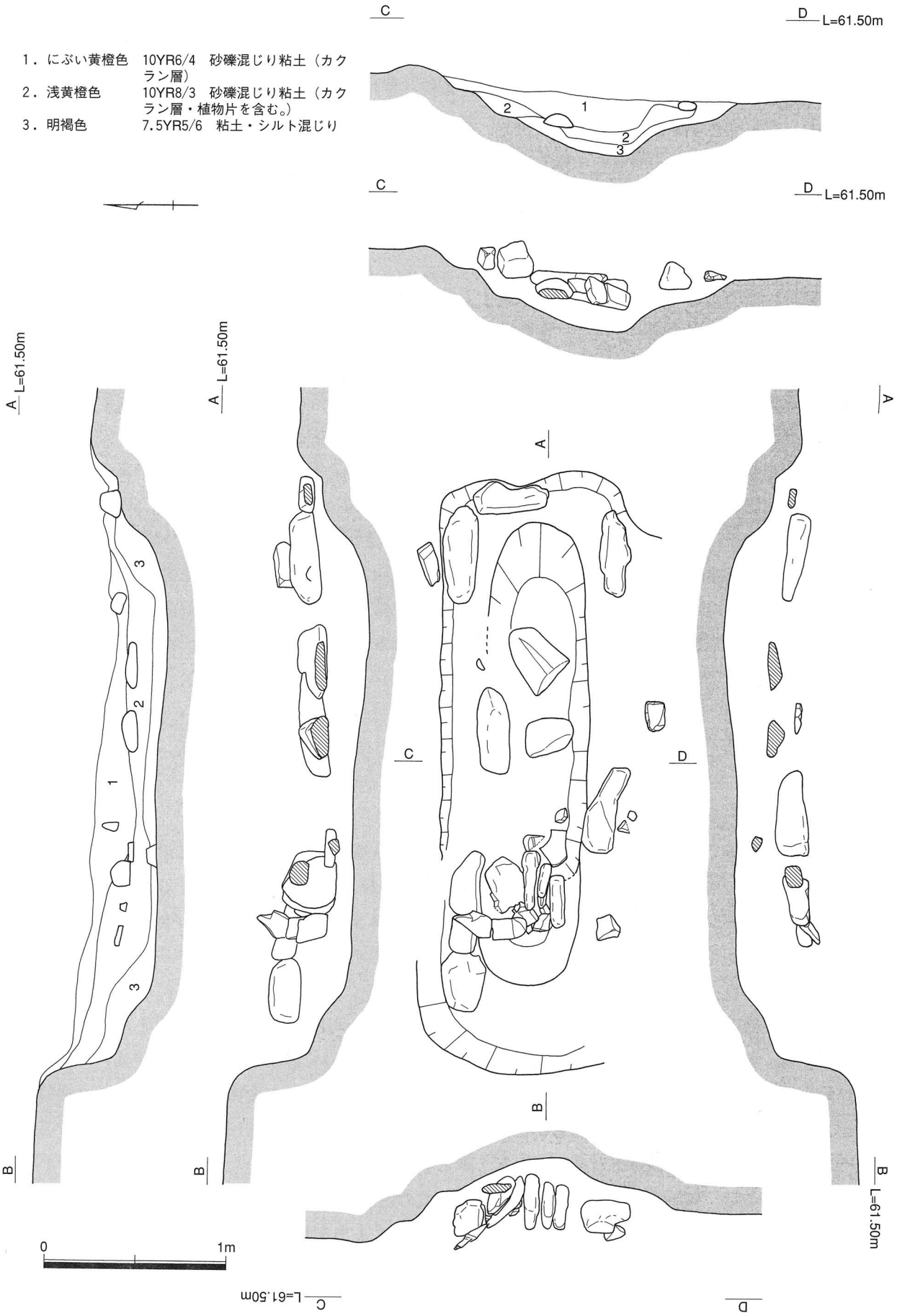
出土遺物はなかった。

ST1004（1号石蓋土壙墓）（第10～12図）

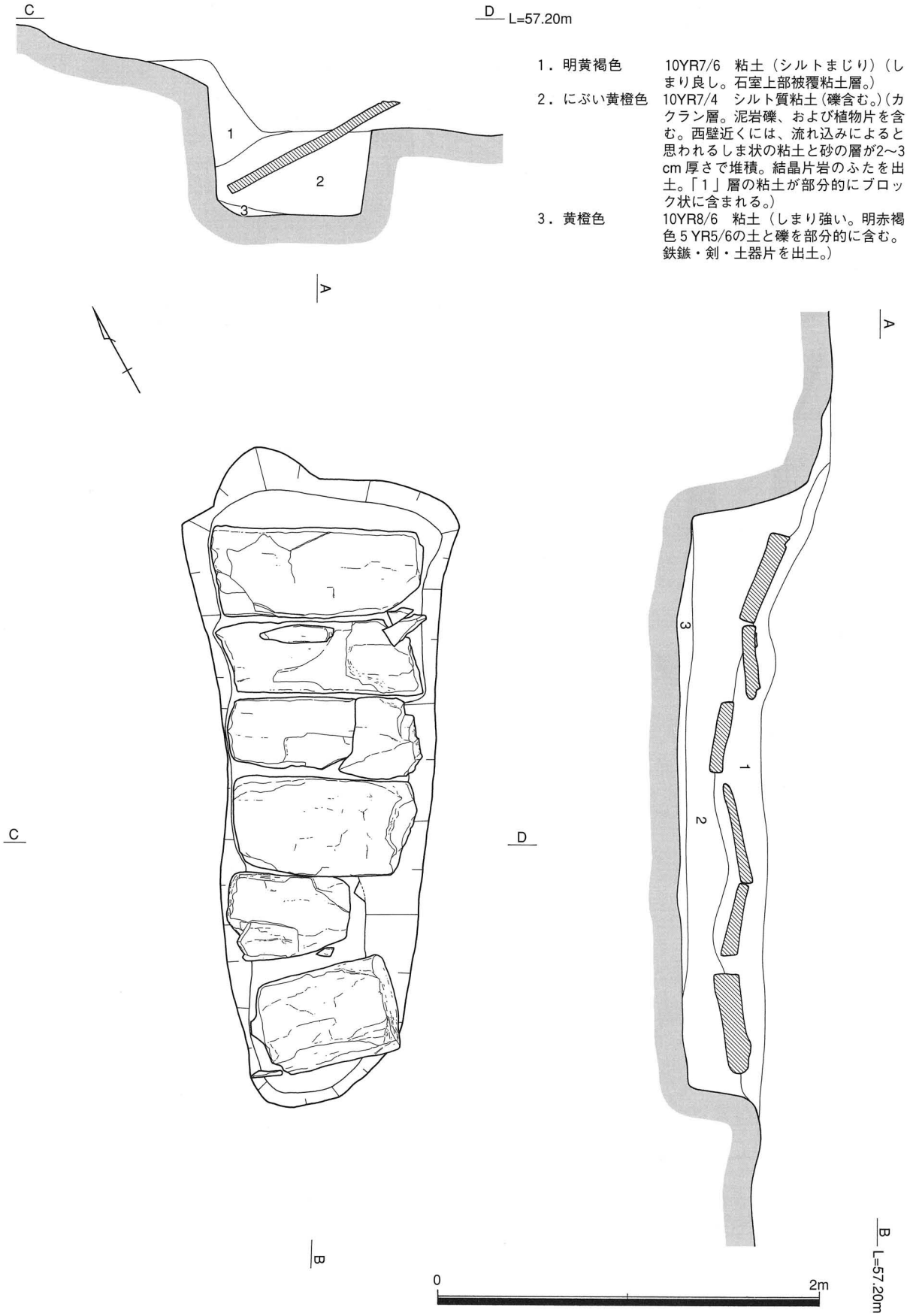
調査区東側の東西に延びる尾根の東端に位置する石蓋土壙墓である。墓壙は長方形状の平面形を呈し、主軸方向はN-230°-Eで真北よりやや東に振る。墓壙規模は上場で長軸3.25m、北小口1.44m、南小口0.7mで、北側は多少の墓壙の崩落があるものと思われるが、平面形状は北側が拡がっている。基底面は長軸2.96m、北小口0.72m、南小口0.6mを測り、若干北小口が広くなっている。深度は北小口側で64cm、南小口側で37cmを測るが、基底面はほぼ水平である。

墳丘はなく、墓壙は地山をほぼ垂直に掘り込み、1m程度の長方形の結晶片岩板石を6枚用いて上面を架構する。蓋石上面は粘土で被覆されていたことが土層の観察で確認された。墓壙底面には粘土床が一部検出され、頭位については粘土床北側で朱が検出されていることや遺物の出土状況から北頭位であったと考えられる。遺物は墓壙底面北小口西に鉄剣1振、東に柳葉形鉄鏃19点・深い逆刺を有する剣身形鉄鏃1点が束になって副葬されていた。剣・鏃とも切先を南に向けていた。

蓋石使用岩石には、割石の結晶片岩を用い、6枚構成の蓋複型となる。墓壙形状は、平面形態が長方形を呈し、断面形態が垂直に掘削することにより方形を呈する方形型である。ST1004は和泉砂岩の岩盤を掘削している。岩盤を直接掘削することにより、棺身内側の風景は箱式石棺と同じになる。こうしたことから、ST1004は鶴島山系石蓋土壙墓の省略型式として派生したと想定されよう。なお、節句山1号墳には小口石を採用しており箱形石棺痕跡が強く残っていることや、西山谷ST1004の蓋石構造に



第９図　ST1003主体部平・断面図

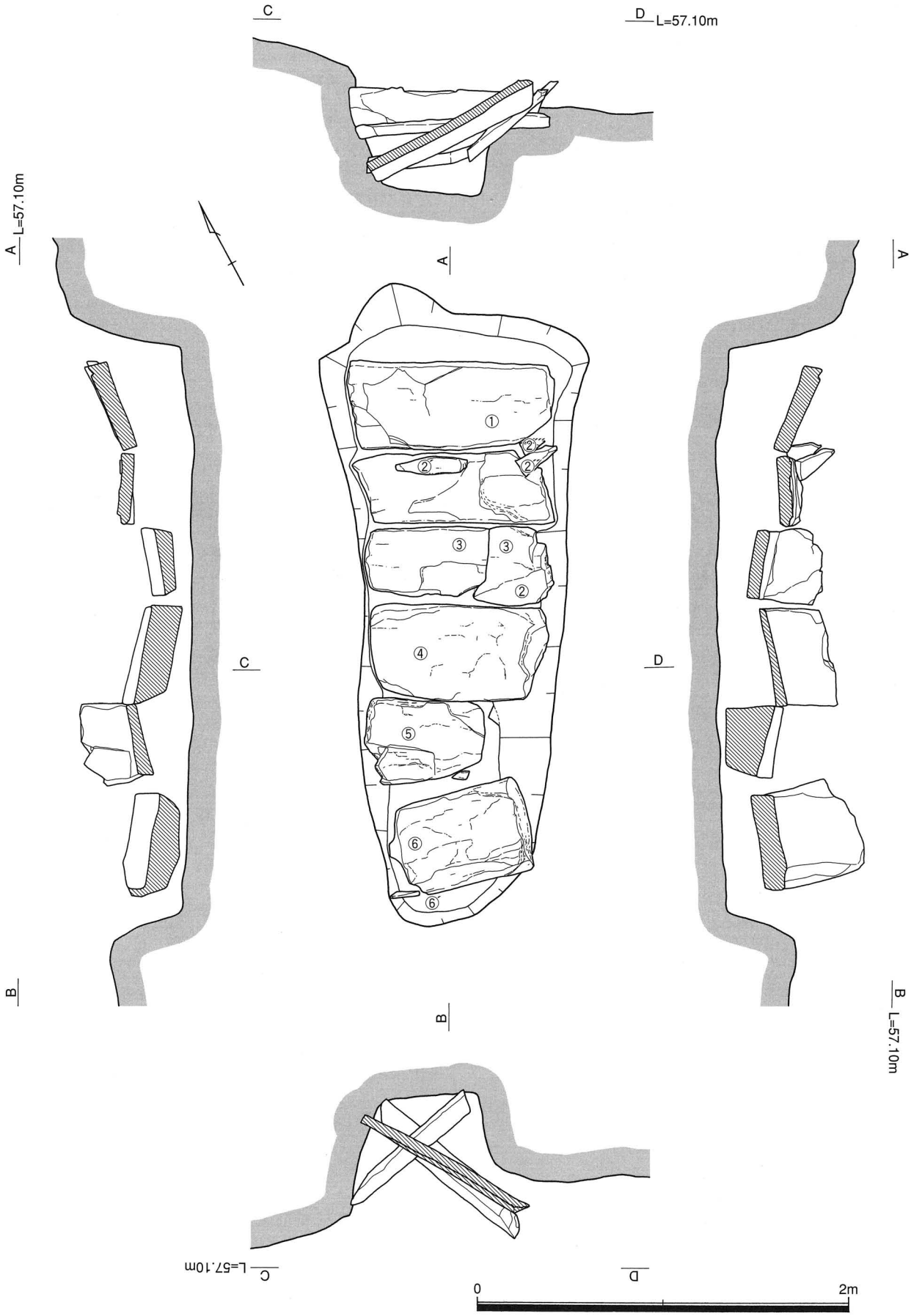


1．明黄褐色　10YR7/6　粘土（シルトまじり）（しまり良し。石室上部被覆粘土層。）

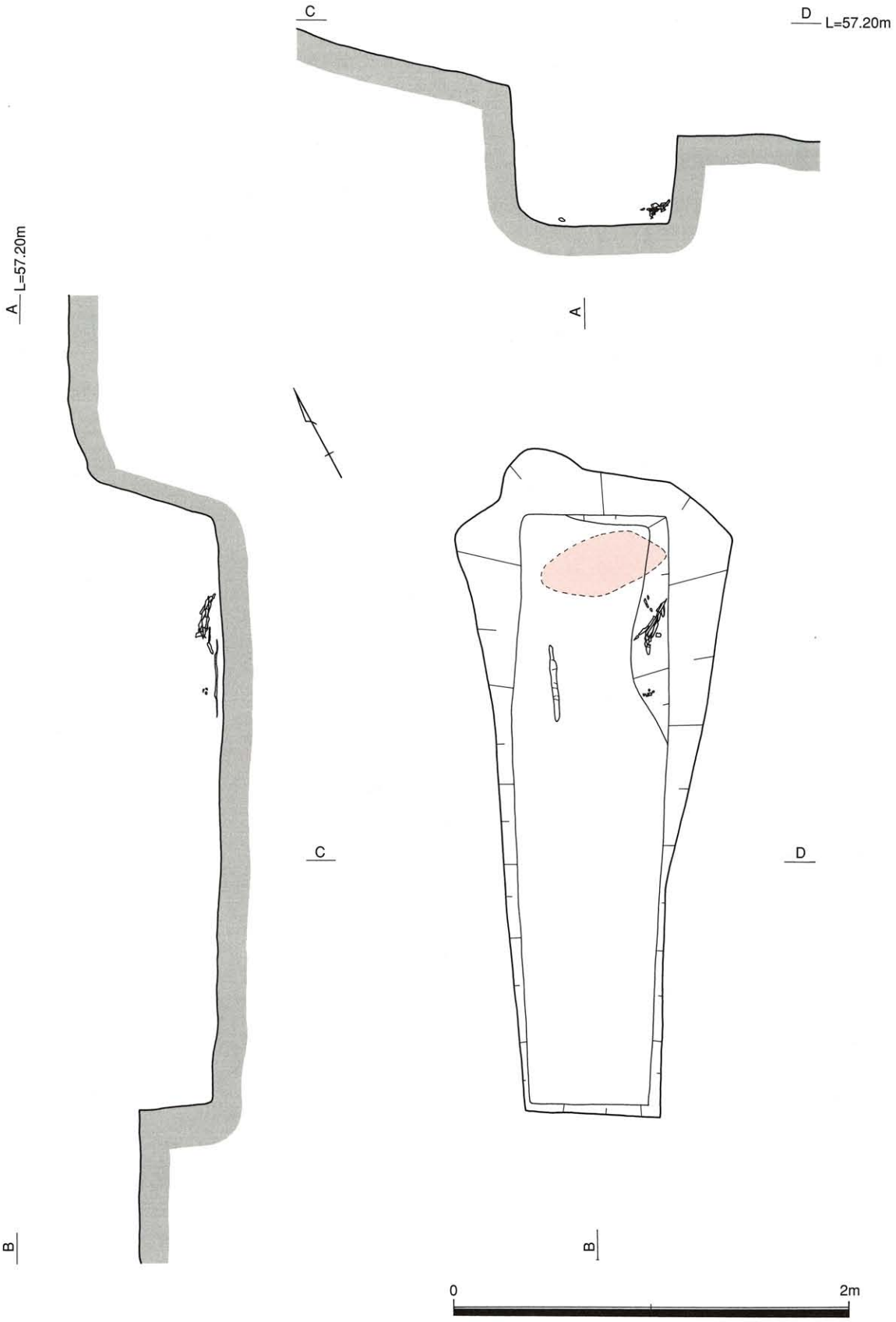
2．にぶい黄橙色　10YR7/4　シルト質粘土（礫含む。）（カクラン層。泥岩礫、および植物片を含む。西壁近くには、流れ込みによると思われるしま状の粘土と砂の層が2～3cm厚さで堆積。結晶片岩のふたを出土。「1」層の粘土が部分的にブロック状に含まれる。）

3．黄橙色　10YR8/6　粘土（しまり強い。明赤褐色5YR5/6の土と礫を部分的に含む。鉄鏃・剣・土器片を出土。）

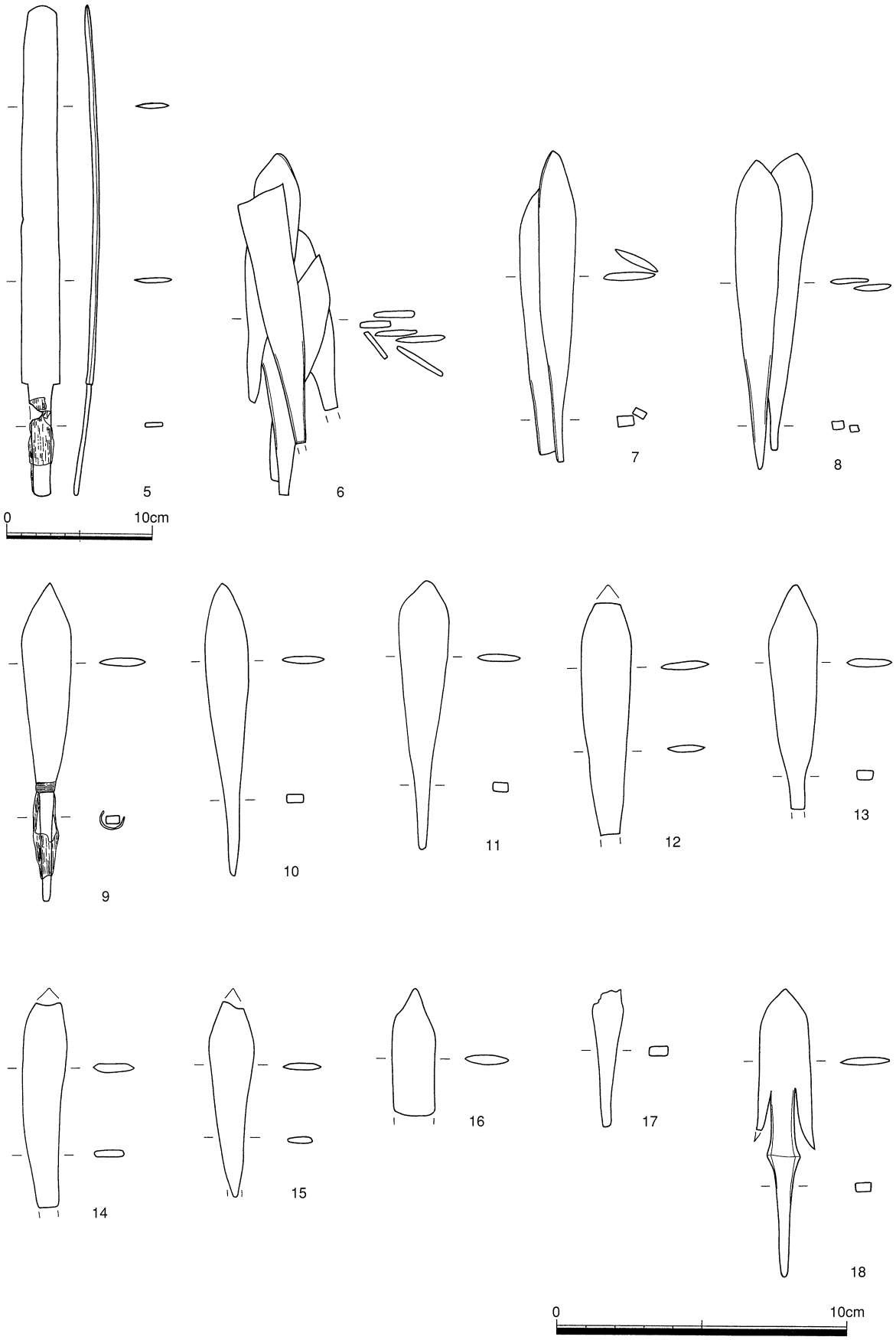
第10図　ST1004主体部平・土層断面図



第11図　ST1004主体部平・立面図



第12図　ST1004遺物出土状況図



第13図　ST1004出土遺物

は６枚の板石が使用されていることから蓋複型となり、新しい要素が認められる。よって節句山１号墳が先行すると考えられよう。

出土遺物（第13図）

５は剣で全長33.9cm、身の長さ26.2cm、身幅2.6cm、身の厚み0.4㎝、茎の長さ7.7㎝、茎幅1.3㎝、茎の厚み0.3㎝である。身には明瞭な鎬はなく、横断面は凸レンズ状を呈する。関は角関である。把口が関の部分で終わっており、短剣の可能性が高い。茎部外面に木質が遺存しており、鞘・柄等に納められていたものと思われる。

鏃は全長11㎝、鏃身長７㎝、茎長４㎝前後にほぼ収まり、規格性が高い。茎部に付着する木質の観察によれば、茎部は直接矢竹に挿入後、樹皮によって巻かれ装着される。また銹着状態および茎部木質の遺存状況から束ねられて副葬されていた可能性が高い。６～17は柳葉鏃である。鏃身部形状は刃部先端よりふくらを有して、鏃身関部に向かって緩やかに延び、明瞭な鏃身関部は持たない。13に撫関状の外形線の変化が認められる。明瞭な頸部は有さない。鏃身長は７㎝程度と大型に分類され、鏃身断面は両丸造である。杉山分類柳葉鏃群Ｖ－２－Ａ－２類に該当し、杉山編年Ⅳ期の年代を与えることができる。18は腸抉柳葉鏃である。逆刺は１段で、鏃身切先よりふくらを有して、逆刺先端に向かって直線状に延びる。鏃身長は5.8㎝を測る。鏃身断面は両丸造で、山形突出を有するのが特徴である。杉山分類腸抉柳葉鏃群Ａ－Ⅰ－３－Ｂに比べて、やや鏃身部長身化・長頸化の傾向がある。杉山編年Ⅳ期の年代を与えることができよう。

その他、土器細片２点が出土したが細片のため、実測可能なものはなかった。

３．西尾根の古墳

SM1002（２号墳）

墳丘形態（第14図）

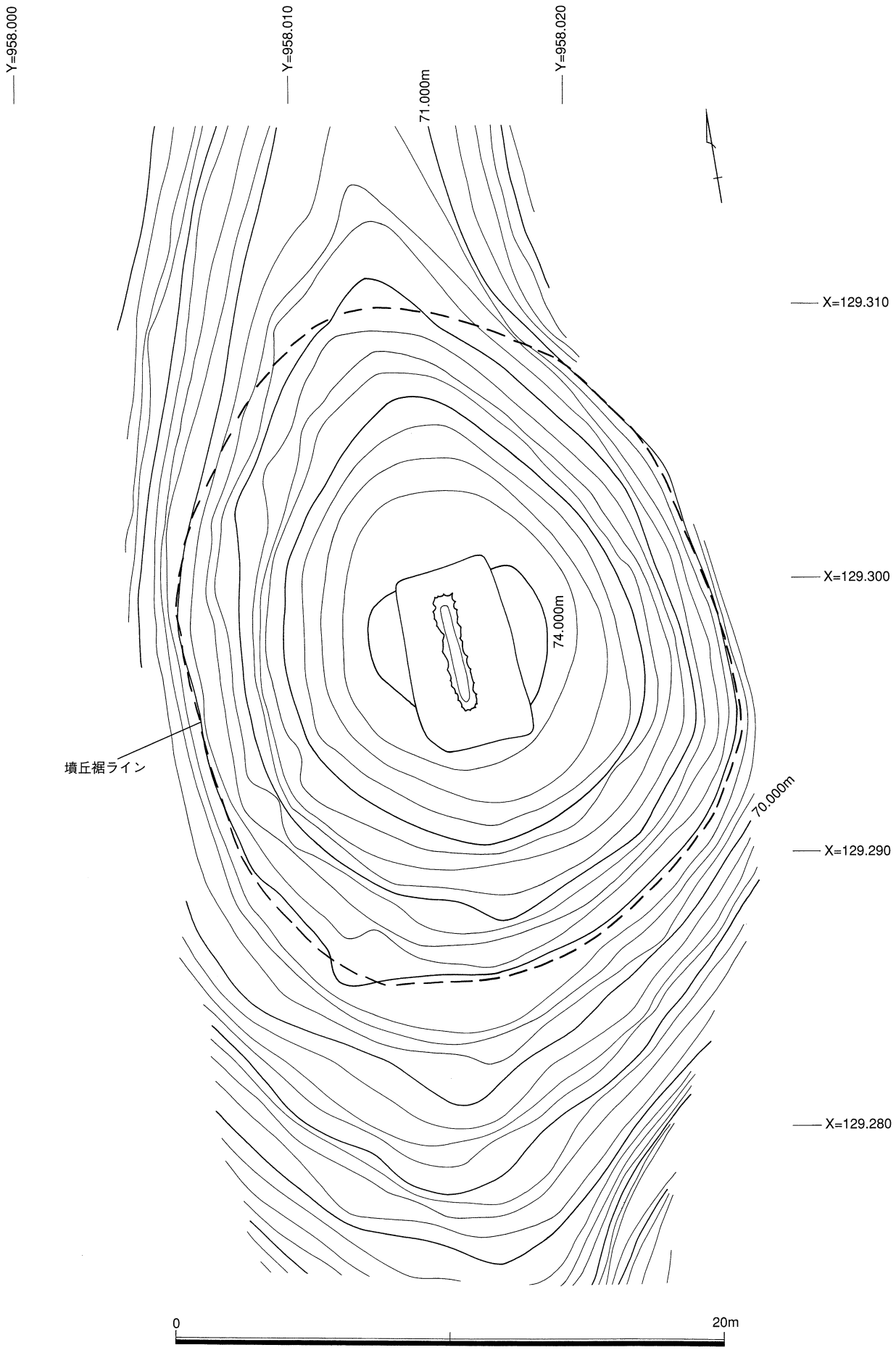
調査区西側の南北に延びる尾根の南端に位置し、墳頂部で標高74mの円墳である。墳丘南側裾部、標高72m付近に地形変換点がみられ、墳丘基底部と考えられる。規模は現状で長軸20m、短軸18m、墳丘高約２ｍを測る。自然の尾根地形を利用しているため、やや楕円の平面形態となっている。和泉層群を基盤とする地山を削り出して墳丘を作出している。盛土はない。表面には葺石・周壕等の外部施設はみられない。

埋葬施設

埋葬施設は墳丘中央に位置する竪穴式石室である。排水溝などの関連施設は検出されなかった。

（１）石室の構築（第15・16図）

石室の構築にあたっては、約70°の傾斜で墓壙を掘り込み、墓壙底中央には粘土棺床構築部分を南北4.67m・石室通中央部分で東西0.86m・石室基底部からの深さ15㎝にＵ字形に緩く掘り窪める。基底構造は竪穴側壁のない、石室基底部分類SC型式（都出 1986）の構造をもち、都出氏のいうSC型の初現的形態とみられる。四国瀬戸内地域の前期古墳に通有の基底構造を持つ。２号墳の墓壙はＵ字形に穿つ型式の基底部構造をもつ。Ｕ字形部分に直接、粘土棺床を設置する。基底部構造に板石や礫石は使用



第14図　SM1002墳丘地形平面図

されず、粘土棺床周囲に礫石の充填は行われていない。木棺痕跡の南北の幅には広狭が認められる。SC型式の石室基底部の構造をとる例は、四国では徳島県上板町安楽寺谷１号墳（徳島県埋蔵文化財センター 1995）・香川県寒川町奥14号墳（丹羽 1991）（前方後円墳集成１～２期）の石室にみられるが、徳島県上板町安楽寺谷墳墓群では、すでに庄内式併行期の砂岩礫積みの竪穴式石室墓が同様の構造を採用しており、在来的な要素を反映したものとみることができる。墓壙基底部幅は石室構築部分の幅に掘削される。

２号墳の基底部構造については、山本三郎氏の分類（山本 1992）によれば、Ｅ２形式に相当する。Ｅ形式は、粘土棺床の周囲および下部に板石・礫石を設置するものをＥ１形式とし、墓壙基底に直接粘土棺床を設置するものをＥ２形式とした。Ｅ１形式は前方後円墳成立期に吉備地域で出現した型式と捉えられており、時期的には２号墳の構築時期と近似するが、粘土棺床の周囲および下部に板石・礫石は使用されておらず構造的に相違がみられる。

棺床の構築は、墓壙基底面に朱を散布した後、石室基底部の石を並べる。次に水銀朱混じりの灰白色粘土を敷き、棺おさえの粘土を棺に沿って長側方向に盛り上げ、さらに棺床底に朱混じりの灰白色粘土を敷く。棺を安置し、棺内・外に水銀朱を散布する。石室下半部の構築は、棺高まで壁体を積み上げた後、棺を安置し、石室四壁を持ち送りながら、石室壁体上面まで２列に小口積みに積み上げて構築する。

天井部は遺存していなかったが、横架する巨大な板石などがみられないため、60cm前後の板石を持ち送り構造で蓋石を架構していたものと推定されるが、石室内には大量の石室石材の礫が床面まで達しており、遺物は破損しているものも少なくないことから、天井部の構造は木材を使用した板蓋の可能性が強く、墳頂部の削平程度も考慮すれば、さらに木蓋構造の可能性は強まる（菅原 2000b）。

石室の裏込めは、石室壁体の構築と併行して、墓壙際いっぱいまで結晶片岩板石を積み上げる。石室壁体最上段から上位は、石室を包むように囲い壁状に礫混じりの土を多用しながら、墓壙上面まで結晶片岩板石を外開きに段状に積み上げる。墓壙積み石は石室側壁最上段から墓壙端部まで約40°の傾斜角を測る。北小口部分の石積みは、人頭大よりやや大きい砂岩の川原石の使用が顕著である。このことは構築順序に関係しているものと考えられ、頭部に特別な意識があったと読み取れる。墓壙上面は最終的には20cm 程度の片岩礫で覆われていたものとみられる。石室の石材は、川原石については近在する大谷川流域などで産出する砂岩が用いられ、板石については吉野川南岸、鮎喰川流域で産出する結晶片岩の割石を使用していると思われる。

（２）竪穴式石室（第15・16・17図）

結晶片岩板石を小口積みにした竪穴式石室である。石室外周上半は墓壙際まで結晶片岩を充填しており、徳島市宮谷古墳の竪穴式石室と類似した構造をとる。

国土座標軸の北より16°西に振る。内法の長さ4.72m、北端幅1.05m、南端幅83cmで、やや北側が開く形状を呈する。石室平面の長幅比は５：１で、いわゆる「長大型石室」に該当する竪穴式石室である。壁体は北端72cm、南端で57cm残存し、石室壁体最上段の比高差は15cmを測るが、石室壁体基底部のレベルはほぼ水平である。結晶片岩板石を小口積みにし、壁体基底部から３～４段目のところより四壁とも持ち送りで積み上げる。四壁コーナー部は直交する。一部に砂岩を補完的に併用する。

上部構造については鳥居龍蔵の当時の報文（鳥居 1888）によれば、上面に４枚の天井石が残存し、さらに２・３枚の板石で架構されていたと思われると伝えるが、天井部を架構する巨大な板石は見られ

なかった。持ち送り構造で蓋石を架構していたものと考えられるが、壁体内傾度が弱く、四壁を垂直に積み上げ、横断面形状は長い箱形を呈し、また石室壁上面と墓壙積石との間に10cm程度の隙間がみられるため、天井石は架構されず木蓋、木材を使用した板蓋であった可能性がある。また墳頂部の削平程度も考慮すれば、上部構造は木蓋構造の可能性が強まる。

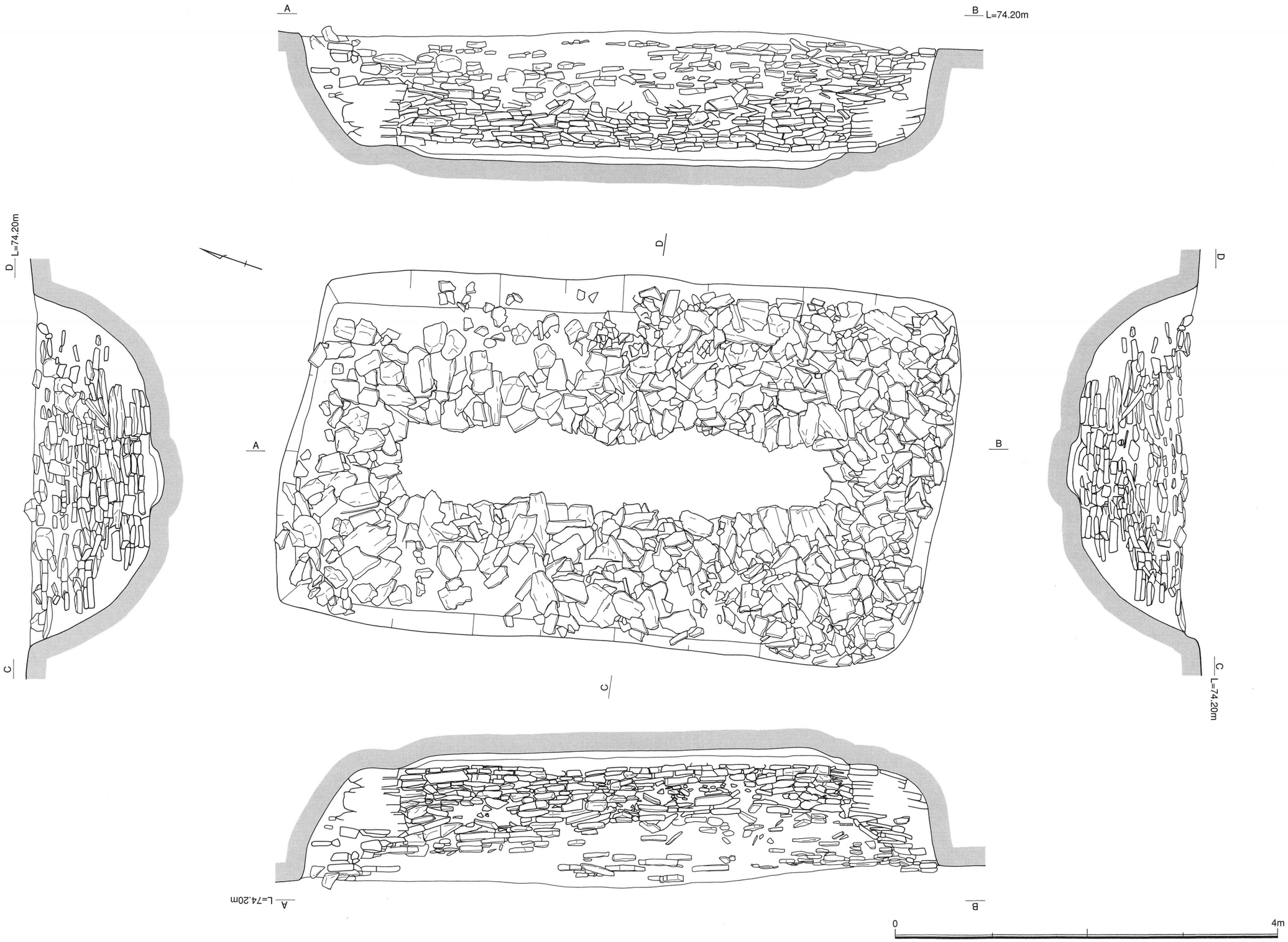
石室床面直上まで攪乱土が堆積し、石室内には大量の石室石材の礫が崩落していたが、蓋に相当する石材は遺存していない。崩落礫は床面まで達しており、遺物は破損しているものも少なくない。石室上側面が持ち送り構造を示すことや棺床北小口周辺（頭部）に散在した鉄鏃、南小口周辺の土器の出土状態から、後世に攪乱を受けたものとみられるが、一方、鏡や剣、側壁際の鉄槍などは原位置を示している。棺床に明瞭な攪乱が及んでないことを考慮すれば、先述したように、石室上面は木蓋構造で、鉄器群、土器類が木蓋上面に安置されていた可能性は残る。このことは、奈良県ホケノ山古墳、鳴門市萩原１号墓、石塚山２号墓の埋葬施設の構造的特質を一部踏襲している要素が見られる。

石室の裏込めは礫混じりの土を多用しながら、壁体を構築するのと同様に墓壙壁際まで板石を積み上げている。墓壙は砂質泥岩層の地山を掘り込んだ南北6.5m、東西4.8m の長方形の平面をなす。墓壙上面から石室床面までの深さ1.25m を測る。

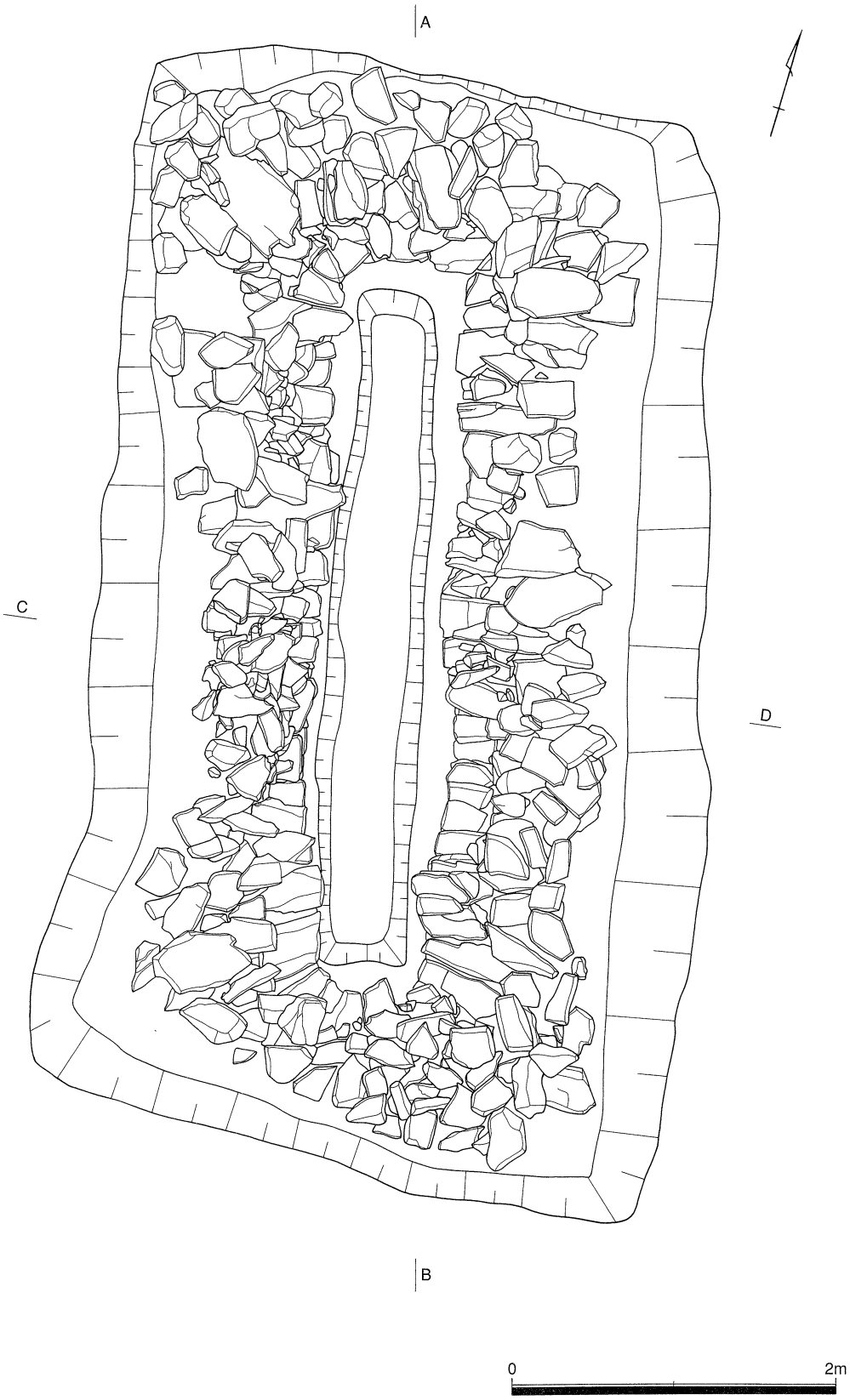
なお西山谷２号墳の築造年代は土器の項で詳細に述べているが、出土土器からみれば萩原１号墓直後型式の年代観が与えられる。石室の構築年代は既往の編年では黒谷川Ⅲ式（菅原 1986)、『弥生土器の様式と編年　四国編』阿波地域Ⅵ-3様式（菅原・瀧山 2000）に収まるものであり、布留０式までは下らないと考えられ、概ね３世紀中葉頃の年代観が与えられる。

（３）粘土棺床（第18図）

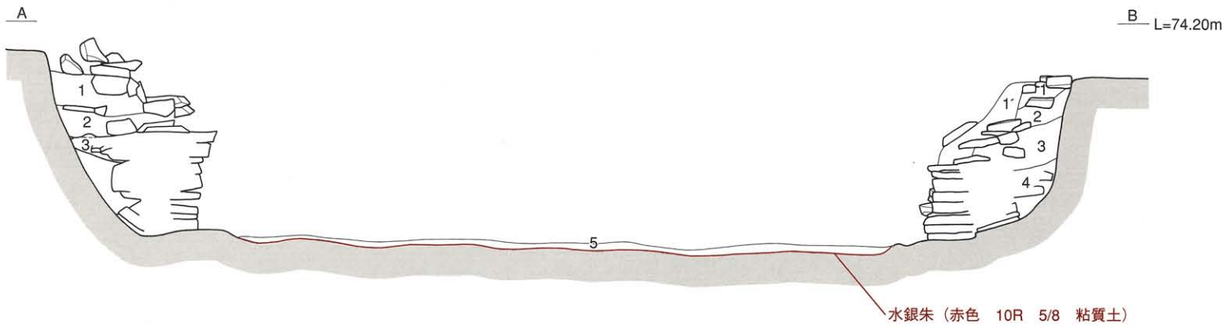
石室床面には、灰白色の粘土棺床がある。棺床の縦横断面は舟底形を呈しており、刳抜式木棺を安置していたものとみられる。小口部は緩やかにカーブを描き、上方に緩やかに立ち上がり、舟底状を呈する。小口部の突起は見られない。木棺の長さ4.2m、棺床上場での幅50cm、基底幅35cmを測る。北頭位であるが、棺の小口幅、棺床の高低差はない。棺床全体に水銀朱が拡がり、特に頭部推定部には多量の水銀朱の散布がみられた。また棺縁に沿う部分は水銀朱の拡がりが希薄であった。水銀朱と粘土を混ぜて構築された棺床は中央部東西断面で７cmの厚さをもち、版築状に丁寧に敷き詰められる。断面観察では２～３cm程度の厚さで３回に分けて敷き詰められ、各工程に水銀朱を塗布しており、断面は縞状の堆積が観察できる。このような粘土棺床の構築法は、奈良県天理市黒塚古墳（河上他 1999）や愛媛県妙見山古墳（下條他 1992）などに報例がみられる。棺床下および周囲に礫床はみられない。棺外にも水銀朱の散布がみられるが、棺の四周に沿って水銀朱の散布が淡いことから、棺外の散布は棺を安置した後、行われたものと考えられる。なお水銀朱は棺内北小口・南小口および中央部分でサンプルを採取し、蛍光Ｘ線分析を行った。その結果によれば各地点とも水銀元素を強く検出し、地点による差異はみられない。また理化学的分析による水銀朱の産地同定によれば、徳島県阿南市の水井産のものと近似する結果が得られている（XXⅡ　自然科学分析参照）。



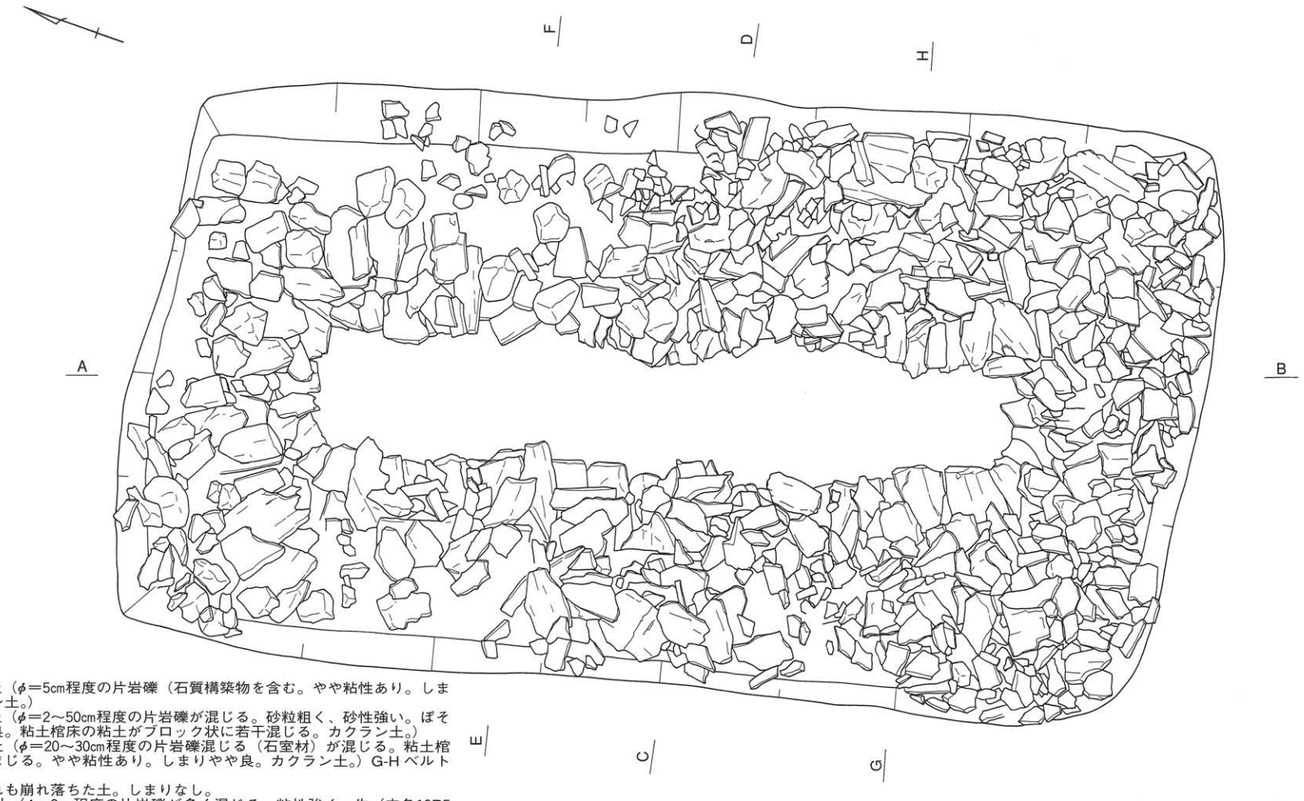
第15図　SM1002竪穴式石室平・断面図

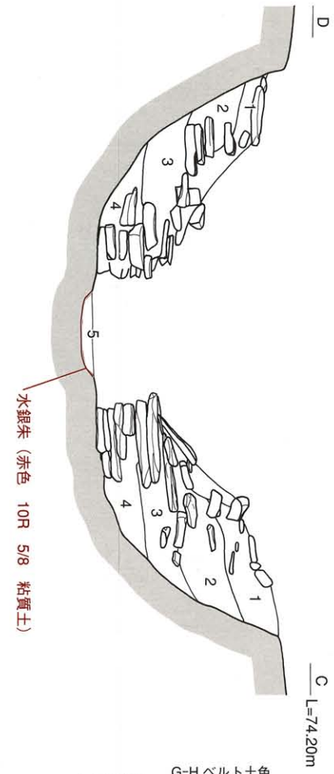


第16図　SM1002竪穴式石室平面図（墓壙上面積石除去後）

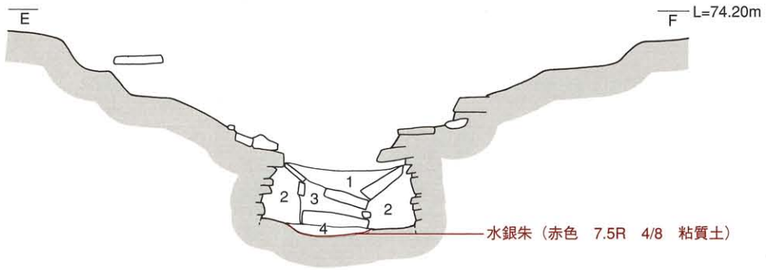


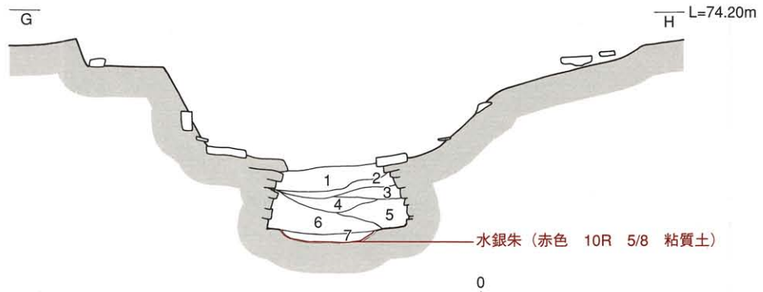
A-B ベルト土色
1．黄褐色　10YR5/6　砂質土（φ＝5～30㎜程度の礫を多く含む。しまりやや強い。墓壙埋土。）
1′．1とほぼ対応。やや礫を多く含む。
2．黄褐色　10YR5/6　砂質土（φ＝5～20㎜程度の礫を多く含む。しまりやや強い。墓壙埋土。）
3．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（φ＝10㎜程度の礫を含む。しまりやや強い。墓壙埋土。）
4．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（φ＝5～10㎜程度の礫を含む。しまりやや強い。墓壙埋土。）
5．にぶい褐色　7.5YR5/4　砂質土（φ＝2㎜程度の片岩礫が多く混じる。粘性強い。朱（赤色10R5/8粘質土）が混じる。カクランうけている。）





E-F　ベルト土色
1．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（φ＝5㎝程度の片岩礫（石質構築物を含む。やや粘性あり。しまり不良。カクラン土。）
2．褐色　10YR4/6　砂質土（φ＝2～50㎝程度の片岩礫が混じる。砂粒粗く、砂性強い。ぽそぽそ。しまり不良。粘土棺床の粘土がブロック状に若干混じる。カクラン土。）
3．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（φ＝20～30㎝程度の片岩礫混じる（石室材）が混じる。粘土棺床の粘土が若干まじる。やや粘性あり。しまりやや良。カクラン土。）G-H ベルト4層に対応。
※1～3層いずれも崩れ落ちた土。しまりなし。
4．にぶい褐色　7.5YR5/4　砂質土（φ＝2㎝程度の片岩礫が多く混じる。粘性強く、朱（赤色10R5/8粘質土）が混じる。カクランうけている。）

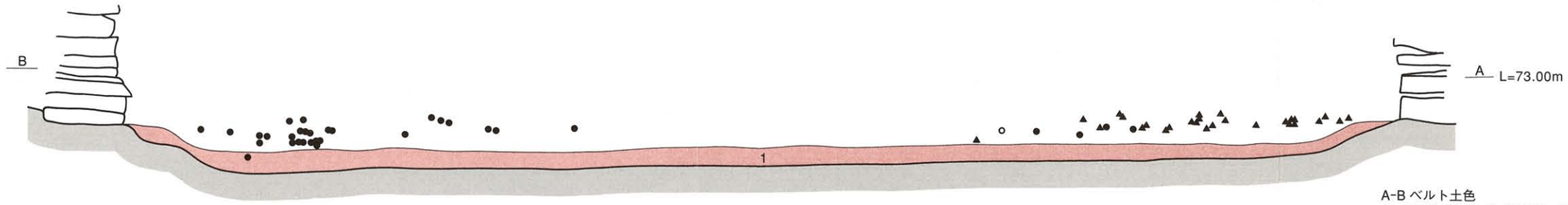




G-H ベルト土色
1．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（φ＝5～30㎝程度の礫（結晶片岩、主体部構築の礫）が混じるが右室内におちこむ。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（1層より砂粒大きい。φ＝5～10㎝程度の片岩礫を含む。やや砂性強い。しまり不良。カクラン土。）
3．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（砂質土の中に粘土（粘土棺床）がブロック状に混じる。やや粘性あり。しまり不良。カクラン土。）
4．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（やや粘性強い。φ＝3㎝程度の礫がまじる。粘土棺床の粘土がブロック状に混じる。しまりやや良い。カクラン土。）
5．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（砂粒粗く（φ＝0.5～1㎜）砂性強い。φ＝5～10㎝程度の礫を含む。しまり不良。カクラン土。）
6．褐色　10YR4/6　砂質土（φ＝2㎝程度の礫を多く含む。砂性強い。φ＝5～10㎝程度の礫を含む。しまり不良。カクラン土。）
※1～6層いずれも崩れ落ちた土。しまりなし。
7．にぶい褐色　7.5YR5/4　砂質土（φ＝2㎝程度およびφ＝20㎝程度の片岩礫が混じる。粘性強く。朱（赤色10R5/8粘質土）が混じるカクランをうけている。）

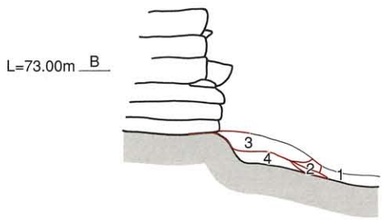
0　4m

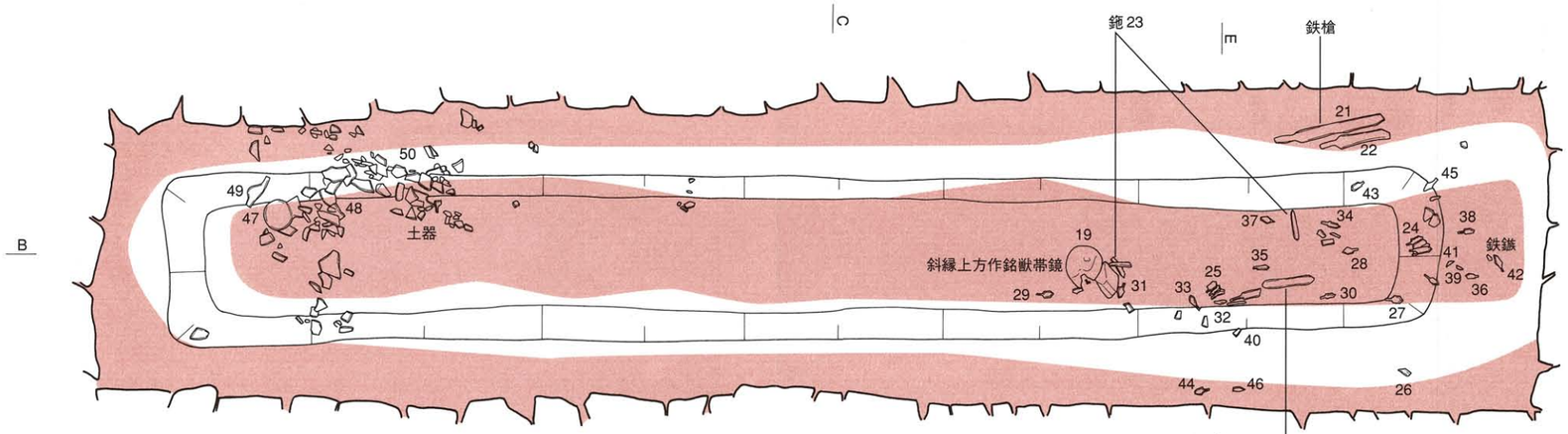
第17図　SM1002竪穴式石室内覆土土層断面および墓壙土層断面図

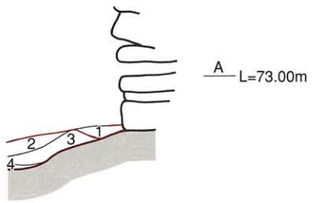


◎・・・・青銅鏡
▲・・・・鉄器
●・・・・土器

A-B ベルト土色
1．にぶい褐色　7.5YR6/4　砂質土（φ＝2㎝程度の片岩礫が多く混じる。粘性強く水銀朱（赤色10R5/8）が付着。）

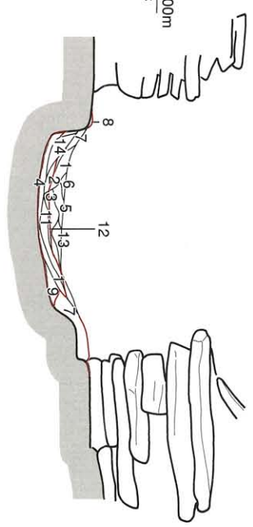


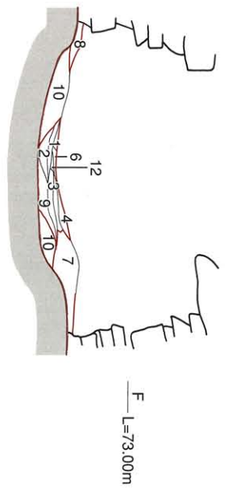




B
1．赤色　10R5/8　粘土（砂質土。やや粒子粗い。水銀朱がブロック状に混入。2層より水銀朱を多く含む。）
2．赤色　10R5/8　粘土（砂質土。やや粒子粗い水銀朱がブロック状に混入。）
3．にぶい黄色　2.5Y6/4　粘土（棺おさえの粘土。上面に水銀朱が付着。）
4．風化岩盤層　灰黄色　2.5Y7/2　粘土（白色粘土。上面に水銀朱の散布がみられる。）

A
1．赤色　10YR5/8　粘土（やや粒子粗い。水銀朱がブロック状に混入。3層より水銀朱の含有率が高い。）
2．赤色　10YR5/8　粘土（やや粒子粗い。水銀朱がブロック状に混入。）
3．にぶい黄色　2.5Y6/4　粘土（やや粒子粗い上面に水銀朱付着。棺おさえ粘土。）
4．地山（風化岩盤層。上面に水銀朱の散布がみられる。）





C-D ベルト土色
E-F

1．	にぶい黄色	2.5Y6/3	粘土（粘土棺床。）
2．	にぶい黄色	2.5Y6/3	粘土（粘土棺床。水銀朱が部分的に混入。）
3．	にぶい黄色	2.5Y6/4	粘土（粘土棺床。部分的に水銀朱が混入。5層よりやや粒子粗い。）
4．	赤色	10R5/8	（やや粘土粗い。水銀朱がブロック状に混入。2層より水銀朱の含有が多い。）
5．	赤色	10R5/8	粘土（水銀朱の影響で赤く染まる。7層よりやや粒子粗い。）
6．	にぶい黄橙色	10YR6/4	粘土（粘土よりやや粒子粗い。上面水銀朱付着。）
7．	にぶい黄色	2.5Y6/4	粘土（棺おさえの粘土。上面に水銀朱付着。）
8．	赤色	10R5/8	粘土（やや粒子粗く砂質強い。水銀朱多く含む。）
9．	赤色	10R5/8	粘土（やや粒子粗い。水銀朱がブロック状に混入。）
10．	にぶい黄色	2.5Y6/4	粘土
11．	橙色	5YR6/6	粘土（やや粒子粗い。水銀朱の影響受ける。）
12．	赤色	7.5R4/8	粘土（ややシルト質。水銀朱層、粘土層の間に縞状に混入。）
13．	赤色	10R5/8	粘土（水銀朱に染まる。5層よりやや水銀朱の影響大。）
14．	にぶい黄色	2.5Y6/4	粘性砂質土（棺床端部粘土。粘性強いが粒子やや粗い。上面に水銀朱付着。）

※一線は水銀朱（赤色　7.5R4/8　粘土）を表す。
※副葬品出土状況図中の番号は遺物実測番号と対応。

0　2m

第18図　SM1002竪穴式石室内副葬品出土状況および粘土棺床土層断面図

副葬品とその出土状況

副葬品

石室内からは多くの副葬品が出土しているが、玉類はみられない。竪穴式石室は部分的に崩壊しており、石室内には大量の石室石材の礫が崩落していた。崩落礫は床面まで達しており、遺物は破損しているものも少なくないため、報告書掲載遺物以外にも器種判別および実測に至らなかった鉄小片もある。

なお石室床面直上まで攪乱土が堆積し、蓋に相当する石材は遺存していないこと及び棺床に明瞭な攪乱が及んでないことを考慮すれば、石室上面は木蓋構造で、鉄鏃などの鉄器群、土器類が上面に安置されていた可能性は残る。

（1）棺内副葬品（第18図）

棺内北小口から130cm南にかけての範囲で鉄鏃43点・鉋1点・鉄剣1振・斧状鉄器1点・鉄片22点が検出された。玉類はない。鉄鏃は棺北側に散在しており、原位置を遊離しているものとみられる。鉄鏃は4～6点が錆着し固まって検出されたものもあり、鏃身が平坦に揃っていることから、靫に納められていた可能性もある。鉄鏃の出土状況から棺上に置かれていたものが散在したと考えられる。棺床からは靫の痕跡は確認できなかった。鉄剣は棺床中央部、棺北小口から50cm南で切先を北に向けた状態で検出した。鉋は棺北小口より50cm南から100cm南にかけての範囲に破損した状態で散在していた。北小口から105cm南の棺中央部では鏡面を上にした完形の青銅鏡1面が検出された。転落したと推定される結晶片岩礫と鏡外縁部が接し、僅かに傾斜した状態が認められた。鏡面の水銀朱の付着状況から棺内に鏡背を上にして被葬者の頭部北側に置かれていたと考えられる。

なお検討を要するが、棺床部分は後世に攪拌された可能性があるが、棺床に明瞭な攪乱が及んではいない。このことを考慮すれば、竪穴式石室の項で述べたが、石室上面は木蓋構造で、副葬遺物である鉄器群、土器類が上面に安置されていた可能性は残る。

青銅鏡（斜縁上方作銘獣帯鏡）（第19・20図）

面径12.5cm、重量約157.6g、縁高0.5cmの斜縁上方作銘獣帯鏡である。縁頂部径12.1cm、界圏頂部径9.1cm、厚さは内区外縁で1㎜、内区の図像のない部分で0.7㎜、外区1.5㎜である。縁部斜面幅は6㎜である。遺存状況は良好で、鏡面及び鏡背面ともに濃緑灰色の色調を呈し、黒味を帯びた白銅質の柔らかい金属光沢をもつ。鏡面及び鏡背面外区の一部に水銀朱が付着する。外区の一部を欠損するが、完鏡副葬されたものとみられる。類似例に広島市中小田1号墳出土鏡、島根県松本1号墳出土鏡、長野県中山36号墳出土鏡などがあり、銘文・図像構成など、広島市中小田第1号古墳出土鏡（潮見 1980・古瀬 1999）が最も類似している。

鏡背面の図像は精緻だが、やや浅い。きめの細かい均一な鋳肌を呈し、鋳上がりも良好であるが、銘帯「乍」上部から内区に向けて、及び「真」の右から外区上方に向けて弱い溶笵の傷が認められる。

鋳造後の研磨は、鏡面、外縁、外区、内区、乳、鈕に施されている。図像の隆起部、突線は弱い研磨が施されたのか、あるいは手擦れか判然としないが、黒ずんで光沢があり、鏡背の文様はやや曖昧な印象を受ける。

鏡背面の文様構成

鏡背の文様構成は、中心に半球形の鈕を置き、その周囲に鈕座があり、鈕の外周に有節突圏帯を巡らせる。内区主文部は円座をもつ小乳で六区画し、その間に半肉彫の神仙・禽獣を配す一仙五獣の構成である。圏線を介して銘帯、さらに圏線を介して内区外周に櫛歯文帯で構成されている。外区には細い二条突線を挟んで二重に鋸歯文帯が巡り、さらに外周突線が巡り、短く立ち上がって斜縁となる。外区内側斜面は無文である。

鈕

半球形状を呈し、鈕径1.7cm、鈕高は鏡背面から0.85cmを測る。鈕孔は、銘文「上」・「工」を結ぶラインを起点にして、15°-265°方向に設けられ、やや上方に偏っている。鈕孔断面は縦0.35cm、横0.65cmの長方形で、その下辺は鏡背平坦面と同一レベルにある。孔縁は整えられ、丸みを帯び、図右側の孔縁は図左側の孔縁より幅が0.2cm大きくなっている。鈕座は外周に有節突圏帯を巡らせる。鈕座径3.25cm、鈕座高は鏡背平坦面から0.15cmである。

乳

乳は6個ある。半球形で円座を備える。乳の底径0.4cm、鏡背平坦面からの乳高は0.25cmである。乳の円座は0.9cm、鏡背面からの高さは0.1cmを測る。

内区図像

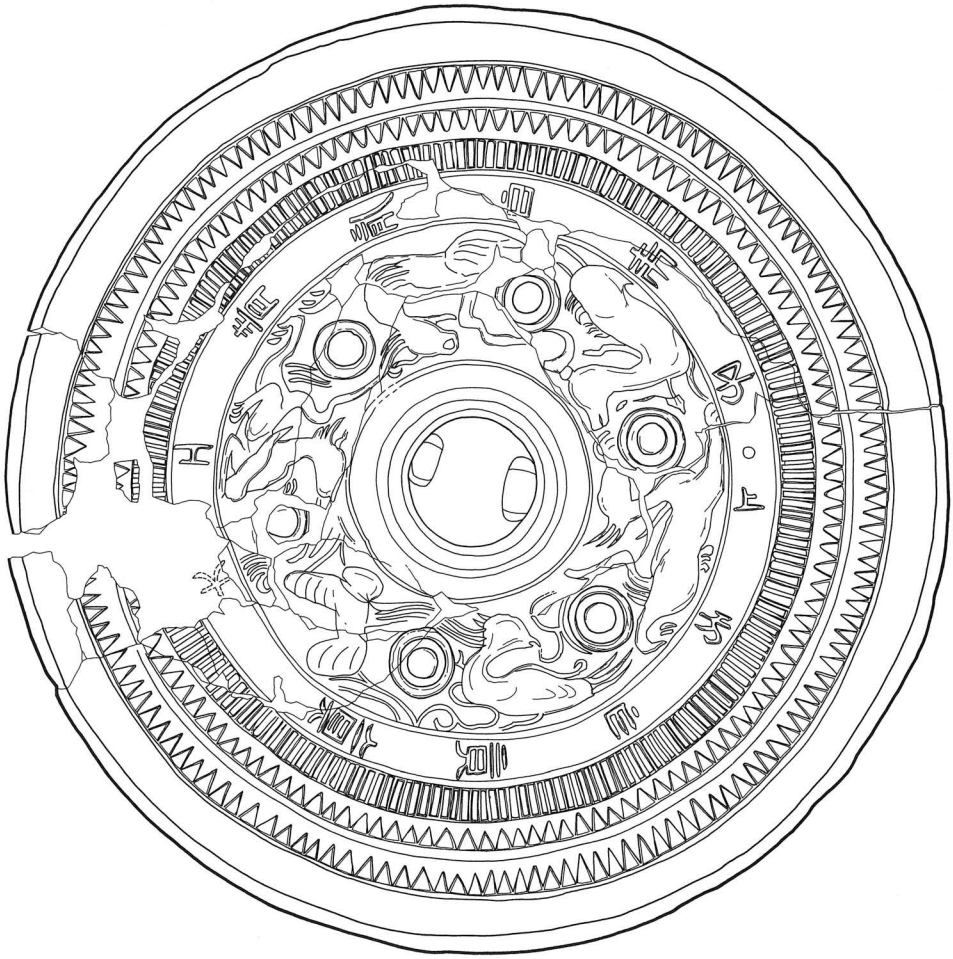
内区は円座をもつ小乳で六区画し、その間に半肉彫の神仙・禽獣を配す一仙五獣の六像式の構成である。六像は図左下より左回りに、神仙・禽・獣・鹿・龍・虎が配される。豢龍氏を表現したとみられる神仙は右を向いている。禽は左を向き、右を振り返っている。獣は右を向き、鹿は左向きで、小乳を挟んで向き合う格好となる。龍は右を向き、首は左を振り返っている。虎は右の向きである。図像の余白には雲気を表現したとみられる渦文で埋められている。

銘帯

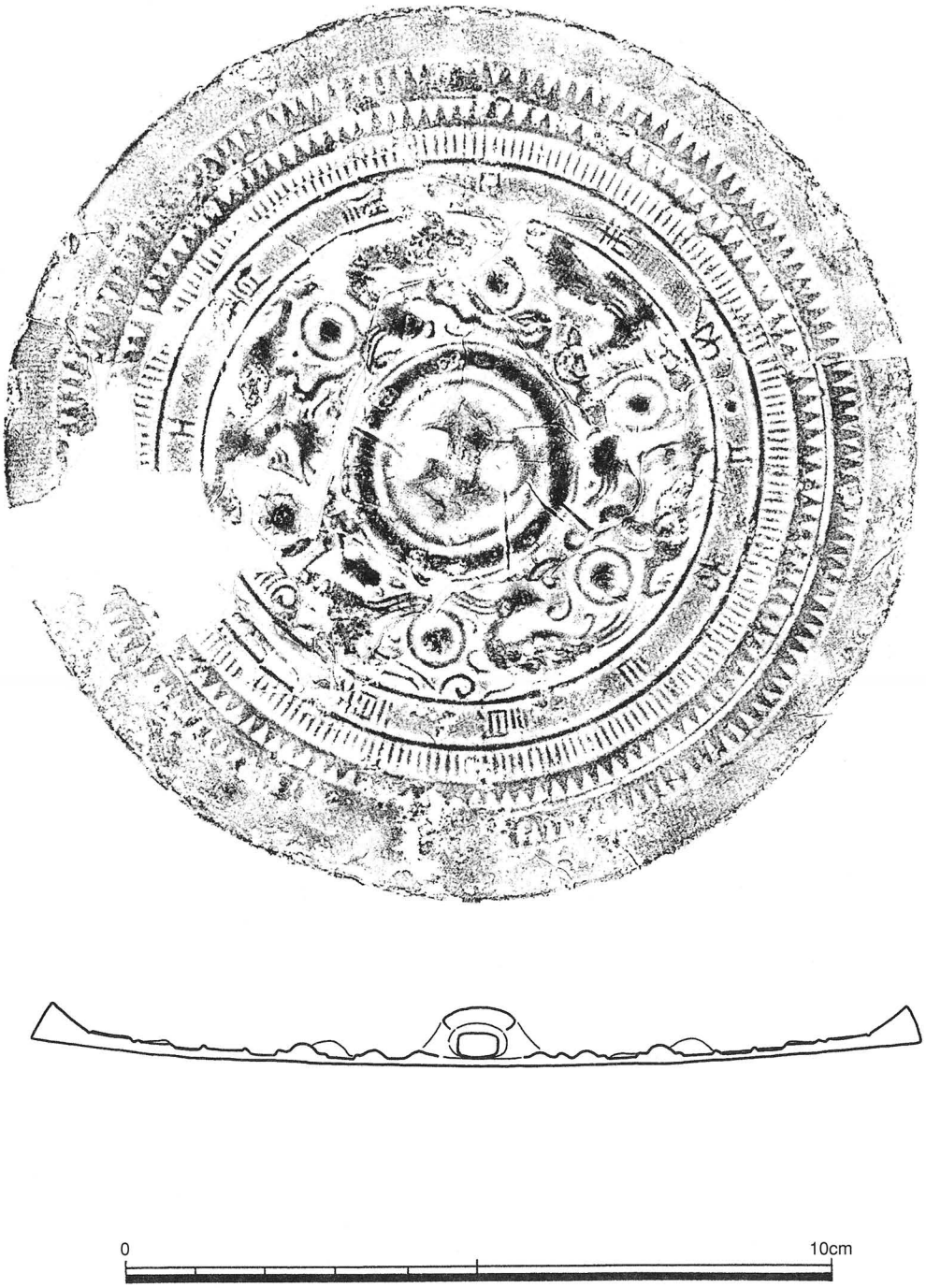
銘帯は幅0.55cmで、突線に挟まれている。一部欠損するが、銘文は図右からはじまり、右回りに「上方乍竟真大工青龍白虎子・」の12字で構成される。隷書風の角ばった書体で鮮明に鋳出されている。字の大きさは、「真」が高さ9㎜、「工」が高さ3㎜と開きがあるものの、他は4～6㎜程度に収まり、「竟」、「真」、「大」の間を除けば、字間もほぼ揃っている。

外区

外区は外向鋸歯文帯、細い二条突線、外向鋸歯文帯、外周突線で構成される。銘文「上」・「工」を結ぶラインを起点にして、内側の鋸歯文帯、外側の鋸歯文帯の左50°方向に鋸歯の乱れがみられ、施文の割付けの終始点と思われる。外縁内側斜面は短く立ち上がり、僅かに彎曲して外縁頂部に至り斜縁となる。外区内側斜面は無文で、研磨がよく施されている。



第19図　SM1002竪穴式石室出土　斜縁上方作銘獣帯鏡（S=1/1）



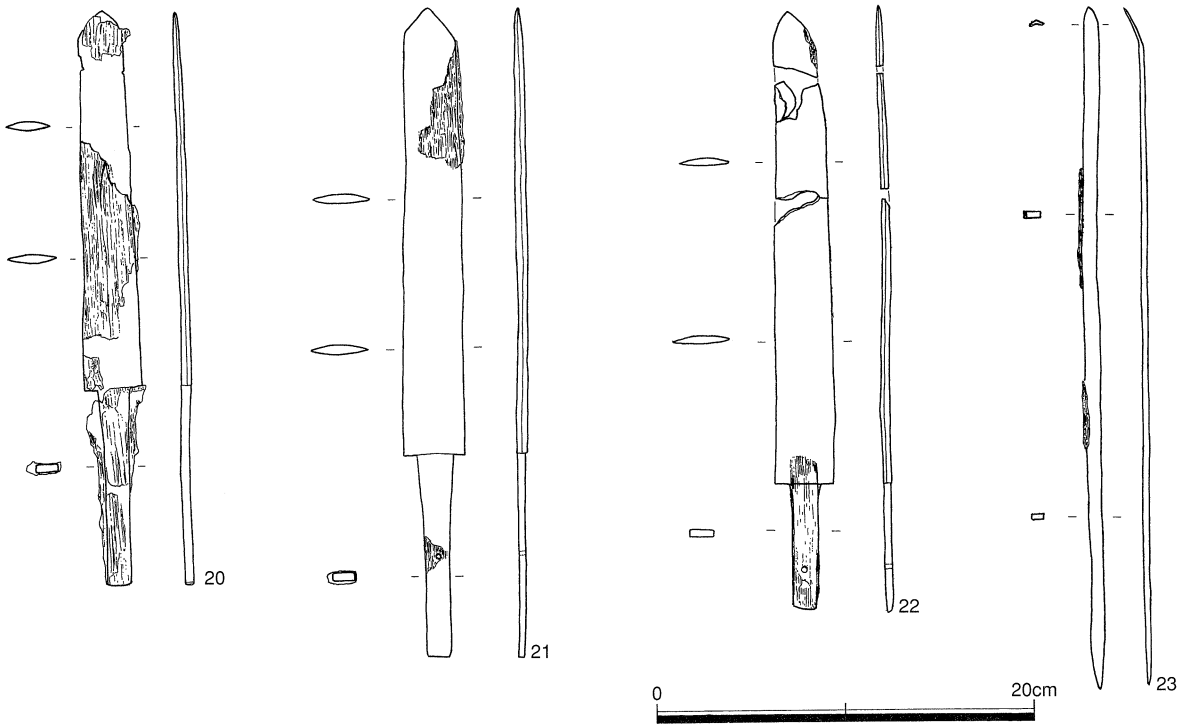
第20図　SM1002竪穴式石室出土　斜縁上方作銘獣帯鏡拓影

鉄　剣（第21図）

20は全長30.4cm、身の長さ20.0cm、身幅2.5cm、身の厚み0.5cm、茎の長さ10.2cm、茎幅1.5cm、茎の厚み0.4cmである。茎部に目釘孔は見られない。身には明瞭な鎬はなく、横断面は凸レンズ状を呈する。関は角関である。把口が関の部分で終わっており、短剣の可能性が高い。身・茎に木質が遺存しており、鞘・把などの装具を有する。剣の表・裏面には朱が多量に付着していた。

鉇（第21図）

23は全長36.1cm、刃部最大幅0.8cm、茎部幅0.7cm、厚み0.3cmを測る。鋒から1.9cmの範囲にのみ楕円形状の裏すきをもち、茎断面は長方形で薄い板状を呈する。基部から27.4cmの範囲まで部分的に縦位の木目をもつ木質が遺存しており、握り部が作られていたものと思われる。

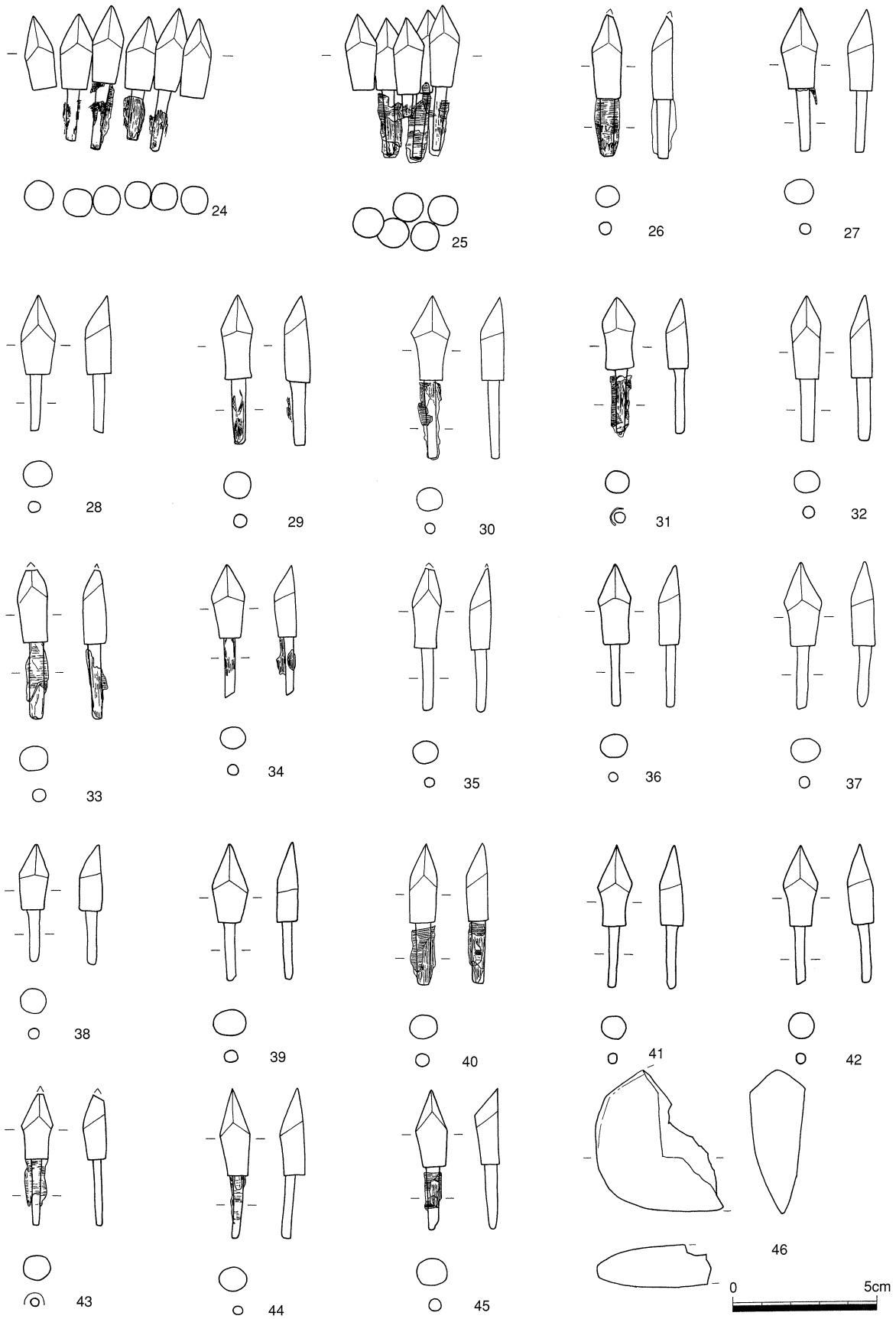


第21図　SM1002竪穴式石室出土鉄器 1

鉄　鏃（第22図）

鉄鏃は小片も含め、43点出土しているが、実測し得たものは31点であった。いずれも圭頭形鉄鏃である。片鎬造りで、鎬側には鋒から身にかけて「人」字形の研ぎが認められ、先端部の断面は三角形状を呈する。定角式鉄鏃に形態が似るが、鏃身・茎部とも断面形は円形を呈し、弥生時代石鏃の系譜をひくものではないと考えられる。茎部に付着する木質の観察によれば、茎部は直接矢竹に挿入後、樹皮によって巻かれ装着される。同形態は佐賀県西一本杉遺跡ST1008出土資料（松尾 1983）等にみられるが、全国でも希少なタイプのものである。西山谷２号墳のような多量副葬は初出である。この鉄鏃の系譜や発生の契機については明らかではないが、朝鮮半島や北部九州～西部瀬戸内にその出現の背景があるものと考えられ、弥生終末期～古墳時代初頭に出現するものと推測される。

全長4.6～5.6cm、鏃身長2.5～3.0cm、鏃身の最大幅1.0～1.4cm、茎長1.8～2.7cmに収まる。鋒部分の



第22図　SM1002竪穴式石室出土鉄器 2

長さは0.9～1.3cmで、鏃身長に対する比率は36.0～43.3％となる。関幅は0.7～1.0cmで、鏃身の最大幅に対する関幅の比率は70.0～71.4％である。茎端部の遺存状態のためか茎長にやや変差がみられるが、鏃身部の寸法は概ね規格性が高い。同様に鏃身部の形態についても規格性が高い。刃は直線的で、身の側縁部も直線的なものが主体を占める。鏃身の側縁部には、内彎しているものも見られ、形態のバリエーションとも考えられるが、鏃身の断面形が円形であることや鉄鏃の大半は寸法・形態に高い規格性がみられる事を考慮すれば、銹化による変形とみることが妥当である様に思われる。

鉄　斧（第22図）

46は鍛造の斧状鉄器で刃部と思われる。丁寧な鍛打により製作されている。小片であるため全体の詳細な形状は不明であるが、板状の形態を呈するものと考えられる。

（2）棺外副葬品（第18図）

石室北小口寄りの棺外、石室北小口から60cm南に、切先を北に向けた鉄槍2本が棺に沿うように検出された。石室南小口から60cm北中心に、直口壺1個体・甕3個体が検出された。内外面には水銀朱の付着が認められる。土器は粘土床に貼り付くように出土し、土器片の出土レベルはほぼ同一である。出土状況から破砕された後、棺上に副葬されたものとみられるが、なお検討の余地が残る。

石室上側面が持ち送り構造を示すことや棺床北小口周辺（頭部）に散在した鉄鏃、南小口周辺の土器の出土状態から、後世に攪乱を受けたものとみられる一方、鏡や剣、側壁際の鉄槍などは原位置を示している。

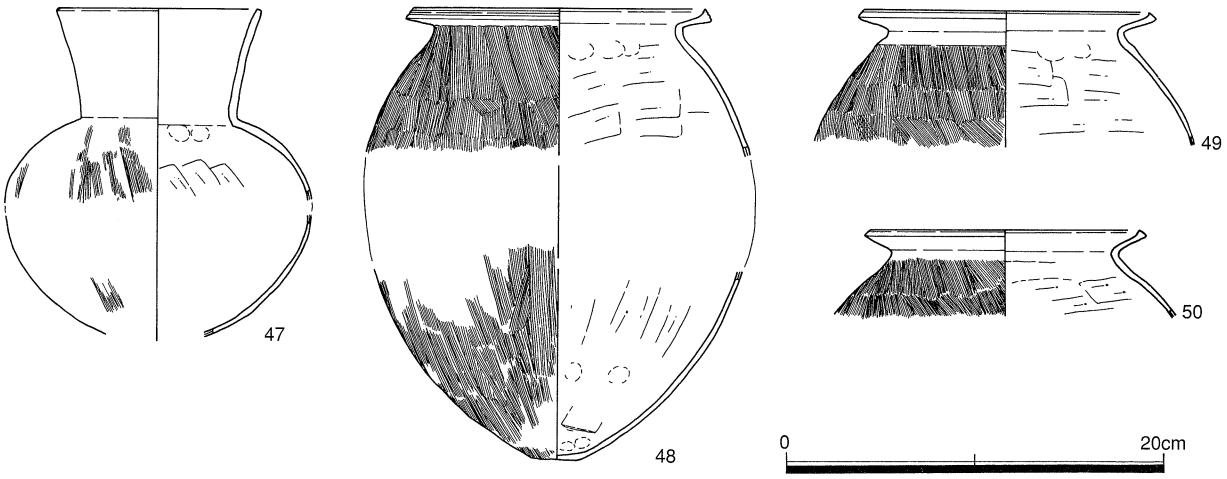
鉄　槍（第21図）

鉄槍は棺に沿うように2点出土している。21は全長34.4cm、身の長さ23.7cm、身の幅は3.2cmを測る。茎長10.7cmである。身の横断面は凸レンズ状を呈する。関は角関である。22は全長31.9cm、身の長さ25.3cm、身の幅は3.0cmを測る。茎長7.7cmである。身の横断面は凸レンズ状を呈する。茎部には1ヵ所目釘孔が認められる。関は角関である。

21・22ともに類似した形態を呈するが、一方は茎の長さが3.0cm短い。直線式の拵で、茎部4面に縦位の木目をもつ木質が遺存しており、関を越え刃部に達する状況も観察される。茎部4面を固くはさみ込み、柄に装着していたものと思われ、装着方法に弥生墳丘墓の副葬例などにみられる古段階の様相をみせる。また、身の部分にも一部木質が遺存しており、鞘に納められていたと思われる。

土　器（第23図）

直口壺（47）・甕（48～50）ともに胎土に結晶片岩粒を含む東阿波型土器で、色調は赤褐色である。体部外面は縦方向の細かなハケ、体部内面下半は縦方向のヘラケズリ、内面上位は横方向のヘラケズリを施し、器壁は薄く仕上げられる。体部内面上位及び内底面にユビオサエを施す。甕口縁部外面はヨコナデおよび２条の擬凹線を施すものがみられる。口縁端部のつまみ上げは小さいが、鋭く収める。底部は僅かに平底をとどめる。いずれも内外面に朱の付着を認める。時期的に徳島県の既往の編年では、阿波Ⅵ-3様式（黒谷川Ⅲ式）の年代に収まるものであり、概ね３世紀中葉頃の年代観が与えられる（菅原・瀧山 2000）。



第23図　SM1002竪穴式石室出土土器

（4）まとめ

東側尾根調査区で出土した古墳群は3号墳を除き、尾根を僅かに整形したもので明確な墳丘はない。時期的には古墳時代前期末～中期初頭に収まるものと考えられる。東尾根で確認された古墳群は石蓋土壙墓を除き、主体部は東西方向を志向しており、斉一性がみられる。

また本調査区は南北および東西に二股に分かれた尾根となっているが、それぞれの尾根において古墳の構築時期および古墳群の構成、主体部の主軸方向、占地など様相が異なる。このことは古墳築造集団が別の集団である、あるいは当該期の社会的規制に起因するものと考えられる。

2号墳における調査成果は、以下のとおりである。

竪穴式石室について

西山谷2号墳は、出土遺物などから最古級の板石積みの竪穴式石室をもつ。石室は長幅比が5：1で、いわゆる「長大型石室」に該当する竪穴式石室の最も古い例である。西山谷2号墳の竪穴式石室の構造が、直径20mの小規模な円墳に採用され、かつ古墳初現期の様相を呈することから、当該地域において畿内に先駆けて長大型の竪穴式石室を埋葬施設としてすでに採用されていたものと考えられる。

石室は南北主軸である。本県では南北主軸の埋葬施設は蓮華谷2号墳・上板町安楽寺谷1号墳などの円墳にとどまらず、前方後方墳の徳島市奥谷1号墳にもみられる。四国の前期古墳の多くは埋葬施設を東西方向に作るが、2号墳は畿内の多くの古墳と同じ南北方向である。石室の板石積みも、4世紀以降の畿内勢力との特に強い結びつきを窺わせるが、むしろ四国勢力が畿内勢力に影響を与えたとも考えられるものの、現段階では推測の域をでない。四国東部（阿讃地域）の前期古墳の埋葬頭位については東西主軸の優位が指摘されてきた（天羽・岡山 1982）。ただし、墳丘主軸と主体部の軸関係については、阿波と讃岐地域では明瞭な差異がある（福永 1990）。阿波において讃岐地域に通有な主軸斜行主体を厳守するのは、萩原1号墓と萩原タイプの築造規格をもつ奥谷2号墳の2例にすぎない。全体として東西軸規制は緩やかであり、東西主軸の優位性は中期まで継続するが、南北主軸をもつものが点として分布する。東西主軸の規制範囲を讃岐地域と親縁関係をもつ階層と捉えられるかどうかについては、東西主軸を志向する古墳群の規制程度とその階層範囲、南北主軸の古墳被葬者との格差程度については、副葬品の組成を含めて、さらに検討が必要である。

西山谷2号墳の竪穴式石室の裏込めは墓壙の壁際まで行われ、石室壁体の構築と併行して行っている。結晶片岩を大量に用いており、竪穴式石室外周に墓壙を覆う石積みがある。本石室構築法に類似するものとして徳島市宮谷古墳（一山他1992）の竪穴式石室がある。墓壙壁に石室を築くのと同様に石を積み、さらに墓壙内に結晶片岩の板石で控え積みをしている。本石室は整備された囲み壁形状ではないが、見かけ上、宮谷古墳の竪穴式石室形状に類似した形態をしている。本石室は、鳴門市萩原1号墓や香川県石塚山2号墳にみられる石室壁体構築と墓壙石積みが同時に行われる石積み墓壙壁構築法にも通じる石室構造を呈する。これは阿讃積石文化圏の在地的要素を反映したものとみられる。安楽寺谷墳墓群では、すでに庄内式併行期の砂岩礫積みの竪穴式石室墓が同様の構造を採用しており、在来的な要素を反映したものとみることができる。

西山谷2号墳の埋葬施設に採用された竪穴式石室は、阿波における結晶片岩板石を使用した長大型石室として初現である。後続して前方後円墳の徳島市宮谷古墳の竪穴式石室が出現する。いずれもU字形に掘り凹む粘土棺床をもち、割竹形木棺を安置していたとみられるが、墓壙基底部の構造については、

西山谷２号墳は墓壙基底をＵ字形に掘り込み、粘土棺床を設置するのに対し、宮谷古墳は平坦な墓壙基底に粘土棺床を設置する構造の違いが認められる。両者の竪穴式石室の構造は、古墳出現期～前期前半の構造的特徴を表すものといえる。また西山谷２号墳の時期は、大和地域で板状石材を使用する長大型石室をもつ中山大塚古墳（前方後円墳132m）と併行する段階であり、また基底部構造については吉備地域の弥生墳丘墓に出現しており、西山谷２号墳の竪穴式石室は吉備地域の影響下で成立したことも想定されるが、なお検討を要する。

西山谷２号墳の竪穴式石室は、阿讃地域の伝統的な埋葬手法を受け継ぎながら、古墳の成立要件である竪穴式石室も築きあげたものと思われる。前方後円墳の成立とともに竪穴式石室の基底部構造において、粘土棺床と礫石の使用を埋葬施設の成立に必備としたものと比べれば、石室基底部の礫床や排水溝の整備などの諸要素を欠いている。これらは松山市朝日谷２号墳や妙見山古墳、香川県鶴尾神社４号墳の棺床構造にみられ、四国の前期古墳の在地的な棺床構築法と考えられる。当該地域内を律する秩序の地域性を表徴するものとして評価すれば、本石室は古墳の形式が定型化しつつある過渡期のものと解釈することができよう。

副葬品について

西山谷２号墳は円墳でありながら、各地の初現期（４世紀頃）の前方後円墳と比べても遜色のない埋葬施設（長大型竪穴式石室）や副葬品（中国鏡の完鏡副葬・鉄器の大量副葬・朱の使用）を有している。

西山谷２号墳は出土土器から３世紀中頃の年代が与えられる。やや不整形な小規模円墳であり、葺石ももたない。副葬品の組み合わせは、上方作系浮彫式獣帯鏡・武器類（鉄鏃・鉄剣・鉄槍）・工具類（鉇）および土器類（壺・甕）の４品目である。剣や槍とした鉄器類は茎の形態を中心にやや規則性に欠け、多様性がみられる。玉類の副葬はみられないが、質・量ともに畿内・瀬戸内地域の前方後円墳と比較して、なんら遜色のない内容である。また初現期の古墳には副葬品に玉類を欠く事例がみられるが、２号墳においてもそれが追認された。

西山谷２号墳の構築時期については、すでに先述しているが、出土した土器による編年などから、３世紀第３四半期に収まる築造とみられ、徳島市宮谷古墳（前方後円墳37.5m）、板野町蓮華谷２号墳（徳島県埋蔵文化財センター1994）に先行する徳島県最古の古墳である。西山谷２号墳は、萩原１号墓直後型式の年代観が与えられ、長大型石室の最古例である。石室の構築年代については、棺外副葬品として出土した土器からみて既往の編年では、黒谷川Ⅲ式（菅原 1986）、『弥生土器の様式と編年　四国編』阿波地域Ⅵ-3様式に収まるものであり、布留０式までは下らないと考えられる。阿波地域Ⅵ-3様式（黒谷川Ⅲ式）は従来、弥生時代終末期最新相に位置付けられてきたが、古墳時代最古様式に修正されている（菅原 2000a）。当該時期は板状石材を使用する長大型の竪穴式石室をもつ首長墓が築造される時期であり、大和地域の中山大塚古墳（前方後円墳132m）と併行する段階のものと思われる。

鳴門市大麻町から板野町にかけての阿讃山脈南麓に構築された前期古墳には、中国鏡の副葬が卓越するという特徴がある。鳴門市萩原墳墓群１号墓（画文帯神獣鏡）、天河別神社古墳群４号墳（斜縁二神二獣鏡）、板野町阿王塚古墳（画文帯神獣鏡）などで出土例がみられ、今回の調査でもその傾向を裏付ける成果が得られた。

西山谷２号墳出土鏡は、斜縁上方作銘獣帯鏡の最も古い完鏡の古墳副葬例のひとつとみられ、広島市中小田１号墳出土鏡、島根県松本１号墳出土鏡、長野県中山36号墳出土鏡などに類例がみられる。

中国鏡の入手は、畿内の中央政権からの一元的な配布として、従来、一般的見解として認知されてきた。つまり、製作地（中国大陸）から、朝鮮半島（楽浪・帯方郡）を経由して、畿内中央政権より、地方首長に配布されたという流れで理解されてきている。

漢鏡７期の画文帯神獣鏡を主とする鏡群については、瀬戸内東部から畿内に集中し、前方後円墳（高規格の古墳）に完鏡副葬される。これに対し、漢鏡７期の上方作系浮彫式獣帯鏡などの鏡群は、九州から近畿にかけて破鏡が多く存在し、その広い地域で完形の鏡が比較的均等に分散されている。また畿内から配布されたと考えられる碧玉製腕飾類を伴わない、規格の低い古墳からの出土が多いとしている（岡村 1992）。西山谷２号墳も直径20m 前後の円墳であり、墳丘の規模・形状からは高規格の古墳とは言い難く、規格の低い古墳から出土する傾向と一致する。

このことから画文帯神獣鏡は畿内の中央政権から地方への一元的な配布であり、これに対し、上方作系浮彫式獣帯鏡などの鏡群は、畿内の中央政権を介さずに従前からの流通体系に従って大陸・半島より流入したのではないかと考えられ、鏡の年代差については、上方作系が画文帯より先行すると考えられる（岡村 1992）。上方作系浮彫式獣帯鏡は、２世紀後半の製作から間もない頃、畿内中央政権の形成とその政治的連携や政治的浸透力の拡充に先立って、在地の首長のもとに流入したものであると考えられる。

西山谷２号墳から出土した鉄鏃は、鏑側には鋒から身にかけて「人」字形の研ぎが認められ、先端部の断面は三角形状を呈する。定角式鉄鏃に形態が似るが、鏃身・茎部とも断面形は円形を呈し、弥生時代石鏃の系譜をひくものではないと考えられる。茎端部の遺存状態のためか茎長にやや変差がみられるが、鏃身部の寸法・形態は概ね規格性が高い。刃は直線的で、身の側縁部も直線的なものが主体を占める。同形態は佐賀県西一本杉遺跡 ST1008出土資料（松尾 1983）等にみられるが、全国でも希少なタイプのものである。西山谷２号墳のような多量副葬は初出である。この鉄鏃の系譜や発生の契機については明らかではないが、朝鮮半島や北部九州～西部瀬戸内にその出現の背景があるものと考えられる。時期的には弥生終末期～古墳時代初頭に出現するものと推測され、有稜系の定角式鉄鏃に先行する段階のものと思われる。

鉄鏃の他、武器類として副葬されたものには鉄剣・鉄槍がある。矛はみられない。前方後円墳成立期（３世紀中葉）には、朝鮮半島においては長兵として、これらの短剣形武器は衰退し、矛が主体となっており、当該期の短剣形武器の多くは国産品であるとみられている（村上 1998）。その製作地としては、鍛冶・鉄器製作技術の高い地域であった北部九州～西部瀬戸内にかけての地域が想定され、流通したものと考えられる。

大陸あるいは西方からの文物は、従前からの流通体系により各地域の首長が直接入手していたが、首長連合が進み、王権が誕生する契機となった。各地域の首長は、大和地域を中心とする畿内中央政権の傘下に入り、物資や情報の流通体系の一元化が行われたものと考えられる。その表徴のひとつとして畿内的前方後円墳が全国的に造られるようになるが、上方作系浮彫式獣帯鏡は大和政権とよばれる中央権力が畿内に形成される以前に流入し、その入手にあたって大和政権は介在しておらず、地方首長が独自に入手していたと想定され（岡村 1992）、国家形成（成立）以前に各地に現れた権力者が独自に入手したものと考えられる。西山谷２号墳の被葬者についても、そうした首長の１人であったことが想定され、最新の鉄製品の導入などからも窺われる。

出土土器について

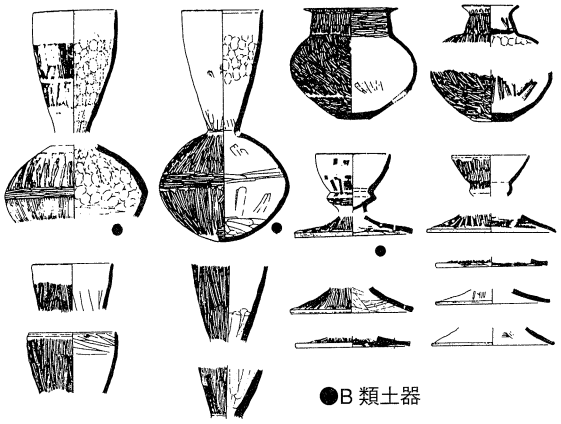
西山谷２号墳から出土した壺・甕の４点の土器については、時期的および特徴的なものについては本文中でふれられているように黒谷川Ⅲ式に相当する。

ここで本文との繰り返しをおそれずに西山谷２号墳出土土器の特徴についてみてみると、47の直口壺は胴部の最大径をやや高い位置にもつ。底部を欠損するが、おそらく突出気味の丸底を呈するものと思われる。48～50は東阿波型の甕である。48の口縁部は短く開きつまみ上げた端部は顕著に肥厚する。このつまみ上げることによってつくり出された平坦面は明瞭であり、擬凹線を２条施している。さらにこれと同一個体とみなされる下半部には、わずかに平坦面をとどめる底部が認められる。一方、49・50は48に比べると口縁部がやや長く開き、口縁端部はつまみ上げるものの肥厚は弱く平坦部は狭く擬凹線も明瞭ではなくなる。このような甕口縁部の形態差はそのまま時期差を示すものと考えられ、後者が若干新しい様相を呈しているといえる。しかし、いずれも口縁端部のつまみ上げは小さいがシャープになるとした黒谷川Ⅲ式の範疇におさまるものであり、新しい様相を呈しているとした49・50の２個体において下半部が残存していないため決定づける要素は不十分であるが、口縁部の特徴から黒谷川Ⅲ式の中でもやや新しくⅣ式に近い様相をもつものであると考えられる。

以上、西山谷２号墳出土土器の特徴についてふれてきたが、ここで、西山谷２号墳と同時期もしくはこれに前後する墳墓あるいは古墳から出土した土器についてその特徴などについて比較を行ってみることにする。

まず西山谷２号墳に先行する墳墓としての土器は、鳴門市所在の萩原１号墓出土土器があげられる。これらの土器類は、主体部上面の白色円礫中に集積されていたと考えられている小型の精製土器と墳丘上面や周溝内から大型の壺などである。小型精製土器にはＢ類細頸壺、台付小型丸底壺、小型広口壺がある。Ｂ類細頸壺は口縁部が内彎する形態をもつ。その内彎の程度は後述する香川県鶴尾神社４号墳出土土器（渡部・藤井 1983）よりも緩やかで、最大径は胴部中位にあり球形を呈する。底部は平底の痕跡をわずかにとどめる。口縁部と同一個体ではあるが接合しない胴部のみの出土土器は最大径を中位にもつが、わずかに扁平化する兆しがみられる。また、小型広口壺では胴部上半から中位に最大径をもち、下半のふくらみはまだみられない。これらの点から萩原１号墓出土土器は、黒谷川Ⅱ式段階に比定することができる。また、墳丘および周溝から出土した大型の土器群はいずれも明確な平底を有するものであり、小型精製土器と時期的には差はないものと考えられている。

この後、萩原１号墓出土土器と西山谷２号墳出土土器との間を埋める時期の土器は阿波地域の墳墓からはみられない。そこで、萩原１号墓に後出する墳墓としては、竪穴式石槨をもつ前方後円墳である鶴尾神社４号墳があり、その石槨周辺から出土した土器群が検討材料としてあげられる。

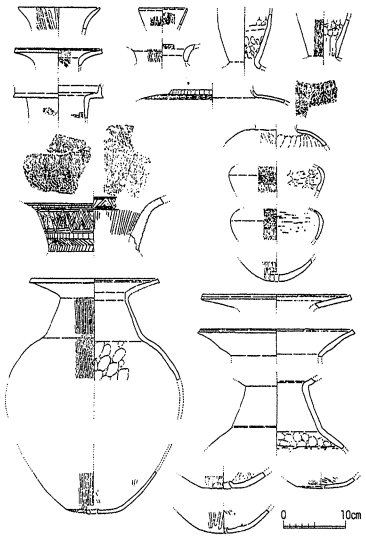


萩原墳墓群１号墓出土土器

西山谷２号墳出土土器と鶴尾神社４号墳出土土器の先後関係については菅原康夫氏と大久保徹也氏による論考に代表される。菅原氏は鶴尾神社４号墳石室南側墳頂部から出土した東阿波

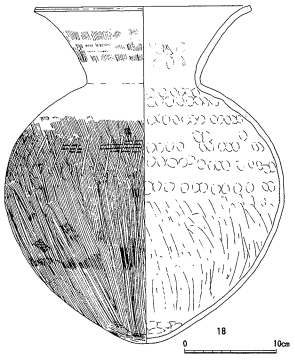
型模倣土器が黒谷川Ⅳ式に比定でき、これが布留０～１式に相当されること、そして鶴尾神社４号墳と同時期とされる香川県丸井古墳出土の甕における口縁端部をつまみ上げる特徴が、黒谷川Ⅲ式においても後出する要素であるとすることなどから鶴尾神社４号墳出土土器と黒谷川Ⅲ式の接点は微妙であるとしつつ西山谷２号墳が鶴尾神社４号墳に先行するとしている。（菅原 2001）

一方、大久保氏は鶴尾神社４号墳出土土器のなかの細頸壺を編年の指標とし、これに郡家原遺跡 SD158、六条上所遺跡 SK01出土土器を比較資料とし、讃岐⑥段階に位置づけている。大久保氏の言うこの讃岐⑥段階は阿波地域の編年に比定すると黒谷川Ⅱ式とⅢ式の間に位置し、黒谷川Ⅲ式は讃岐⑥段階よりも新しい讃岐⑦段階に並行するとみることから、黒谷川Ⅲ式の時期でも新しい段階に位置する西山谷２号墳出土土器は鶴尾神社４号墳出土土器に後出する（大久保 2002）という、菅原氏とは逆の見解に達している。



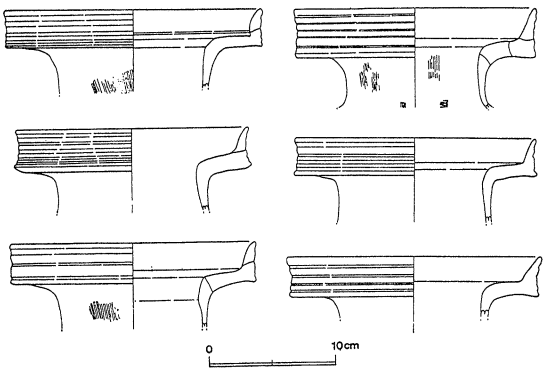
鶴尾神社４号墳出土土器

次に西山谷２号墳より若干遅れる古墳に、上板町所在の蓮華谷古墳群（Ⅱ）２号墳出土土器（須崎 1994）があげられる。出土土器には東阿波型土器の広口壺があり、石室南小口外側において口縁部を東側に向け横倒しの状態で出土している。胴部最大径はやや高い位置にあり、倒卵形を呈する。底部は突出気味の丸底であり、胴部内面上半はユビオサエ、下半はヘラケズリを施すなど技法の面においても東阿波型土器の様相を色濃くとどめる。口縁端部は方形におさめられ擬凹線も明瞭ではなくなってきており、口頸部の境もなくなっている。これらの点から西山谷２号墳出土土器よりも後出するものとみてよいであろう。



蓮華谷古墳群（Ⅱ）
２号墳出土土器

最後に西山谷２号墳に後出する古墳として徳島市所在の宮谷古墳出土土器がある。西山谷２号墳出土土器と共通する器種の出土がなく全体を復元できるものはないが、二重口縁壺が複数個体出土している。この二重口縁壺の口縁部はいずれも直立して立ち上がり、外面には複数条の凹線を巡らす。この特徴をもった形態は黒谷川Ⅱ式段階に出現し、続くⅣ式において盛行する。このような点とあわせて宮谷古墳出土土器は、口縁部がほぼ垂直に立ち上がり折り返しも直角に近いことから黒谷川Ⅳ式段階に含まれるものと考えられる。



宮谷古墳出土土器

以上、西山谷２号墳出土の土器に前後する阿波地域を中心とした墳墓出土の土器についてみてきた。上記のように西山谷２号墳出土土器は、萩原１号墓出土土器に後出し蓮華谷古墳群（Ⅱ）２号墳出土土器、宮谷古墳出土土器に先行し黒谷川Ⅲ式段階に位置することはほぼ確定できる。しかし、西山谷２号墳出土土器の

位置づけをより確定的なものとするためには、黒谷川Ⅲ式と鶴尾神社４号墳出土土器との前後関係をより詳細に分析する必要がある。

一方、これら供献土器の出土状況についてみてみると、西山谷２号墳出土土器は石室南西側に集中して出土しており、木蓋上面に安置されていたと考えられている。しかし、直口壺を除きいずれの甕も細かく破砕されていることから、葬送儀礼に際し棺を安置し、閉蓋時点で破砕した土器を南西側に重点的に散布するという行為が行われていたと想定できる。また小型精製土器（加飾食器）を伴わないこと、さらにいずれの土器片にも朱の付着が認められることなどから、飲食儀礼を行わないが朱の散布は遂行するという行為もあわせて考えられる。しかし、土器に付着した朱については棺床に散布されたものが付着したのか朱を塗布した土器を供献したのか、それとも葬送儀礼に際し供献土器を朱の器としていたのか検討の余地が残る。

萩原１号墓では、方形区画の４隅に土器を供献するという行為が確認されており、またその器種・量とも豊富である。鶴尾神社４号墳においても焼成前穿孔し儀器化した供献土器を破砕し埋葬施設周辺に置いており、その器種・量の豊富さは同様である。ところが、西山谷２号墳に後出する蓮華谷古墳群（Ⅱ）２号墳では広口壺１点を横倒しにした状態で安置されており、西山谷２号墳よりさらに土器の供献に対しての行為が矮小化している。

以上のように墳墓出土の土器形式とその出土状況などを合わせて考えてみると、西山谷２号墳は土器の破砕や朱の散布、小型精製土器を伴わず器種の限定・少量化という方針がとられていたことが看取できる。つまり、西山谷２号墳に先行する萩原１号墓や先後関係が微妙な鶴尾神社４号墳などにはみられない新しい要素を確立しているといえるのである。その一方で確立された新しい要素は、後出する蓮華谷古墳群（Ⅱ）２号墳に継承されていることは確実視できる。

以上土器の型式とその出土状況について概観してきたが、いずれも当該期の第１級資料であるため今後のさらなる検討に期待したい。

西山谷２号墳の位置付け

西山谷２号墳は古墳の形式化する過渡期、古墳のスタイルが確立する以前の段階ものと思われる。言い換えれば、畿内に核をもつ「古墳文化」の傘下にある、あるいは同盟的関係をもつことは認められるが、西山谷２号墳はその諸要素に自立性が確認されるため、西山谷２号墳における古墳の諸要素のすべてを畿内からの「配布」と考えることには疑問がもたれる。西山谷２号墳は、畿内で確立する古墳（長大型石室）構造を持ち、畿内中央政権の王墓の先駆けとなる古墳であった可能性がある。

阿讃山脈東南縁地域における最古の墳墓は萩原１号墓である。主体構造の再検討の結果、積石木槨という前方後円墳に継続しない埋葬施設を構築し、箱形木棺を安置していることを確認した（菅原 2000a）。墓上祭祀に伴う土器組成に吉備や讃岐地域との関連が窺え、特に萩原１号墓における積石低墳丘・狭小な突出部の付設、主体部上面への白色円礫の被覆や列石による墳丘区画は、阿波型弥生墳丘墓ととらえうるとしている（菅原 2000a）。萩原１号墓から西山谷２号墳への非連続性は、単一埋葬、多量の土器供献行為の欠落、白色円礫の不採用、竪穴式石室と刳抜式木棺の出現、完形鏡の副葬、鉄器の多量副葬などの点から、阿波地域における定型化古墳の境界線をここに設定することができるとしている（菅原 2000a）。

西山谷２号墳の竪穴式石室については概要項で述べたように、基底部形態はSC型式の構造を示す。

外周の石積みは墓壙壁に沿って貼り付けたような形状であり、石室上面を被覆する構築法であって、控え積みの機能を果たしていない。宮谷古墳でも結晶片岩板石を礫槨状に配した壁体が構築されており、西山谷２号墳と同様の手法が採られている。石室平面形態では、短小型に属する鶴尾神社４号墳とは構造・石室長幅比においても明瞭な相違があり、阿讃地域の最古式竪穴式石室に短小型と長大型（都出1986）の二形態が存在していることが窺える。西山谷２号墳の石材の多用と石室の被覆機能、特に裏込め上端における砂岩礫の併用は、萩原１号墓の木槨外周の方形区画列石（石囲壁）構築法の痕跡ともみなしうるもので、阿波における竪穴式石室出現過程を暗示するものといえよう。

石室石材に用いられている結晶片岩は、弥生時代終末期の萩原１号墓ですでに採用されており、結晶片岩を採用した竪穴式石室は西山谷２号墳で形態的にほぼ完成されている。以後、古墳主体部（埋葬施設）築造の石材として継承されていく。結晶片岩は埋葬施設に用いる石材として葬送観念の意味が持たされたとみられ、畿内の古墳にも用いられている（宇垣 1987）。

畿内中央政権は各地の墓制を取り込み、洗練させながら前方後円墳として古墳のスタイルを成立させたと思われる。西山谷２号墳は畿内の古墳の原形とまではいえないが、竪穴式石室の構築法で何らかの影響を与えたと十分に考えられる。西山谷２号墳はその構築時期および石室の形態から、瀬戸内東部地域で成立・発達した板石積みの石室が畿内に普及したとする説、畿内で成立する古墳構造の原形となったことの傍証・補強するものといえる。このことは竪穴式石室の成立過程を探る上で非常に意義深い。

当該地域は、列島各地を結ぶ水上交通の大動脈として機能していたと考えられる瀬戸内海に面し、古代の官道である南海道が設定されるなど、阿波と畿内、瀬戸内地域を結ぶ交通の要地であり、また内陸部への物流の主要な経路の一つであったと考えられる吉野川を一望できる立地であることなどから、西山谷２号墳は水上交通権を掌握した首長墓と位置づけることができる。

また東尾根の石室墓あるいは周辺に所在する石室には石室石材に砂岩を使用しており、副葬土器にも片岩の含有がみられない。西山谷２号墳は石室に吉野川南岸で採取される片岩板石を使用し、また鮎喰川流域で製作された土器を副葬していることなどから、２号墳の被葬者は当時、阿波の中心地だった鮎喰川流域から、この地域を掌握するために派遣された人物（派遣将軍）であったと推定される。片岩を使用した石室、鮎喰川流域で製作された土器は、当該地域では首長クラスの墓にしか用いられないと考えられる。このことは特定の階層の人物にしか使用できない社会規範が整っていたと考えられ、当該期の当地域に地域の政治と経済を掌握する首長の存在と権力構造が整っていたことが窺われる。

引用・参考文献

東　　潮　1986「鉄剣」『弥生文化の研究』９　弥生人の世界　雄山閣

天羽　利夫・岡山真知子　1982「曽我氏神社古墳群調査報告」『徳島県博物館紀要』第13集

一山　　典・三宅　良明　1992「徳島県徳島市宮谷古墳」『日本考古学年報』43　日本考古学協会

一山　　典・三宅　良明　1993「徳島県徳島市宮谷古墳」『日本考古学年報』44　日本考古学協会

宇垣　匡雅　1987「竪穴式石室の研究」考古学研究34-1・34-2

大村　　直　1986「鉄鏃」『弥生文化の研究』９　弥生人の世界　雄山閣

岡村　秀典　1990「卑弥呼の鏡」『邪馬台国の時代』

岡村　秀典　1992「浮彫式獣帯鏡と古墳出現期の社会」『出雲における古墳の出現を探る－松本古墳群シンポジウムの記録－』出雲考古学研究会

大久保徹也　2000「四国北東部地域における首長層の政治的集結－鶴尾神社４号墳の評価をめぐって」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部第14回大会

大久保徹也　2002「四国北東部地域における地域的首長埋葬儀礼様式の成立時期をめぐって」『論集　徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会

大西　浩正　1990『黒谷川郡頭遺跡Ⅴ』徳島県教育委員会

河上　邦彦　他　1999「黒塚古墳の発掘調査－奈良県天理市柳本町所在－」『日本考古学　第７号』日本考古学協会

菊池　芳朗　1996「前期古墳出土刀剣の系譜」『雪野山古墳の研究』考察篇　八日市市教育委員会

阪口　英毅　2005「第４章　副葬品の研究　６鉄製品　（１）武器　②鏃」『紫金山古墳の研究－古墳時代前期における対外交渉の考古学的研究－』京都大学大学院文学研究科

阪口　英毅　2005「紫金山古墳出土鉄鏃の構成と副葬状況」『紫金山古墳の研究－古墳時代前期における対外交渉の考古学的研究－』京都大学大学院文学研究科

潮見　　浩　編　1980『中小田古墳群』広島市教育委員会・広島大学文学部考古学研究室

下條　信行　他　1992『妙見山古墳発掘調査概報Ⅱ・埋葬施設編』大西町教育委員会・愛媛大学考古学研究室

杉山　秀宏　1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』８　奈良県立橿原考古学研究所

菅原　康夫　1986『黒谷川郡頭遺跡Ⅰ』徳島県教育委員会

菅原　康夫　1987『黒谷川郡頭遺跡Ⅱ』徳島県教育委員会

菅原　康夫・大西　浩正　1989『黒谷川郡頭遺跡Ⅲ・Ⅳ』徳島県教育委員会

菅原　康夫　1996「徳島県における前方後円墳成立前後」『中四研だより４号』中四国前方後円墳研究会

菅原　康夫・瀧山　雄一　2000「阿波地域」『弥生土器の様式と編年　四国編』

菅原　康夫　2000a「萩原墳丘墓をめぐる諸問題」『前方後円墳を考える―研究発表要旨集―』古代学協会四国支部第14回大会

菅原　康夫　2000b「Ⅲ　調査事業報告」『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol.12

菅原　康夫　2001「まとめ」『徳島県埋蔵文化財センター調査概報３　阿讃山脈東南縁の古墳群』㈶徳島県埋蔵文化財センター

須崎　一幸　1994『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告４　蓮華谷古墳群Ⅱ』㈶徳島県埋蔵文化財センター

都出比呂志　1986『竪穴式石室の地域性の研究』大阪大学文学部国史研究室

都出比呂志　1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』22号　史学篇

都出比呂志　1999「首長系譜変動パターン論序説」『古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究』大阪大学文学部

徳島県埋蔵文化財センター　1994「蓮華谷墳墓群（Ⅱ）」『徳島県埋蔵文化財センター報告書』第４集

徳島県埋蔵文化財センター　1995「安楽寺谷墳墓群」『徳島県埋蔵文化財センター報告書』第13集

徳島県埋蔵文化財センター　2001「阿讃東南縁の古墳群－四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査概報－」『徳島県埋蔵文化財センター調査概報』第３集

鳥居　龍蔵　1888「阿波国板野郡大谷村塚穴」『東京人類学会雑誌』3-24

丹羽　祐一　1991「香川県の前期古墳－事例－奥14号墳」『四国・瀬戸内の前期古墳』古代学協会四国支部第５回大会資料

奈良県立橿原考古学研究所「中山大塚古墳」『奈良県立橿原考古学研究所調査報告』第82冊
福永　伸也　1990「主軸斜交主体部論」『鳥居前古墳－総括編－』大阪大学文学部考古学研究室
古瀬　清秀　1999「広島県前期古墳出土の特徴ある青銅鏡について」『考古学から見た地域文化－瀬戸内の歴史復元－』渓水社
北條　芳隆　1999「讃岐型前方後円墳の提唱」『国家形成期の考古学』大阪大学文学部考古学研究室
松尾　吉高　1983「西一本杉遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財報告書』（3）佐賀県教育委員会
松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター　1998「朝日谷2号墳」『松山市埋蔵文化財調査報告書』第63集
水野　敏典　2003「日韓鉄鏃に見る相対年代観－古墳時代中期を中心として－」『新世紀の考古学－大塚初重先生喜寿記念論文集－』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会
村上　恭通　1998『倭人と鉄の考古学』青木書店
村上　恭通　1999「鉄製武器形副葬品の成立とその背景」『先史学・考古学論究』Ⅲ　龍田考古会
森　　浩一・伊藤　勇輔　1972『徳島県三好郡三加茂町丹田古墳調査報告』同志社大学文学部文化学科
山本　三郎　1992「竪穴系の埋葬施設」『古墳時代の研究』第7巻　雄山閣
渡部　明夫・藤井　雄三　1983『鶴尾神社4号墳調査報告書』高松市教育委員会
渡部　明夫　1994「四国の刳抜式石棺」『古代文化』46-6

3　石室の移設・保存と公開

（1）移設に至る経緯と経過

西山谷２号墳の保存についての具体的協議は、用地交渉で中断していた発掘調査再開の目途が立った平成11年11月に開始された。埋蔵文化財センターは当該古墳、特に石室の重要性から、文化財課に保存措置の検討を提案した。文化財課では、現地保存・移設、双方の可能性を追求しながら文化庁、中四国各県の調査遺跡保存の類例を取材する一方、高速道路推進局・JH 徳島工事事務所に可能性を打診、鳴門市教育委員会への状況説明と移設の場合の受け入れの可能性について打診した。しかし、石室の重要性は極めて高いが墳丘施設等は簡略であり、当時保存を要請する可能性がある遺跡調査に未着手であったことなどから、石室の移設保存を念頭において、平成12年２月文化財課・埋蔵文化財センターは JH 四国支社・徳島工事事務所、高速道路推進局と協議した。以後、工程や費用負担などの諸課題について検討を進めることとした。同時に、受け入れを打診された鳴門市は移設候補地の検討を開始した。３月９日には文化庁調査官が現地視察、重要性を確認した。翌日、調査着手したばかりの日開谷西古墳群（大代古墳）で前方後円墳が発見され、保存協議は並行して進められることとなった。年度が替わった４月３日、文化財課長名の文書で移設保存を依頼、翌日 JH 四国支社は、西山谷２号墳石室・日開谷西古墳群（大代古墳）と４月以降着手予定で保存を要請する可能性もあるカネガ谷東古墳群（カネガ谷遺跡）と西山田古墳群（Ｉ）を含め、路線全体の総合的な扱いのなかで判断したいという意向を示し、西山谷２号墳石室の取り扱いについては JH 徳島工事事務所に任せるかたちで調整した。翌日、JH 徳島工事事務所からは現地から搬出させる費用を負担する旨の回答があり、調査方針も確定した。

４月18日記者発表、20日以降大きく報道され、22日には移設保存の方針も報道された。23日の現地説明会には約800人の見学者があった。

その後 JH 徳島工事事務所は工事用道路の敷設計画・工程を示し、調査工程との調整を図るとともに、搬出先の決定期限が示されることとなった。地元大谷地区で急遽結成された「西山谷２号墳を考える会」が鳴門市長へ現地保存等を陳情、「西山谷２号墳の現地保存を求める要望書」が文化財課長宛に提出された。地元要望を受けた鳴門市教育委員会からも、「西山谷２号墳の保存に関する要望書」が JH 徳島工事事務所長と文化財課長宛に提出された。文化財課ではそれぞれに長短ある移設復元候補地を改めて検討した結果、保存の条件（設置基盤、温湿度・紫外線、維持管理）で優れている県立埋蔵文化財総合センターに移設復元する方針を決定した。文化財課長は鳴門市長を訪問して説明した。市長は県の方針を了承、同席した市教育委員会とともに関係者に説明し、了承を得た。

（2）竪穴式石室の搬出

石室の移設については、①現地での石室の保存処理作業、②梱包・切り取り作業、③搬出・仮置き、④石室の復元整備の各段階があり、①～③については、移設方針の決定した４月以降、搬出方法について具体的検討が続けられたが、搬出道路幅などの規制のため２分割で搬出作業を行う方針が確定した。各幅３ｍ、長さ３ｍ、高さ２ｍのブロック（各約30t）での切り取りとなる。現地説明会以後、並行して切り取りに対応した調査が進められた。準備作業として、切り取り部分以外の積石の平面実測と、レベリング、ナンバリング、写真記録を行った。搬出業務は６月28日付で㈱京都科学に委託し、以後石室

及び粘土棺床の保存処理、続いて梱包等の作業、切り取り、搬出作業により、県立埋蔵文化財総合センター敷地内に仮保管した。搬出経費は19,530千円であり、JHが負担した。

作業日誌抄

2000年

7月18日　石室移築作業準備。石室清掃等。

7月19日　移築作業開始。重機等搬入。石室切り取り位置打ち合わせ。石室積石・粘土棺床保存処理。分割部分型取り。

7月21日　粘土棺床保存処理。分割部分石室積み石取り外し。重機による墳丘裾カット。

7月22日　石室発泡ウレタン固定。

7月23日　石室分割部分切り取り。

7月24日　石室切り取り作業。横穴ボーリング掘削。

7月25日　H鋼組み付け。鋼材固定。

7月26日　石室鋼材固定。発泡ウレタン吹き付け固定。

7月31日　石室切り離し。鉄板圧入。

8月2日　鉄板圧入作業（石室切り離し）終了。石室搬出準備

8月3日　石室移動。重機により麓まで搬出。

8月10日　クレーンおよびトレーラーにより石室搬送。センター敷地内に仮保管。

（3）石室の復元整備

県立埋蔵文化財総合センターに移設復元する方針を決定して以降、文化財課と埋蔵文化財センターは復元整備工事の方法等について具体的検討を開始した。原位置に類似した建設位置、紫外線等に配慮した覆屋の形状、総合センターの整備拡充計画との調和などを念頭に、平成13年度当初予算要求、県土木部営繕課、板野町への依頼を行った。予算が承認され、平成13年度には営繕課・文化財課・埋蔵文化財センター等関係者で具体的な工事計画を検討した。設計については（有）堤建築設計研究室が、新設工事については（有）山本建設が、復元整備工事は（株）京都科学が受注した。石室の石組みが予想外の損傷を受けていたため、3ヶ月工期を延伸し、平成14年7月8日完工した。復元整備の総経費は28,500,000円であった。7月16日には板野町、鳴門市の関係者やJH徳島工事事務所長を招いて竣工記念式典が執り行われ、一般公開に至った。

作業概要

切り取った石室を、埋蔵文化財センター敷地内に予定した移設地点に搬入する。展示施設（鉄筋コンクリート製）枠組を設営し、石室復元作業にかかる。石室保護のための上部ウレタン除去後、中央部（切り取り部分）粘土棺床復元・石室周辺部裏込め・表面成形・中央部（切り取り部分）石室壁体復元・墓壙積石復元・墓壙上面葺石復元・粘土棺床復元の各工程を行う。

・対象面積　　約600㎡、うち石室復元約200㎡

・整備内容

1）竪穴式石室の露出保護展示

遺構保存のため、強化ガラス製覆いを設置する。石室内には結露防止のため換気設備を設ける。

2）墳丘および旧地形復元

墳丘および旧地形をイメージ的に復元するため、移設地点の整地・盛土を行う。

3）説明板等展示

カラー写真・図面を含めて調査成果等を解説するアルミ製説明板を設置する。

4）植栽

斜面保護および修景のため、芝・低木植栽を行う。

作業日誌抄

2001年

12月22日　石室移動。移築・復元場所に200tクレーンにて吊り上げ設置。

2月18日　石室復元作業開始。石室分割部分壁体および墓壙積石復元作業。

2月20日　墓壙の立ち上がり勾配の復元に問題。対荷重・耐久性など対応策検討。施工方法・作業工程見直し。

2月27日　墓壙復元方針案決定。セメント系土壌改良材、表面保護強化材、高密度発泡スチロール等を用いて復元。

3月11日　石室復元作業再開。

3月14日　石室復元作業約70％進捗。

3月16日　石室復元作業ほぼ終了。

3月18日　石室周辺清掃。墓壙擬土復元。粘土床樹脂含浸。

3月20日　石室移築・復元作業最終工程打ち合わせ。

3月29日　石室粘土棺床・積石クリーニング。副葬品レプリカ設置。石室移築・復元作業終了（石室部分）。周辺整備は後日実施。

7月16日　西山谷2号墳竪穴式石室屋外展示施設竣工記念式典。一般公開開始。

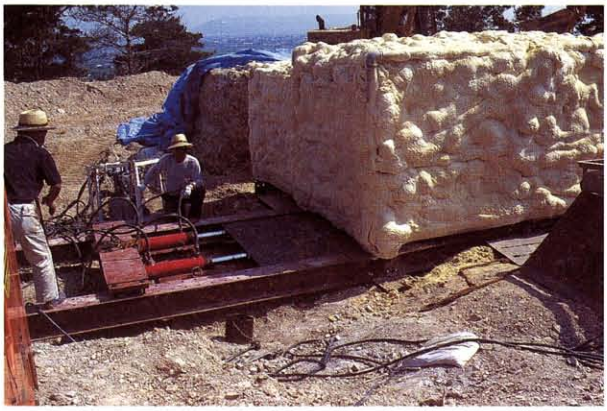
粘土棺床の保存処理

石室積石の保存処理

石室切り取り準備

横穴掘削

鋼材固定・ウレタン樹脂吹き付け



鉄板圧入

重機による搬出

クレーン積み込み

第24図　石室の移築・保存１

徳島県立埋蔵文化財総合センター内移築場所

クレーンによる石室の設置

展示施設枠組み

石室復元（壁体石積み作業）

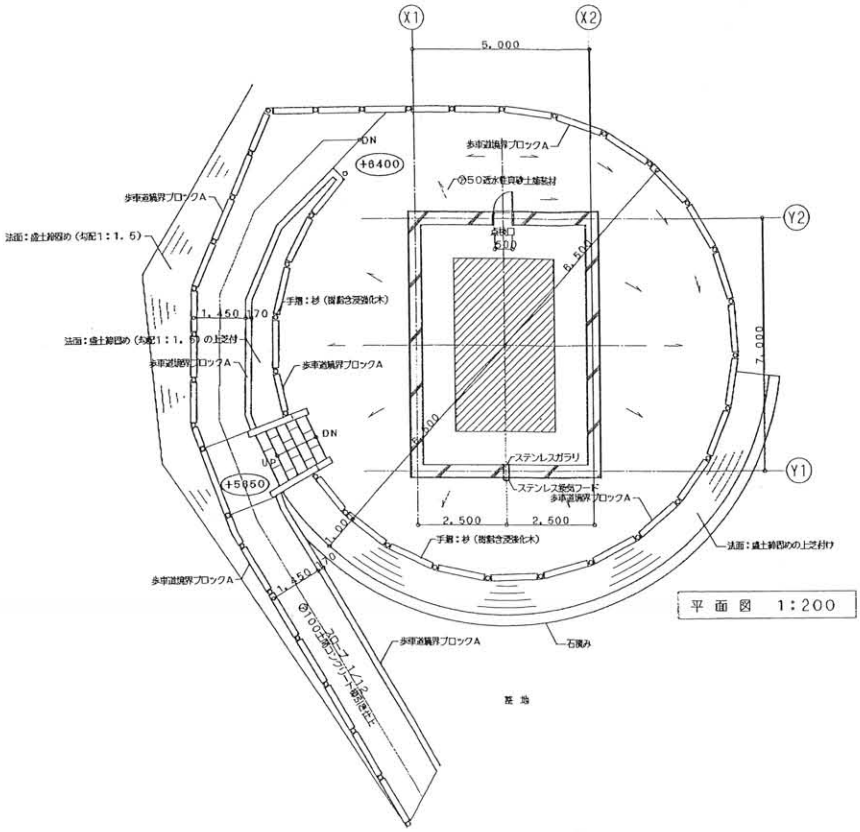
竪穴式石室の復元作業風景

復元した竪穴式石室

竪穴式石室の公開

西山谷２号墳竪穴式石室屋外展示施設

第25図　石室の移築・保存２



第26図　石室移築工事平面図および屋外展示施設

西山谷古墳群
第１表　出土遺構一覧表
SM

遺構名	グリッド	墳丘平面形態	墳丘規模（m）	石室（主体部）断面形態	墓壙長軸（cm）	墓壙短軸（cm）	石室長軸（内法cm）	石室短軸（内法cm）	棺床長軸（cm）	棺床短軸（cm）	深度（cm）	主軸方向	備　考
SM1002	H-6	円墳	直径20	四角形状	650	380	472	北側105 南側83	420	50（上場） 35（基底）	墓壙 北側125 南側113 石室 北側72 南側57	N-16°-W	２号墳。
SM1003	R-25	円墳	直径15	逆台形状			243	98			石室10	N-75°-W	３号墳。

ST

遺構名	グリッド	墳丘平面形態	墳丘規模（m）	石室（主体部）断面形態	墓壙長軸（cm）	墓壙短軸（cm）	石室長軸（内法cm）	石室短軸（内法cm）	棺床長軸（cm）	棺床短軸（cm）	深度（cm）	主軸方向	備　考
ST1001	S-21				213	89			203	82	10	N-90°-E	１号石室墓。
ST1002	R・S-16・17				360	135			305	36	13	N-75°-W	２号石室墓。
ST1003	R・S-19				327	134			254	57	18	N-80°-E	３号石室墓。
ST1004	P・Q-27			四角形状	325	94			296（基底面）	75（基底面）	南側37 北側64	N-23°-E	１号石蓋土壙墓。

第２表　出土遺物観察表
SM（鉄器）

報告書掲載番号	遺　構	出土地点	層　位	器　種	全長（cm）	刃　部（cm）			茎　部（cm）			目　釘		関の形状	横断面形状	重量（g）	その他の法量（cm）	残存率	部　位	備　考
						長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	本数	直径（cm）							
20	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄剣	30.4	20.0	2.5	0.5	10.2	1.5	0.4			角	凸レンズ	110.1		1/1		
21	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄槍	34.4	23.7	3.2	0.6	10.7	1.2	0.4	1	0.3	角	凸レンズ	172.5		1/1		
22	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄槍	31.9	25.3	3.0	0.5	7.2	1.3	0.4	1	0.3	角	凸レンズ	147.2		1/1		

ST（鉄器）

報告書掲載番号	遺　構	出土地点	層　位	器　種	全長（cm）	刃　部（cm）			茎　部（cm）			目　釘		関の形状	横断面形状	重量（g）	その他の法量（cm）	残存率	部　位	備　考
						長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	本数	直径（cm）							
1	ST1002	S-16・17	粘土棺床	鉄剣	35.8	26.7	2.7	0.3	9.3	1.1	0.4			角	凸レンズ	122.2		1/1		
2	ST1002	S-16・17	粘土棺床	鉄槍	30.4	20.2	2.7	0.5	10.0	1.1	0.4	1	0.3	角	凸レンズ	110.5		9/10		
5	ST1004	P・Q-27	粘土棺床	鉄剣	33.9	26.2	2.6	0.4	7.7	1.3	0.3			角	凸レンズ	91.8		1/1		

SM（鉄器）

報告書掲載番号	遺　構	出土地点	層　位	器種	長　さ（cm）			鏃　身（cm）			茎		重量（g）	その他の法量（cm）	残存率	部　位	備　考
					全　長	鏃　身	茎　長	最大幅	最大厚	関　幅	直　径	面数（断面形）					
24	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	5.0	2.7	2.3	1.0	1.0	0.8	0.4	円	67.6				６個体。
25	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	5.0	2.8	2.2	1.1	1.0	0.7	0.4	円	59.2				５個体。
26	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	5.0	2.9	2.1	1.0	0.7	0.9	0.4	円	9.1		1/1		
27	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	5.0	2.9	2.1	1.2	0.9	0.9	0.4	円	8.2		1/1		
28	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	4.8	2.7	2.1	1.2	0.9	0.8	0.4	円	10.6		1/1		
29	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	5.1	2.9	2.2	1.1	0.9	0.9	0.5	円	11.4		1/1		
30	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	5.6	2.9	2.7	1.4	0.8	0.8	0.3	円	8.8		1/1		
31	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	4.7	2.4	2.3	1.2	0.8	1.0	0.4	円	8.0		1/1		
32	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	5.1	2.9	2.2	1.0	0.8	0.8	0.4	円	8.9		1/1		
33	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	5.1	2.5	2.6	1.1	0.8	0.9	0.5	円	7.7		1/1		
34	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	4.6	2.6	2.0	1.2	0.8	0.8	0.4	円	7.6		1/1		
35	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	5.0	2.8	2.2	1.0	0.8	0.8	0.4	円	7.7		1/1		
36	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	4.9	2.8	2.1	1.2	0.8	0.9	0.3	円	8.5		1/1		
37	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	5.1	2.9	2.2	1.3	0.8	0.8	0.4	円	8.8		1/1		
38	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	4.1	2.3	1.8	1.0	0.9	0.8	0.3	円	7.2		1/1		
39	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	4.8	2.7	2.1	1.2	0.7	0.8	0.5	円	6.9		1/1		
40	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	4.8	2.7	2.1	1.0	0.8	0.9	0.5	円	8.6		1/1		
41	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	4.9	2.8	2.1	1.1	0.8	0.8	0.3	円	6.2		1/1		
42	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	4.8	2.8	2.0	1.2	0.9	0.8	0.3	円	8.2		1/1		
43	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	4.6	2.3	2.3	1.0	0.8	0.8	0.3	円	6.2		1/1		
44	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	5.2	3.0	2.2	1.1	0.9	0.7	0.3	円	8.4		1/1		
45	SM1002	H-6	粘土棺床	鉄鏃	4.8	2.6	2.2	1.1	0.8	0.8	0.4	円	8.5		1/1		

ST（鉄器）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	長さ（cm）			鏃身（cm）			茎		重量（g）	その他の法量（cm）	残存率	部位	備考
					全長	鏃身	茎長	最大幅	最大厚	関幅	直径	面数（断面形）					
3	ST1002	R-19	粘土棺床	鉄鏃	12.5	11.4		4.1	0.7	2.3			60.7		1/1		
6	ST1004	P·Q-27	床面	鉄鏃	8.6			1.7	0.2				74.1				5個体。
7	ST1004	P·Q-27	床面	鉄鏃	10.7	7.6	3.1	1·3	0.3	0.7	0.6	四角	37.9				2個体。
8	ST1004	P·Q-27	床面	鉄鏃	10.7	6.8	3.9	1.5	0.2	1.0	0.4	四角	22.9				2個体。
9	ST1004	P·Q-27	床面	鉄鏃	10.9	7.1	3.8	1.7	0.3	0.7	0.5	四角	11.0		1/1		
10	ST1004	P·Q-27	床面	鉄鏃	10.1	6.0	4.1	1.5	0.2	0.9	0.6	四角	9.3		1/1		
11	ST1004	P·Q-27	床面	鉄鏃	9.2	5.8	3.4	1.7	0.3	0.9	0.5	四角	9.9		1/1		
12	ST1004	P·Q-27	床面	鉄鏃	8.0	6.8	1.2	1.7	0.3	1.1			10.7		1/2	鏃身	
13	ST1004	P·Q-27	床面	鉄鏃	7.7	6.2	1.5	1.7	0.3	0.8	0.6	四角	11.6		1/2	鏃身	
14	ST1004	P·Q-27	床面	鉄鏃	7.0			1.5	0.3				8.9		1/2	鏃身	
15	ST1004	P·Q-27	床面	鉄鏃	6.7			1.5	0.3				7.2		1/2	鏃身	
16	ST1004	P·Q-27	床面	鉄鏃	4.4			1.5	0.4				6.6		1/2	鏃身	
17	ST1004	P·Q-27	床面	鉄鏃	4.7		4.0	1.1	0.4	1.1	0.6	四角	4.3		1/2	茎部	
18	ST1004	P·Q-27	床面	鉄鏃	10.0	5.8	4.2	1.7	0.3	1.2	0.6	四角	14.8		1/1		

SM（鉄器）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	全長（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	横断面形状	重量（g）	その他の法量（cm）	残存率	部位	備考
23	SM1002	H-6	粘土棺床	鉈	36.1	0.8	0.3	四角	48.4	茎部幅 0.7	1/1		裏に木質残存。朱付着。
46	SM1002	H-6	粘土棺床	斧状鉄器	4.9	4.4	2.0	隅丸長方形	47.2		1/4		

ST（石器）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	石材	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	その他の法量（cm）	残存率	部位	備考
4	ST1002	R-16·17	粘土棺床	泥岩	砥石	12.1	4.6	1.8	1324.0		1/1		

SM（青銅器）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	その他の法量（cm）	残存率	部位	備考
19	SM1002	棺内中央部	粘土棺床	斜縁上方作銘獣帯鏡	面径12.5		縁高0.5	157.6		9/10		完鏡。

SM（土器）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径（cm）	体部最大径（cm）	底径（cm）	頸部径（cm）	器高（cm）	その他の法量（cm）	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
47	SM1002	H-6	粘土棺床床面	直口壺	口縁部1/2	10.8	16.2		8.2	17.6		口縁～体部	口縁外反して端部丸く収める。体部内彎。	外面：口縁部ナデ。頸部器面損傷調整不明。おそらくナデ。体部タテハケ（9条／cm）。内面：口縁部頸部ナデ。体部ユビオサエのちナデ。タテヘラケズリ。	石英・雲母・結晶片岩	外面：橙 内面：橙	
48	SM1002	H-6	粘土棺床床面	甕	口縁部1/5	15.4		2.4	13.1	上半部7.7 下半部10.1	復元高23.8	口縁～底部	口縁外反してくの字。口縁端部は上方に拡張する。底部は僅かに平底をとどめる。	外面：ナデ・タテハケ。内面：口縁部ナデ・ヨコヘラケズリ。底部ヘラケズリのちナデ・ユビオサエ。	石英・雲母・赤色斑粒・結晶片岩	外面：にぶい褐 内面：にぶい褐	
49	SM1002	H-6	粘土棺床床面	甕	口縁部1/9	15.0			12.4	7.0		口縁部	口縁外反して「く」の字。口縁端部は上方に拡張する。	外面：ナデ。タテハケ（11条／cm）。内面：ナデ・ヨコヘラケズリ。	石英・雲母・赤色斑粒・結晶片岩	外面：にぶい褐 内面：にぶい褐	
50	SM1002	H-6	粘土棺床床面	甕	口縁部1/5	14.2			12.0	4.6		口縁部	口縁外反して「く」の字。口縁端部は上方に拡張する。	外面：ナデ・ハケ（12条／cm）。内面：ナデ・ヘラケズリ	石英・雲母・赤色斑粒・結晶片岩	外面：にぶい褐 内面：にぶい褐	

XIX　大谷山田遺跡

例　言

1　本章は四国横断自動車道建設に伴う大谷山田遺跡の発掘調査報告書である。

2　所在地　鳴門市大麻町大谷字椢原34他

調査対象面積　19,450㎡

試掘面積　590㎡

本調査面積　420㎡

3　発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次の通りである。

発掘調査期間　試掘　平成11年３月１日～平成11年３月31日

平成12年３月１日～平成12年３月31日

本掘　平成12年４月２日～平成12年５月31日

報告書作成期間　平成14年４月１日～平成15年３月31日

4　遺物番号・挿図番号・図版番号は通し番号とした。遺物番号は本文・挿図・表・図版と一致する。

5　本遺跡の地理的・歴史的環境については、「Ⅱ　調査地点の立地と環境」を参照されたい。

6　SM1001・ST1001出土鉄器についての報文は一部栗林誠治が執筆した。

1　調査の経過

（1）調査の経過（Ⅰ-第1図およびⅡ-第1・5・20図）

大谷山田遺跡は鳴門市大麻町大谷地区に所在し、阿讃山脈南麓、大谷川右岸の標高15～20mの北から南へ緩やかに傾斜する扇状地上に位置する。現況は畑地・果樹園である。当該地域は以前から古墳群が密集する地域として周知されていた。したがって、分布調査で推定された遺跡の範囲の内19,450㎡を調査対象面積として、調査同意の得られた地区から順次、試掘調査を実施した。試掘調査は平成10年度および平成11年度に実施され、計590㎡のトレンチを掘削した。試掘の結果、調査対象地区の北西部において古墳時代後期の須恵器が出土し、周辺に古墳の存在する可能性が高いため、須恵器の出土した地区を中心に420㎡の範囲を対象に本調査へ移行した。本調査は平成12年4月から実施され、平成12年5月31日に終了した。

（2）発掘調査の方法（第1図）

調査を始めるにあたり、グリッドの配置に際しては、発掘統一基準にならい、第Ⅳ系国土座標を基準とし、5mメッシュを1グリッドとして調査対象地を包み込む形で設定した。南西隅を基準として北にA・B・C…、東に1・2・3…の順に記号・番号をふり、その組み合わせで各グリッド名を表すこととした。遺構記号・番号は検出時に順次決定した。

（3）調査日誌抄

大谷山田遺跡調査日誌抄

2000年

4月1日　調査準備。

4月13日　表土重機掘削開始（須恵器片等出土）。

4月14日　重機掘削（須恵器片多数出土）。作業風景写真撮影。

4月17日　重機掘削（須恵器・土師器片出土）。グリッド設定。遺物平面図1/20作成。
遺物写真撮影。

4月18日　包含層人力掘削および遺構面精査開始（須恵器・土師器片出土）。土層断面撮影。

4月19日　横穴式石室（SM1001）検出。写真撮影。

4月21日　SM1001石室掘り下げ（須恵器・土師器片検出）。SM1001土層断面図作成。
SM1001石室平面図作成。横穴式石室写真撮影。

4月24日　SM1001掘下げ。調査区西側で小竪穴式石室（ST1001）検出。

4月25日　SM1001およびST1001堀下げ（須恵器片検出）。ST1001土層断面撮影。
SM1001横穴式石室全景写真撮影。

4月27日　SM1001掘り下げ（土師器片検出）。ST1001内より鉄剣・鉄鏃出土。遺物写真撮影。
SM1001見通し断面・平面図作成。

4月28日　SM1001掘り下げ（鉄鏃検出）。ST1001掘り下げ（鉄鏃・須恵器杯検出）。

5月1日　SM1001掘り下げ（床面より鉄鏃・耳環検出）。

5月2日　調査区南東にてST1002検出。SM1001石室礫床平面図作成。

5月8日　ST1002掘り下げ。

5月10日　SM1001・ST1001・1002掘り下げ。SM1001石室閉塞石見通し断面図作成。

5月12日　ST床面平面・見通し断面図作成。

5月17日　SM1001・ST1001・1002掘り下げ。SM1001石室平・断面図作成。

5月19日　SM1001・ST1001・1002掘り下げ。SM1001・ST1001・1002石室平・断面図作成。
石室写真撮影。

5月22日　SM1001鉄器取り上げ。SM1001石室玉検出状況写真撮影。ST1001・1002石室写真撮影。

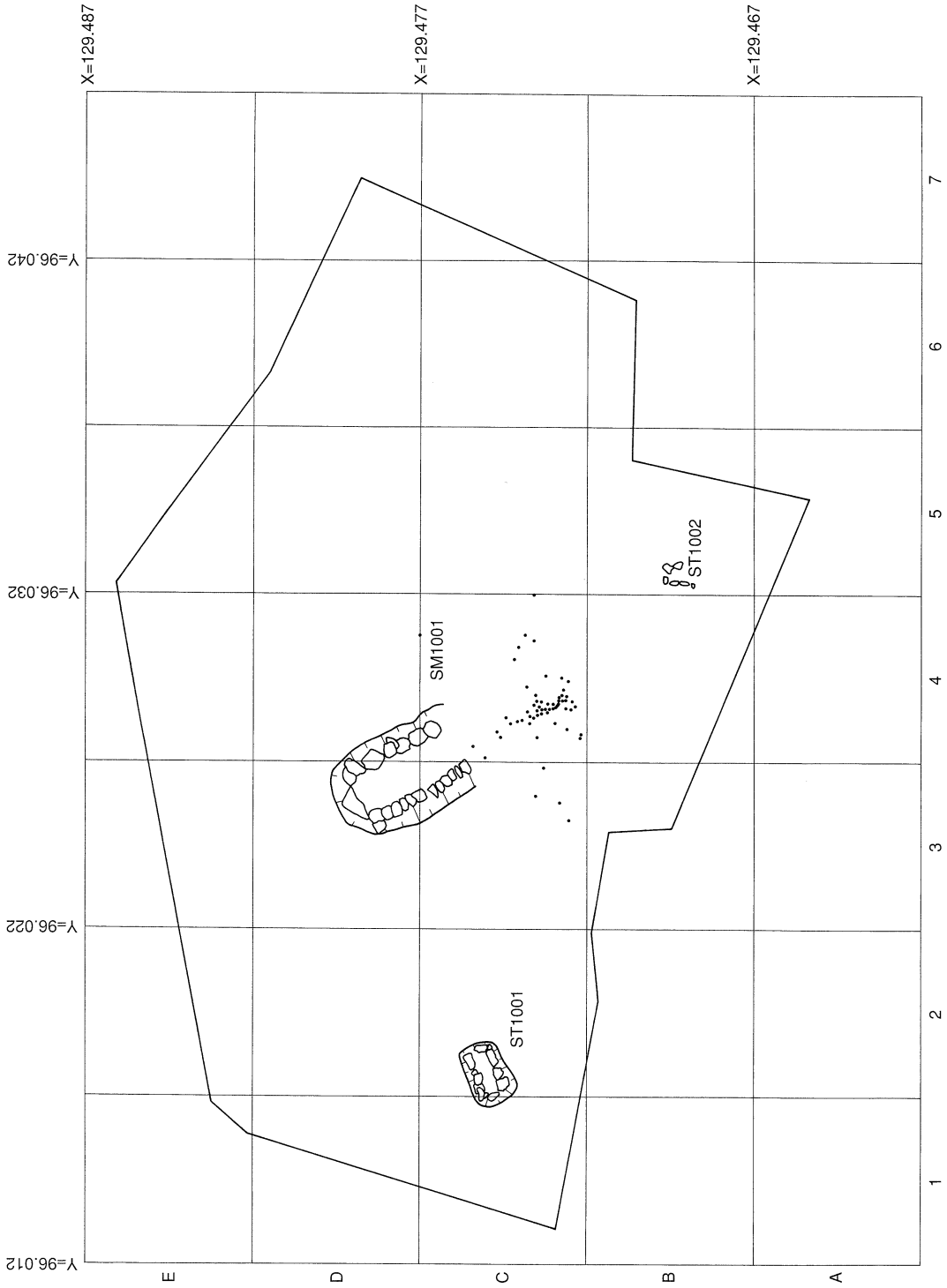
5月24日　ST断ち割り。写真撮影。

5月26日　SM1001石室平・断面図作成。

5月29日　SM1001断ち割り。写真撮影。

5月30日　SM1001石室断ち割り土層断面図作成。

5月31日　遺構完掘状況写真撮影。調査終了。現場撤収。



第１図　グリッド配置・遺構配置図

2　調査成果

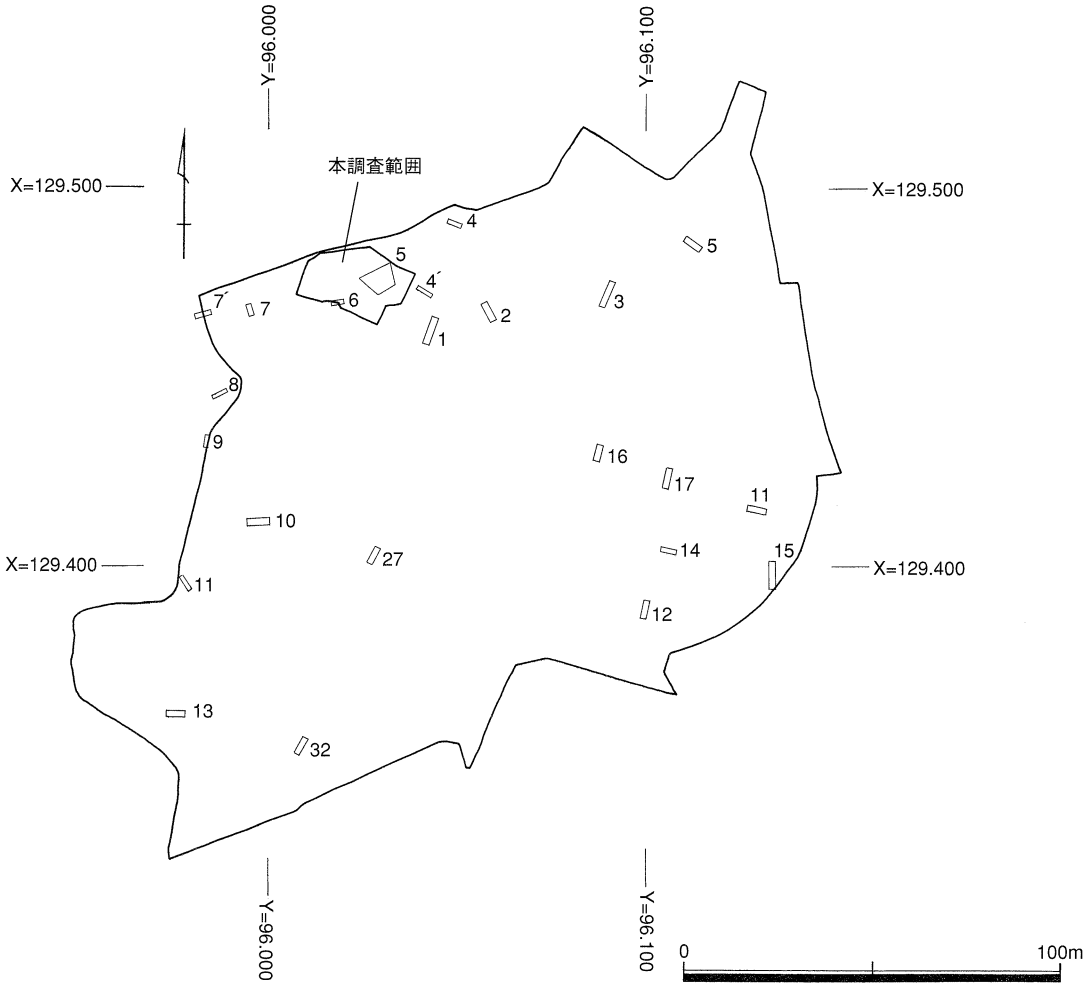
（1）遺跡の位置（Ⅰ-第1図およびⅡ-第1・5・20図）

大谷山田遺跡は四国横断自動車道建設に伴い発掘調査が実施された。調査地点は阿讃山脈南麓、鳴門市大麻町大谷地区の大谷川右岸、標高15～20mの北から南へ緩やかに傾斜する扇状地上に位置する。

（2）基本層序（第2・3図）

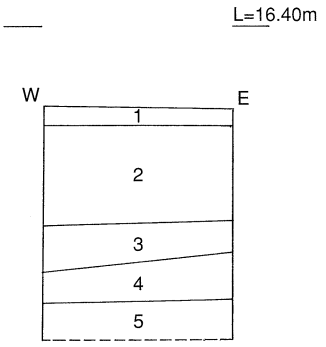
トレンチ配置状況と土層堆積状況

調査対象地が広範囲にわたるため、調査同意の得られた地区から順次トレンチを設定し、掘削作業を実施した。試掘に際しては、調査対象面積の5％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。試掘の結果、調査区北西部において須恵器等が集中して出土したため、420m²の範囲を対象に本調査へ移行した。



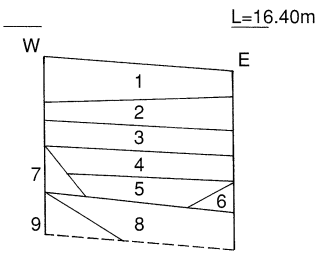
第2図　トレンチ配置図

5トレンチ



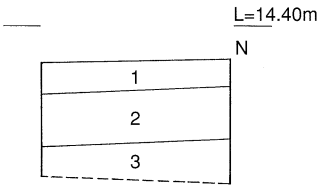
1．黒褐色　7.5YR3/2　砂質土
（表土・耕作土、近現代大谷焼片含む。）
2．褐色　10YR4/4　砂質土
（ϕ=10～20cm程度の砂岩亜円礫多く含む。）
3．にぶい黄褐色　10YR4/5　砂質土
（ϕ=5.0cm程度の円礫を多く含む。近現代の大谷焼片を含む。）
4．褐色　10YR4/6　砂
（ϕ=0.5cm程度の砂層。ϕ=3.0cm程度の円礫を含む。）
5．灰黄褐色　10YR4/2　砂質土
（ϕ=1.0cm程度の礫を多く含む。酸性強い川砂。）

13トレンチ



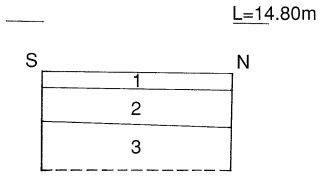
1．灰黄褐色　10YR4/2　砂質土（表土・桑畑の耕作土1.0cm角の土師質土器片出土。）
2．褐色　10YR4/4　砂質土（ϕ=5.0～10cm程度の亜円礫が混じる。浅い谷状地形が埋没。出土・岩盤風化土の流れ込み。粘性やや強い。）
3．褐色　10YR4/2　砂質土（ϕ=1.0cm程度の礫層。粘性やや強い。流れ込み。）
4．褐色　10YR4/6　砂質土（ϕ=1.0cm程度の礫を含む。粘性強い。流れ込み。1.0cm角土師質細片出土。）
5．褐色　10YR4/4　砂質土（ϕ=1.0cm程度の礫を多く含む。粘性やや強い。流れ込み。）
6．褐色　10YR4/6　砂質土（ϕ=5.0～10cm程度の亜円礫を多く含む。粘性やや強い。山からの流れ込み。）
7．にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（ϕ=2.0cm程度の礫を含む。粘性やや弱い。流れ込み。）
8．暗褐色　10YR3/4　砂質土（ϕ=0.2cm程度の礫を含む。やや砂性強い。流れ込み。）
9．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（ϕ=5.0cm程度の角礫を含む。やや粘性強い。岩盤風化土。地山・岩盤層。）

32トレンチ



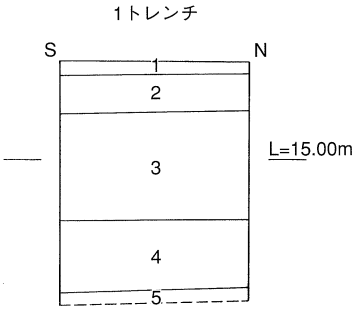
1．黒褐色　7.5YR3/2　砂質土（表土、梨畑耕作土。）
2．褐色　10YR4/4　砂質土（ϕ=0.1cm程度の砂とϕ=5.0～10cm程度の亜円礫の砂質層。大谷川氾濫砂礫層。）
3．暗褐色　10YR3/3　砂礫（ϕ=0.1cm程度の砂層。2層より粗砂。ϕ=5.0～20cm程度の亜円礫を多く含む。大谷川砂礫層。）

27トレンチ

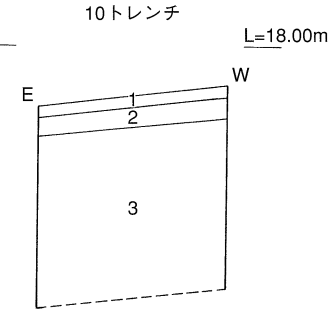


1．黒褐色　7.5YR3/2　砂質土（表土、梨畑耕作土。）
2．褐色　10YR4/4　砂質土(砂。ϕ=0.1cm程度の砂とϕ=5.0～10cm程度の亜円礫の砂礫層。大谷川氾濫洪水砂。)
3．暗褐色　10YR3/3　砂礫(ϕ=0.1cm程度の砂層。ϕ=5.0～20cm程度の亜円礫を多く含む。大谷川砂礫層。)

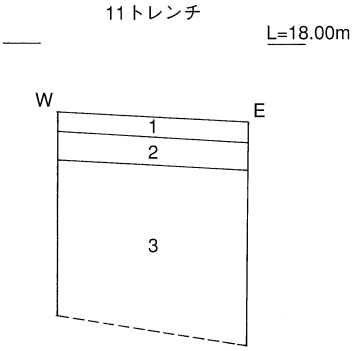
1トレンチ



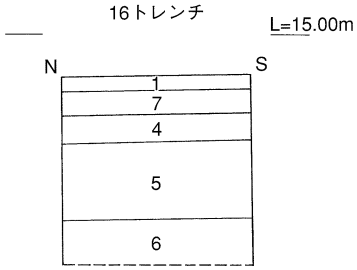
10トレンチ



11トレンチ



16トレンチ



1・10・11・16トレンチ
1．暗褐色　10YR3/4　粘性砂質土、やや砂質土傾向あり（粘性・しまりあまりなし。ϕ=0.3～2.0cm大の礫含む。植物遺体が多く混入。果樹園の耕作土。）
2．暗オリーブ褐色　2.5Y3/3　60%　暗褐色　10YR3/4　30～40%　砂質土（やや粘性砂質土傾向あり。粘性・しまりあまりなし。ϕ=0.2～3.0cm大の礫を混入。植物遺体や木の根を多く混入。床土又は客土。）
3．オリーブ褐色　2.5Y4/3　50%　褐色　10YR4/4　40～50%の混色（砂礫による攪乱層。粘性ほとんどなし。しまりあまりなし。植物の根等が多く混入。カクラン層。）
4．褐色　10YR4/4　60～70%　オリーブ褐色　2.5Y4/3　30～40%（砂礫と礫層が若干互層のようになっている。粘性・しまりほとんどなし。扇状地の押し出し層。）
5．オリーブ褐色　2.5Y4/3　50～60%　褐色　10YR4/4　20～30%　暗灰黄色　2.5Y4/2　10～20%
砂礫層（粘性・しまりほとんどなし。ϕ=0.2～1.5cm大の砂岩円礫から成る。ϕ=1.0～3.0cm前後の礫を主体とする植物の根等が若干見られる。扇状地の押し出し層・自然堆積層。）
6．褐色　10YR4/4　60～80%　にぶい黄褐色　10YR4/3　10～15%　オリーブ褐色2.5Y4/3　10%　砂質土（若干粘性砂質土傾向あり。礫ϕ=0.2～1.5cm大の大きさを多く含む砂礫層とも考えられる。やや土混じりの砂礫層。粘性まれにあり。しまりあまりなし。扇状地の押し出し層・自然堆積層。）
7．オリーブ褐色　2.5Y4/4　50%　オリーブ褐色　2.5Y4/3　40%　砂質土　シルト傾向あり（粘性わずかにあり。しまりわずかにあり。植物遺体を混入する。ϕ=0.2～1.0cm大の礫少し含む。床土又は客土。）

0　1m

第3図　模式柱状土層図

土層堆積状況は各トレンチとも類似しており、基本的な土層堆積は表土（客土・耕作土）・砂質シルト層・扇状地性砂礫層である。基本層序は以下の通りほぼ対応する。

1．…黒褐色 10YR2/3 砂質土（表土、耕作土。）
2．…にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質土（シルト質土。ϕ＝3～5㎝程度の亜円礫を含む。）
3．…黄褐色 10YR5/6 砂質土（シルト質土。ϕ＝2㎝程度の亜円礫を含む。）
4．…褐色 10YR4/4 砂質土（シルト質土。）
5．…暗褐色 10YR3/2 砂質土（シルト質土。ϕ＝5㎝程度の亜円礫を含む。粘性あり。）
6．…暗褐色 10YR3/3 砂礫（シルト質土混じる。ϕ＝5～20㎝程度の亜円礫を含む。）

（3）遺構と遺物（第1）

遺跡内における遺構配置は第1図に示すとおりである。横穴式石室を主体部とするSM（古墳）を1基、SM1001に付随すると思われるST（小竪穴式石室墓）2基が出土した。

SM1001（1号墳）（第4～7図）

C･D-3･4グリッド、調査区中央部で確認された古墳である。後世の開墾等による削平を受けているためか、墳丘および周壕・葺石等は確認できない。推定ではあるが、墳丘は盛土により築造され、残存する石室規模から10～15mの円墳であった可能性がある。

主体部は横穴式石室である。墓壙規模は現存で、長軸5.00m、短軸2.67m、最大深度0.83mで、平面形は長楕円形状を呈する。

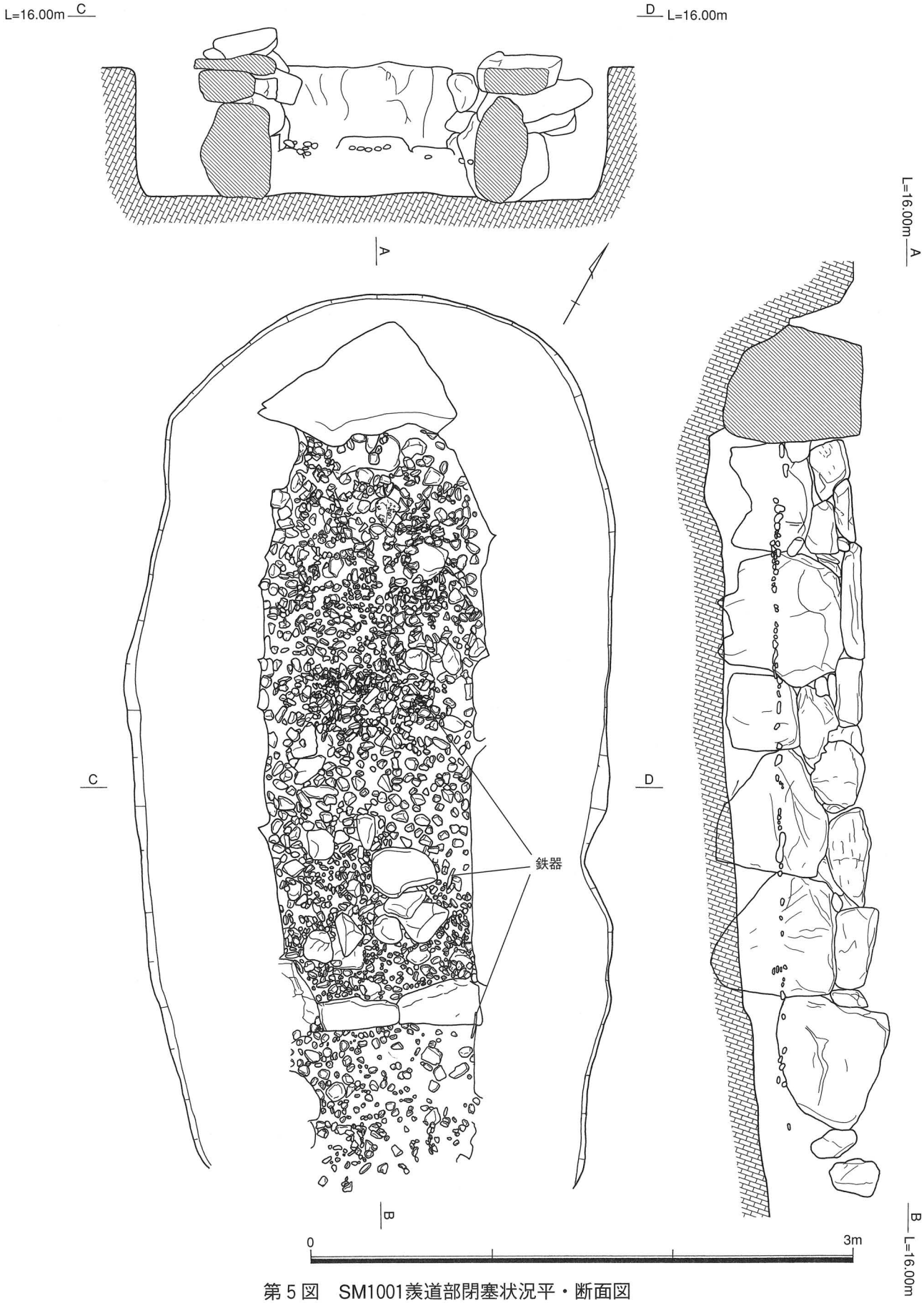
石室は天井石および側壁上部が消失しているため、正確な石室形状は不明であるが、無袖胴張型の横穴式石室である。石室規模は石室長軸4.90m、玄室長3.15m、羨道部0.90m、石室短軸は1.10m、奥壁幅0.85m、石室床面からの壁体残存高0.9mを測る。南東方向に開口し、主軸方向はN-36°-Wで僅かに西へ振っている。頭位は北頭位である。

石室石材にはすべて砂岩の角礫が用いられている。側壁は小口積みで遺存状態の良い壁体で3～4段積まれているが、削平を受けているため現状では持ち送りの有無までは確認できない。また、側壁1段目の基底石は奥壁に匹敵する、長さ・幅約80㎝、厚さ約50㎝程度の大きさの角石を用い基礎を固めている。これより上位になると長さ約30㎝・幅約20㎝・厚さ20㎝程度の平石を小口積みに積み上げている。加えて、奥壁は1段のみ石が残存していたが、おそらく2段以上の石が積み上げられていたと思われる。框石は2個の平石が用いられ、小口を合わせるように構築している。

石室床面は2面の構築が確認される。第2次床面には直径5㎝前後の砂岩の円礫が敷き詰められていた。一方、第1次床面には20～30㎝程度の平石が用いられており、比較的精緻に敷き詰めている。床面が2面存在していたことから、数回にわたる追葬が行われたことが窺われる。

羨道部は玄室同様、削平を受けており、遺存状況は良好ではないが、若干の閉塞石を確認することができた。閉塞石には直径10㎝前後の角礫が使用され、礫間に粘土等を充填して詰めた様子は観察できないことから、石のみによる閉塞が行われたものと思われる。閉塞石は、羨道部から框石を越えて玄室内に至るまでの範囲で石を積み上げ閉塞されていた。最終の閉塞時期は第2次床面形成時期か、その後の追葬が行われた時点でのものであるかは不明である。

第４図　SM1001石室（第２次床面）平・断面図



第５図　SM1001羨道部閉塞状況平・断面図